

茨城県教育財団文化財調査報告第95集

一般県道水戸那珂湊線道路改良
工事地内埋蔵文化財調査報告書

沢田遺跡

平成7年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第95集

一般県道水戸那珂湊線道路改良 工事地内埋蔵文化財調査報告書

さわ だ
沢田 遺跡

平成7年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

序

国及び茨城県は、ひたちなか市（旧那珂湊市，勝田市）と，東海村にまたがって位置する水戸射爆撃場跡地内に，「常陸那珂国際港湾公園都市」の建設を進めております。この建設予定地域内の海岸砂丘地帯には，埋蔵文化財包蔵地である沢田遺跡が確認されております。

財団法人茨城県教育財団は，運輸省及び茨城県から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け，昭和62年7月から平成3年3月まで四次にわたる発掘調査を実施し，その成果を2部の報告書にまとめ刊行いたしました。さらに，平成4年度には茨城県からの委託を受け，沢田遺跡の第五次発掘調査を実施いたしました。

本報告書は，沢田遺跡の第五次発掘調査における調査成果を収録したものです。本書が学術的な研究資料としてはもとより，教育，文化向上の一助としても，広く活用されますことを希望いたします。

なお，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，委託者である茨城県をはじめ，茨城県教育委員会，那珂湊市教育委員会ならびに，関係機関・関係各位から御指導，御協力を賜りましたことに対し，衷心より感謝の意を表します。

平成7年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 礒田 勇

例 言

- 1 本書は茨城県教育委員会の委託により，財団法人茨城県教育財団が平成4年4月から平成5年3月まで実施した沢田遺跡の調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は，ひたちなか市阿字ヶ浦町字渚2,221ほかである。

理 事 長	磯 田 勇	昭和63年6月～	
副 理 事 長	角 田 芳 夫 小 林 秀 文	平成3年7月～平成6年3月 平成6年4月～	
専 務 理 事	中 島 弘 光	平成5年4月～	
常 務 理 事	本 田 三 郎	平成3年4月～平成5年3月	
事 務 局 長	藤 枝 宣 一	平成4年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長	石 井 毅 安 藏 幸 重	平成2年4月～平成5年3月 平成5年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長 代 理	河 野 佑 司	平成6年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	水 飼 敏 夫	平成4年4月～
	係 長	根 本 達 夫	平成6年4月～
	主 任 調 査 員	根 本 康 弘	平成3年4月～平成5年3月
	主 任 調 査 員	海 老 澤 稔	平成6年4月～
	主 事	杉 山 秀 一	平成4年4月～平成6年3月
経 理 課	課 長	藤 田 和 行	平成4年4月～平成5年3月
	課 長	小 幡 弘 明	平成5年4月～
	課 長 代 理	鈴 木 三 郎	平成5年4月～
	係 長	大 高 春 夫	平成6年4月～
	主 任	飯 島 康 司	平成4年4月～平成6年3月
	主 事	大 貫 吉 成	平成4年4月～平成5年3月
	主 事	軍 司 浩 作	平成5年4月～
調 査 課	課長(部長兼務)	石 井 毅	平成2年4月～平成5年3月
	課長(部長兼務)	安 藏 幸 重	平成5年4月～
	調 査 第 二 班 長	和 田 雄 次	平成4年4月～平成5年3月
	主 任 調 査 員	後 藤 哲 也	平成4年4月～平成5年3月調査
	調 査 員	新 井 聡	平成4年4月～平成5年3月調査
整 理 課	課 長	阿 久 津 久	平成5年4月～
	主 任 調 査 員	後 藤 哲 也	平成6年10月～平成7年3月整理・執筆・編集

- 3 本書に使用した記号等については、第3章第1節の3「遺構・遺物の記載方法」の項を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、遺跡の性格に関しては、神奈川大学短期大学部教授の網野善彦氏、遺物については、出光美術館学芸員の荒川正明氏、茨城県立歴史館主任研究員の瓦吹堅氏に御指導をいただいた。
- 5 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。
- 6 遺跡の概略

ふりがな	いっばんけんどうみとなかみなとせんだうろかいりょうこうじちないまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ						
書名	一般県道水戸那珂湊線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書						
副書題	沢田遺跡						
巻次	Ⅲ						
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第95集						
編著者名	後藤哲也						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2						
発行年月日	1995(平成7)年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
さわだいせき 沢田遺跡	いばらきけん 茨城県ひたちな しあじがうちょう か市阿字ヶ浦町 あざなぎさ 字渚2,221ほか	08209-070	36度 23分 50秒	140度 36分 40秒	19920401～ 19930331	20,000m ²	一般県道水 戸那珂湊線 道路改良工 事に伴う調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
沢田遺跡	製塩跡	中世 近世 近代	釜屋跡 5か所 鹹水槽 102基 粘土貼土坑 112基 土樋 23条 炉跡 69基 土坑 100基 墓壙 2基		土師質土器, 陶磁器, 墨書石, 石製品, 金 属製品, 古銭, 骨製 品, ガラス製品, 人 骨, 獣骨	第4次調査まで では確認できな かった遺構, 遺物と して, 近代の建物 跡, 墓壙, 紀年銘 の入った墨書石等 が上げられる。	

目 次

序

例言

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 遺跡	8
第1節 調査方法と遺構・遺物の記載方法	8
1 地区設定	8
2 基本層序の検討	8
3 遺構・遺物の記載方法	9
第2節 遺跡の概要	10
第3節 遺構と遺物	11
1 製塩跡の遺構と遺物	11
2 その他の遺構と遺物	43
3 遺構外出土遺物	90
第4節 まとめ	121
1 屋外鹹水槽について	121
2 陶磁器について	121

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図 …………… 6	第28図 鹹水槽実測図(4) …………… 48
第2図 沢田遺跡調査区 …………… 7	第29図 鹹水槽実測図(5) …………… 49
第3図 調査区呼称方法概念図 …………… 8	第30図 鹹水槽実測図(6) …………… 50
第4図 基本土層図 …………… 8	第31図 鹹水槽実測図(7) …………… 51
第5図 第1号製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽・ 居出場実測図(第1号竈) …………… 13	第32図 鹹水槽実測図(8) …………… 52
第6図 第1号製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽・ 居出場実測図(第2号竈) …………… 14	第33図 鹹水槽出土遺物実測図 …………… 53
第7図 第1号製塩跡出土遺物実測図 …………… 15	第34図 粘土貼り土坑出土遺物実測図 …………… 56
第8図 第2号製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 …………… 17	第35図 粘土貼り土坑実測図(1) …………… 57
第9図 第2号製塩跡鹹水槽・居出場実測図 …… 18	第36図 粘土貼り土坑実測図(2) …………… 58
第10図 第3号製塩跡出土遺物実測図 …………… 20	第37図 粘土貼り土坑実測図(3) …………… 59
第11図 第3号製塩跡釜屋内遺構配置図 (土樋実測図) …………… 21	第38図 粘土貼り土坑実測図(4) …………… 60
第12図 第3号製塩跡鹹水槽・居出場実測図 …… 22	第39図 粘土貼り土坑実測図(5) …………… 61
第13図 第3号製塩跡鹹水槽実測図 …………… 23	第40図 粘土貼り土坑実測図(6) …………… 62
第14図 第4号製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽 実測図 …………… 25	第41図 粘土貼り土坑実測図(7) …………… 63
第15図 第5号製塩跡竈実測図 …………… 26	第42図 粘土貼り土坑実測図(8) …………… 64
第16図 第6号製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽・ 土樋実測図 …………… 27	第43図 粘土貼り土坑実測図(9) …………… 65
第17図 第6号製塩跡鹹水槽実測図 …………… 28	第44図 炉跡実測図(1) …………… 68
第18図 第7号製塩跡鹹水槽実測図 …………… 30	第45図 炉跡実測図(2) …………… 69
第19図 第7号製塩跡遺構配置図 (土樋実測図) …………… 31・32	第46図 炉跡実測図(3) …………… 70
第20図 第8号製塩跡遺構配置図 …………… 34	第47図 炉跡実測図(4) …………… 71
第21図 第8号製塩跡鹹水槽実測図 …………… 35	第48図 炉跡実測図(5) …………… 72
第22図 第8号製塩跡鹹水槽実測図 …………… 36	第49図 炉跡実測図(6) …………… 73
第23図 第9号製塩跡遺構配置図 (鹹水槽実測図) …………… 38	第50図 炉跡出土遺物実測図 …………… 74
第24図 第9号製塩跡鹹水槽実測図 …………… 39	第51図 土坑実測図(1) …………… 77
第25図 鹹水槽実測図(1) …………… 45	第52図 土坑実測図(2) …………… 78
第26図 鹹水槽実測図(2) …………… 46	第53図 土坑実測図(3) …………… 79
第27図 鹹水槽実測図(3) …………… 47	第54図 土坑実測図(4) …………… 80
	第55図 土坑実測図(5) …………… 81
	第56図 土坑実測図(6) …………… 82
	第57図 土坑実測図(7) …………… 83
	第58図 土坑実測図(8) …………… 84
	第59図 土坑出土遺物実測図 …………… 85
	第60図 墓壇実測図 …………… 86
	第61図 礎石建物跡実測図 …………… 88
	第62図 不明遺構実測図 …………… 89

第63図	不明遺構出土遺物実測図	89	第74図	遺構外出土遺物実測図(11)	101
第64図	遺構外出土遺物実測図(1)	91	第75図	遺構外出土遺物実測図(12)	102
第65図	遺構外出土遺物実測図(2)	92	第76図	遺構外出土遺物実測図(13)	103
第66図	遺構外出土遺物実測図(3)	93	第77図	遺構外出土遺物実測図(14)	104
第67図	遺構外出土遺物実測図(4)	94	第78図	遺構外出土遺物実測・拓影図(15)	105
第68図	遺構外出土遺物実測図(5)	95	第79図	遺構外出土遺物実測図(16)	106
第69図	遺構外出土遺物実測図(6)	96	第80図	遺構外出土遺物実測図(17)	107
第70図	遺構外出土遺物実測図(7)	97	第81図	遺構外出土遺物実測図(18)	108
第71図	遺構外出土遺物実測図(8)	98	第82図	遺構外出土遺物実測図(19)	109
第72図	遺構外出土遺物実測図(9)	99	第83図	遺構外出土遺物実測図(20)	110
第73図	遺構外出土遺物実測図(10)	100	第84図	遺構外出土遺物実測図(21)	111

表 目 次

表 1	沢田遺跡周辺中世城館・塚一覧表	5	表 8	鹹水槽一覧表	43・44
表 2	製塩跡一覧表	40	表 9	粘土貼り土坑一覧表	54～56
表 3	竈一覧表	40	表10	炉跡一覧表	66・67
表 4	釜屋内鹹水槽一覧表	41	表11	土坑一覧表	74～76
表 5	居出場一覧表	41	表12	墓墳一覧表	87
表 6	屋外鹹水槽一覧表	41・42	表13	礎石建物状遺構一覧表	87
表 7	土樋一覧表	42	表14	不明遺構一覧表	87

付 図 目 次

付図 1	沢田遺跡遺構配置図
------	-----------

写 真 目 次

<p>P L 1 調査前風景, 第 1 号製塩跡</p> <p>P L 2 第 3 号製塩跡, 第 4 号製塩跡</p> <p>P L 3 第 7 号製塩跡, 第 8 号製塩跡</p> <p>P L 4 第 9 号製塩跡, 第12号トレンチ, 第13号トレンチ, 第18号トレンチ, 第41号トレンチ</p> <p>P L 5 第 1 号製塩跡 第 1 号竈土層断面, 第 1 号竈断割状況, 第33号釜屋内鹹水槽土層断面</p> <p>P L 6 第 2 号製塩跡 第 3 号竈, 第 3 号竈断割状況, 第47号釜屋内鹹水槽土層断面</p> <p>P L 7 第 2 ・ 3 製塩跡 第45号屋外鹹水槽土層断面, 第40 ・ 45号屋外鹹水槽, 第 3 号製塩跡釜屋遺構確認状況</p> <p>P L 8 第 3 号製塩跡 第 4 号竈土層断面, 第 4 号竈断割状況, 第 9 号土樋と第54号釜屋内鹹水槽</p> <p>P L 9 第 3 号製塩跡 第57号鹹水槽 (居出場) 土層断面, 第57号鹹水槽(居出場), 第16号屋外鹹水槽土層断面</p> <p>P L 10 第 3 号製塩跡 第16号屋外鹹水槽, 第16号屋外鹹水槽と第 1 号土樋, 第 1 号土樋土層断面</p> <p>P L 11 第 3 ・ 4 号製塩跡 第 1 号土樋断割状況, 第 10号土樋土層断面, 第85号釜屋内鹹水槽</p> <p>P L 12 第 5 ・ 6 号製塩跡 第 6 号竈断割状況, 第26号屋外鹹水槽と第 3 ・ 6 号土樋, 第26号屋外鹹水槽と第 3 号土樋確認状況</p> <p>P L 13 第 6 ・ 7 号製塩跡 第 3 ・ 6 号土樋, 第68号屋外鹹水槽土層断面, 第 70号屋外鹹水槽</p> <p>P L 14 第 7 号製塩跡 第73号屋外鹹水槽, 第15号土樋確認状況, 第15号土樋断割状</p>	<p>況</p> <p>P L 15 第 7 号製塩跡 第68号屋外鹹水槽, 第22号土樋土層断面, 第23号土樋</p> <p>P L 16 第 3 ・ 7 号製塩跡 第 1 ・ 2 号土樋, 第16号土樋, 第17 ・ 18 ・ 19号土樋, 第22号土樋</p> <p>P L 17 第 7 ・ 8 号製塩跡 第 4 号土樋, 第 4 号土樋断割状況, 第80 ・ 81号屋外鹹水槽</p> <p>P L 18 第 8 ・ 9 号製塩跡 第79号屋外鹹水槽断割状況, 第88号屋外鹹水槽, 第 1 号鹹水槽</p> <p>P L 19 第 2 号鹹水槽断割状況, 第 9 号鹹水槽, 第21号鹹水槽</p> <p>P L 20 第21号鹹水槽断割状況, 第39号鹹水槽, 第44号鹹水槽</p> <p>P L 21 第46号鹹水槽, 第46号鹹水槽断割状況, 第50号鹹水槽遺物出土状況</p> <p>P L 22 第60号鹹水槽断割状況, 第62号鹹水槽, 第63号鹹水槽断割状況</p> <p>P L 23 第94号鹹水槽, 第96号鹹水槽, 第97号鹹水槽</p> <p>P L 24 第 1 号粘土貼土坑断割状況, 第 4 号粘土貼土坑土層断面, 第19号粘土貼土坑土層断面</p> <p>P L 25 第22号粘土貼土坑, 第22号粘土貼土坑断割状況, 第42号粘土貼土坑断割状況</p> <p>P L 26 第57号粘土貼土坑, 第72号粘土貼土坑, 第78号粘土貼土坑</p> <p>P L 27 第80号粘土貼土坑, 第80号粘土貼土坑断割状況, 第102号粘土貼土坑</p> <p>P L 28 第111 ・ 112号粘土貼土坑, 第13号炉跡 ・ 第25号土坑, 第15号炉跡</p> <p>P L 29 第22号炉跡とその周辺, 第22号炉跡遺物出土状況, 第39号石組炉跡</p> <p>P L 30 第40号炉跡, 第43号炉跡断割状況, 第62号炉跡</p>
---	--

- P L 31 第1号土坑, 第1号土坑断割状况, 第2号土坑
風景, 調査終了後全景
- P L 32 第5号土坑土層断面, 第8号土坑, 第15号土坑断割状况
P L 42 第1・3号製塩跡, 鹹水槽出土遺物
- P L 33 第18・19号土坑, 第60号粘土貼土坑・第34号土坑, 第46号土坑
P L 43 鹹水槽, 炉跡, 土坑, 不明遺構出土遺物
- P L 34 第52号土坑と石列, 第60号土坑と石組遺構, 第80号土坑断割状况
P L 44 遺構外出土遺物(内耳土鍋)
- P L 35 第1号墓壙, 第2号墓壙, 不明石列遺構
P L 45 遺構外出土遺物(内耳土鍋・土師質土器の皿)
- P L 36 B3b7区貝殻集積状况, 遺構外遺物出土状况(内耳土鍋片), E4j8区遺物出土状况(内耳土鍋片, 人骨)
P L 46 粘土貼土坑, 土坑, 不明遺構, 遺構外出土遺物(内耳土鍋片)
- P L 37 遺構外遺物出土状况(土師質土器の皿), (七輪), (砥石)
P L 47 遺構外出土遺物(土師質・瓦質土器)
- P L 38 G5a9区遺物出土状况(墨書供養石), H5f0区遺物出土状况(鏝), B3g1区遺物出土状况(幼児骨, 小刀, 六道銭)
P L 48 遺構外出土遺物(七輪・陶器片)
- P L 39 B3g1区遺物出土状况(幼児骨と六道銭), 遺構外遺物出土状况(人骨と内耳土鍋片), (人骨と六道銭)
P L 49 遺構外出土遺物(陶器・炆器片)
- P L 40 F5d8区遺物出土状况(幼児骨と貝殻), 遺構外遺物出土状况(獸骨), H6i1区遺物出土状况(獸骨)
P L 50 遺構外出土遺物(陶器・炆器片)
- P L 41 E4～F4区調査終了後風景, 埋め戻し作業
P L 51 遺構外出土遺物(陶器・磁器・須恵器・炆器片)
- P L 52 遺構外出土遺物(陶器片・土製品・ガラス製品)
- P L 53 土師質・瓦質土器・炆器片, 縄文式土器・須恵器・埴輪片
- P L 54 鹹水槽・遺構外出土遺物(石製品)
- P L 55 遺構外出土遺物(石・金属製品)
- P L 56 土坑, 遺構外出土遺物(金属製品)
- P L 57 遺構外出土遺物(金属・骨角製品)
- P L 58 鹹水槽・土坑出土遺物(古銭), 第3号竈断割作業風景

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

昭和21年以降、米空軍により使用されてきた「水戸対地射爆撃場」は、昭和48年（1973年）に日本政府に返還された。返還後の跡地利用について茨城県は、昭和56年（1981年）に大規模流通港湾と国営公園を主な用途とする跡地利用計画を決定した。その計画に基づき、跡地内の道路整備事業の一環として、本事業「一般県道水戸那珂湊線道路改良工事」が実施されることになった。

平成3年12月、事業主体者である茨城県土木部道路建設課は、茨城県教育委員会と共に工事区域の現地踏査を行い、埋蔵文化財の存在を確認した。平成4年1月、茨城県土木部道路建設課は茨城県教育委員会に工事区域内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、沢田遺跡の一部と考えられる20,000㎡について、発掘調査による記録保存の措置を講ずることになった。そしてその調査機関として、茨城県教育財団が紹介された。

財団法人茨城県教育財団は、平成4年4月1日付で茨城県と埋蔵文化財発掘調査の業務委託契約を締結し、平成4年4月1日から平成5年3月31日まで沢田遺跡の第五次発掘調査を実施することになった。

第2節 調査経過

沢田遺跡の第五次発掘調査は、平成4年4月1日から平成5年3月31日までの1か年にわたって実施された。以下、調査の経過について、その概要を記述する。

- 4 月 7日に、本年度調査エリアの現地踏査を行い、それをもとに調査計画を作成した。13日に現場事務所を開設し、22日から作業員を投入した。まず、調査区の南側から東西のトレンチを設定して試掘を行い、遺構確認調査を進めていった。
- 5 月 前月に引き続きトレンチ試掘を行い、27日から重機を投入した。最初にエリア内にあった仮設道路の碎石除去を行った。
- 6 月 12日にトレンチ試掘が終了し、E4区を中心に黒色土砂を確認した。15日に方眼杭打ちを行い、翌日からE4区の遺構調査を始めた。それと並行して、18日から重機による表砂除去及び、遺構確認作業を開始した。
- 7 月 6日から22日にかけて、E4区確認面を中心とするエリア内の第1回危険物調査が行われた。その結果、砂中に埋没していた危険弾数発を確認し、自衛隊に依頼して除去した。27日から、新たにG5区、H5・6区、の遺構調査を開始した。28日、エリア内にあった仮設道路のエリア外への移設が完了した。
- 8 月 4日、エリア内に立っていた電柱の移設が行われた。また5日には、自衛隊の爆発物処理班による危険弾の検分が行われた。7日から、B3、C3区の遺構調査を開始した。この区の調査において、墓壇2基を確認した。20日までに、エリア内にあった仮設道路のアスファルト除去作業が完了し、エリア内の障害物がすべてなくなった。26日には、第2回目の方眼杭打ちを実施した。
- 9 月 1日から14日にかけて、第2回危険物調査が行われ、危険弾数発を確認した。18日から、D5、E5区の遺構調査を開始した。

- 10 月 2日から、F 5・6区、G 6区の遺構調査を開始した。遺物の状況から、今回の調査において最も新しい、近代の生活面にあたると思われる。28日からは、いよいよG 6、H 6区の土樋とそれに伴う大型鹹水槽の調査を始めた。31日には、第3回目の方眼杭打ちを実施した。
- 11 月 10月30日より11月5日まで、那珂湊市「懐古館」において、「沢田遺跡調査成果展示」を実施し、250名の見学者があった。9日から、I 6、J 6区の製塩遺構群の調査を開始し、竈1基、屋外鹹水槽7基、屋内鹹水槽と思われるもの2基を確認した。27日からは、D 4区、E 4・5区の下層部の遺構調査を開始した。30日には、自衛隊爆発物処理班による、不発弾の爆破処理が行われ、現場作業を休止した。
- 12 月 9日に、那珂湊署による人骨検分が実施され、埋葬処理を行っても問題ないとの判断が下された。D 4区、E 4・5区の下層部に確認された遺構の調査を行い、S N148の底面から五輪塔の風・空輪部が、また、G 5a区の砂中から墨書のある自然石が出土した。G 6区に確認された釜屋であるS K 110の調査も行った。
- 1 月 G 5・6区の小規模土坑群の調査と、H 6区の大型鹹水槽と土樋の密集した部分の調査を進めた。
- 2 月 H 6区の釜屋S K 96と、G 6区からH 6区にかけての二次面に確認された鹹水槽と小規模土坑群の調査を進めた。16日には、班内研修が実施され、神奈川大学短期大学部教授の網野善彦氏を招聘して、遺跡に関するコメントをいただいた。また、19日には阿字ヶ浦の浄妙寺にて、第1回目の人骨埋葬が行われた。25日からは、G 6区からH 6区にかけての三次面の調査を開始した。
- 3 月 4日までですべての遺構調査を終了し、重機による埋め戻しに入った。作業員は11日まで撤収の準備を行い、12日には埋め戻しも完了した。8日には報告会、15日には第2回目の人骨埋葬を実施し、25日までに事務所の撤収を完了し、調査を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

沢田遺跡は、茨城県ひたちなか市阿字ヶ浦町大字沢田字青塚から渚にかけて所在している。ひたちなか市は平成6年11月1日に、旧勝田市と旧那珂湊市が合併して誕生したが、旧市域で言えば、沢田遺跡は那珂湊市の最北東部に位置している。旧那珂湊市は、東端が黒潮と親潮の交錯する太平洋に面しており、古くから気候、産業、交通などの面で、この海の影響を大きく受けてきた地域である。また中心市街地は市域の南東端部、那珂川の河口左岸に面した所にあり、14世紀以降港として発展し⁽¹⁾、現在は多くの水産業関連施設を有している。行政的には、北の東海村、西の旧勝田市、南の水戸市（旧常澄村）、大洗町と境を接し、海に向かっての交通の要地となっている。

また地形的には、沢田遺跡は、阿字ヶ浦海水浴場から北へ久慈川河口まで広がる太平洋岸の砂丘地帯「東海・阿字ヶ浦砂丘」の中に位置している。この海岸砂丘は、海岸の狭い低地に留まらず、久慈川と那珂川の間広がる「那珂台地」の東端に這い上がり、数kmほどの内陸部にまで及んでいる。これは、この海岸に吹く北ないし北々東の卓越風によって、砂が内陸へ運ばれたためである。この砂は、風による分級作用によってふるい分けられた粒揃いの中粒砂で形成されている。この砂からなる小砂丘群が、北東から南西方向に稜線を持ち、雁行状に配列されている⁽²⁾。遺跡の標高は9～12m程度で、径10m前後の非常に小さな砂丘が点在し、比高差2～3m程度の起伏を作り出している。この砂丘の地層は、最上部に厚さ10m近い砂丘砂の堆積が見られ、その下は厚さ3～4mの関東ローム層があり、その中部に鹿沼軽石層を挟んでいる⁽³⁾。

植生については、遺跡のある汀線近くの微小砂丘地では、微小砂丘の頂上部を中心にハマヒルガオ、ハマエンドウなどの海浜植物が自生しており、その部分を掘ると、下に黒色土混じりの砂層が確認できる。これは海浜植物の腐植堆積によるものと思われる。汀線から300m程度以上内陸になると、小砂丘群となり、その部分は標高差に関係なくマツ類の群生や、乾燥性の丈の低い草木類が見られ、内陸部に行くほど松の樹高が高くなる傾向がある。

風による砂の移動は非常に大きく、平均風速10m前後の風が一晩吹き続けると、深さ1mほどの穴はたちまち埋まってしまうくらいである。また海岸に寄せる波の高さは、比較的風のない穏やかな日でも1m～1m50cmほどあり、満潮時に高潮が押し寄せたりすると、波の高さは5mを超え汀線はかなり上昇する。これにより、海岸の製塩遺構が破壊されているところもある。

このように、沢田遺跡の自然環境は、海岸であるが故の自然現象に非常に強い影響を受ける地域であることを念頭において考えていかなければならない遺跡である。

注

(1) 茨城県 『茨城県史 市町村編』 1972年3月

(2) 茨城県 『土地分類基本調査 那珂湊』 1991年3月

(3) (2)前掲書

第2節 歴史的環境

前回までの調査では、沢田遺跡は中世から近世初期にかけての製塩遺跡であるという見解を示してきたので⁽¹⁾、ここでは中世以降についての沢田遺跡周辺の地域の概観を行うことにする。

まず、沢田遺跡の存在する海岸地域は、平安時代には湊・平磯・磯崎・部田野地区とともに前浜（現在の阿字ヶ浦）が常陸国那賀郡幡田郷はたに所属していたことから⁽²⁾、この幡田郷にあったことが推定できる。これが中世になると、戸田野郷へたのと表現が変わり、吉田郡だじょうに所属した⁽²⁾。鎌倉時代は、公領として大掾職の馬場氏が代々管轄していたようである⁽²⁾。その後鎌倉時代末期から南北朝時代には、戸田野郷は鹿島神宮の神領だったようである⁽³⁾。さらに応永33年（1426年）には、水戸館えどみちふさに本拠を置き吉田郡一帯を支配していた大掾氏（旧馬場氏）が江戸通房に館を占拠され、以後戸田野郷周辺の地は江戸氏の所領となったようである⁽⁴⁾。

近世に入り、天正28年（1590年）には、水戸の江戸氏が佐竹氏に追われ、江戸氏の所領は佐竹領となった⁽⁵⁾。この時期は、「前はま」の地が確実に佐竹領であったことが史料から確認できる⁽⁶⁾。しかし、佐竹領の時代は長続きせず、関ヶ原の戦いにおける戦後処理の一環として、佐竹氏は慶長7年（1602年）徳川家康に秋田国替を命ぜられ、常陸を去った。以後、数年間は実質的に家康の直轄領となったが、慶長14年（1609年）には初代水戸藩主となる徳川頼房が封ぜられ、水戸藩の時代が始まった⁽⁷⁾。

水戸藩政時代には、沢田遺跡周辺の情報が諸史料に見られるようになってくる。元和年間（1615～24年）には、猛烈な強風が吹き、「大塚、青塚、二亦」村などの海岸集落が内陸部の「前浜、馬渡、長砂」などの集落へ移住したといわれている⁽⁸⁾。このことにより、沢田周辺の地は常住の集落ではなくなった可能性もあるが、天保13年（1842年）の前浜村田島反別図には沢田海岸に塩竈9軒、沢田川に沿って水車1軒と水田の地割りが記されており、移住後も耕作や製塩が行われていたことがわかる。製塩に関しては、その後も竈数の増減はあったが、明治18年（1885年）までは継続していたようである⁽⁹⁾。

近代に入ると、前浜村は明治4年（1871年）7月の廃藩置県で水戸県に所属した。さらに11月には茨城県に所属が変わった⁽¹⁰⁾。また明治22年（1898年）の町村制で、足崎、長砂、馬渡、前浜の4村が合併し、前渡村が誕生した⁽¹¹⁾。製塩については、明治35年（1911年）から同43年（1919年）の間は前浜で行われていたようである⁽¹²⁾。大正時代には、沢田遺跡の背後に広がる広大な砂丘地帯は、水戸二連隊の実弾射撃演習場として利用され始めた。その後、昭和初期に一時途絶えたものの、昭和11年（1936年）からは陸軍航空隊の爆撃演習が行われるようになり、昭和15年（1940年）には、前浜地区は水戸陸軍飛行学校の飛行場となった。さらに終戦後の昭和21年（1946年）6月には、飛行場敷地と建物が米占領軍に接収され、「水戸対地射撃場」となった⁽¹³⁾。土地の古老の話によると、戦中、戦後を通じ食料不足の状態が続いた時には、鉄製の長方形釜を使い、直煮法による塩作りを行ったとのことである。

そして昭和29年（1954年）3月30日、前渡村大字前浜は那珂湊町と合併し、翌31日那珂湊市が誕生した。さらに昭和33年（1958年）7月1日、「前浜町」を「阿字ヶ浦町」に変更し⁽¹⁴⁾、平成6年11月1日には、那珂湊市と勝田市が合併し、「ひたちなか市」となり現在に至っている。

注

(1) 茨城県教育財団 「常陸那珂港関係埋蔵文化財調査報告書1 沢田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第52集』 財団法人茨城県教育財団 1989年3月

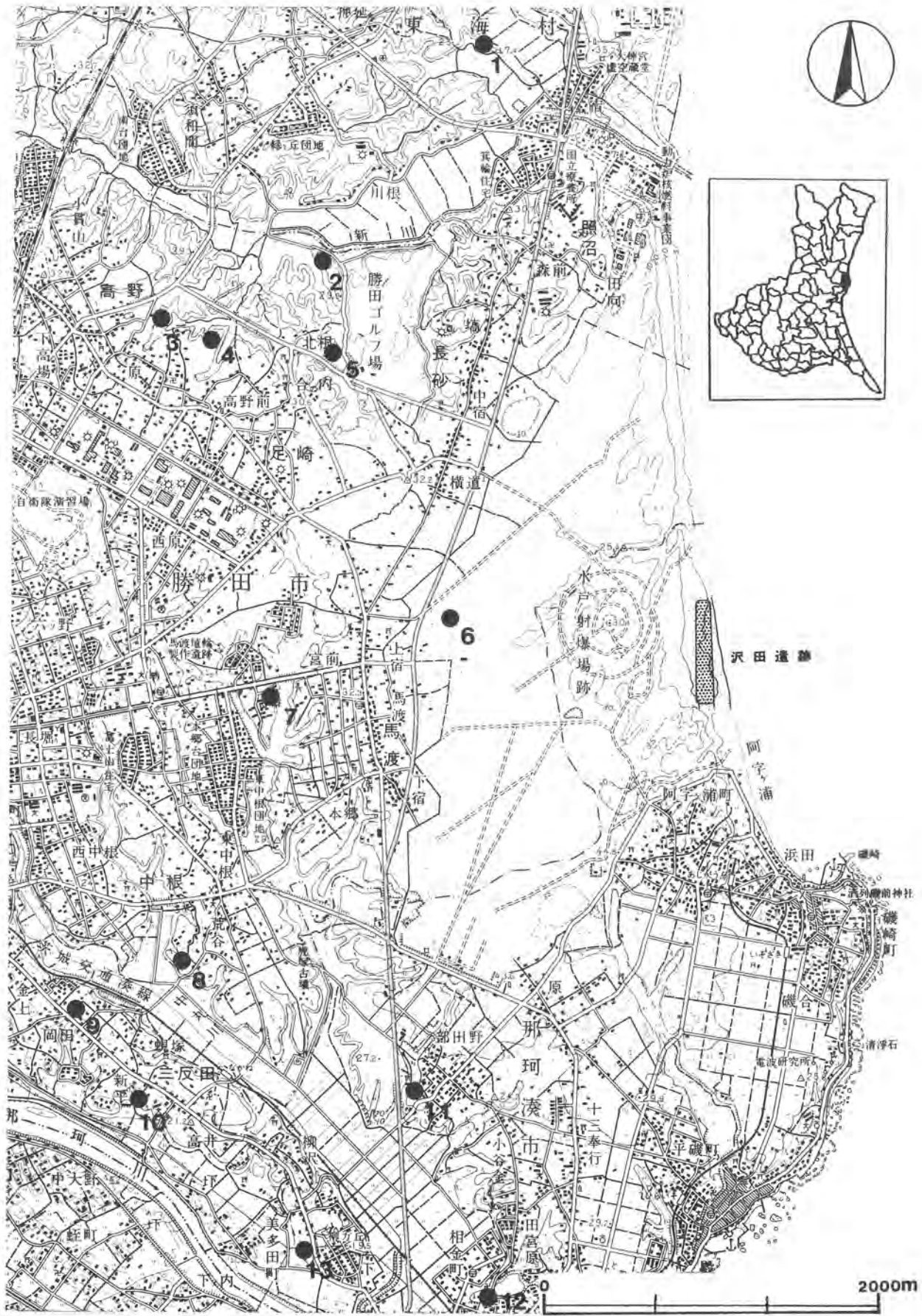
茨城県教育財団 「常陸那珂港関係埋蔵文化財調査報告書2 沢田遺跡」(上),(下)2冊『茨城県教育財

団文化財調査報告第77集』 財団法人茨城県教育財団 1992年 3月

- (2) 中山信名・栗田寛 『新編常陸国誌』 「巻第三那珂郡幡田郷の条」 宮崎報恩会版, 崙書房 1979年12月
- (3) 茨城県史編さん中世史部会 『茨城県史料中世編Ⅰ』 「鹿嶋神宮領田敷注文書」 (康永二年正月九日書写) 茨城県 1970年 3月
- (4) (2)前掲書 巻第一 建置沿革の条
- (5) (2)前掲書 巻第一 建置沿革の条
- (6) 那珂湊市地名研究会 『那珂湊の地名』 那珂湊市 1986年 3月
文禄4年(1595年)7月16日の中務大輔当知行目録写(佐竹義秀文書)に「前はま」の地名が見える。
- (7) 茨城県史編集委員会 『茨城県史近世編』 茨城県 1985年 3月
- (8) 佐藤次男 「伝説千々乱風」 『茨城県史研究32』 茨城県史編さん委員会 1975年 8月
- (9) 小池信親 「前浜村史」 『那珂湊市史料第一集』 那珂湊市史編さん委員会 1975年 3月
- (10) 宮崎報恩会 『那珂湊の歴史』 財団法人宮崎報恩会 1974年 1月
- (11) (10)前掲書
- (12) 梅原勇 『地方史研究とその活用—近世以降の常陸地方における製塩の研究を通して—』 昭和44年度内地留学研究報告書 1970年 3月
- (13) 勝田市史編さん委員会 『勝田市史料Ⅴ 水戸射爆撃場の歴史』 勝田市 1982年 1月
- (14) (10)前掲書

表1 沢田遺跡周辺中世城館跡・塚一覧表

図中 番号	名 称	県遺跡 番 号	現 況	築 城 者	時 期	備 考
1	真崎城跡	534	山林・畑	真崎三郎義連	鎌倉～戦国	本郭,土塁,一・二の壕残存
2	多良崎城跡	3181	山林	伝多良崎次郎盛忠	鎌倉	史跡として整備
3	清水館跡	3187	山林・畑		戦国	土塁残存
4	小山城跡	3683	山林		南北朝	土塁,堀跡残存
5	奥山館跡	3172	山林	吉田里幹(多良崎三郎)	鎌倉	土塁残存
6	大沼経塚群		荒地		戦国	91年度天文10年銘経筒出土
7	大山館跡	4238	一部整地	大山四郎左衛門		土塁残存
8	中根城跡	4186	山林・畑	佐竹治義	鎌倉	本郭,二・三の郭,土塁残存
9	新堀堀跡	4199	畑			
10	新平遺跡	4194	畑			館跡がある
11	古屋敷館跡		公民館	馬場小次郎資幹か	鎌倉	
12	館山館跡		寺院	伝小泉左京亮重幹	永禄中廃止	
13	道理山館跡		山林・畑	吉田盛清(道理山九郎)	鎌倉	



第1図 周辺遺跡分布図



第2図 沢田遺跡調査区

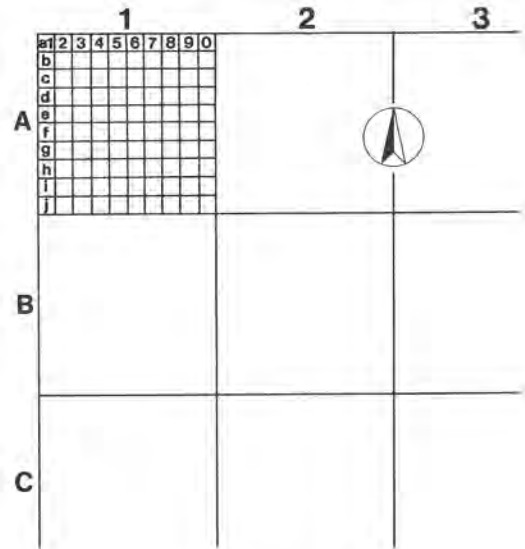
第3章 遺 跡

第1節 調査方法と遺構・遺物の記載方法

1 地区設定（第2・3図）

沢田遺跡の調査は、昭和62年7月から平成3年3月まで四期にわたり、茨城県教育財団によって行われている。この期間の調査における地区設定については、初年度の調査において設定された調査区の表示方法をそのまま利用してきた。しかし、今回の第五次調査における調査区域には、新たな地区設定の必要が出てきたので遺跡及び遺構の位置を明確にするため、次のように設定した。

まず、日本平面直角座標第Ⅸ系の原点から、X軸(南北)方向に+44,480.00m、Y軸方向に+69,800.00m移動した点を基準にして、そこから東へ280m、南へ400mまでの範囲を40m四方の大調査区に分割し、さらに大調査区の中を4m四方の小調査区に分割して設定した。

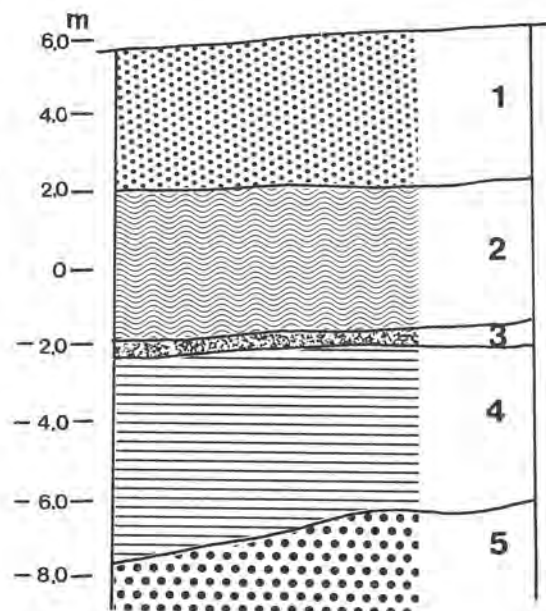


第3図 調査区呼称方法概念図

調査区の名称は、アルファベットと算用数字を組み合わせた記号で表現した。大調査区は、基準点から南へ40mごとにA～J、東へ40mごとに1～7とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。小調査区は、各大調査区の北西角を基点とし、南へ4mごとにa～j、東へ4mごとに1～10とし、大調査区名の後につけて「A1c4区」、「B2f0区」のように呼称した。なお、これらの調査区を区画する杭の呼称については、それぞれの区の北西角の杭に表示して調査を進めた。

2 基本層序の検討（第4図）

当遺跡の基本的層序は、運輸省第二港湾建設局作成の「地層想定断面図」によると、1、2層は沖積世期に形成された粒度の異なる細砂で構成された砂質土層である。3層は、沖積世初期の砂礫からなる礫質土層である。4層は洪積世期に形成された砂質土層で、シルト混じり微細砂・微細砂・中砂によって構成されている。5層は、中新世に形成された砂質泥岩から成る軟岩層である。当遺跡で検出された遺構は、いずれも1層の砂質土層中に構築されたものである。



第4図 基本土層図

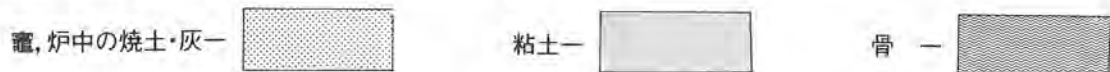
3 遺構・遺物の記載方法

本書における遺構・遺物の記載方法は、以下の通りである。

(1) 使用記号

- (遺構関係) 竈, 炉, 土坑, 墓塚—S K 鹹水槽, 粘土貼土坑—S N 土樋—S D
不明遺構—S X
- (遺物関係) 土器, 陶磁器, ガラス器—P 石器, 石製品—Q 金属製品, 古銭—M
骨角製品—B
- (計測値) 口径—A 器高—B 底径—C 高台径—D 高台高—E
つまみ径—F つまみ高—G 現存値—() 復元推定値—[]

(2) 遺構平面図中のスクリーンパターンによる表示方法



(3) 土層の分類

土層観察の記述については、土層断面図中に含有物のみを表記することとし、下記の記号を使用した。

- 砂—s 煤を含む黒色土—e 粘土—n 貝殻片—h 礫・小石—g 灰—a
焼砂・焼土—b 炭化材・炭化物—c ローム—l 攪乱—k

(4) 色調の表現

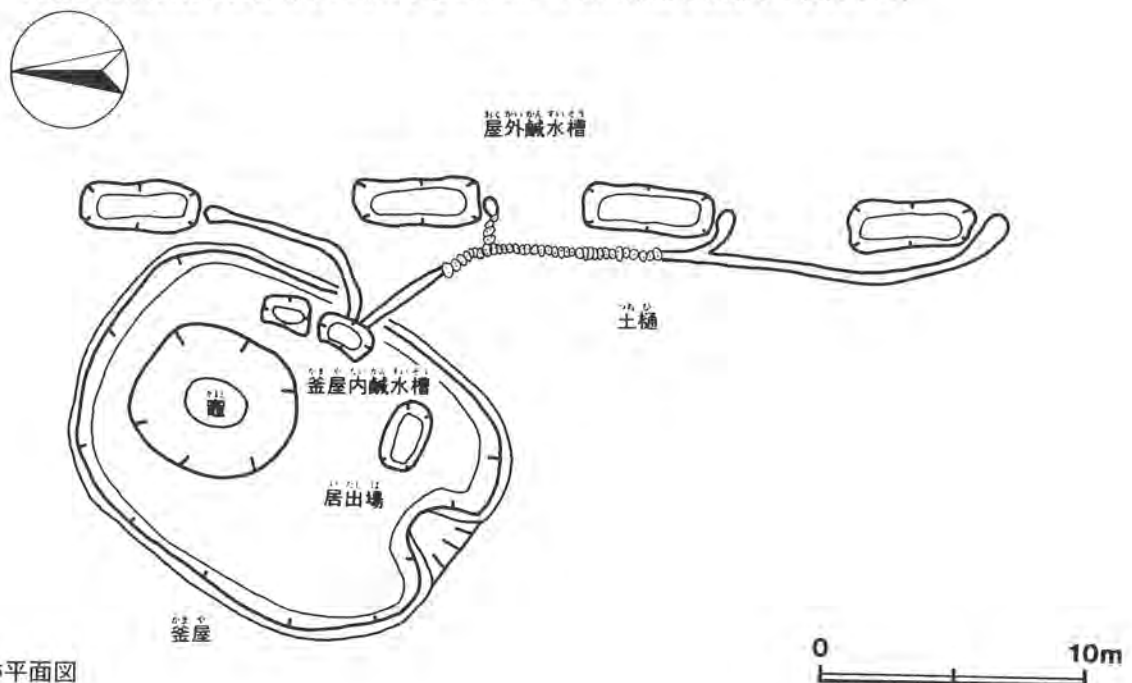
土層や遺物の観察における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 日本色研事業株式会社）を参照した。

(5) 遺構・遺物実測図の掲載方法

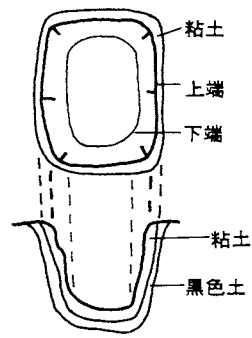
- ① 遺構実測図は、原則として縮尺60分の1で掲載した。
- ② 遺物実測図は、原則として縮尺3分の1で掲載した。

(6) 遺構名の表記方法

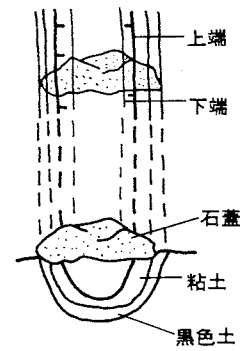
当遺跡の遺構には製塩跡特有のものが多いため、下図の用語を使用して表記した。



製塩跡平面図



鹹水槽平面・断面図



土樋平面・断面図

第2節 遺跡の概要

沢田遺跡は、ひたちなか（旧那珂湊）市阿字ヶ浦町の太平洋に面する標高9～12mの海岸砂丘上に位置し、調査面積は20,000㎡である。

今回の調査によって確認された遺構は、中世から近代にかけての釜屋跡5カ所（竈6基）、鹹水槽102基、粘土貼土坑112基、土樋23条、土坑100基、炉跡69基、墓壙2基である。

遺物は、遺物収納箱（60×40×20cm）に7箱出土している。中世から近世にかけての遺物として、土師質土器の皿、内耳土鍋、陶磁器片、石製品、金属製品、古銭、骨角製品、墨書石などが出土している。近代の遺物として、七輪、ガラス瓶、陶磁器などが出土している。

第3節 遺構と遺物

1 製塩跡の遺構と遺物

今回の第五次調査において、明確に把握できた製塩跡は9カ所である。そのうち、濃縮した海水である鹹水^{かんすい}を煮詰める煎熬^{せんごう}作業を行った釜屋跡と、鹹水を一時溜めておき異物を沈殿させるための屋外鹹水槽や、その鹹水を釜屋内鹹水槽へ送り込むための粘土貼りの溝である土樋^{つちひ}が、全部揃った形で確認できたのは1カ所（第3号製塩跡）のみである。また、釜屋跡とそれに伴う屋外鹹水槽を確認できたのが1カ所（第2号製塩跡）、釜屋跡のみの確認が3カ所（第1・4・5号製塩跡）ある。さらに、屋外施設のみの確認が4カ所あって、そのうち屋外鹹水槽とそれに伴う土樋が揃って確認できたのが2カ所（第6・7号製塩跡）、屋外鹹水槽のみの確認が2カ所（第8・9号製塩跡）である。

釜屋内の施設のセットとしては、屋外から運ばれた鹹水を釜に入れるまでに一時溜めておき、異物を沈殿させるための釜屋内鹹水槽が2基、鹹水を煮詰めるための大釜を据えた竈^{かまど}が1基、煮詰め終わった荒塩^{にがり}の苦汁を抜くための施設である居出場^{いだしば}が1基あるのが基本である。このことは、第四次調査までで明らかになっている。

第1号製塩跡（第5・6図）

位置 調査区の南部、H6i7区を中心に釜屋が確認され、南側に出入口をもつ。

遺構構成 2基の竈と7基の鹹水槽からなる。これらの遺構群は、竈が2基確認できたことと、釜屋内鹹水槽の重複関係及び竈と釜屋内鹹水槽の位置関係などから、新旧2つのグループに分けることができる。第1グループは、第1号竈（SK96A）、2基の釜屋内鹹水槽（SN121・123B）で構成されている。第2グループは、第2号竈（SK96B）、3基の釜屋内鹹水槽（SN123A・124・125）、2基の居出場（SN214・215）で構成されており、第2グループの方が新しい。

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北最大長が約16m、東西最大長が約14mに及び、形状は不定形である。砂に煤や灰と細かく砕いた貝殻片（以下、破砕貝と呼称する）を混ぜ合わせて練り上げた黒色土を、砂上に厚さ20～25cmほど貼りつけて構築している。この黒色土は、釜屋内鹹水槽を囲むように広がってはならず、また柱穴も確認できなかったため、釜屋の規模と形状を明確に把握することはできない。しかも、この黒色土は竈の上部にも貼られていたので、この釜屋が廃絶された後に堆積したと考えることもできる。

そして、第1号及び第2号竈の北側から北西側をとり囲むように、灰ブロックや破砕貝を含む砂混じりのロームによって作られた帯状の部分が2条確認されている。0.4～0.8mの間隔をあけて二重に巡っており、巾0.5m、厚さ20～50cmほどのものである。これは、釜屋の建物に対し何らかの補強を施すためのものと考えられ、内側のものが第1号竈の操業時に、外側のものが第2号竈の操業時に機能していたものと思われる。

竈 第1号竈はH6i6区を中心に確認され、平面形は楕円形である。規模は、長軸6.30m、短軸4.36m、深さ1.23mである。厚さ約10cmの黒色土を鍋状に貼って構築しており、覆土は上層から中層にかけて周辺から流れ込んだ砂が自然堆積し、下層は第2号竈を構築した際に貼った黒色土の中に厚さ20～30cmの灰層が部分的に残っている。火床直下の砂層は火熱を受け、約30cmほどの厚さで赤変した焼砂になっている。

第2号竈はH6g7区を中心に確認され、平面形は楕円形である。規模は、長軸7.00m、短軸4.17m、深さ2.02mである。土層の堆積状況は、火床部にあたる黒色土層が見られず、灰層の直下が厚さ10cmの焼砂になっている。南側の覆土は、上層から中層に砂の自然堆積が見られたが、北側の覆土は、上層から下層にいたるまで黒色土層となっており、人為的な埋め戻しか二次的な施設構築が行われた可能性がある。また、第2号竈の断ち

割りを行ったところ、2 mほど南側にはほぼ同じ標高でもう1つの灰層があり、これも竈として使用された可能性がある。

釜屋内鹹水槽 第1号竈に伴う釜屋内鹹水槽は、第29号鹹水槽（S N121）がH6j7区、第31B号鹹水槽（S N123 B）がH6i7区を中心に確認され、平面形は、どちらも推定で隅丸方形に近い。規模は、第29号鹹水槽が長軸2.82 m、短軸2.17 m、深さ1.15 m、第31号鹹水槽が長軸1.86 m、短軸1.53 m、深さ0.60 mである。どちらも底面は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を貼った上に、炭化物、灰、破砕貝を練り込んだ厚さ2～8 cmの褐色粘土を貼って構築している。

第29号鹹水槽の壁の南西コーナー部中段には足掛け石が1点出土している。これは、人が1 m30～40 cmほどもある深い鹹水槽の中に入って鹹水を汲み出す際に、足場にしたものと考えられる。この2基は、底面のレベルがほぼ同じであることから、同時期に構築されたものと考えられることができる。

第2号竈に伴う釜屋内鹹水槽は第31A号鹹水槽（S N123A）がH6i7区、第32号鹹水槽（S N124）がH6i8区、第33号鹹水槽（S N125）がH6h8区を中心に確認され、平面形は、どれも推定で隅丸方形に近い。規模は、第31号鹹水槽（S N123A）が長軸1.54 m、短軸1.48 m、深さ0.40 m、第32号鹹水槽が長軸1.22 m、短軸1.07 m、深さ0.28 m、第33号鹹水槽が長軸2.13 m、短軸1.34 m、深さ0.61 mである。どれも底面は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を貼った上に厚さ1～8 cmの褐色粘土を貼って構築している。

第31号鹹水槽と第32号鹹水槽は重複しており、31号が32号を切っているため、32号の作り替えが31号（S N123A）である。第33号鹹水槽は、第32号鹹水槽と同時に作られ、その後は作り替えなしで機能していたものと考えられることができる。

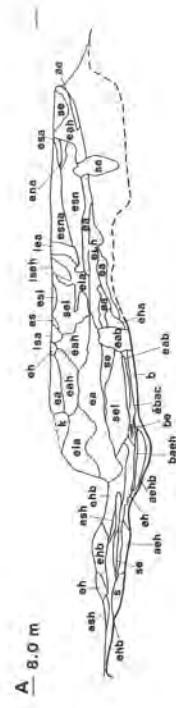
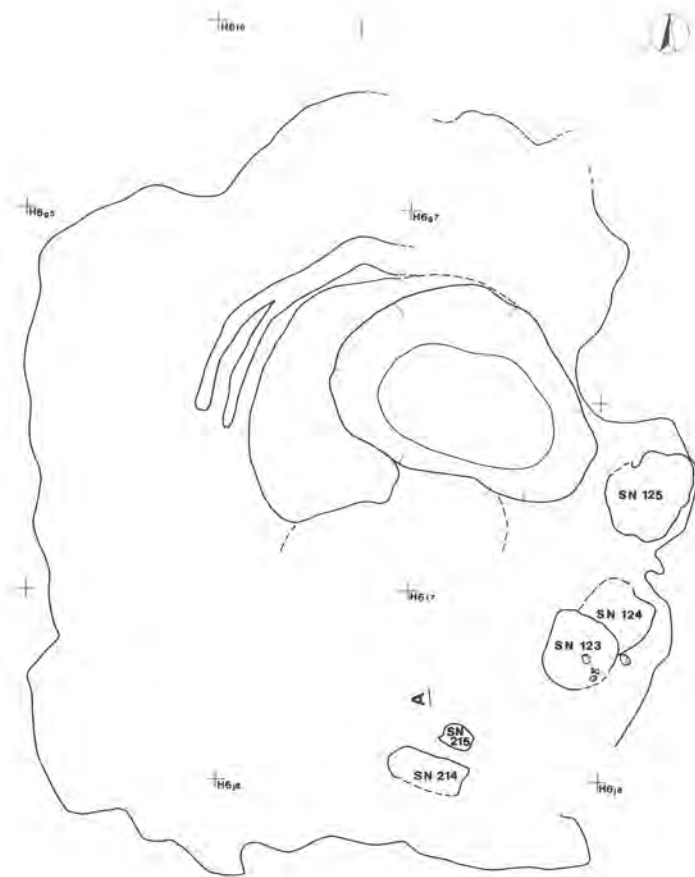
居出場 第98号鹹水槽（S N214）と第99号鹹水槽（S N215）が竈の南側のH6j7区とH6i7区を中心に確認され、平面形は、どちらも推定で隅丸長方形である。規模は、第98号鹹水槽が長軸1.49 m、短軸0.68 m、深さ0.26 mであり、第99号鹹水槽は崩落が大きく、規模を計測することはできない。どちらも底面は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を貼った上に厚さ1～7 cmの褐色粘土を貼って構築している。

2基同士の新旧関係は、竈から見て99号の外側に98号が位置していることから、99号の作り替えが98号であると思われる。そして、第98号鹹水槽と、第1号竈に伴う釜屋内鹹水槽である第29号鹹水槽が重複していることから、この2基は第2号竈に伴うものである。

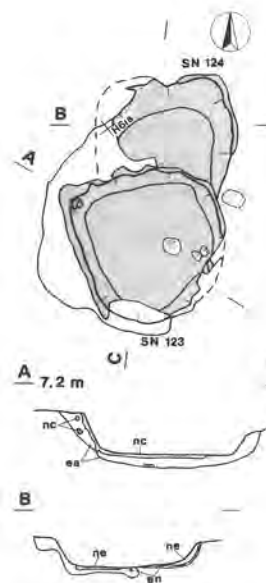
出土遺物 第1号竈の覆土中から、底部中央に穿孔された土師質土器の皿1点（第7図1）と、第2号竈の断ち割り層より下の砂層から石臼が1点（第7図2）出土している。

所見 本跡の出土遺物は周囲からの流れ込みの可能性もあるので、出土遺物から本跡の時期を明確にすることはできない。しかし、同じ敷地の釜屋に新旧2つのグループがあったことから、本跡を築いた操業者は、施設の大きな作り替えをしながら、比較的長期間継続して製塩を行っていたものと考えられる。

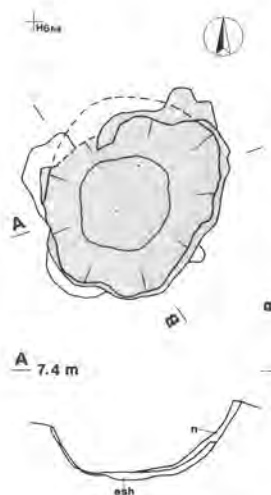
また、本跡のすぐ東から北東側には土樋をもつ鹹水槽群である第7号製塩跡が位置しているが、土樋の傾斜が本跡へ向かって下ってきてはならず、その反対方向である北の方へ下っているため、1つのグループにはならない。



SK 96 B



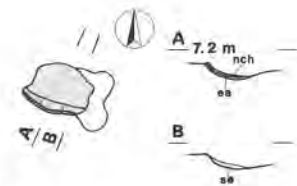
SN 123A-124



SN 125



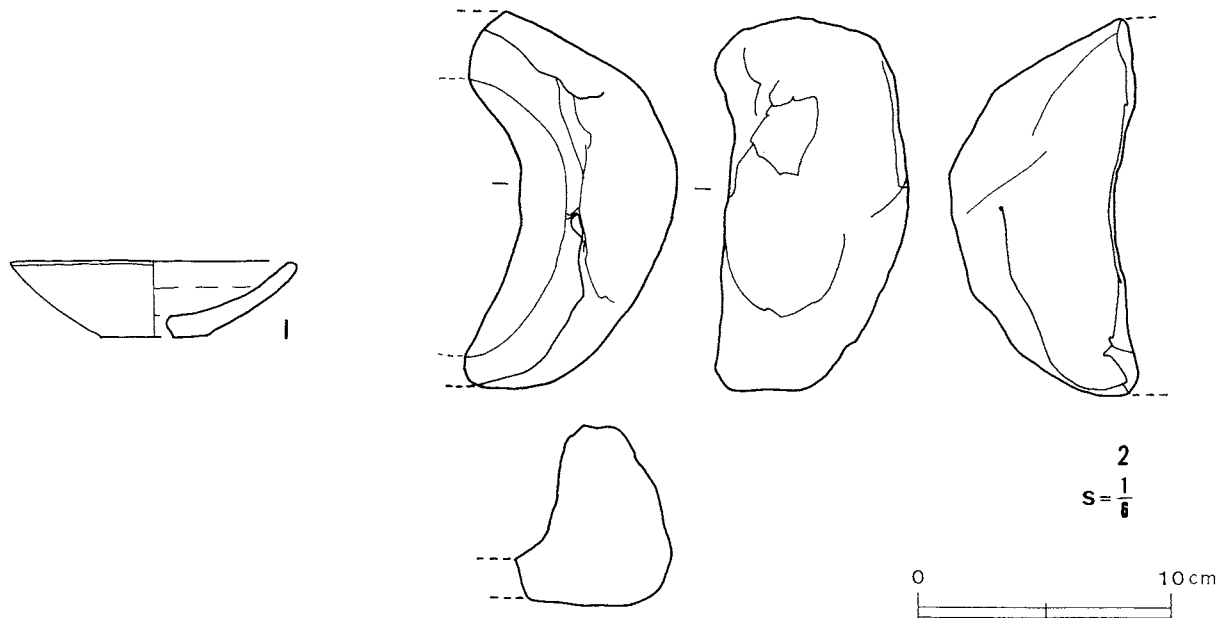
SN 214



SN 215



第6図 第1号製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽・居出場実測図(第2号竈)



第7図 第1号製塩跡出土遺物実測図

第1製塩跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7図 1	皿 土師質土器	A 11.3	底部は平底でやや突出し、中央に穿孔が施される。体部、口縁部はやや内彎ぎみに外傾して立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・長石 橙色 普通	P12 残存率97% S K 96 A 覆土
		B 2.9				
		C 4.0				

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第7図2	石 E1	(30.3)	(16.5)	14.2	(6150.0)	砂岩	S K 96 B 断割下層	Q 3 唐F1(搗き臼) 残存率40%

第2号製塩跡 (第8・9図)

位置 調査区の最南部西側、I 6h₂区を中心に位置する。

遺構構成 第3号竈 (S K 99), 2基の釜屋内鹹水槽 (S N 143・144), 1基の居出場 (S N 147), 2基の屋外鹹水槽 (S N 136・141) で構成されている。

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北約7m, 東西約6mで、不定形である。灰と破砕貝混じりの黒色土を砂上に厚さ5~60cmほど貼り付けて構築しているが、この黒色土は竈の周辺にしか確認できなかったため、釜屋の規模と形状を明確に把握することはできない。

竈 第3号竈はI 6h₁区を中心に確認され、平面形は楕円形である。規模は、長軸4.44m, 短軸3.21m, 深さ0.64mである。厚さ40~60cmの黒色土を鍋状に貼って構築しており、覆土は上層から中層にかけて周辺から流れ込んだ砂が自然堆積し、下層には色調や含有物の違いから、非常に薄い10の層に区分できる灰層の堆積が見られる。火床部にあたる黒色土が堅牢に構築されているためか、その下に焼砂の層は見られない。

釜屋内鹹水槽 第3号竈に伴う釜屋内鹹水槽は、第47号鹹水槽 (S N 143) と第48号鹹水槽 (S N 144) がI 6h₂区を中心に確認され、平面形は、どちらも隅丸方形に近い。規模は、第47号鹹水槽が長軸1.80m, 短軸1.56m, 深さ1.01m, 第48号鹹水槽が長軸1.72m, 短軸1.59m, 深さ0.95mである。どちらも底面は平坦で、壁は外

傾しながら立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を貼った上に厚さ2～8cmの褐色粘土を貼って構築している。

第47号鹹水槽の底部中央には、周囲の粘土とは異質の灰と破砕貝を多量に含んだ粘土がほぼ円形に貼ってある。これは、鹹水槽の底に溜まった泥水を汲み出す際に、かき出し桶や柄杓などで粘土を削り取ってしまったことにより中央部の粘土が摩滅して水漏れを起こしたか、起こしそうになったので、それを修復したためのものと考えられる。また、西壁中央やや南よりの下半部には、上から下に巾を広げる形で窪みが見られる。これは、上から鹹水を入れる際に、流れ落ちてくる鹹水の侵食作用により、窪んだものと考えられる。この窪みの位置と、第四次までの調査から、釜屋の入口が南側にあったと推定できること、さらに土樋が存在しないこと等を考え合わせると、この釜屋で製塩作業に従事した者は、担い桶に汲んだ鹹水を釜屋の入口から屋内に運び入れて、釜屋内鹹水槽にあけていたと考えることができる。

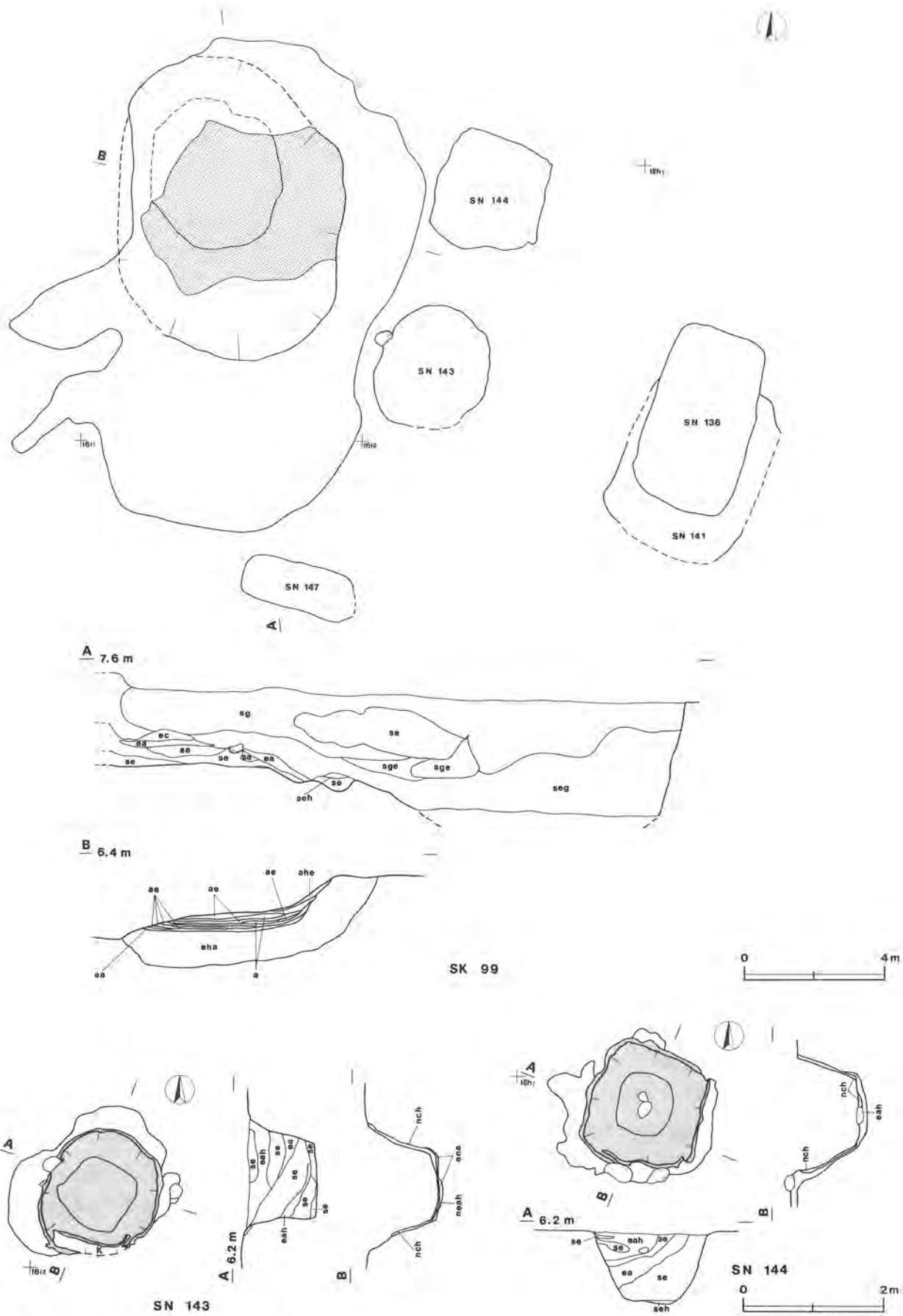
第48号鹹水槽の底部中央には、径15～20cmの平たい石が2点見られる。これは鹹水の落下により底面の粘土が崩壊するのを防ぐためか、底の泥水を汲み出す際の足場石にしたものであろう。南側の壁上部にも、径20～30cmの石が置いてあったが、これは壁の補強材にしたか、作業者が運んできた担い桶の鹹水を鹹水槽にあける際、重みで足が砂に埋もれバランスをくずしてしまわないよう足場にしたものと考えられる。

居出場 第3号竈に伴う居出場の、第49号鹹水槽（S N 147）が竈の南側I 6h₁区を中心に確認され、平面形は、隅丸長方形である。規模は、長軸1.70m（推定値）、短軸0.63m、深さ0.42mである。底面は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を貼った上に厚さ1～8cmの褐色粘土を貼って構築している。

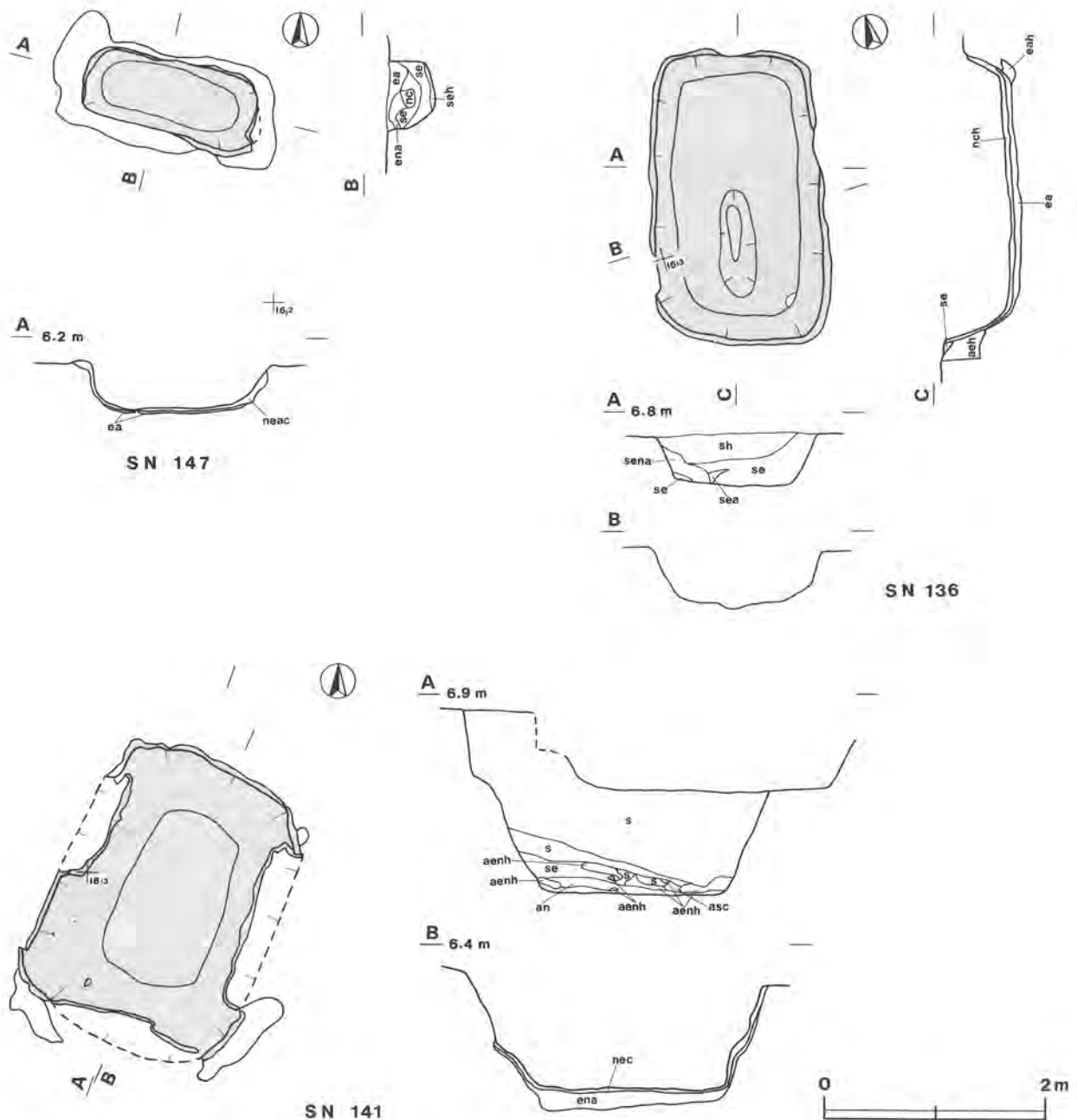
屋外鹹水槽 第40号鹹水槽（S N 136）と第45号鹹水槽（S N 141）が、釜屋の東側のI 6h₃区とI 6i₃区を中心に確認された。両者は重複しており、40号が45号を切っているため、40号の方が新しい。平面形は、どちらも隅丸長方形である。規模は、第40号鹹水槽が長軸2.66m、短軸1.45m、深さ0.53mであるが、第45号鹹水槽は40号に切られているため、長軸と短軸の長さについては計測できず、深さが1.03mである。どちらも底面は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同様に、砂の表面を掘り込み、黒色土を貼った上に、厚さ1～8cmの褐色粘土を貼って構築している。

第40号鹹水槽の底面中央部には、鹹水落下の圧力により形成されたと思われる溝状の窪みがある。第45号鹹水槽の底面中央部には、鹹水受けと思われる石が3点粘土中に埋め込まれてあり、壁の南西コーナー部中段には足掛け石が1点ある。2基同士の重複関係からみて、45号の作り替えが40号であろう。

所見 本跡は出土遺物がなく、その時期を明確にすることはできない。第40・45号鹹水槽の南東側には、同規模の鹹水槽が3基（第41・42・44号鹹水槽）存在するが、距離が少し離れ過ぎていることと、長軸方向が約90度ずれていることから、これらは本跡に伴うものではない。



第8図 第2号製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



第9図 第2号製塩跡鹹水槽・居出場実測図

第3号製塩跡 (第11~13図)

位置 調査区の中央よりやや南寄りの、G6h₁区に出入口をもつ釜屋が位置する。

遺構構成 第4号竈 (SK110), 2基の釜屋内鹹水槽 (SN156・157), 3基の居出場 (SN139・161・162), 4基の屋外鹹水槽 (SN60・126・130・177), 4条の土樋 (SD1・2・9・10) で構成されている。

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北約16m、東西約14mで、不定形である。灰と破砕貝混じりの黒色土を砂上に厚さ5~60cmほど貼り付けて床面を構築している。この床面は全体に緩い傾斜をもっているが、西側と北側は比較的傾斜がきつい。東側と南側は非常に緩い傾斜であるが、東側には釜屋内鹹水槽があるため、これらのことから、出入口は南側にあったと考えられる。また、釜屋の南側にある居出場 (SN139) のすぐ北には、径1~2mほどの薄い粘土の広がり確認できた。これは釜屋の出入口部付近の床面を強固な造りにする

ために貼られたものであろう。

そして第1号製塩跡と同様に、ロームを主成分とする帯状部分が1条確認され、さらに釜屋内部の竈の周辺部に、不規則に配置されたピットが5カ所確認できた。これらのピットは、いずれも黒色土層を掘り込んでその下の砂層に達しており、竈を支持するためか、釜屋全体を支持するための柱穴であろう。

竈 第4号竈はG6f₁区を中心に確認され、平面形は楕円形である。規模は、長軸3.64m、短軸3.32m、深さ0.84mである。厚さ5～20cmの黒色土を鍋状に貼って構築しており、覆土は上層から下層に至るまで周辺から流れ込んだ砂が自然堆積していたが、そのうち中層から下層にかけては煤の粒子や小ブロックを、少量から中量含んだ砂層となっている。下層部に灰の堆積は見られないが、火床部にあたる黒色土層の下には、厚さ20～50cmの焼砂層が見られる。底部の中央には周辺から流れ込んだと思われる石5点が集中している。

釜屋内鹹水槽 第4号竈に伴う釜屋内鹹水槽は、第53号鹹水槽(S N156)がG6g₂区、第54号鹹水槽(S N157)がG6f₂区を中心に確認され、平面形は、どちらも隅丸長方形である。規模は、第53号鹹水槽が長軸2.23m、短軸1.57m、深さ0.85m、第54号鹹水槽が長軸1.40m、短軸0.93m、深さ0.59mである。どちらも底面は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を貼った上に厚さ1～8cmの褐色粘土を貼って構築している。

第53号鹹水槽底面の北端部壁際に、鹹水受けと思われる径30cmほどの平たい石が置いてある。また東端部壁際にも径15cmほどの焼けた石があったが、これは流れ込みによるものと思われる。

居出場 第4号竈に伴う居出場は、第43号鹹水槽(S N139)がG6h₂区、第57号鹹水槽(S N161)がG6h₂区、第58号鹹水槽(S N162)がG6h₂区を中心に確認され、平面形は、いずれも隅丸長方形である。規模は、第57号鹹水槽が長軸1.52m、短軸0.53m、深さ0.53m、第58号鹹水槽が長軸1.42m、短軸0.65m、深さ0.17mである。第43号鹹水槽は、崩落が激しく計測できなかった。3基とも底面は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を貼った上に厚さ1～10cmの褐色粘土を貼って構築している。

57号と58号は重複しており、58号の上に57号が構築されているので、58号の作り替えが57号である。また、43号の南壁は数cmほどの高さでしか残っていないが、これがちょうど57号の北壁と重複しており、57・58号より内側の竈寄りにあって崩落がひどいことから、43号の南壁を利用した作り替えが57号になるものと思われる。3基の新旧関係は、古い順に43号、58号、57号となる。また、57号の底面東端部には石が1点置いてあったが、居出場の性格から考えると、何のために置かれたものかは不明である。

屋外鹹水槽 釜屋の東側G6i₃区・G6h₄区・G6f₄区・G6e₄区を中心とした4カ所から、第16号鹹水槽(S N60)・第34号鹹水槽(S N126)・第36号鹹水槽(S N130)・第66号鹹水槽(S N177)の4基が、直列に並んで確認できた。いずれも粘土壁の崩落が激しいため、平面形は推定で隅丸長方形である。規模は、長軸が推計値を含め順に4.88m・3.85m・4.86m・4.12m、短軸が推計値を含め順に2.60m・2.10m・2.20m・1.70m、深さが現存値で順に1.25m・0.83m・0.73m・0.30mである。いずれも底面は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がっている。釜屋内鹹水槽と同様に、砂の表面を掘り込み、黒色土を貼った上に、厚さ1～12cmの褐色粘土を貼って構築している。

第16号鹹水槽壁面の北東コーナー最下部から底面部にかけて、鹹水受けと思われる石が2点置いてある。第34号鹹水槽壁面の西側コーナー部中段に、足掛け石が2点上下にあった。足掛けが2段あったことから考えると、この鹹水槽はかなりの深さをもっていたものと推定できる。第36号鹹水槽底面の南西隅には径30cmほどの鹹水受けと思われる平たい石が1点置いてあり、壁の南西コーナー部中段には足掛け石が1点あった。

土樋 第1号土樋(S D1)と第2号土樋(S D2)が、釜屋の南東側G6h₃区からG6j₂区、第9号土樋(S D

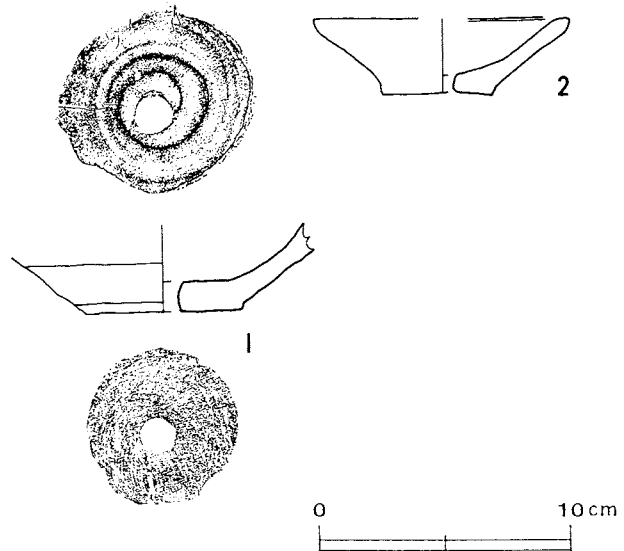
9)と第10号土樋(SD10)が、釜屋内鹹水槽のすぐ東側のG6f₂区からG6g₃区にかけて確認できた。4条のいずれも本来の規模を有しておらず、現存値で全長が最短のもので0.12m、最長のもので8.48mである。これらの土樋の断面形は、半円形の皿状かU字状であり、上幅11~56cm、深さ7~20cmである。

第1号土樋は、第16号鹹水槽南西端のすぐ外側に円形皿状の水受けを持っており、その中央部に平たい石が置いてある。その水受けから、本跡の釜屋内鹹水槽である第53・54号鹹水槽へ、鹹水を流し送る機能を果たしていたと思われる。第2号土樋は、第1号土樋のすぐ西にありほんの一部しか残存していなかったため、連絡関係は不明である。第9号土樋は、4基の屋外鹹水槽から土樋を通して流れて来た鹹水を釜屋内鹹水槽へ取り込むためのものであり、釜屋へ向かって流路が大きく屈曲し、第54号鹹水槽へ連結している。屈曲部分は上幅を広く作り替えてある。これは、流れて来た鹹水が曲がる際に外側への遠心力が働き、その部分の壁を壊したためであろう。またその部分には蓋石があり、底と壁には粘土の代わりに平たい石と鯨骨で強化修復が施されている。第10号土樋は、第9号土樋から分流して第53号鹹水槽へ連結していたものであるが、実際に確認できたのは鹹水槽への落ち口の部分のみである。

出土遺物 第4号竈の覆土中と、居出場である第57号鹹水槽の覆土西側中層から、底部中央に穿孔された土師質土器の皿が1点ずつ出土している。

所見 本跡の出土遺物は周囲からの流れ込みの可能性もあるので、出土遺物から本跡の時期を明確にすることはできない。

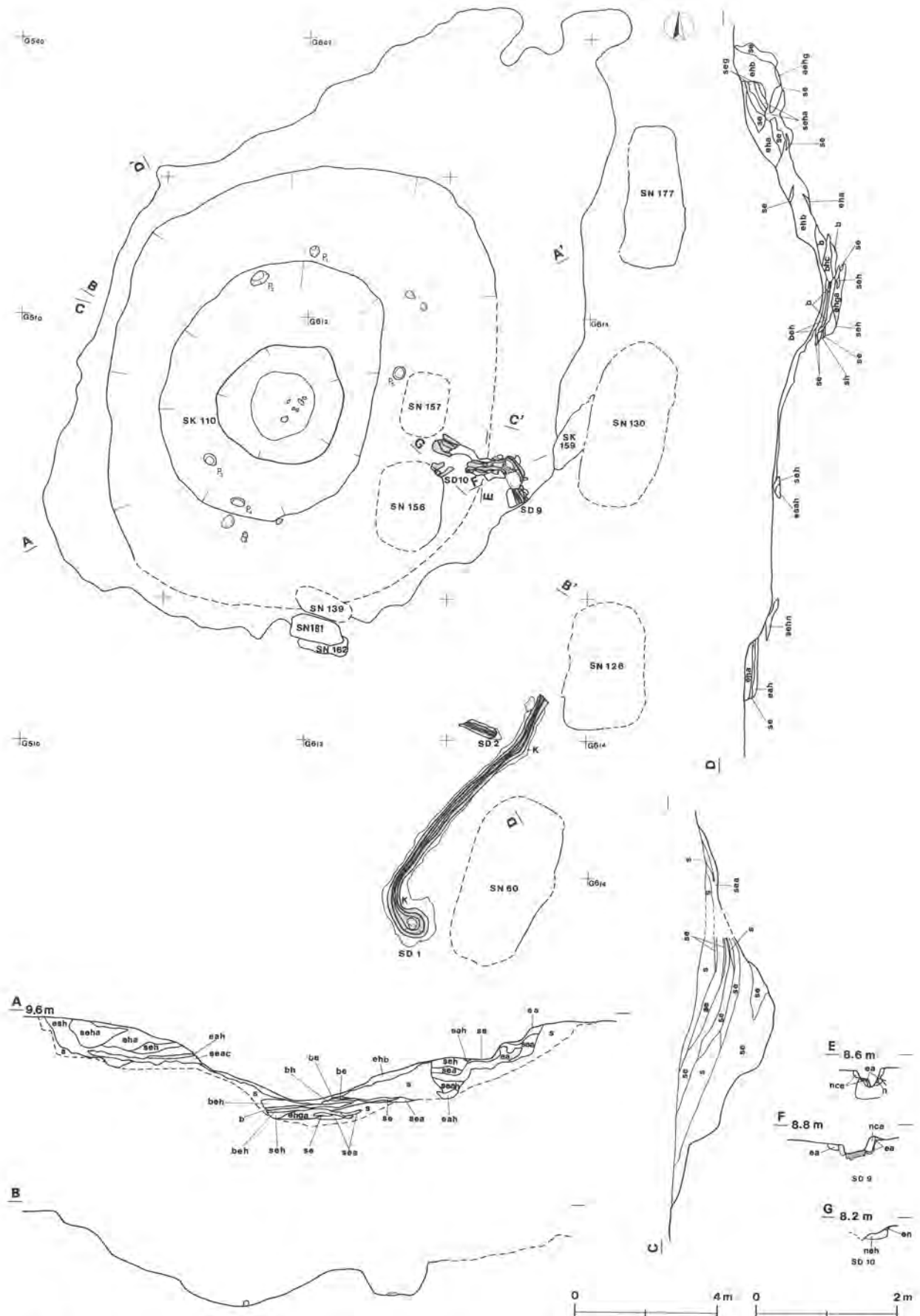
本跡の南東側に屋外鹹水槽が3基(第26・64・67号鹹水槽)と、土樋が3条(第3・6・11号土樋)確認できたが、距離が少し離れ過ぎているため、これらは本跡に伴うものではない。



第10図 第3号製塩跡出土遺物実測図

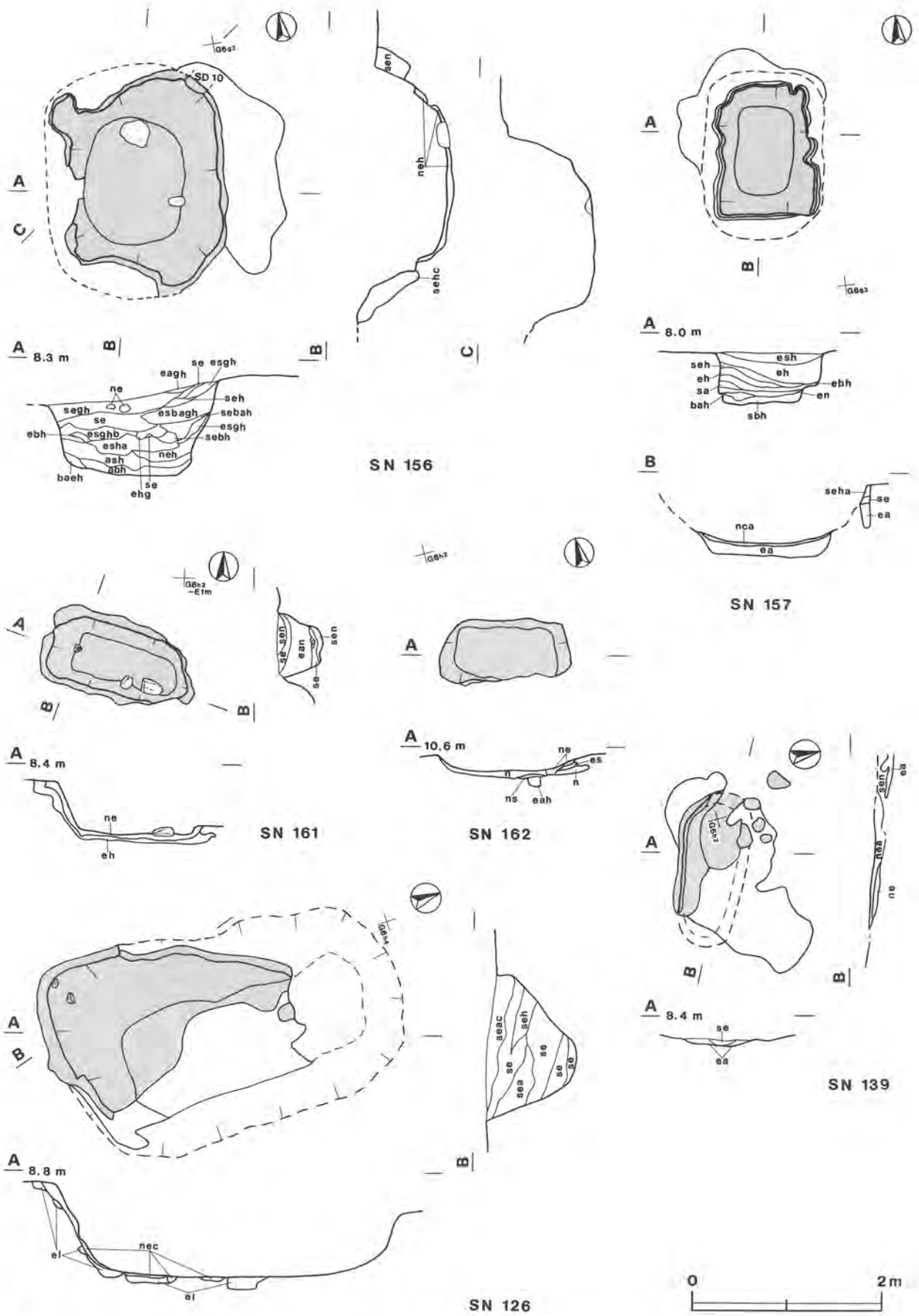
第3号製塩跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第10図 1	皿 土師質土器	B(2.4)	底部から体部片。底部は平底で片面が突出し、中央に穿孔が施される。体部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P6 残存率50% S N161覆土中層
		C 6.1				
2	皿 土師質土器	A[10.2]	底部から口縁部片。底部は平底で突出し、中央に穿孔が施される。体部、口縁部は直線的に立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P13 残存率60% S K110覆土
		B 3.0				
		C 4.4				

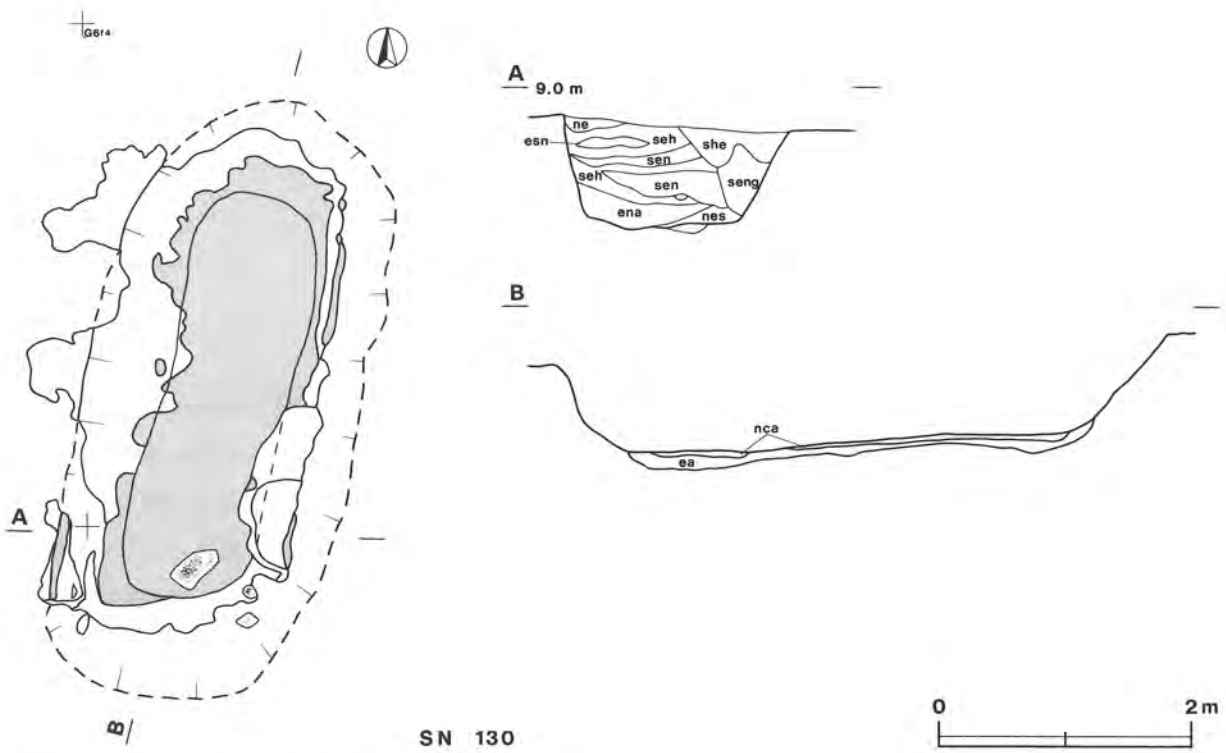
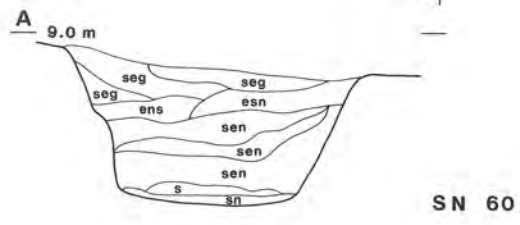
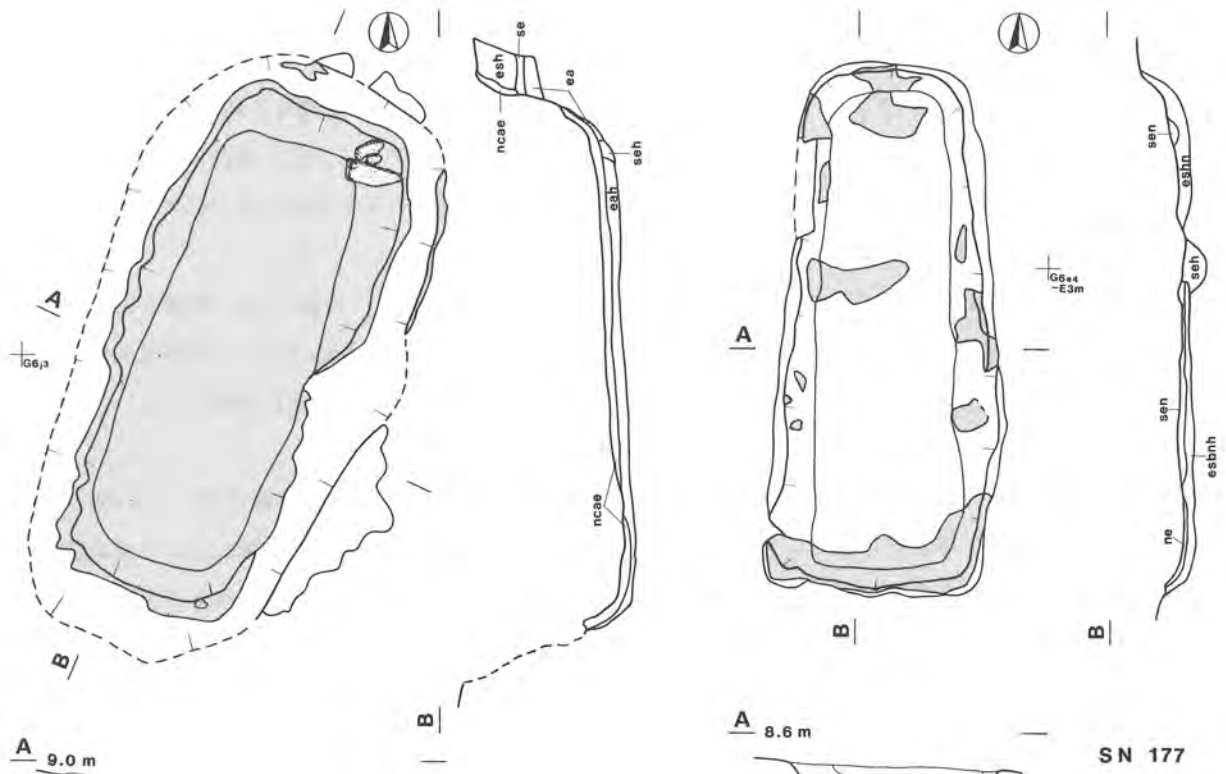


(断面図のみ)

第11図 第3号製塩跡釜屋内遺構配置図(土樋実測図)



第12図 第3号製塩跡鹹水槽・居出場実測図



第13図 第3号製塩跡鹹水槽実測図

第4号製塩跡（第14図）

位置 調査区の中央よりやや南寄りの、G6c4区を中心に釜屋が位置する。

遺構構成 第5号竈（SK170）、2基の釜屋内鹹水槽（SN198・SN199）で構成されている。

釜屋 確認できた黒色土の範囲は、南北約9m、東西約8mで、不定形である。灰と破砕貝混じりの黒色土を砂上に厚さ5～60cmほど貼り付けて構築している。しかし、後世の攪乱により黒色土が一部欠落しているところがあったため、釜屋の規模と形状を明確に把握することはできない。

竈 第5号竈はG6c4区を中心に確認され、平面形は楕円形である。規模は、長軸6.7m、短軸4.9m、深さ1.25mである。土層の堆積状況は、覆土が上層から下層に至るまで周囲からの流れ込みによる砂の自然堆積で、その下の火床部にあたる黒色土層は、灰や焼砂の堆積が確認できなかったため、明確に把握できない。しかし、すぐ東に2基並んだ釜屋内鹹水槽があるので、竈があったことは確実である。

釜屋内鹹水槽 第5号竈に伴う釜屋内鹹水槽は、第84号鹹水槽（SN198）と第85号鹹水槽（SN199）がG6c4区を中心に確認され、平面形はどちらも隅丸方形に近い。規模は、第84号鹹水槽が長軸2.07m（推定値）、短軸1.45m、深さ0.93m、第85号鹹水槽が長軸1.82m、短軸1.42m、深さ1.07mである。84号の長軸方向が概ね南北であるのに対し、85号の長軸方向は概ね東西で約90度ずれている。どちらも底面は平坦であるが、中央部に泥水汲み出しの際に形成されたと思われる浅い窪みがある。壁はどちらも外傾しながら立ち上がっている。釜屋の地盤を掘り込んだ後、黒色土を貼った上に厚さ1～10cmの褐色粘土を貼って構築している。

第84号鹹水槽の底面は、作り替えによる段差が確認できる。東壁上部確認面のすぐ外側に広がっている黒色土の面に、足場石と思われる石が2点ある。また壁上部の粘土は赤褐色を呈しており、明らかにその下の部分とは質の異なる粘土を使用したことが分かる。これは、構築の途中で粘土が不足したためその補充を行ったか、壁の上部のみが崩落したため、その部分を再構築したかのどちらかであると考えられる。

第85号鹹水槽の南壁上部確認面のすぐ外側に広がっている黒色土の面に、足場石と思われる石が3点ある。また、壁の北東と北西コーナー中段に足掛け用と思われる浅い窪みがある。

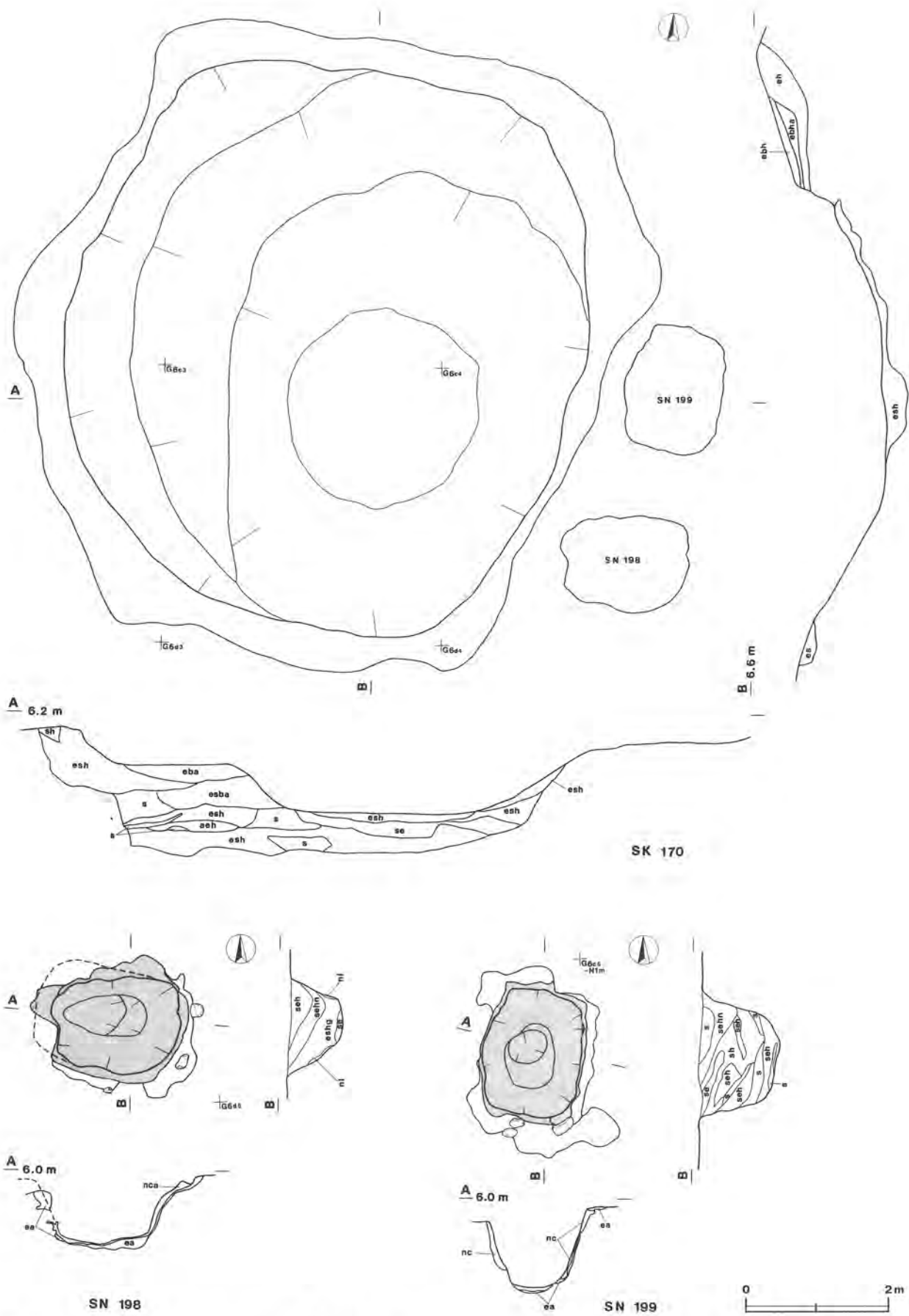
所見 本跡は出土遺物がなく、その時期を明確にすることができないが、釜屋の位置で本跡と近接している第3号製塩跡の標高と本跡の標高を比較すると、本跡の方が約2.5～3.0mほど低い場所に位置しているので、本跡の操業時期の方が古いと考えられる。

第5号製塩跡（第15図）

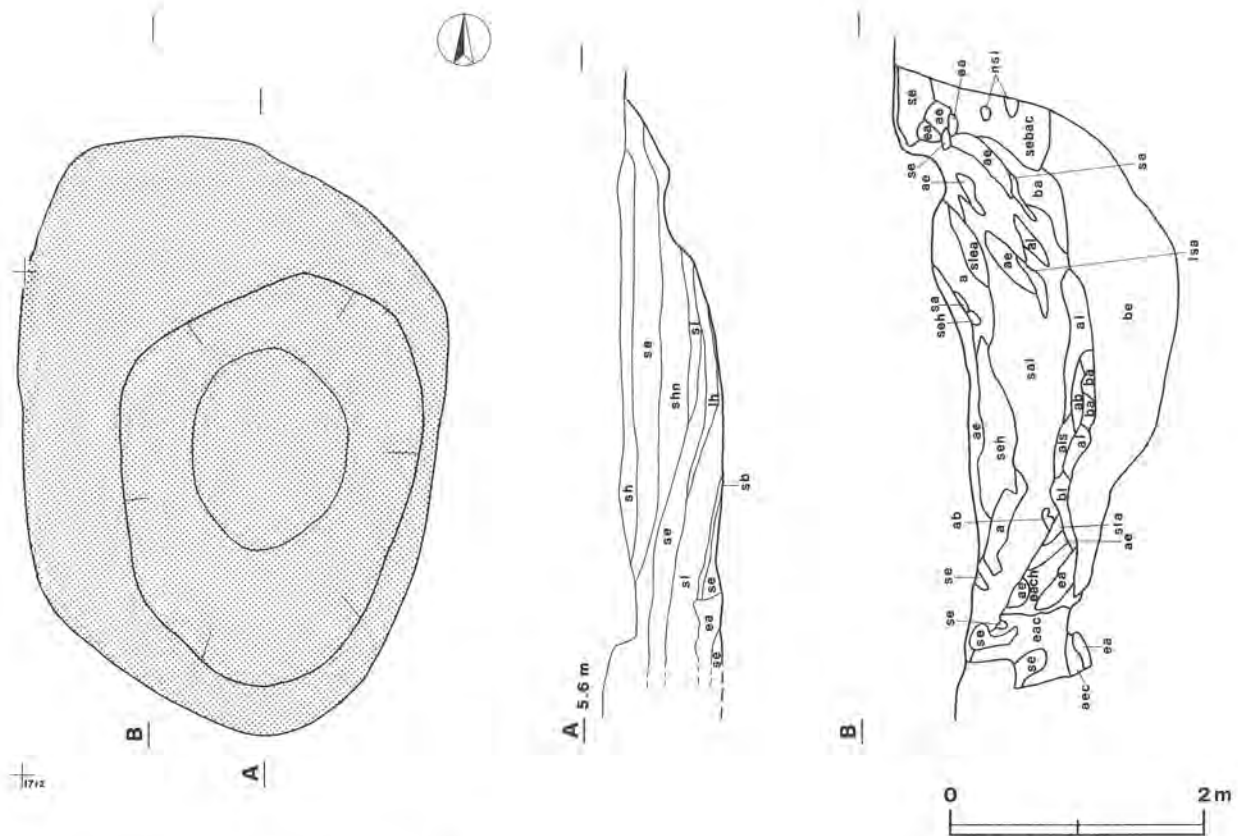
位置 調査区の南東端、I7e2区を中心に竈が位置する。

遺構構成 本跡は竈1基のみで構成されている。

竈 第6号竈（SX3）は、I7e2区を中心に確認され、平面形は卵形である。黒色土がほんの一部しか確認できず、確認面では釜屋内の竈であるとの判断ができなかったため、SX3と番号をつける。規模は、焼砂の範囲が南北4.90m、東西3.22m、竈部分の長軸が3.20m、短軸が2.38m、深さ0.80mである。覆土は、焼けた灰が多量に混じった砂が厚く堆積しており、断ち割り面の土層にも、砂層の下に非常に締まった厚い灰層と焼砂層の堆積が見られる。この状態から判断すると、かなりの期間使用されたものと思われ、他の釜屋の様相とは大きく異なっている。



第14図 第4号製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽実測図



第15図 第5号製塩跡釜屋内遺構実測図

第6号製塩跡（第16・17図）

位置 調査区の中央よりやや南寄りの、G6j₆区を中心に位置する。

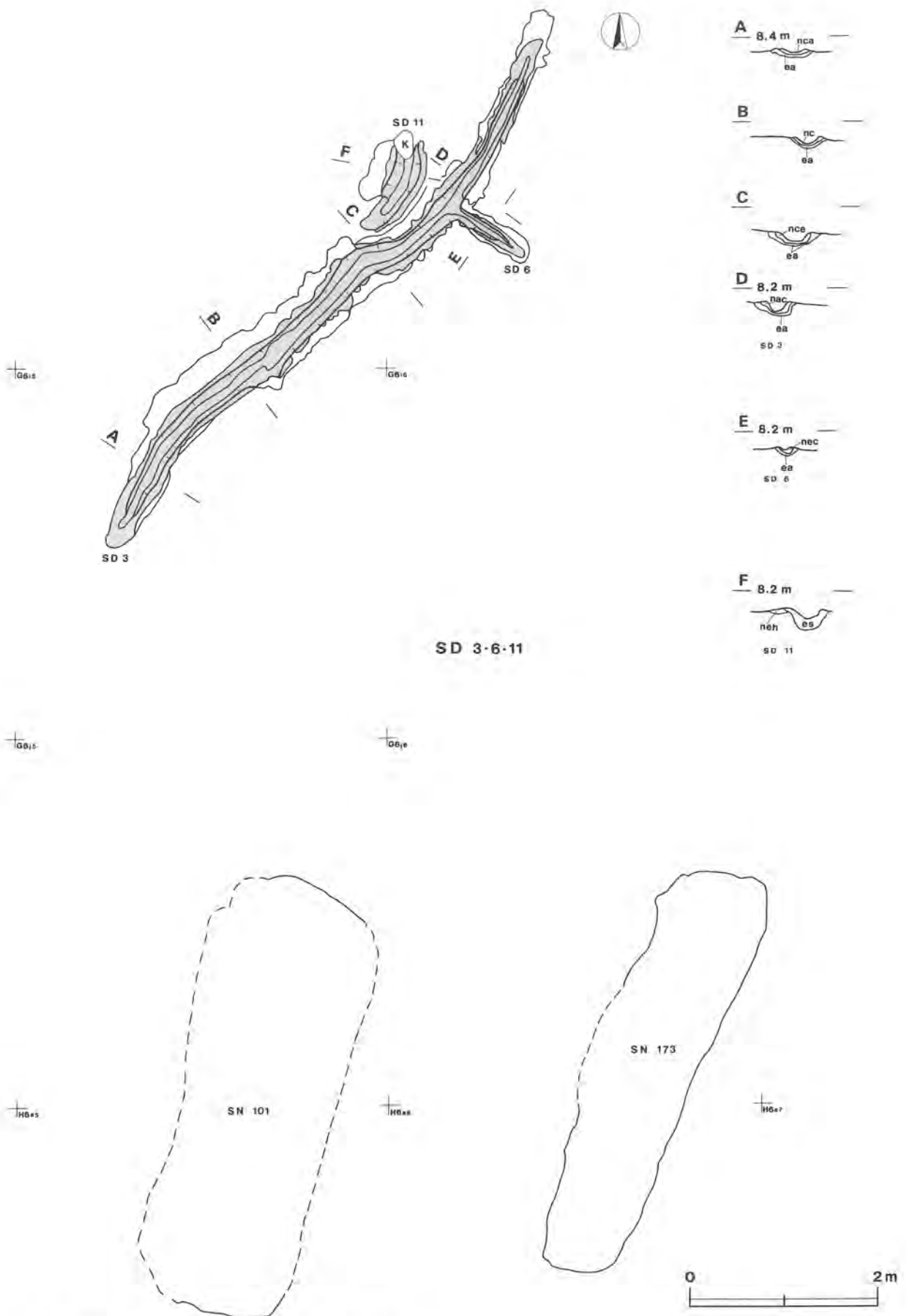
遺構構成 釜屋跡は確認できず、3基の屋外鹹水槽（S N101・173・179）と3条の土樋（S D3・6・11）で構成されている。

屋外鹹水槽 第26号鹹水槽（S N101）がG6j₅区、第64・67号鹹水槽（S N173・179）がG6j₆区を中心に確認され、平面形は、いずれも隅丸長方形である。規模は、いずれも現存値で第26号鹹水槽が長軸4.68m、短軸1.73m、深さ0.74m、第64号鹹水槽が長軸4.64m、短軸1.14m、深さ0.26m、第67号鹹水槽が長軸4.62m、短軸1.04m、深さ0.08mである。いずれも底面は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がっている。砂の表面を掘り込み、黒色土を貼った上に、厚さ1～9cmの褐色粘土を貼って構築している。

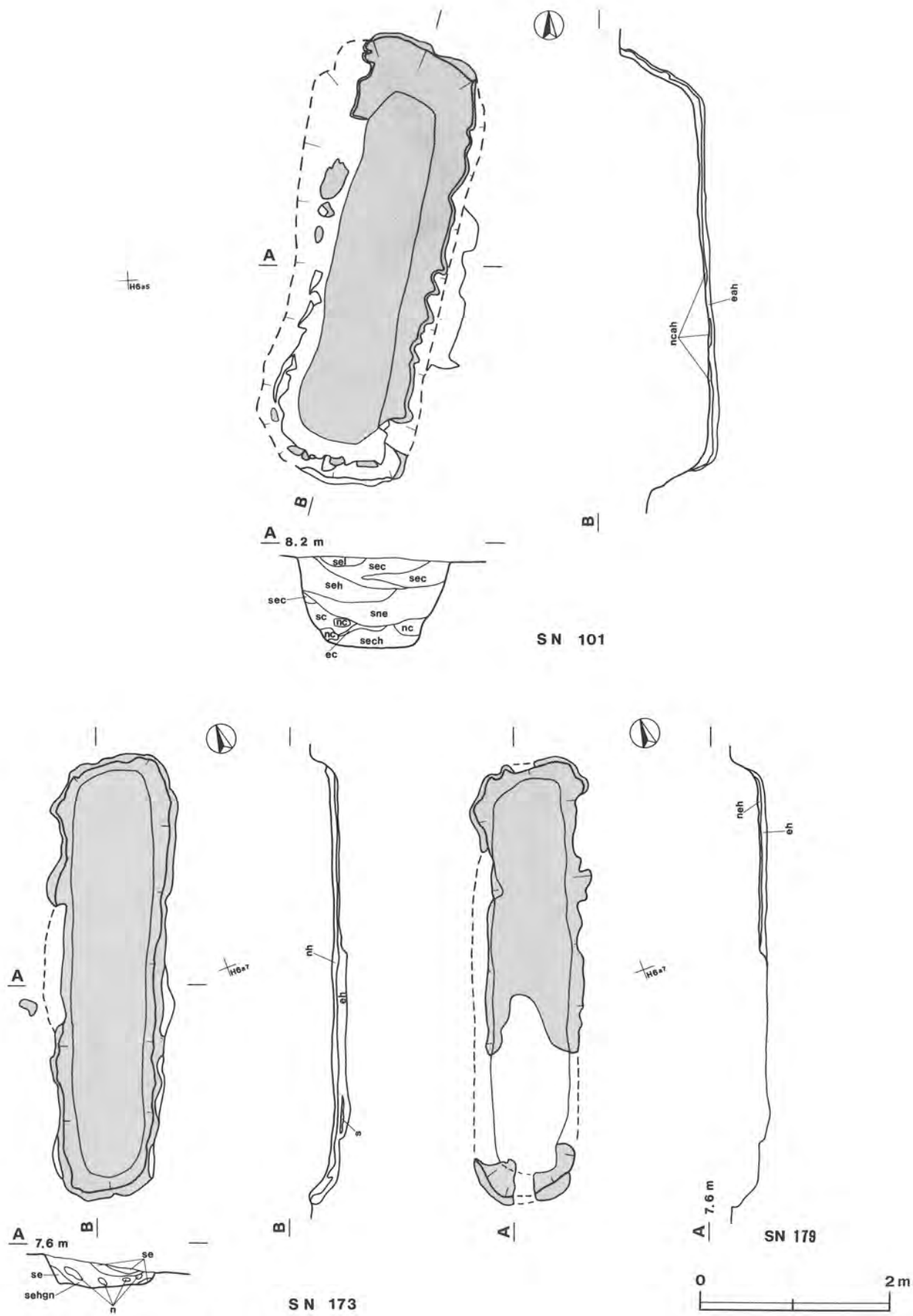
第67号鹹水槽は、第64号鹹水槽の断ち割りをを行った際、その真下に確認できたので、67号の作り替えが64号である。また両鹹水槽とも、ほとんど底面部のみの確認だったので、深さの値が非常に小さくなっている。

土樋 第3号土樋（S D3）、第6号土樋（S D6）、第11号土樋（S D11）が、屋外鹹水槽のすぐ北側のG6h₆区からG6i₅区にかけて位置する。3条のいずれも本来の規模を有してはならず、現存値で全長が最短のもので0.70m、最長のもので7.45mである。これらの土樋の断面形は、半円形の皿状かU字状であり、上幅6～37cm、深さ4～11cmである。

第3号土樋は、第26号鹹水槽のすぐ西側から北側にかけて存在し、南端の伸びる方向を延長すると、第26号鹹水槽の南西コーナー部の近くに到達するので、この土樋は第26号鹹水槽中の鹹水を釜屋へ流し送るために構築されたと考えることができる。第6号土樋は、第3号土樋に対し直角に合流する部分だけが確認できた。こ



第16図 第6号製塩跡釜屋内遺構・鹹水槽・土樋実測図



第17図 第6号製塩跡鹹水槽実測図

の土樋については、残存部分があまりにも少ないため、その機能を明らかにすることはできない。第11号土樋も残存部分が非常に少なかったが、その部分が第3号土樋と近接してほぼ平行になっているので、第11号土樋の作り替えが第3号土樋であろう。

所見 本跡は出土遺物がなく、その時期を明確にすることはできない。本跡を挟むような形で第1号製塩跡と第3号製塩跡がほぼ同じ標高で位置しているが、距離が少し離れ過ぎているため、これらは本跡に伴うものではない。

第7号製塩跡（第18・19図）

位置 調査区の南部東側，H6b₈区からH6g₈区にかけて位置する。

遺構構成 釜屋跡は確認できず，4基の屋外鹹水槽（S N180・184・186・187），17条の土樋（S D4・5・7・8・12A・B・13～23）で構成されている。

屋外鹹水槽 H6c₈区・H6f₉区・H6e₉区・H6g₈区を中心とした4カ所から，第68号鹹水槽（S N180）・第70号鹹水槽（S N184）・第72号鹹水槽（S N186）・第73号鹹水槽（S N187）の4基が確認され，平面形は，いずれも隅丸長方形である。規模は，長軸が順に5.47m・4.50m・5.25m・5.61m，短軸が順に1.74m・1.63m・1.05m・1.60m，深さが現存値で順に1.19m・0.62m・1.34m・0.89mである。いずれも底面は平坦で，壁は外傾しながら立ち上がっている。砂の表面を掘り込み，黒色土を貼った上に，厚さ1～25cmの褐色粘土を貼って構築している。

第68号鹹水槽壁面の南東コーナー部中段に，足掛け窪みが1カ所ある。第70号鹹水槽は壁の崩落が激しく，ほとんど底面しか確認できなかった。第72号鹹水槽の底面には，ほぼ中央部に石が1点埋め込まれている。第73号鹹水槽は，底面の粘土が北端のほんの一部しか残っておらず，黒色土の残存部を追うことによって確認した。

土樋 H6b₈区からH6g₈区にかけて17条（第4・5・7・8・12～23号土樋）確認され，全長が最短のもので0.37m，最長のもので12.17mである。これらの土樋の形状は，断面形が半円形の皿状かU字状であり，上幅9～30cm，深さ4～13cmである。これらの土樋の新旧関係は，屋外鹹水槽を含めた重複関係と位置関係から，古い順に以下のように整理できる。

① 第16・19・21・22号土樋（S D16・19・21・22）

この4条は，いずれも屋外鹹水槽との連絡関係が確認できなかったものであるが，他の土樋との重複関係から，最も古いグループになる。中でも，16号よりは21号が古く，19号よりは22号が古い。

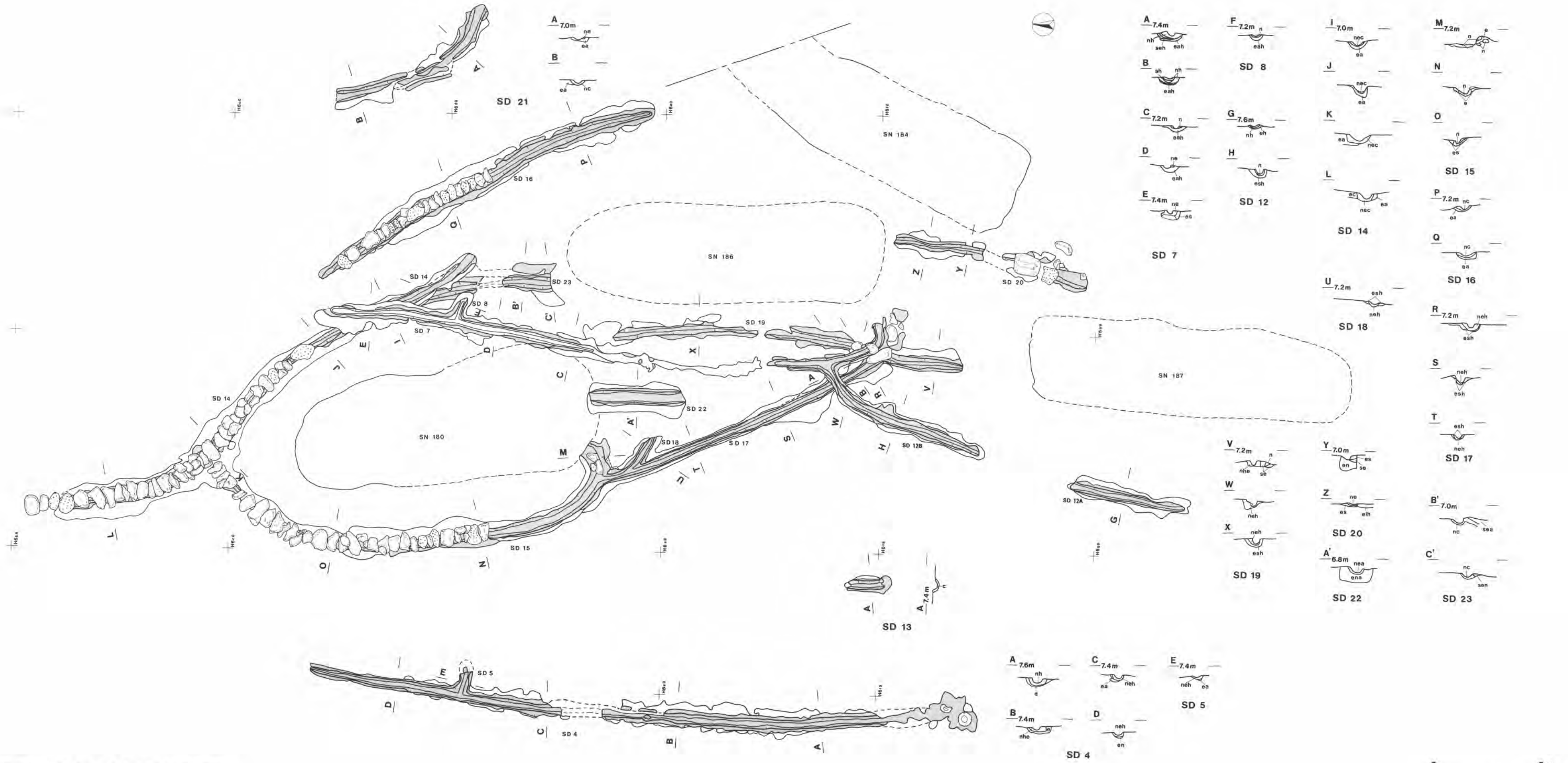
② 第12～15・17・18・20・23号土樋（S D12～15・17・18・20・23）

このうち第12・13号土樋は第73号鹹水槽，第14・20・23号土樋は第70号鹹水槽，第15号土樋は第68号鹹水槽，第17・18号土樋は第72号鹹水槽とそれぞれ連絡している。12・13号グループよりは17・18号グループの方が古く，14・20・23号グループはさらに古い。15号グループは，前2者のグループにまたがって存在している。これらのうち，15・17号には水受けの存在を確認している。また，14・15・16号には石蓋がある。

③ 第4・5・7・8号土樋（S D4・5・7・8）

この4条は，いずれも屋外鹹水槽との連絡関係が確認できないものである。4・5号は合流部をもっており，同一時期に機能していたと考えられる。7・8号も同一時期のものである。4・5号の真下に7・8号が確認できたので，7・8号の作り替えが4・5号である。

所見 本跡は出土遺物がなく，その時期を明確にすることはできない。本跡の土樋は，いずれも概ね南から北



第19図 第7号製塩跡遺構配置図(土樋実測図)

第8号製塩跡（第20～22図）

位置 調査区の中央よりやや南寄りの、G6f4区からH6b7区にかけての南北に細長い地域内で、屋外鹹水槽はほぼ直列に並んだ状態で位置している。

遺構構成 釜屋跡は確認できず、10基の屋外鹹水槽（S N185・188～191・193～197）で構成されている。

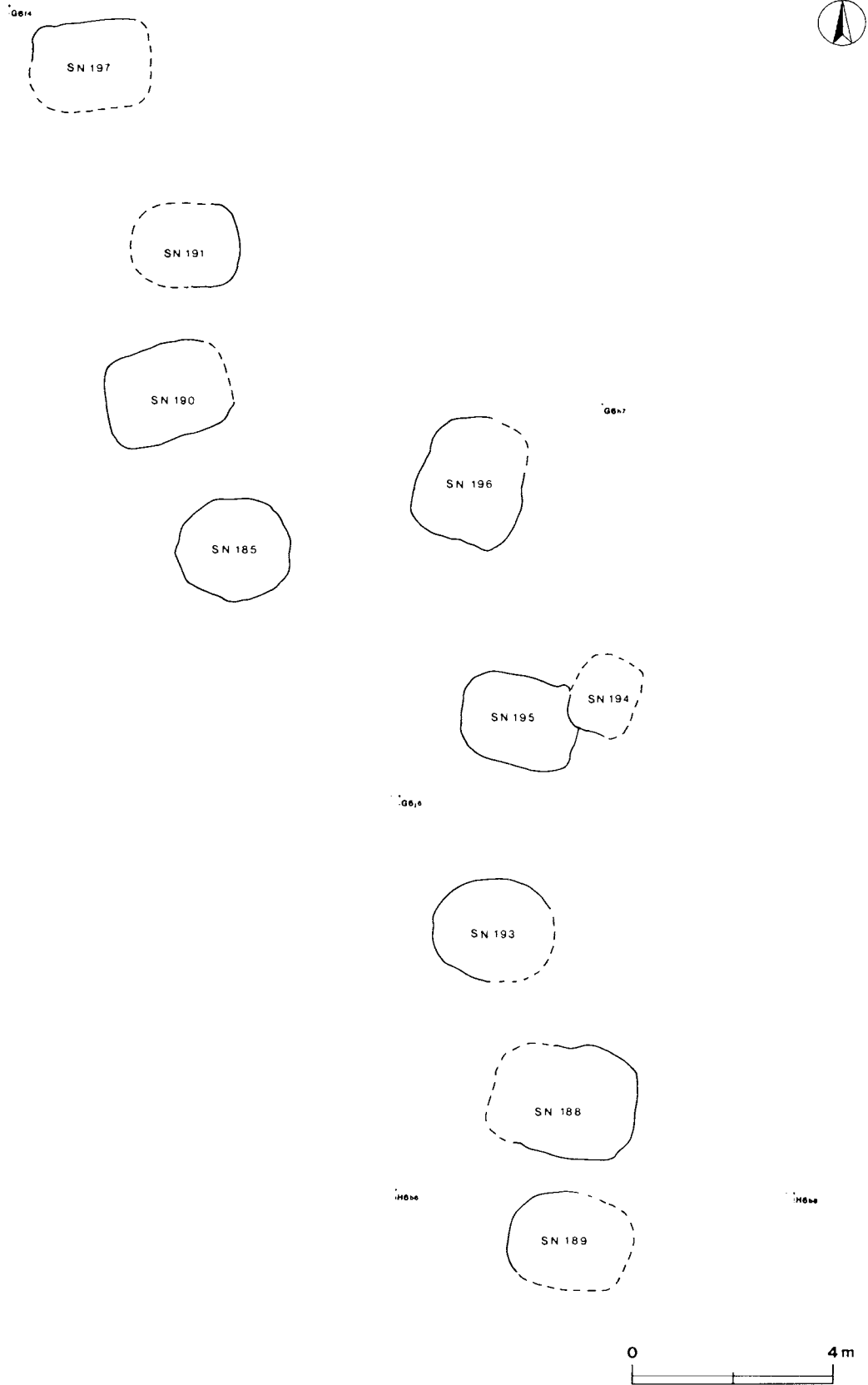
屋外鹹水槽 確認された10基は、いずれも比較的粘土壁の残存状態が良い。規模は、長軸が2.06～2.62m、短軸が1.17～2.30m、深さが0.78～1.48mである。いずれも底面は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がっている。砂の表面を掘り込み、黒色土を貼った上に、厚さ1～14cmの褐色粘土を貼って構築している。

第71号鹹水槽（S N185）は、G6hs区を中心に確認され、平面形が壁の上端部で円形であるが、底面は隅丸長方形となっている。底面の南東隅には、アワビの貝殻が1点埋め込まれている。壁の上部は内彎気味に外傾しながら立ち上がっている。壁の北西コーナー部中段に足掛け石が1点、南東コーナー部中段に足掛け窪みが1カ所ある。第74号鹹水槽（S N188）は、H6as区を中心に確認され、平面形は隅丸方形である。底面中央から東側にかけて、帯状に泥水汲み出しの際に形成されたと思われる浅い窪みがあり、東壁の下部へと続いている。その東壁下部には、石が1点埋め込まれている。また、壁の南東コーナー部中段には、足掛け石が1点ある。第75号鹹水槽（S N189）は、H6b6区を中心に確認され、平面形は推定で隅丸方形である。底面中央部に泥水汲み出しの際に形成された浅い窪みがある。第76号鹹水槽（S N190）は、G6f4区を中心に確認され、平面形は隅丸長方形である。底面中央部やや西寄りのところに、泥水汲み出しによる浅い窪みがあり、壁の北西コーナー部中段には、足掛け石が1点ある。第77号鹹水槽（S N191）は、G5g4区を中心に確認され、平面形は隅丸長方形である。底面中央部に泥水汲み出しによる浅い窪みがある。第79号鹹水槽（S N193）はG6j6区を中心に確認され、平面形は円形に近い隅丸方形である。底面中央部やや東寄りのところに、鹹水受け・足場用の石が1点、壁の南東・北西コーナー部に足掛け石が1点ずつある。壁の南東側上部は崩落していた。第82号鹹水槽（S N196）は、G6h6区を中心に確認され、平面形は隅丸方形である。底面中央部に、泥水汲み出しによる浅い窪みがあり、壁の南西コーナー部中段には、足掛け石が1点ある。南壁中央部には、鹹水を入れた時に落下圧により形成されたと思われる溝状の窪みがある。第83号鹹水槽（S N197）は、G6f4区を中心に確認され、平面形は隅丸長方形である。底面中央部やや西寄りのところに、泥水汲み出しによる浅い窪みがあり、壁の北西コーナー部中段には、足掛け石が1点ある。

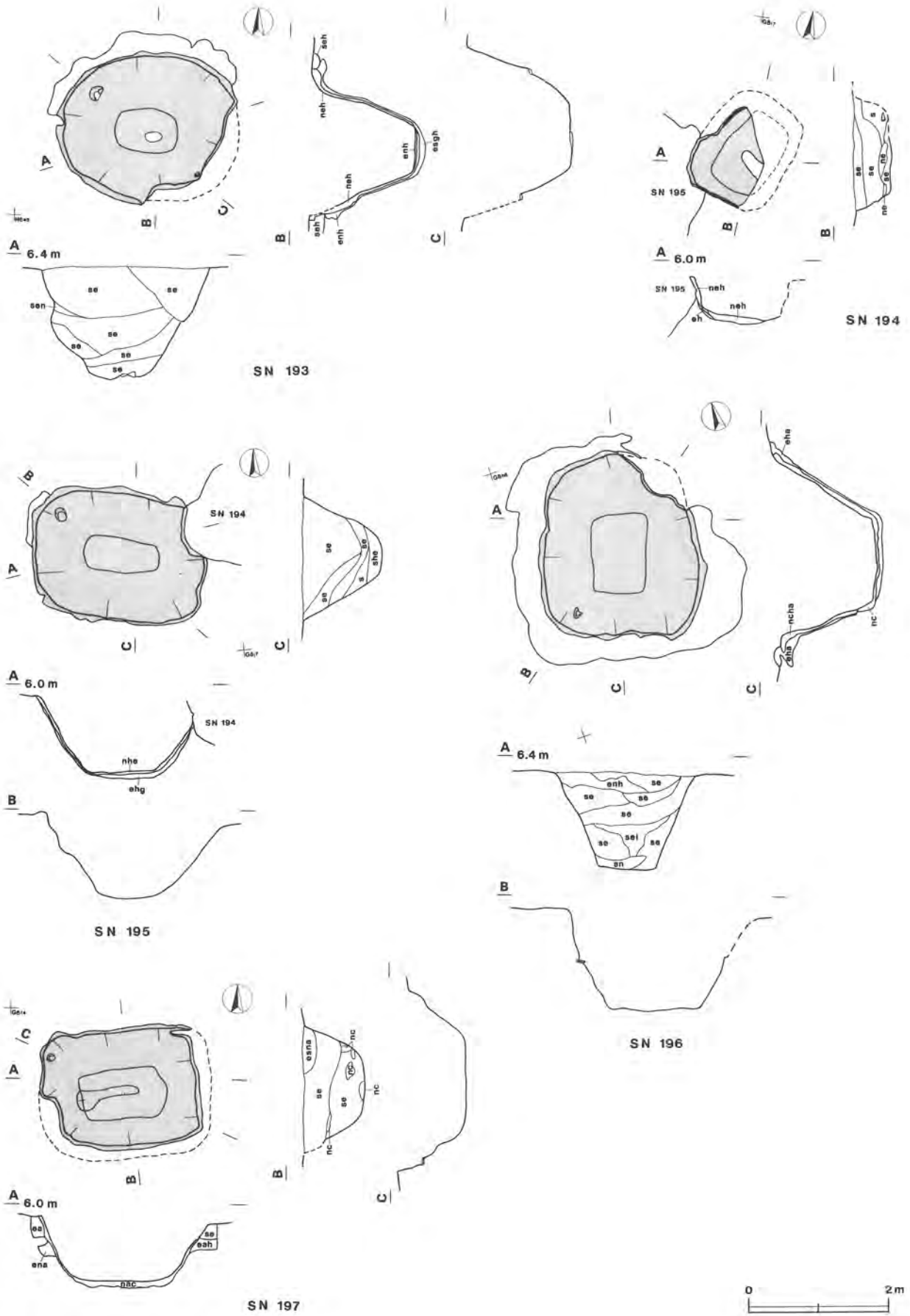
第80号鹹水槽（S N194）は、G6i6区を中心に位置している。崩落が大きく、四分の一程度しか残りがなかったが、平面形は推定で隅丸方形である。底面中央部に、泥水汲み出しによる浅い窪みがあった。この真上には、第78号鹹水槽が確認できていたので、80号の作り替えが78号であろう。第81号鹹水槽（S N195）は、G6i6区を中心に確認され、平面形は隅丸長方形である。底面中央部やや西寄りのところに、鹹水の落下圧による浅い窪みがあり、壁の南西コーナー部中段には、足掛け窪みが1カ所ある。80号と81号は重複しており、80号が81号を切っているため、80号の方が新しい。

出土遺物 第83号鹹水槽確認面のすぐ北側から、陶器の蓋1点、播鉢片1点、内耳土鍋の口縁部片3点、底部片2点、体部片3点が出土している。

所見 本跡の出土遺物は遺構外のもので、出土遺物から本跡の時期を明確にすることはできない。本跡の北側には、釜屋をもつ第4号製塩跡が位置しているが、距離が少し離れ過ぎているので、本跡に伴うものではない。また、本跡の確認面と、本跡の真上にあった第3・6製塩跡の確認面の標高差は、約3mほどあり、両跡の間に1m以上の砂の堆積が見られた。このことは、本跡の方が確実に古いということを示しているものである。



第20図 第8号製塩跡遺構配置図



第22図 第8号製塩跡鹹水槽実測図

第9号製塩跡（第23・24図）

位置 調査区の中央よりやや南寄りの、G6f₂区からH6a₃区にかけて、屋外鹹水槽がほぼ並列に並んだ状態で位置している。

遺構構成 釜屋跡は確認できず、11基の屋外鹹水槽（S N201～206・216～220）で構成されている。

屋外鹹水槽 確認された11基は、いずれも比較的粘土壁の残存状態が良い。平面形は、第88号鹹水槽が隅丸方形なのを除いては、いずれも隅丸長方形である。規模は、長軸が1.50～2.56 m、短軸が1.10～2.41 m、深さが0.56～1.15 mである。いずれも底面は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がっている。砂の表面を掘り込み、黒色土を貼った上に、厚さ1～10 cmの褐色粘土を貼って構築している。

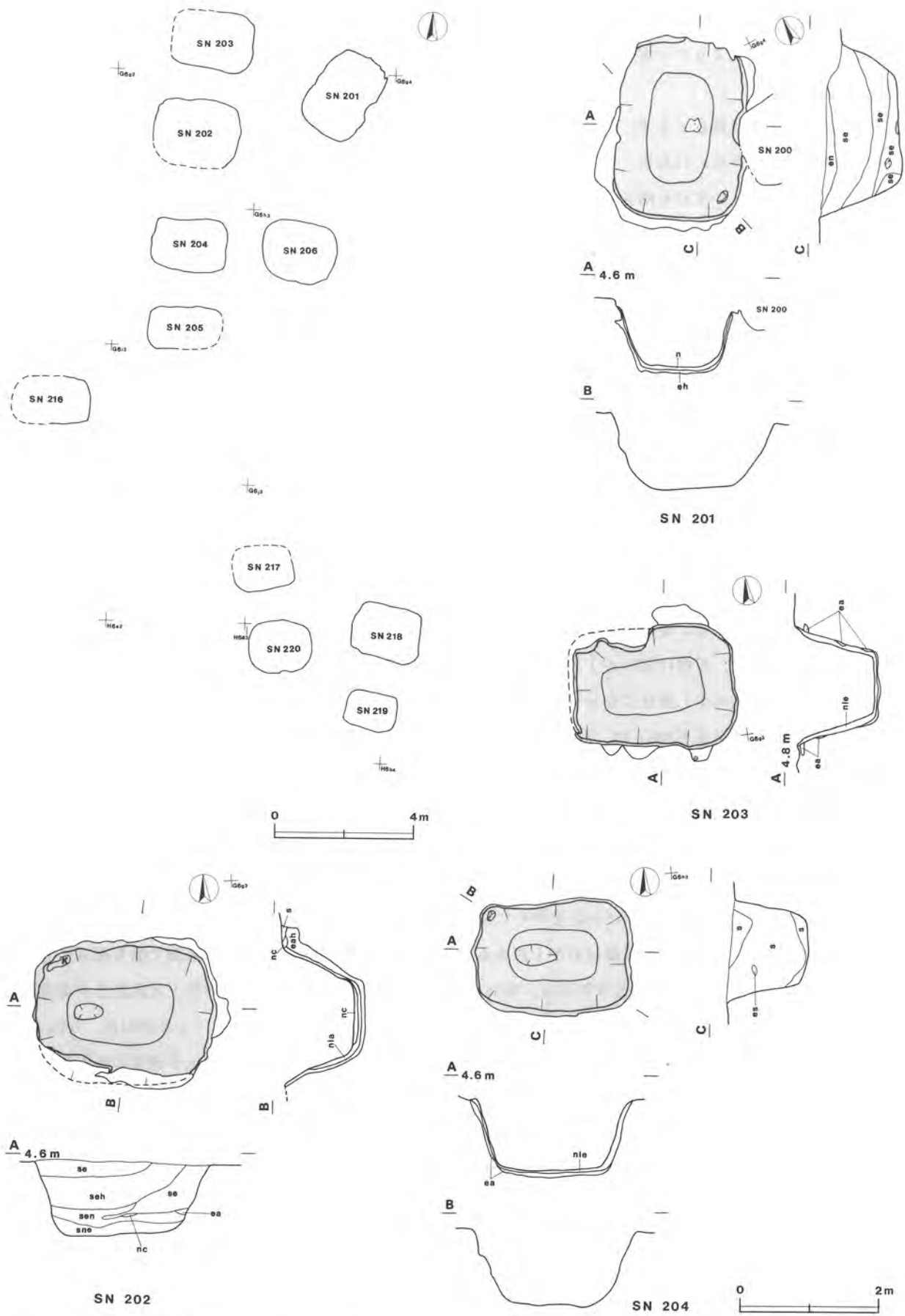
第87号鹹水槽（S N201）は、G6g₃区を中心に位置している。底面の中央やや南寄りのところに鹹水受け・足場用と思われる平たい石が1点置いてある。壁の南東コーナー部中段には、足掛け窪みが1カ所ある。この鹹水槽と第86号鹹水槽は重複しており、86号が87号を切っているため、86号の方が新しい。

第88号鹹水槽（S N202）は、G6g₂区を中心に位置している。底面の粘土が一部異質の粘土で貼られているところがあり、補修が行われたことが分かる。壁の北西コーナー上部、底面から約1 mの所に、足掛け窪みが1カ所ある。なぜこれほど高い位置に足掛けを作ったのかは不明である。また、西壁中央部に鹹水の落下圧により形成されたと思われる溝状の浅い窪みがあった。第89号鹹水槽（S N203）は、G6f₂区を中心に確認された。88号と同様に、壁の北西コーナー部最上段に、足掛け窪みが1カ所ある。また、この鹹水槽の確認面のすぐ西側に、馬の骨が出土し、覆土中からはマツの木片が1片出土している。第90号鹹水槽（S N204）は、G6h₂区を中心に位置している。底面中央部やや西寄りのところに、鹹水の落下圧による浅い窪みがあり、壁の北西コーナー部上段には、足掛け窪みが1カ所ある。第91号鹹水槽（S N205）は、G6h₂区を中心に位置している。底面が全体的にほんの少し皿状になっており、壁南東コーナー部よりやや北寄りの上段に足掛け窪みが1カ所ある。第92号鹹水槽（S N206）は、G6h₃区を中心に位置している。底面中央部やや西寄りのところに、泥水汲み出しによる浅い窪みがあり、壁の北西コーナー部最上段に足掛け石が1点ある。

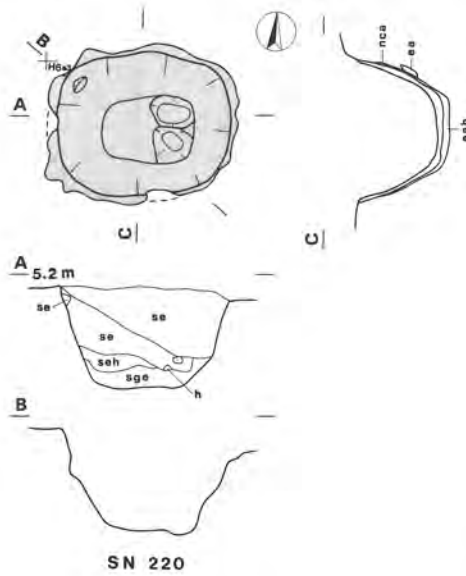
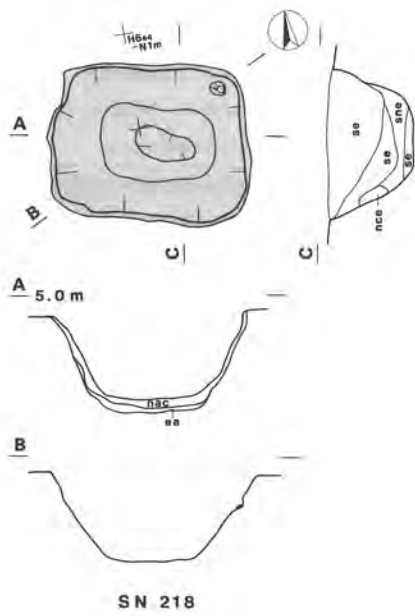
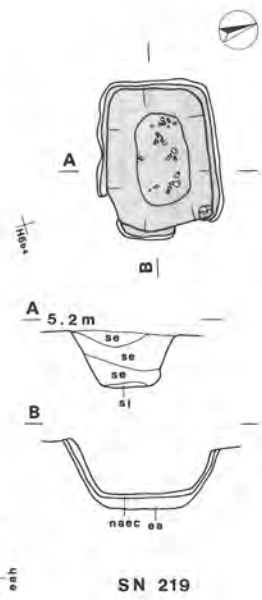
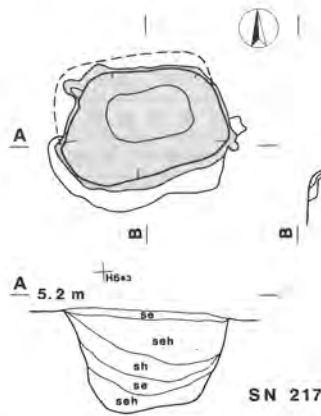
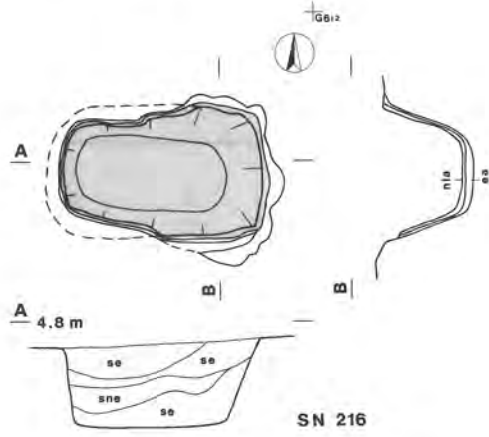
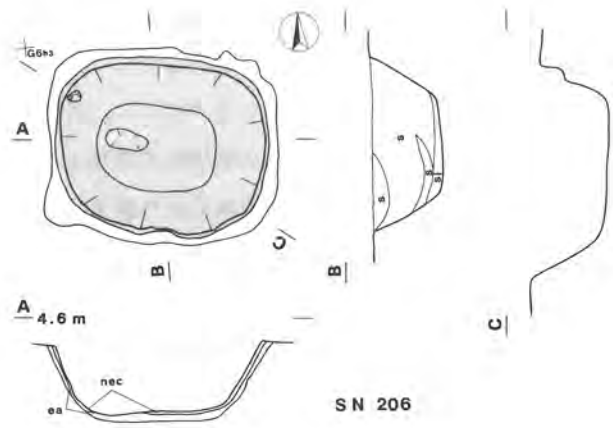
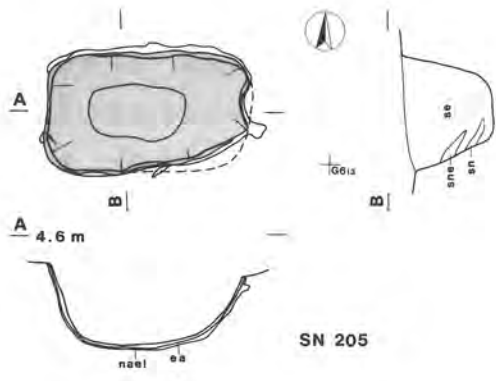
第100号鹹水槽（S N216）は、G6i₁区を中心に位置している。ローム粒子を多く混入させた粘土を使って壁を構築しており、西側の壁は崩落が激しい。前記6基の鹹水槽より、底面の標高が30～50 cmほど高く、本跡の鹹水槽群の中で1基だけ最も西側（内陸側）に位置している。

第101号鹹水槽（S N217）は、G6j₃区を中心に位置している。底面中央部は、非常に厚く粘土が貼ってある。壁の北西コーナー部中段には、足掛け石が1点ある。北壁の崩落は、遺構確認の際に重機で削り取ってしまった部分である。第102号鹹水槽（S N218）は、H6a₄区を中心に位置している。底面の粘土と黒色土が非常に厚く貼ってある。壁の北東コーナー部中段には、足掛け石が1点ある。第103号鹹水槽（S N219）は、H6a₃区を中心に位置している。底面の粘土に小石が数点埋め込まれている。また、底面の黒色土が非常に厚く貼られている。壁の北東コーナー部分最上段に、足掛け石が1点ある。全体の規模が、本跡の他の鹹水槽より一回り小さい。これは遺構確認の際に、壁の上部を重機が削り取ってしまったためかもしれない。第104号鹹水槽（S N220）は、H6a₃区を中心に位置している。底面の粘土と黒色土が非常に厚く貼ってある。壁は外傾して立ち上がるが、上部のみ若干内彎しており、北西コーナー部中段に足掛け窪みが1カ所ある。第101～104号鹹水槽は、構築に使用した粘土の質が同じであるので同時に構築されたものと考えられる。また、これら4基の鹹水槽の底面の標高は、第88～91号鹹水槽より約1 m高い。

所見 本跡は出土遺物がなく、その時期を明確にすることはできない。また、本跡の確認面の標高は、近接する第8号製塩跡の確認面の標高より0.7～1.5 mほど低く、遺構分布区域が第8号製塩跡より西側（内陸側）に



第23図 第9号製塩跡遺構配置図（鹹水槽実測図）



第24図 第9号製塩跡鹹水槽

位置している。海岸の汀線から遠ざかるほど遺構確認面の標高が下がるということは、当遺跡の操業期間中は、時代をさかのぼるほど汀線が西側にあったことを示しており、このことから、本跡の操業期は、第8号製塩跡の操業期より若干古いと考えることができる。さらに、これら第8・9号製塩跡と、釜屋のみを確認した第4号製塩跡の確認面の標高は、他の製塩跡の標高よりかなり低く、これらの確認面を第二次面とすると、第一次面に確認した第3・6・7号製塩跡の屋外鹹水槽の形態は、長軸が4～5m台の大規模なものが多く、しかも土樋を伴っている。しかし、第二次面に確認した屋外鹹水槽の形態は、長軸が2m前後の隅丸方形に近い比較的小規模なもので、しかも土樋を伴っていない。このことは、第二次面に確認した製塩跡の操業規模よりも、第一次面に確認した製塩跡の操業規模が大きいことを示しており、一時の断絶期を挟んで操業規模が拡大したと考えることができる。

表2 製塩跡一覧表

番号	位置	黒色土				遺構構成					備考
		範囲(最大値)		形状	厚さ(cm)	釜屋内施設			屋外施設		
		南北(m)	東西(m)			竈(号)	鹹水槽(号)	居出場(号)	鹹水槽(号)	土樋(号)	
1	H6i7	16.0	14.0	不定形	20~25	1	29,31(B)	—	—	—	第1グループが新しく第2グループが古い。土師質小皿、石臼各1点
2	16hz	7.0	6.0	不定形	5~60	3	47,48	49	40,45	—	屋外鹹水槽40号は45号の作り替え
3	G6h1	16.0	14.0	不定形	5~60	4	53,54	57,58 43	16,34,36,66	1,2,9,10	居出場57号は58号の作り替え。43号はこの2基より古い。土師質小皿2点
4	G6c4	9.0	8.0	不定形	5~60	5	84,85	—	—	—	第3号製塩跡より古い。
5	17e2	—	—	—	—	6	—	—	—	—	覆土に厚い灰層と焼砂層の堆積あり
6	G6j6	—	—	—	—	—	—	—	26,64,67	3,6,11	鹹水槽64号は67号の作り替え
7	H6b8~H6gs	—	—	—	—	—	—	—	68,70,72,73	4,5,7,8,12,13,14, 15,16,17,18,19,20, 21,22,23	土樋12・13号は鹹水槽73号、14・20・23号は70号、15号は68号、17・18号は72号と連絡している。
8	G6f4~H6d7	—	—	—	—	—	—	—	71,74,75,76,77,79 80,81,82,83	—	屋外鹹水槽83号のすぐ北側から陶器の蓋、播鉢片1点、内耳土銅片8点
9	G6f2~H6a3	—	—	—	—	—	—	—	87,88,89,90,91,92 100,101,102,103,104	—	第8製塩跡と共に遺構確認面の標高が他の製塩跡より低い。

表3 竈一覧表

製塩跡番号	番号	位置	長軸方向	平面形	規模			出土遺物	備考
					長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)		
1	1	H6i6	N-18°E	楕円形	6.30	4.36	1.23	1区覆土中に土師質小皿1点	第1号竈が第2号竈より古い。
	2	H6g7	N-70°W	楕円形	7.00	4.17	2.02	断割下面に石臼片1点	
2	3	16h1	N-35°E	楕円形	4.44	3.21	0.64	—	—
3	4	G6f1	N-5°E	楕円形	3.64	3.32	0.84	覆土中から土師質小皿(底部穿孔)1点	—
4	5	G6c4	N-19°E	楕円形	6.70	4.90	1.25	—	第3号製塩跡より古い。
5	6	17e2	N-5°E	卵形	3.20	2.38	0.80	—	焼砂の範囲が南北4.90m、東西3.22m

表4 釜屋内鹹水槽一覧表

製塩跡 番号	番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土厚 さ(cm)	壁面	底面	出土遺物	備 考
					長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)					
1	29	H6j7	N-47°E	隅丸方形	[2.82]	2.17	1.15	2~6	外傾	平坦	—	南西コーナー壁中段に足掛け石1点
	31B	H6i7	N-25°E	隅丸方形	1.86	1.53	0.60	3~8	外傾	平坦	—	—
	31A	H6i7	N-23°E	隅丸方形	1.54	1.48	0.40	2~6	外傾	平坦	—	—
	32	H6i8	N-62°W	〔隅丸方形〕	[1.22]	[1.07]	0.28	1~6	外傾	平坦	—	—
	33	H6h8	N-42°E	隅丸方形	2.13	1.34	0.61	1~8	外傾	平坦	—	—
2	47	I6h2	N-35°E	隅丸方形	1.80	1.56	1.01	2~8	外傾	平坦	—	西壁上部に焼石1点、東壁上部すぐ外に石2点
	48	I6h2	N-24°E	隅丸方形	1.72	1.59	0.95	2~5	外傾	平坦	—	底面中央に石2点、南壁上部に石2点
3	53	G6g2	N-13°E	隅丸長方形	2.23	1.57	0.85	1~8	外傾	平坦	—	底面北端に石1点
	54	G6f2	N-10°E	〔隅丸長方形〕	1.40	0.93	0.59	1~4	外傾	平坦	—	—
4	84	G6c4	N-85°W	〔隅丸方形〕	[2.07]	1.45	0.93	1~10	外傾	平坦	—	東壁上部確認面に石2点
	85	G6c4	N-20°E	隅丸方形	1.82	1.42	1.07	2~9	外傾	平坦	—	底面に浅い凹み、壁コーナーに足掛け凹み2

表5 居出場一覧表

製塩跡 番号	鹹水槽 番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土厚 さ(cm)	壁面	底面	出土遺物	備 考
					長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)					
1	98	H6j7	N-73°W	〔隅丸長方形〕	[1.49]	0.68	0.26	2~7	外傾	平坦	—	2号竈に伴う居出場、99号居出場の作り替え
	99	H6i7	—	〔隅丸長方形〕	—	—	0.13	1~2	外傾	平坦	—	崩落が激しい
2	49	I6h1	N-24°E	隅丸長方形	[1.70]	0.63	0.42	1~8	外傾	平坦	—	—
3	43	G6h2	N-62°W	〔隅丸長方形〕	—	—	—	3~10	—	平坦	—	崩落が激しい
	57	G6h2	N-70°W	隅丸長方形	1.52	0.53	0.53	2~8	外傾	平坦	覆土中に土師質小皿1点	底面東端部に石1点、58号居出場の作り替え
	58	G6h2	N-75°W	〔隅丸長方形〕	1.42	[0.65]	0.17	1~7	外傾	平坦	—	西壁上部に焼石1点、東壁上部すぐ外に石2点

表6 屋外鹹水槽一覧表

製塩跡 番号	番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土厚 さ(cm)	壁面	底面	出土遺物	備 考
					長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)					
2	40	I6h3	N-17°E	隅丸長方形	2.66	1.45	0.53	1~5	外傾	平坦	—	底面中央に溝状の凹み
	45	I6i3	N-20°E	〔隅丸長方形〕	[2.43]	[1.73]	1.03	2~8	外傾	平坦	—	底面中央に石3点、壁南西角に足掛け石1点
3	16	G6i3	N-23°E	〔隅丸長方形〕	[4.88]	[2.60]	1.25	1~9	外傾	平坦	—	壁北東角最低部に石2点
	34	G6h4	N-6°E	〔隅丸長方形〕	[3.85]	[2.10]	0.83	2~12	外傾	平坦	—	壁西角に足掛け石2点
	36	G6f4	N-15°E	〔隅丸長方形〕	[4.86]	[2.20]	0.73	1~9	外傾	平坦	—	2区底面に石1点、壁南西角に足掛け石1点
	66	G6e4	N-1°E	隅丸長方形	4.12	1.70	0.30	2~5	外傾	平坦	—	—
6	26	G6j5	N-16°E	〔隅丸長方形〕	4.68	[1.73]	0.74	1~9	外傾	平坦	—	底面中央に石2点、南壁上部に石2点
	64	G6j6	N-22°E	隅丸長方形	4.64	1.14	0.26	—	外傾	平坦	—	—
	67	G6j6	N-22°E	〔隅丸長方形〕	4.62	1.04	0.08	1~5	外傾	平坦	—	—
7	68	H6c8	N-15°W	隅丸長方形	5.47	1.74	1.19	5~25	外傾	平坦	—	壁南東角に足掛け凹み1
	70	H6f9	N-30°E	〔隅丸長方形〕	[4.50]	1.63	0.62	1~13	外傾	平坦	—	壁の崩落が激しい
	72	H6e9	N-3°W	〔隅丸長方形〕	5.25	1.05	1.34	2~15	外傾	平坦	—	—
	73	H6g8	N-8°E	〔隅丸長方形〕	[5.61]	[1.60]	0.89	2~7	外傾	平坦	—	—
8	71	G6h5	N-85°E	円 形	2.32	2.09	1.35	1~14	外傾	平坦	—	底面に貝殻1点、壁北西・南東角に足掛け石・凹み
	74	H6a5	N-0°	隅丸方形	2.62	2.30	1.26	1~8	外傾	平坦	—	底面に凹み、壁南東角に足掛け石・東部下端に石
	75	H6b5	N-72°W	〔隅丸方形〕	[2.60]	2.14	1.28	2~10	外傾	平坦	—	底面に凹み
	76	G6g4	N-74°E	隅丸長方形	2.60	1.95	0.88	2~7	外傾	平坦	—	底面に凹み、壁北西角に足掛け石1点

裂産跡 番号	番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土厚 さ(cm)	壁面	底面	出土遺物	備 考
					長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)					
8	77	G5g ₁	N-84°E	隅丸長方形	2.06	1.17	0.78	1~6	外傾	平坦	—	底面に凹み
	79	G6j ₆	N-86°W	隅丸方形	2.22	2.12	1.48	2~11	外傾	平坦	—	底面に石1点, 壁南東・北西角に足掛け石各1点
	80	G6i ₆	N-63°W	[隅丸長方形]	[0.97]	[1.00]	[0.59]	2~10	外傾	平坦	—	底面に凹み
	81	G6i ₆	N-78°W	隅丸長方形	2.40	1.80	1.06	1~7	外傾	平坦	—	底面に凹み, 壁北西角に足掛け凹み
	82	G6h ₆	N-16°E	隅丸方形	2.60	2.18	1.46	1~9	外傾	平坦	—	底面に凹み, 南壁に凹み・壁南西角に足掛け石
	83	G6f ₄	N-88°E	隅丸長方形	2.19	1.62	0.91	2~10	外傾	平坦	—	底面に凹み, 壁北西角に足掛け石1点
9	87	G6g ₃	N-36°E	隅丸長方形	2.56	1.82	0.88	1~5	外傾	平坦	—	底面に石1点, 壁南東角に足掛け凹み
	88	G6g ₂	N-88°W	隅丸方形	2.53	[2.41]	1.03	1~6	外傾	平坦	—	両側壁中央に縦長の凹み
	89	G6f ₂	N-87°E	隅丸長方形	2.25	1.77	1.15	2~9	外傾	平坦	—	すく西の確認面に馬の骨, マツの木片
	90	G6h ₂	N-87°W	隅丸長方形	2.21	1.59	1.02	1~10	外傾	平坦	—	底面に凹み, 壁北西角に足掛け凹み
	91	G6h ₂	N-88°W	隅丸長方形	2.07	1.25	0.82	2~5	外傾	平坦	—	底面やや皿状, 壁南東角に足掛け凹み
	92	G6h ₃	N-81°W	隅丸長方形	2.15	1.75	0.75	1~5	外傾	平坦	—	底面に凹み, 壁北西角に足掛け石1点
	100	G6i ₁	N-82°W	隅丸長方形	2.11	1.36	0.89	1~6	外傾	平坦	—	—
	101	G6j ₃	N-76°E	隅丸長方形	1.76	1.17	1.02	1~9	外傾	平坦	—	壁北西角に足掛け石1点
	102	H6a ₄	N-80°W	隅丸長方形	2.01	1.63	0.90	3~10	外傾	平坦	—	壁北東角に足掛け石1点
	103	H6a ₃	N-78°W	隅丸長方形	1.50	1.10	0.56	3~7	外傾	平坦	—	壁北東角に足掛け石1点
	104	H6a ₃	N-86°W	隅丸長方形	1.84	1.53	0.85	2~10	外傾	平坦	—	—

表7 土樋一覧表

裂産跡 番号	位置	番号	主軸方向	流れ方向 (八方位)	規 模				粘土の 厚 さ (cm)	蓋石 の有無	土樋同士の相互関係・鹹水槽との連絡関係	備 考
					長 さ (cm)	最大幅 (cm)	最小幅 (cm)	深 さ (cm)				
3	G6h ₃ ~G6j ₂	1	N-30°E	南西→北東	8.48	46	14	12	4~10	無	16号鹹水槽 → 9号土樋	水受けあり
	G6h ₃	2	N-66°W	北東→南西	0.45	16	11	8	4~6	無	? → ?	—
	G6f ₂ ~G6g ₃	9	N-53°W	南東→北西	[3.26]	38	18	20	1~8	有	16・34・36・66号鹹水槽 → 54号釜屋内鹹水槽	底・壁を石と鯨骨で補強修復
	G6f ₂ ~G6g ₃	10	N-51°E	北西→南東	0.12	25	23	7	1~10	無	9号土樋 → 53号釜屋内鹹水槽	落口部のみ残存
6	G6h ₆ ~G6i ₃	3	N-46°E	南西→北東	7.45	34	12	11	2~7	無	26号鹹水槽 → ?	—
	G6h ₆	6	N-51°W	南東→北西	0.70	13	6	4	2~4	無	? → 3号土樋	—
	G6h ₅ ~G6h ₆	11	N-30°E	南西→北東	0.70	37	23	11	4~7	無	? → ?	—
7	H6c ₉ ~H6f ₉	4	N-7°E	南東→北東	12.17	22	9	10	3~13	無	? → ?	7号土樋の作り替え
	H6d ₉	5	N-74°W	東→北西	[0.61]	22	12	6	2~4	無	? → 4号土樋	8号土樋の作り替え
	H6c ₉ ~H6f ₉	7	N-2°E	南東→北	10.53	16	10	6	2~13	無	? → ?	—
	H6d ₉	8	N-68°W	南東→北東	0.37	14	9	6	1~4	無	? → 7号土樋	—
	H6f ₈ ~H6g ₈	12A	N-12°E	南西→北東	2.29	15	11	4	2~3	無	73号鹹水槽 → ?	—
	H6e ₈ ~H6f ₈	12B	N-26°E	南西→北東	2.95	20	11	10	3	無	73号鹹水槽 → ?	—
	H6e ₈ ~H6f ₈	13	N-3°W	南東→北	0.59	15	14	8	1~6	無	? → 12号土樋	—
	H6b ₈ ~H6d ₈	14	N-32°W	南東→北西	9.22	24	11	13	1~11	有	23号土樋 → ?	—
	H6b ₈ ~H6d ₈	15	N-3°W	南東→北東	8.02	30	9	13	2~6	有	68号鹹水槽 → 14号土樋	水受けあり
	H6c ₈ ~H6d ₈	16	N-25°W	南東→北西	6.55	27	10	11	2~8	有	? → ?	—
	H6d ₈ ~H6f ₈	17	N-29°W	南東→北西	5.37	18	11	11	1~10	無	72号鹹水槽 → 15号土樋	水受けあり
	H6d ₈	18	N-56°W	南東→北西	0.75	14	11	4	3~4	無	? → 17号土樋	—
	H6d ₈ ~H6f ₈	19	N-5°E	南西→北西	6.27	24	11	10	1~15	無	? → ?	—
	H6f ₉	20	N-15°E	南西→北東	[3.70]	15	10	4	2~8	無	70号鹹水槽 → 23号土樋	—
	H6c ₉ ~H6d ₉	21	N-32°W	南東→北西	3.40	25	15	6	2~6	無	? → ?	—
H6d ₉ ~H6e ₉	22	N-1°E	南→北	1.75	23	20	10	2~8	無	? → ?	—	
H6c ₉ ~H6d ₉	23	N-4°W	南→北西	2.20	22	13	8	2~7	無	20号土樋 → 14号土樋	—	

2 その他の遺構と遺物

当遺跡の遺構調査においては、粘土貼りの遺構には便宜上、すべてS Nの略記号に番号をつけて表示する方法をとったが、整理の段階でS N番号のついた遺構を鹹水槽と、粘土貼り土坑の2種に区別した。鹹水槽のうち、群として明確に把握できたものは前項で報告したが、それ以外のものはこの項にまとめて記載する。S Kの略記号を用いた遺構は、炉跡、土坑、墓壇の3種に区別した。これらの遺構と礎石建物状遺構、不明遺構を含め製塩跡以外の遺構として、この項に報告する。

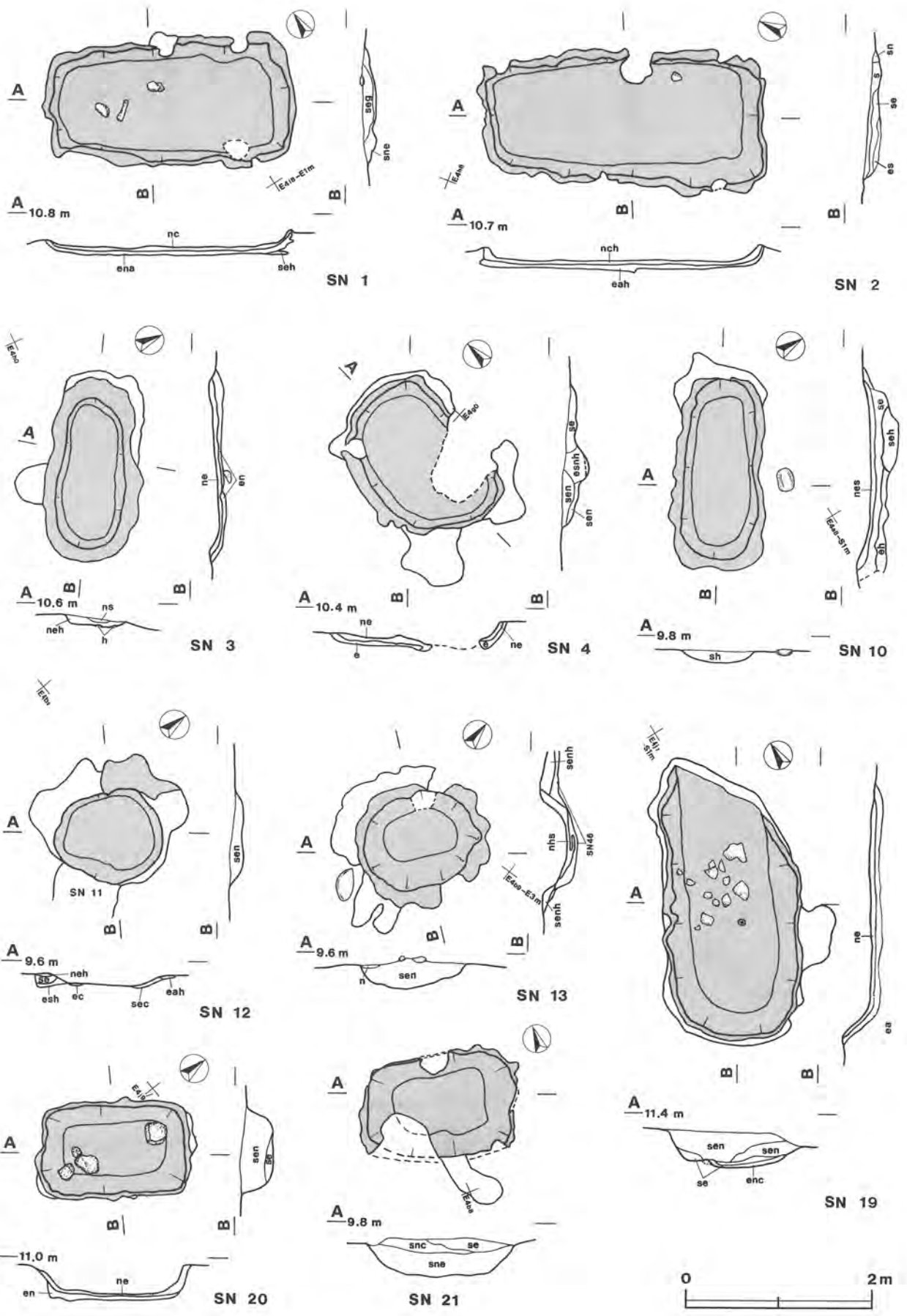
(1) 鹹水槽（第25～32区画）

前項で報告をした製塩跡に含まれる鹹水槽以外に、比較的大型のものであるが他の遺構とは同一の群として考えにくいものと、長軸が1.0～2.5m、短軸が0.7～1.0m程度の小型で浅い遺構である。平面形は、隅丸長方形か楕円形が多く、底面は平坦か緩やかな皿状である。鹹水槽として使用したと考えられるものをここにまとめた。これら小型の鹹水槽のほとんどは、調査前と遺構確認時の標高差が比較的小さいものが多く、当遺跡での製塩業の規模が縮小された時期のものであると考えられる。これらのうち、遺物が出土している遺構がいくつかあるが、いずれも流れ込みの可能性があるため、遺構は以下に一覧表として記載し、その後に遺構から出土した遺物を参考資料として掲載する。

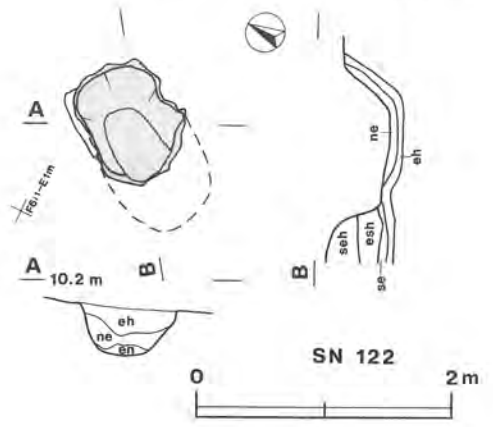
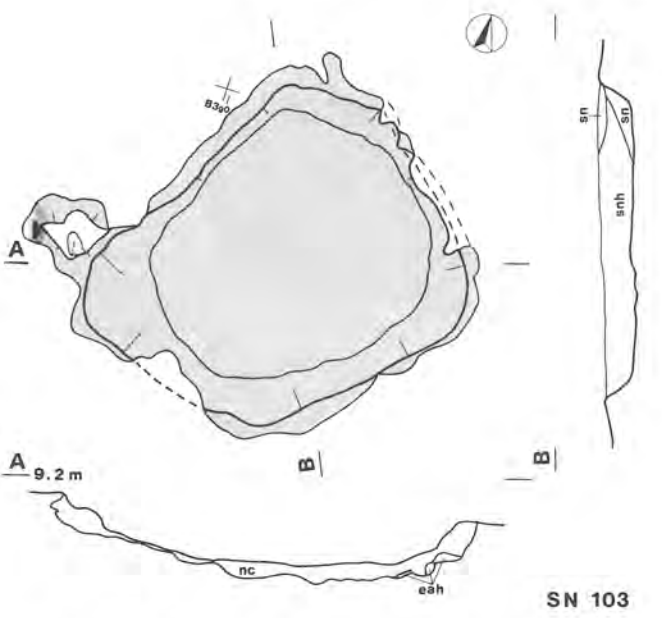
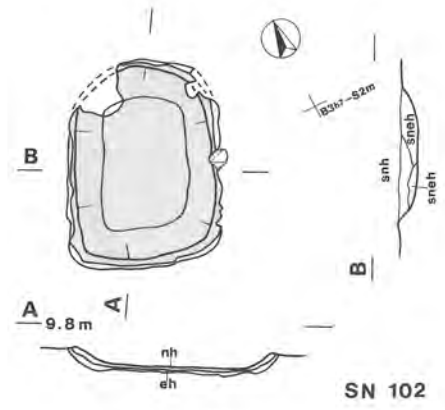
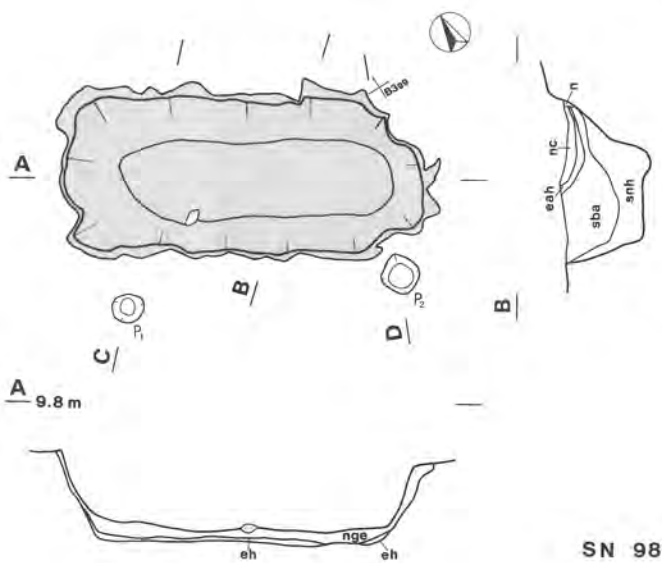
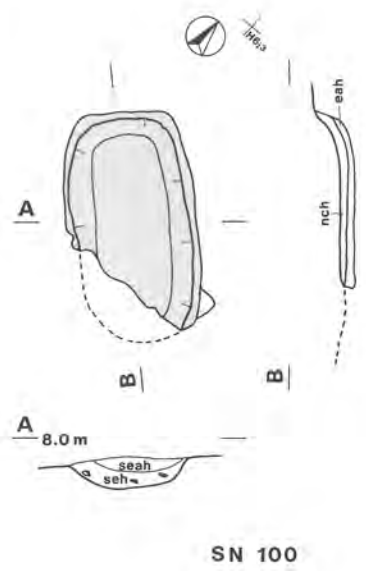
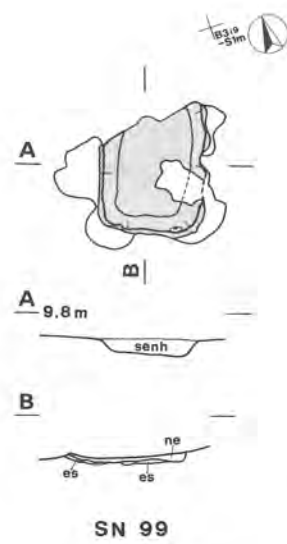
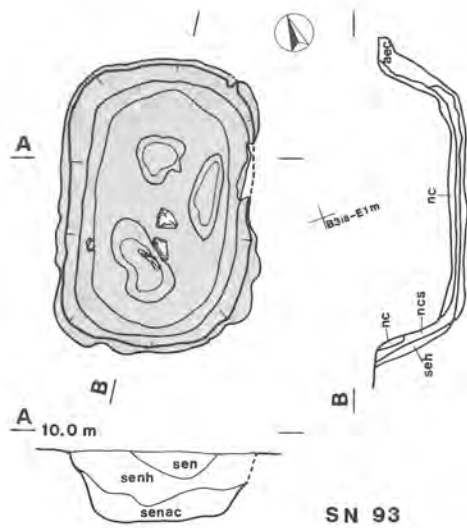
表8 鹹水槽一覧表

区画 番号	S N 番号	位置 番号	長軸方向	平面形	規模			粘土厚 さ(cm)	壁面	底面	出土遺物	備考	
					長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)						
第25区	1	E4h _s	N-55°W	隅丸長方形	2.58	1.21	0.15	2～5	外傾	平坦	土師質土器片3点、陶器片11点、磁器・須恵器片1点	上部削平、底面に石2点、SN2と並列	
	2	E4h _s	N-22°W	隅丸長方形	2.86	1.28	0.16	2～10	外傾	平坦	—	上部削平、底面に石2点、骨片1点	
	3	E4g _o	N-59°W	隅丸長方形	1.63	0.65	0.10	1～5	—	平坦	—	上部削平	
	4	E4g ₉	N-4°E	楕円形	1.75	1.10	0.30	4～12	外傾	平坦	—	上部削平、壁・底面東部攪乱で欠落	
	10	E4a ₇	N-57°W	隅丸長方形	1.97	0.80	0.12	5～15	外傾	平坦	周辺に幼児骨・内耳片4点	上部削平、すぐ東側に石1点	
	12	E4b _s	N-34°E	楕円形	1.18	1.00	0.20	2～14	外傾	平坦	—	上部削平、SK11(旧)と重複	
	13	E4b ₉	N-35°E	楕円形	1.22	1.13	0.27	1～5	外傾	平坦	—	粘土・黒色土共攪乱で欠落大、直下にSN46	
	19	E4j ₇	N-66°W	隅丸長方形	(2.53)	1.35	0.25	4～7	外傾	平坦	底面に古銭1点(判読不能)	底面に小石多数、北半が削平により欠落	
	20	E4j ₉	N-42°E	隅丸長方形	1.55	0.92	0.27	2～10	外傾	平坦	—	底面北東隅に石1点、南西隅に石3点	
	21	E4a ₇	N-24°E	隅丸長方形	1.59	1.10	0.41	1～14	外傾	平坦	—	壁南西角の一部攪乱で欠落、直下にSN49	
第26区	37	E4d ₆	N-29°E	楕円形	0.84	0.52	0.13	7～9	外傾	平坦	—	直下にSN39、長軸方向が互いに約90°違う	
	39	E4c ₆	N-55°W	隅丸長方形	1.35	0.90	0.43	—	—	皿状	—	SN37の直下、壁崩落	
	49	E4a ₇	N-80°W	不定形	1.41	0.68	0.45	2～7	外傾	平坦	—	SN21の直下、東壁と底面のみ残存	
	55	H5f ₉	N-44°W	隅丸長方形	1.00	2.40	0.15	2～9	外傾	平坦	周辺から鏝出土	上部削平	
	56	H5f ₉	N-41°E	隅丸長方形	1.85	0.68	0.18	3～15	外傾	平坦	—	上部削平	
	71	F4a _o	N-66°E	隅丸長方形	1.38	1.04	0.41	1～3	外傾	平坦	—	—	
	72A	18A	E4b ₃	N-58°W	隅丸長方形	1.71	1.20	0.35	2～10	外傾	平坦	—	壁の上部を異質の粘土で貼り替えている
	72B	18B	E4b ₃	N-58°W	隅丸長方形	1.45	0.97	0.35	1～5	外傾	平坦	土師質土器片1点	—
	77	19	B3g ₅	N-60°W	隅丸長方形	2.41	0.79	0.14	1～12	外傾	平坦	土師質土器片6点	—
	91	20	B3h ₇	N-62°W	隅丸長方形	1.53	1.04	0.17	3～11	外傾	平坦	—	覆土中層に東壁崩落による粘土塊混入
第27区	97	22	B3h ₇	N-29°E	隅丸長方形	1.49	0.97	0.35	2～9	外傾	平坦	—	壁上部と底面の一部粘土貼り替え
	93	21	B3h ₇	N-25°E	隅丸長方形	2.26	1.36	0.58	3～13	外傾	平坦	陶器片1点	底面に石3点、木の根1本、粘土貼り替え
	98	23	B3g ₈	N-58°W	隅丸長方形	2.84	1.20	0.59	2～14	外傾	平坦	—	底面に石2点、SK62(旧)と重複

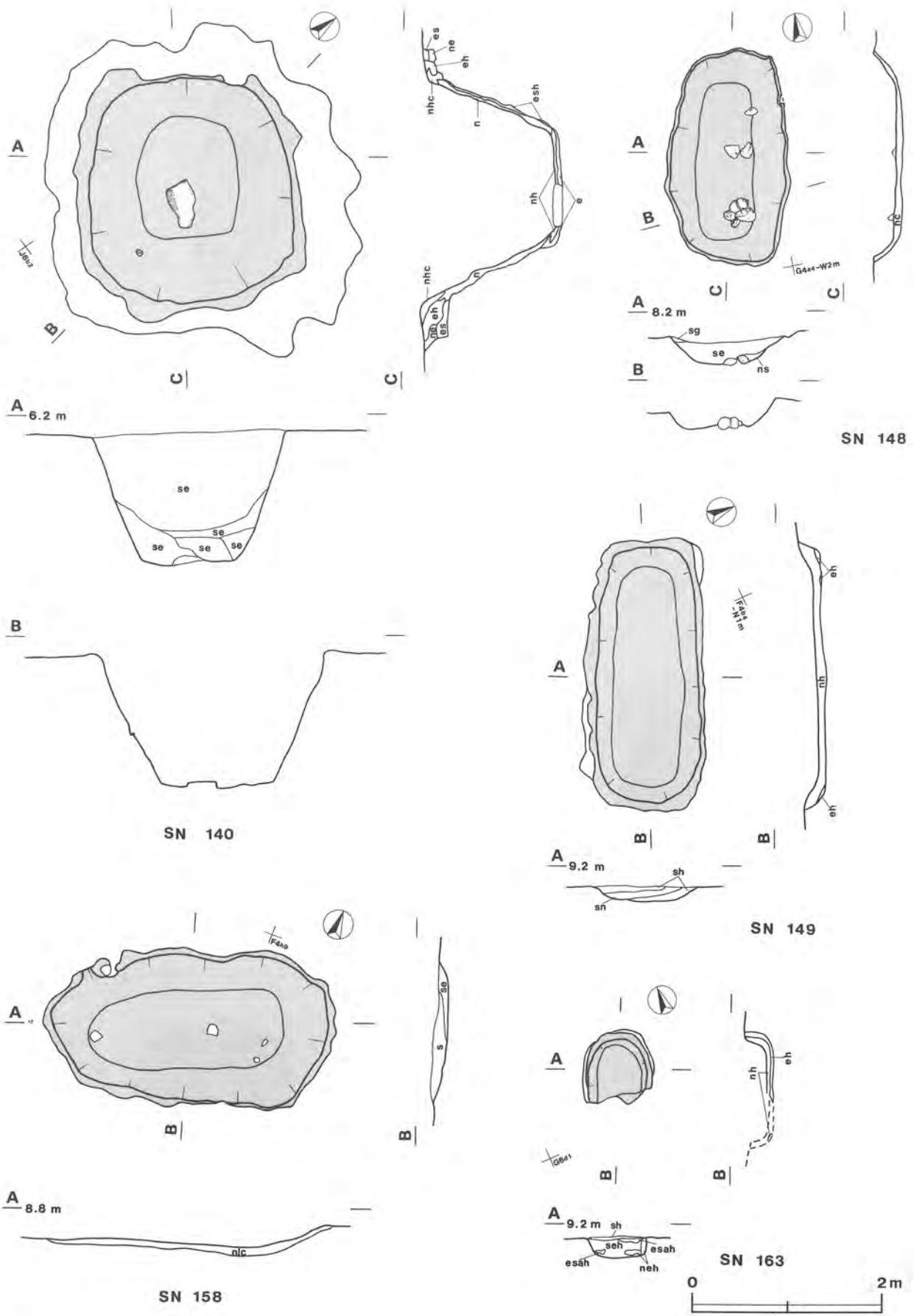
図版 番号	S N 番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土厚 さ(cm)	壁面	底面	出 土 遺 物	備 考	
					長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)						
第27図	99	24	B3i ₈	N-21°E	隅丸長方形	(0.92)	0.82	0.07	1~6	外傾	平坦	—	東壁が削平で欠落、底面一部攪乱で欠落
	100	25	H6j ₃	N-48°W	隅丸長方形	(1.79)	0.91	0.20	4~8	外傾	平坦	—	南壁が削平で欠落
	102	27	B3h ₆	N-30°E	隅丸長方形	1.54	1.13	0.15	1~5	外傾	平坦	—	壁北東角攪乱で欠落
	103	28	B3g ₀	N-46°E	[隅丸方形]	2.90	2.37	0.46	2~20	外傾	皿状	—	壁北西角周辺に石1点、覆土下層に粘土塊
	122	30	F6i ₁	N-28°E	[楕円形]	(1.35)	0.73	0.39	5~7	外傾	平坦	—	壁西側崩落、すぐ北西にSX1
第28図	129	29	H6g ₈	N-16°W	隅丸長方形	(2.57)	1.20	0.19	5~13	外傾	平坦	—	覆土中層に南壁崩落による粘土塊混入
	131	37	F6i ₁	N-25°E	隅丸長方形	1.34	0.90	0.24	2~7	外傾	平坦	—	—
	132	38	F5h ₀	N-5°E	隅丸長方形	(1.42)	0.85	0.37	2~4	外傾	平坦	—	—
	135	39	G6a ₄	N-51°W	隅丸長方形	2.30	1.23	0.57	5~11	外傾	平坦	土師質土器・陶器片各1点	—
	137	41	I6j ₃	N-59°W	隅丸長方形	2.09	1.40	1.15	3~7	外傾	平坦	—	大型屋外鹹水槽、壁北西角に足掛け石1点
	138	42	J6a ₄	N-55°W	隅丸長方形	1.92	1.40	0.66	2~6	外傾	平坦	—	—
	142	46	F5e ₇	N-37°E	隅丸長方形	1.37	0.69	0.34	2~6	外傾	平坦	—	—
第29図	140	44	J6a ₂	N-56°W	隅丸方形	2.45	2.17	1.41	2~9	外傾	平坦	—	底面中央に石1点、壁南西角に足掛け石1点
	148	50	F4j ₇	N-12°E	楕円形	2.27	1.23	0.24	2~8	外傾	平坦	底面に五輪塔風空輪1点	底面に石6点
	149	51	F4b ₄	N-63°W	楕円形	2.75	1.12	0.18	6~11	外傾	平坦	—	上部削平
	158	55	F4h ₈	N-69°E	隅丸長方形	2.96	1.57	0.20	4~12	外傾	皿状	—	大型屋外鹹水槽、底面に石4点、上部削平
	163	59	G6c ₁	N-25°E	[楕円形]	(0.61)	0.63	0.22	3~8	外傾	平坦	—	南半が攪乱により欠落
第30図	155A	52A	G6a ₄	N-28°E	隅丸長方形	3.19	1.70	0.74	3~10	外傾	平坦	—	大型屋外鹹水槽だが、セット関係は不明。
	155B	52B	G6a ₄	N-28°E	隅丸長方形	3.68	1.99	0.93	3~10	外傾	平坦	—	底面の粘土が三重に貼られていた。作り
	155C	52C	G6a ₄	N-23°E	隅丸長方形	3.58	1.38	0.50	2~12	外傾	平坦	—	替えを二度行った。壁の崩落が激しい。
	164	60	F5c ₀	N-19°E	隅丸長方形	1.77	0.68	0.56	1~10	外傾	平坦	—	—
	166	61	G5b ₉	N-65°W	隅丸長方形	1.53	0.86	0.51	1~6	外傾	平坦	—	—
第31図	159	56	F5d ₀	N-7°W	隅丸長方形	2.20	1.93	1.23	2~8	外傾	平坦	—	壁南西角に足掛け石1点
	169	62	G5f ₈	N-24°W	隅丸長方形	1.15	0.57	0.22	1~6	外傾	平坦	—	底面に石6点
	172	63	H6i ₃	N-19°E	隅丸長方形	3.08	2.20	1.32	1~7	外傾	平坦	—	—
	175	65	G6i ₆	N-88°E	[隅丸長方形]	0.90	0.82	0.35	2~7	外傾	平坦	—	底面に石3点埋め込み、東半が攪乱で欠落
	183	69	G6h ₅	N-33°E	楕円形	2.10	1.39	0.46	1~15	外傾	平坦	—	大型屋外鹹水槽、底面に石1点、上部削平
第32図	192	78	G6i ₆	N-58°W	[隅丸長方形]	(1.12)	1.25	0.19	2~5	外傾	平坦	—	東半が削平により欠落、直下にSN196
	200	86	G6g ₄	N-86°W	隅丸長方形	1.61	1.14	0.40	1~4	外傾	平坦	—	SN201(旧)と重複
	207	93	G6h ₄	N-68°W	隅丸長方形	1.64	0.97	0.48	1~6	外傾	平坦	—	底面に石7点埋め込み
	208	94	G6g ₄	N-73°W	楕円形	1.47	1.10	0.46	1~6	外傾	平坦	—	底面と壁面に石の埋め込み多数
	209	95	G6i ₃	N-81°W	隅丸長方形	1.71	1.00	0.36	1~5	外傾	平坦	—	底面に浅い凹み
	210	96	G6h ₄	N-27°E	隅丸長方形	1.79	1.42	0.69	2~8	外傾	平坦	—	底面中央に石1点と浅い凹み、壁南西角に足掛け凹み
	211	97	G6i ₃	N-22°W	楕円形	1.44	1.01	0.29	1~4	内傾	平坦	—	上部削平



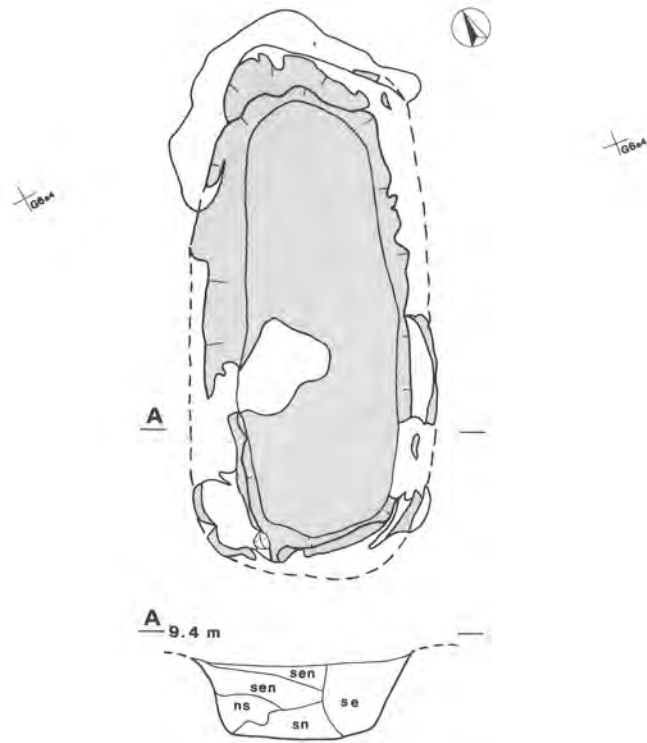
第25図 鹹水槽実測図(1)



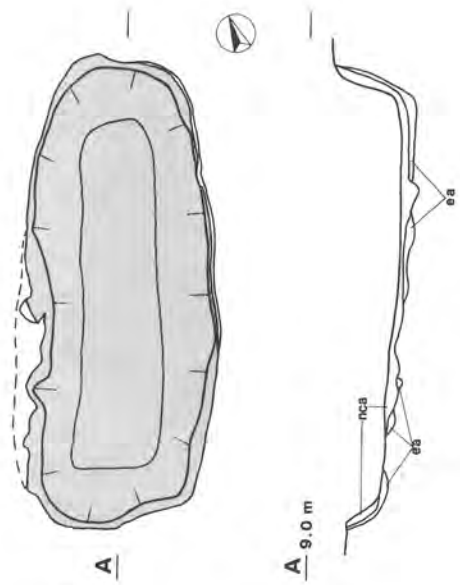
第27図 鹹水槽実測図(3)



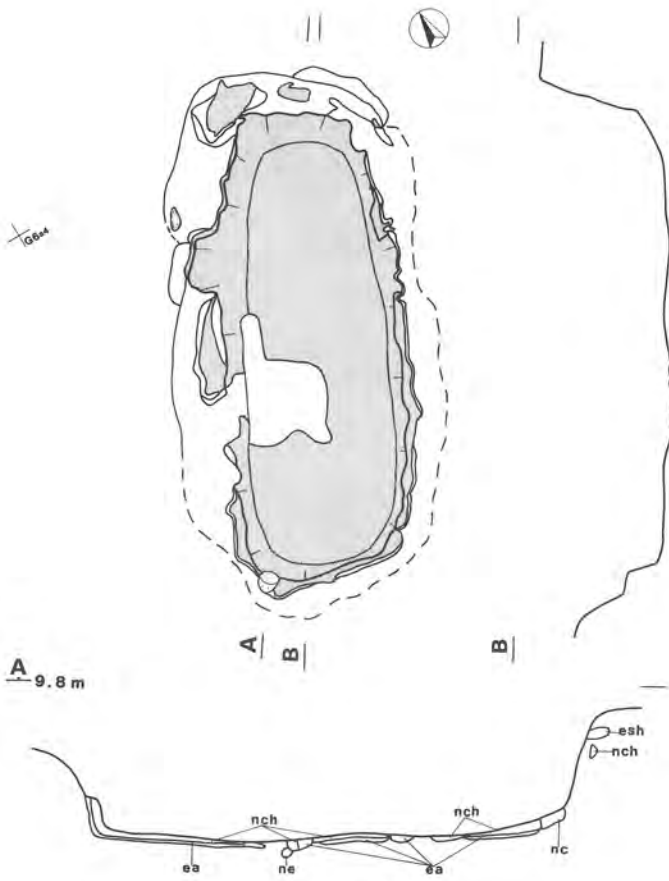
第29図 鹹水槽実測図(5)



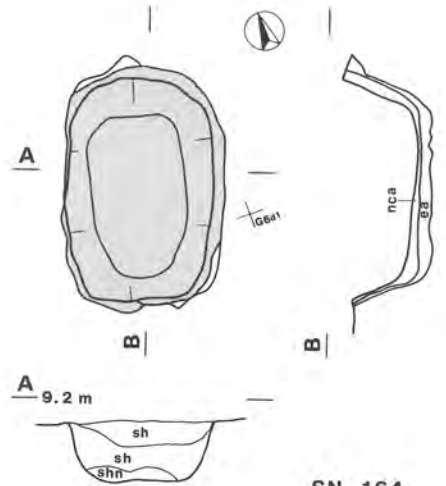
SN 155A



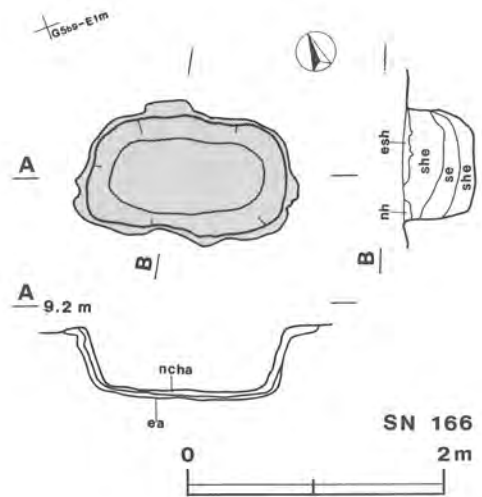
SN 155C



SN 155B

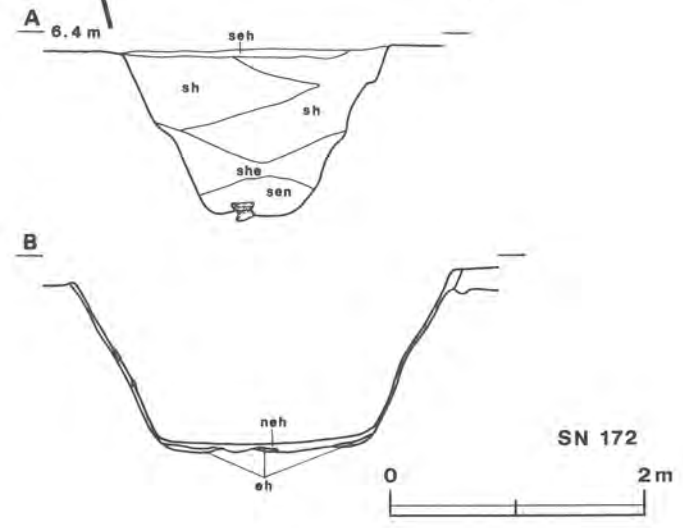
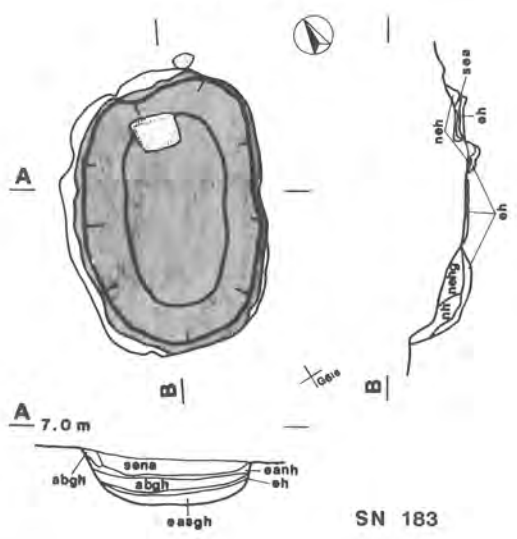
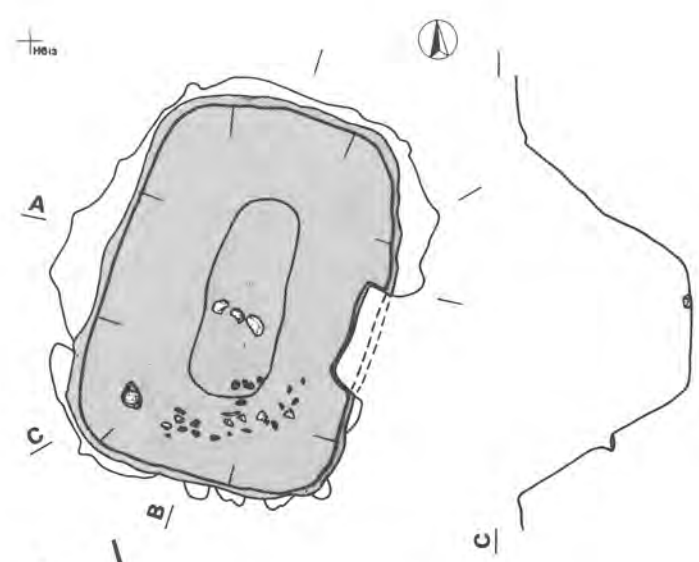
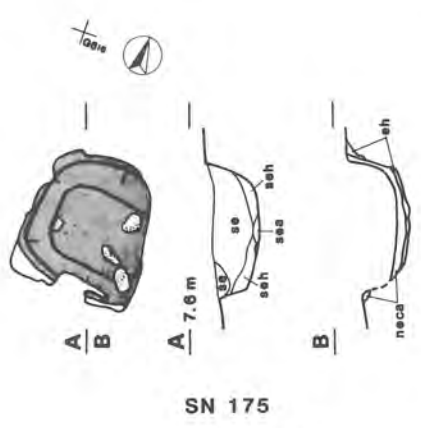
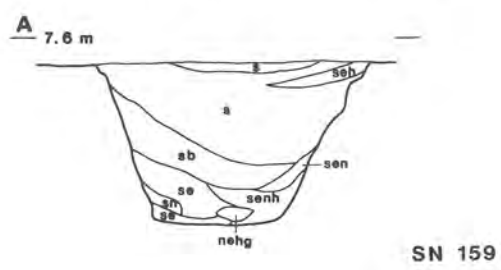
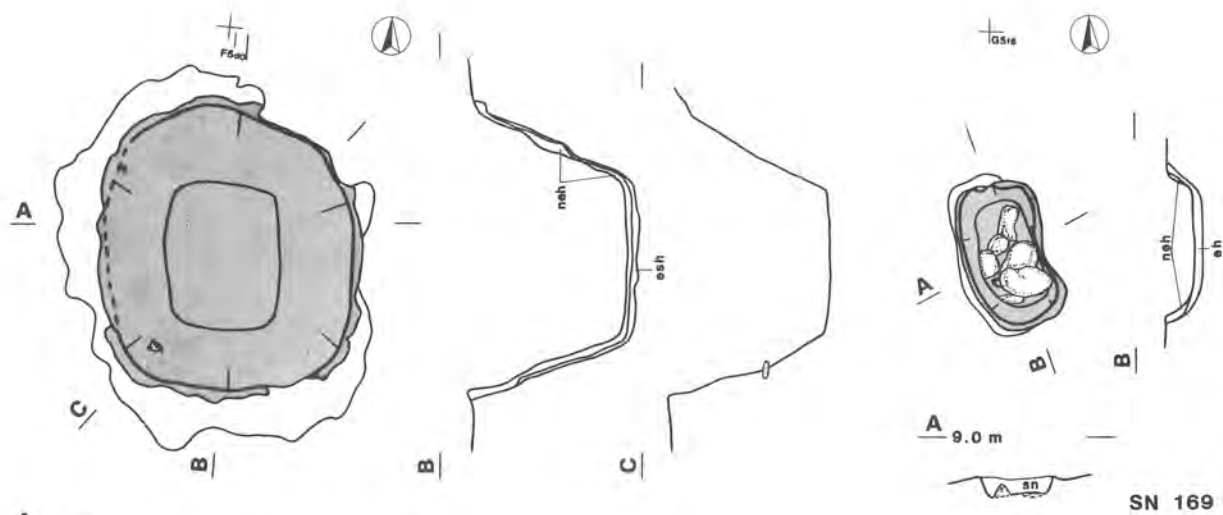


SN 164

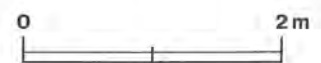
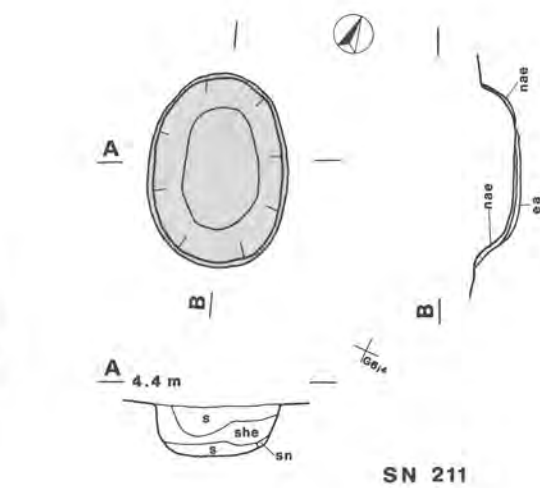
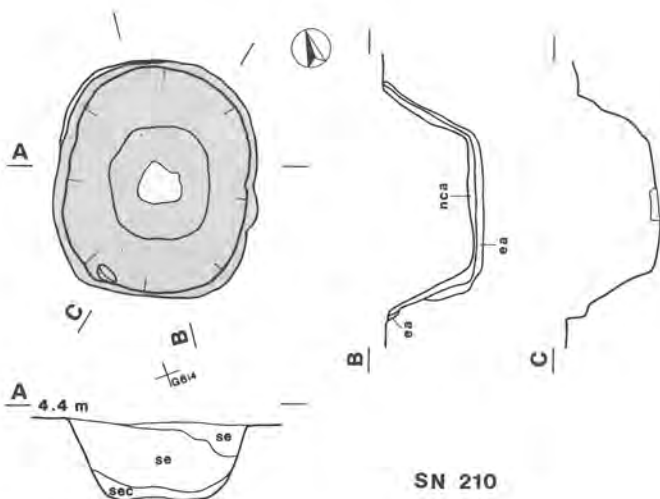
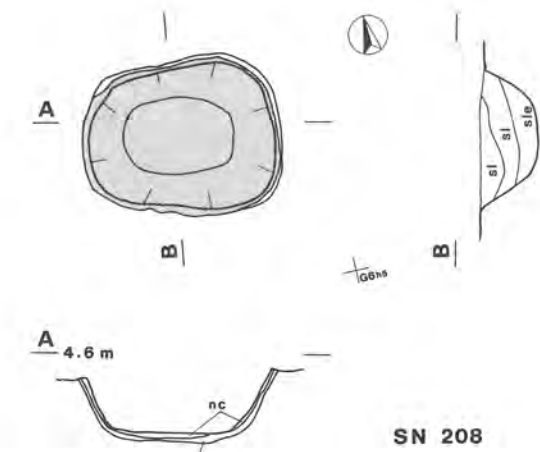
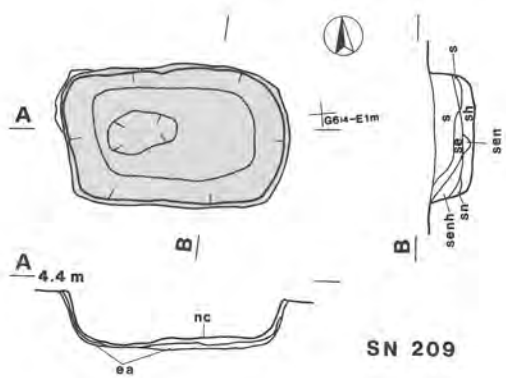
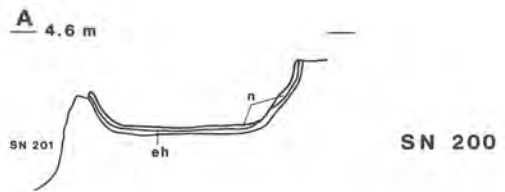
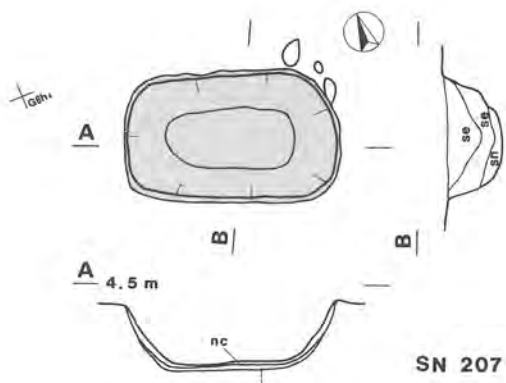
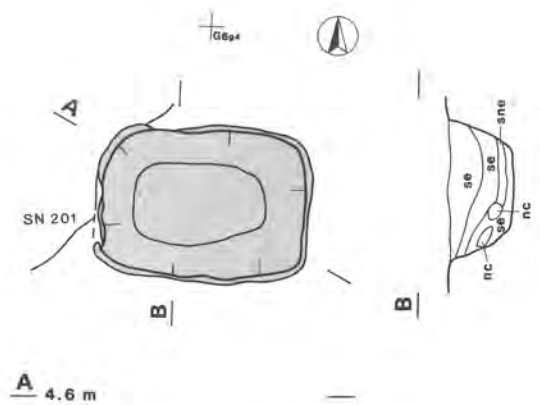
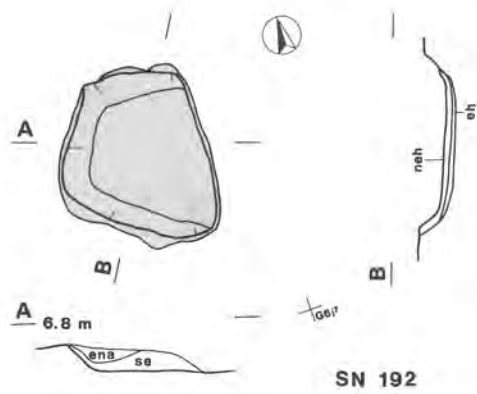


SN 166

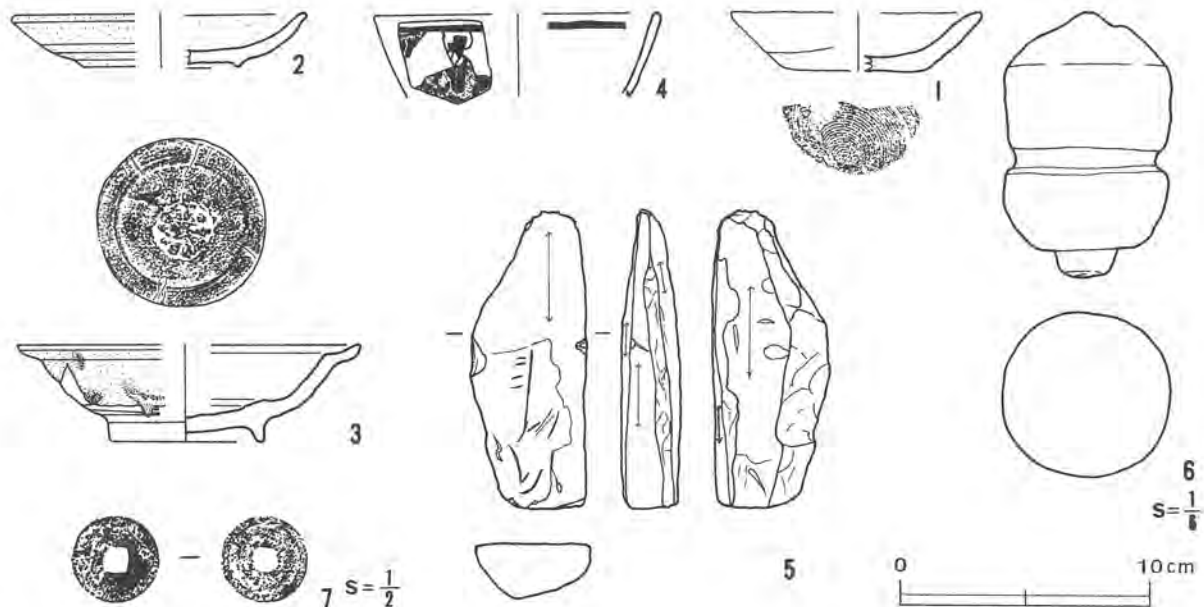
第30図 鹹水槽実測図(6)



第31図 鹹水槽実測図(7)



第32図 鹹水槽実測図(8)



第33図 鹹水槽出土遺物実測図

鹹水槽出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33図 1	皿 土師質土器	A[10.0] B 2.4 C[5.6]	底部から口縁部片。底部は平底。体部、口縁部は直線的に立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母・長石 スコリア、にぶい 赤褐色 普通	P 4 内面煤付着 残存率40% S N135覆土
2	丸皿 陶器	A[11.8] B 2.1 C[6.3]	底部から口縁部片。削り出し三角高台。体部、口縁部は内彎ぎみに立ち上がり、上端部が外反する。	水挽き成形。底部回転ヘラ切り。底裏に目積み痕あり。体部外面回転ヘラ削り。全面施釉。	砂粒 灰白色 長石釉 普通	P 1 志野 残存率20% S N 1 覆土
3	小鉢 陶器	A[13.6] B 3.9 C 6.2	底部から口縁部片。削り出し高台の外面垂直内面内彎。体部は内彎して立ち上がる。折縁口縁で上端部が内彎する。	水挽き成形。底部回転ヘラ切り。見込みに扁平に盛り上がる輪ハゲと印花文あり。外面腰部から底部にかけ無釉。	砂粒・長石 灰白色 長石釉 普通	P 5 志野 残存率50% S N135覆土
4	染付碗 磁器	A[11.4] B(3.4)	胴部から口縁部片。器壁が薄く、胴部から口縁部にかけ内彎気味に立ち上がる。	水挽き成形。呉須生掛け。透明釉。	砂粒 白色 普通 被二次焼成	P 2 明万暦製 残存率15% S N 1 覆土

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第33図5	砥石	12.0	4.6	2.2	146.2	凝灰岩	S N12	Q 1
6	五輪塔	21.3	13.2	—	4711.2	砂岩	S N148床面	Q 2 五輪塔の風空輪部

図版番号	銭種	初鑄年		出土地点	備考
		時代	年号(西暦)		
第33図7	不明	—	—	S N19	M 1

(2) 粘土貼土坑(第35~43図)

この項で報告する「粘土貼土坑」は、長軸、短軸ともに1 m以下のものがほとんどで、平面形は円形が多く、隅丸方形や楕円形、隅丸長方形のものもある。底面は皿状か平坦で、壁は外傾、まれに内彎して立ち上がる。構築方法は大型の鹹水槽と同じで、黒色土を貼った上に褐色粘土を貼っている。これらのごく小規模な遺構は、

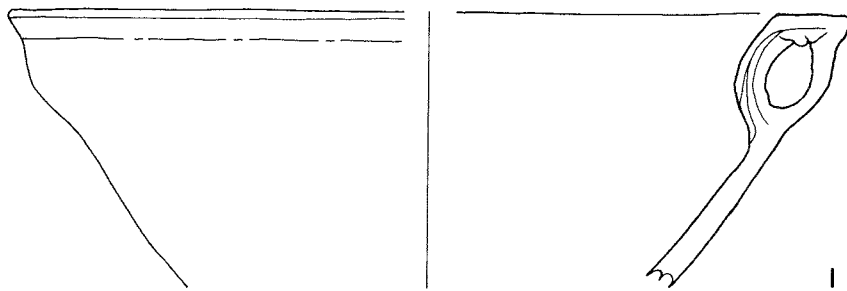
鹹水槽に使用したとは考えにくく、何らかの目的で水などを入れて使用したのではないかと考えられる。しかも、これらの遺構は、前記の小型鹹水槽と確認面がほぼ同じで、同時期のものと考えられる。これらのうち、遺物が出土している遺構がいくつかあるが、いずれも流れ込みの可能性があるため、遺構は以下に一覧表として記載し、その後に遺構から出土した遺物を参考資料として掲載する。

表9 粘土貼土坑一覧表

図版 番号	S N 番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土厚 さ(cm)	壁面	底面	出土遺物	備 考
					長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)					
第35図	6	E4h7	N-8°E	楕円形	0.45	0.43	0.10	2~4	外傾	皿状	-	遺構外すく北に石1点
	7	E4i9	N-37°W	不定形	1.27	0.53	0.08	2~5	-	平坦	-	直下にSN43、底面のみ残存
	8	E4b7	N-41°W	楕円形	0.74	0.59	0.11	9~20	外傾	平坦	-	南西部攪乱により欠落
	9	E4f6	N-80°E	円形	0.61	0.57	0.20	2~5	内傾	皿状	-	-
	11	E4b8	N-27°E	円形	0.59	0.59	0.12	2~4	外傾	平坦	-	SN12(新)と重複
	14	E4d5	N-33°E	楕円形	0.82	0.51	0.12	1~7	外傾	皿状	-	-
	15	E4a6	N-0°	楕円形	0.66	0.55	0.11	4~16	外傾	平坦	-	-
	16	E4a6	N-21°W	楕円形	0.66	0.58	0.13	4~10	外傾	平坦	-	底面に石2点
	17	E4b7	N-29°W	隅丸方形	0.46	0.37	0.10	7~19	外傾	平坦	-	-
	18	E4g7	N-12°W	円形	0.47	0.42	0.06	2~4	-	皿状	-	-
	22	E5c1	N-56°W	楕円形	0.86	0.62	0.20	4~10	-	皿状	-	北西部攪乱により欠落
	23	E4a9	N-60°W	楕円形	0.60	0.34	0.10	4~12	外傾	平坦	-	-
	24	E4c0	N-60°W	楕円形	0.96	0.54	0.14	2~5	外傾	平坦	-	攪乱によりほぼ南半が欠落
	25	E4i9	N-53°W	楕円形	0.73	0.62	0.17	9~14	外傾	平坦	-	北東壁に石1点埋め込み、底面粘土の貼り替えあり
第36図	26	E4i0	N-60°E	楕円形	1.08	0.89	0.20	6~29	外傾	平坦	-	粘土部分がほとんど崩落
	27	E4i0	N-55°W	円形	0.80	0.75	0.19	2~5	外傾	皿状	-	壁の一部を残し粘土がほとんど崩落
	28	E3j9	N-20°E	楕円形	1.75	1.10	0.30	4~12	外傾	平坦	-	南西部攪乱により欠落
	29	E5c1	N-89°E	楕円形	0.85	0.70	0.11	1~7	外傾	平坦	-	南東壁と壁南角・西角に石埋め込み
	30	E4e7	N-8°W	円形	0.58	0.55	0.25	1~6	外傾	平坦	-	底面中央に石1点
	31	E4j9	N-82°E	楕円形	0.46	0.24	0.04	2~4	-	平坦	-	-
	32	E5i1	N-53°W	楕円形	0.73	0.57	0.16	-	外傾	平坦	-	-
	33	E4e7	N-25°W	楕円形	0.55	0.49	0.34	2~24	外傾	平坦	内耳土鍋片1点	底面に石3点、東部に攪乱穴あり
	35	E4e7	N-41°E	楕円形	0.65	0.58	0.16	-	外傾	皿状	-	-
	36	E4e6	N-21°E	円形	0.49	0.43	0.12	2~5	外傾	平坦	-	-
	38	E4i8	N-43°W	楕円形	1.08	0.86	0.46	2~7	外傾	皿状	-	黒色土混じりの柔らかい粘土で構築
	40	E4f6	N-7°E	円形	0.64	0.46	0.19	1~3	外傾	皿状	-	南半は攪乱により欠落
	41	E4f6	N-23°W	(円形)	0.45	(0.23)	0.07	2~5	外傾	平坦	-	東半は削平により欠落
	42	E4e5	N-22°E	楕円形	1.20	0.88	0.30	2~5	外傾	平坦	-	-
第37図	43	E4i9	N-17°E	隅丸方形	0.58	0.52	0.10	2~13	外傾	平坦	-	SN7の直下に確認、壁北東部攪乱により欠落
	44	E4c8	N-8°W	楕円形	0.58	0.50	0.23	3~23	外傾	皿状	-	覆土中に粘土塊多数
	45	E4j8	N-29°E	楕円形	0.35	0.27	0.05	2~6	外傾	平坦	-	南壁崩落
	46	E4b9	N-27°E	楕円形	1.23	1.03	0.37	1~5	外傾	平坦	内耳土鍋片1点	SN13の直下に確認、さらに下層にSN50あり
	47	E4c7	N-51°E	円形	0.50	0.46	0.18	2~4	外傾	平坦	-	南壁攪乱により欠落
	48	E4d5	N-33°E	楕円形	0.76	0.48	0.15	2~6	-	平坦	-	-
	50	E4b9	N-70°E	円形	1.68	1.50	0.39	5~8	外傾	皿状	内耳土鍋片3点	SN46の直下に確認、底面のみ残存
	51	E4c5	N-50°E	円形	0.60	0.60	0.04	20~25	外傾	平坦	-	南東壁攪乱により欠落
	52	E4h7	N-23°W	楕円形	0.65	0.42	0.11	2~10	-	平坦	-	-
	53	E4c5	N-23°E	楕円形	0.54	0.49	0.29	5~20	外傾	皿状	-	SK17の直下に確認
	54	E4g9	N-19°W	円形	0.46	0.45	0.11	3~14	外傾	平坦	-	-

図版 番号	S N 番号	番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土厚 さ(cm)	壁面	底面	出土遺物	備 考
						長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)					
第38図	57	40	H5d0	N-33°E	円形	0.57	0.51	0.09	6~10	外傾	皿状	—	壁に石多数埋め込み
	58	41	H5c9	N-34°E	円形	0.46	0.43	0.10	3~8	外傾	平坦	—	—
	59	42	H6d2	N-55°E	円形	0.57	0.54	0.20	1~10	外傾	平坦	—	炭化物を多量に混入させた粘土で構築
	61	43	H6e2	N-59°W	楕円形	0.64	0.50	0.33	3~7	外傾	皿状	—	壁に石多数とアワビの貝殻埋め込み
	62	44	H6c1	N-30°W	楕円形	0.66	0.59	0.37	6~25	外傾	平坦	—	—
	63	45	H6c1	N-80°W	楕円形	0.88	0.59	0.55	6~16	垂直	平坦	—	—
	64	46	H6g2	N-51°W	隅丸長方形	0.82	0.47	0.22	—	外傾	平坦	—	—
	65	47	H6g2	N-37°E	隅丸長方形	0.70	0.48	0.11	3~11	外傾	皿状	—	—
	66	48	H6h1	N-42°W	楕円形	0.61	0.56	0.03	4~9	外傾	平坦	—	東・南・西壁は削平により欠落
	67	49	H6d1	N-63°E	楕円形	0.44	0.41	0.13	2~8	外傾	平坦	—	—
	68	50	H6f2	N-20°E	楕円形	0.74	0.64	0.04	1~3	外傾	平坦	—	上部削平
	第39図	69	51	F5e7	N-52°E	隅丸方形	0.78	0.67	0.13	1~3	外傾	平坦	—
70		52	H5e7	N-50°E	隅丸方形	0.70	0.60	0.14	3~8	外傾	皿状	—	覆土に粘土塊多量
73		53	E4i8	N-32°W	楕円形	0.53	0.37	—	1~4	—	平坦	—	上部削平,直下にSN74
74		54	E4i8	N-5°W	楕円形	0.65	0.59	0.09	2~5	外傾	皿状	—	底面と壁に石多数充填,SN73の直下に確認
75		55	E4e5	N-42°E	隅丸方形	0.60	0.42	0.12	4~6	外傾	皿状	—	北半が攪乱により欠落
76		56	H6i3	N-6°W	楕円形	0.70	0.61	0.11	2~9	外傾	平坦	—	—
78		57	B3j7	N-81°E	楕円形	0.85	0.44	0.18	2~12	外傾	皿状	—	底面に石2点,SK43(旧)と重複,壁北西角欠落
79		58	E4d5	N-53°W	方形	0.65	0.59	0.11	2~4	外傾	平坦	—	底面に石4点,南壁に石1点埋め込み
80		59	H6e1	N-62°W	楕円形	0.80	0.74	0.37	1~5	外傾	平坦	—	北壁に石1点埋め込み,粘土の下の黒色土が厚い
81		60	C3a7	N-42°W	不定形	1.07	0.77	0.20	3~7	外傾	平坦	—	底面と壁に石と獣骨多数,SK48と連続
82		61	H6e2	N-25°W	楕円形	1.00	0.73	0.28	3~8	外傾	皿状	—	SN84(旧)と重複
第40図		83	62	H6e2	N-87°E	楕円形	0.50	0.42	0.07	2~7	外傾	平坦	—
	84	63	H6c2	N-85°W	楕円形	1.19	0.62	0.51	1~10	垂直	平坦	—	SN82(新)と重複
	85	64	H5d7	N-50°W	円形	0.47	0.46	0.03	4~6	外傾	平坦	—	—
	86	65	H5f9	N-65°E	不定形	0.93	0.48	0.04	3~6	外傾	平坦	—	底面中央から西壁にかけ,攪乱により欠落
	87	66	H5f9	N-31°W	楕円形	0.21	0.19	0.10	3~5	外傾	皿状	—	—
	88	67	G5i9	N-23°E	円形	0.58	0.57	0.14	1~4	外傾	平坦	—	—
	89	68	G5h9	N-37°W	隅丸方形	0.48	0.47	0.14	3~14	外傾	平坦	—	—
	90	69	G5i7	N-28°E	楕円形	1.02	0.83	0.05	1~5	外傾	平坦	—	覆土下層に壁上部崩落による粘土塊堆積
	92	70	B3h0	N-4°E	楕円形	1.57	0.96	0.23	3~12	外傾	平坦	—	南側の底面から壁にかけて攪乱穴あり
	94	71	B3f8	N-1°E	楕円形	1.11	0.97	0.24	3~6	外傾	平坦	—	南東壁の一部攪乱により欠落
	95	72	B3g9	N-52°E	楕円形	0.77	0.69	0.10	3~9	外傾	平坦	—	—
	96	73	B3i8	N-56°E	楕円形	0.82	0.67	0.10	2~4	—	皿状	—	—
第41図	104	74	D5i3	N-47°E	円形	0.53	0.52	0.10	2~12	外傾	平坦	—	底面隅に石2点埋め込み,覆土中に多量の粘土混入
	105	75	E4i9	N-22°E	円形	0.99	0.79	0.43	2~10	外傾	皿状	—	南壁崩落,直下にSN109
	106	76	E5b5	N-26°E	円形	0.76	0.76	0.18	4~7	外傾	平坦	—	底の粘土層中に石1点充填,作り替えによる二重底
	107	77	E4d8	N-37°E	楕円形	0.85	0.72	0.17	3~6	内傾	平坦	—	—
	108	78	E4b8	N-22°E	楕円形	0.50	0.45	0.21	1~7	外傾	皿状	内耳土鍋片1点	底面に石大小各1点
	109	79	D4i9	N-86°W	[楕円形]	1.13	0.92	0.37	2~5	外傾	平坦	内耳土鍋片1点	南壁に石1点,SN105の直下に確認,壁の崩落大
	110	80	G6a1	N-53°W	円形	0.51	0.49	0.16	1~6	外傾	皿状	—	底面中央に石1点
	111	81	F5d7	N-29°E	楕円形	0.59	0.50	0.06	—	—	皿状	—	—
	112	82	F5d7	N-50°W	不定形	0.65	0.37	0.02	2~12	—	平坦	—	—
	113	83	F6j1	N-45°E	隅丸長方形	0.82	0.58	0.26	1~5	外傾	平坦	—	—
	114	84	F5f0	N-82°E	[円形]	(0.84)	(0.72)	0.08	1~4	—	皿状	—	南半が削平により欠落
	115	85	G6d3	N-32°W	隅丸長方形	0.85	0.68	0.24	3~10	外傾	平坦	—	北壁上部崩落,壁と底面の北側が焼けている

図版 番号	S N 番号	番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			粘土厚 さ(cm)	壁面	底面	出土遺物	備 考
						長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)					
第41図	116	86	F5h s	N-36°E	円形	0.43	0.42	0.13	2~3	外傾	皿状	-	-
	117	87	G6b s	N-30°E	隅丸長方形	0.88	0.52	0.13	2~4	外傾	[平坦]	-	底面中央の粘土剥離
	118	88	G6d s	N-56°W	隅丸長方形	0.94	0.57	0.32	2~5	外傾	平坦	-	-
	119	89	F5j o	N-42°E	円形	0.45	0.43	0.20	2~9	外傾	皿状	-	-
	120	90	G5a o	N-24°E	円形	0.50	0.50	0.90	2~5	外傾	平坦	-	北壁崩落
	133	91	F6f 1	N-60°W	円形	0.45	0.44	0.09	2~4	外傾	皿状	-	-
	134	92	F6g 2	N-11°E	楕円形	0.60	0.50	0.12	2~5	外傾	皿状	-	-
	145	93	F6j o	N-25°E	不定形	0.45	0.36	0.13	1~11	外傾	皿状	-	SK100の直下に確認、南側部分攪乱により欠落
	146	94	I6j 1	N-58°E	隅丸長方形	0.87	0.56	0.16	2~10	外傾	皿状	-	-
	第42図	150	95	E4h 7	N-22°E	楕円形	0.70	0.38	0.14	2~4	外傾	平坦	-
151		96	E4i 9	N-52°W	円形	0.60	0.46	0.06	1~3	-	皿状	-	上部削平
152		97	E4i o	N-79°E	[楕円形]	0.56	0.33	0.11	4~7	-	-	-	底面と壁北東角が攪乱により欠落
153		98	F5c 7	N-23°E	円形	0.67	0.60	0.13	1~5	内傾	皿状	-	-
154		99	F5c e	N-40°W	隅丸長方形	1.03	0.83	0.24	3~8	外傾	平坦	-	-
160		100	G6 a 1	N-17°E	隅丸長方形	0.79	0.60	0.11	6~9	外傾	平坦	-	-
165		101	G5 d o	N-27°W	楕円形	0.72	0.55	0.10	5~13	外傾	平坦	-	底面に石1点、底面の粘土層中に貝殻・石各1点充填
167		102	G5 c o	N-42°W	円形	0.69	0.64	0.16	2~5	外傾	皿状	-	-
168		103	G5 d o	N-53°E	円形	0.39	0.29	0.04	2~5	外傾	平坦	-	上部削平
170		104	G5 g s	N-33°W	[楕円形]	0.87	0.57	0.02	1~3	-	平坦	-	-
171		105	G5 j 2	N-39°E	[楕円形]	0.92	0.52	0.08	2~6	-	平坦	-	底面に石1点、上部削平により底面のみ確認
174		106	G6 d s	N-57°E	隅丸方形	0.88	0.80	0.39	-	-	平坦	-	SK155(旧)と重複、東壁の一部のみ粘土が残存
第43図	176	107	G5d o	N-13°E	[円形]	0.80	0.69	0.23	2~9	外傾	皿状	-	覆土に粘土塊多量
	178	108	G6e 3	N-77°E	円形	0.63	0.59	0.08	2~4	外傾	皿状	-	-
	181	109	G6c 2	N-64°W	円形	0.65	0.52	0.10	2~21	垂直	皿状	-	底面に石1点埋め込み、底面の粘土層中に石1点充填
	182	110	G6d 3	N-40°E	円形	0.88	0.86	0.10	2~6	外傾	平坦	-	-
	212	111	G6i 2	N-90°W	隅丸方形	1.09	0.97	0.20	1~4	外傾	平坦	-	SN213(旧)と重複
	213	112	G6i 2	N-90°W	隅丸長方形	1.42	0.95	0.19	2~7	外傾	平坦	-	SN212(新)と重複

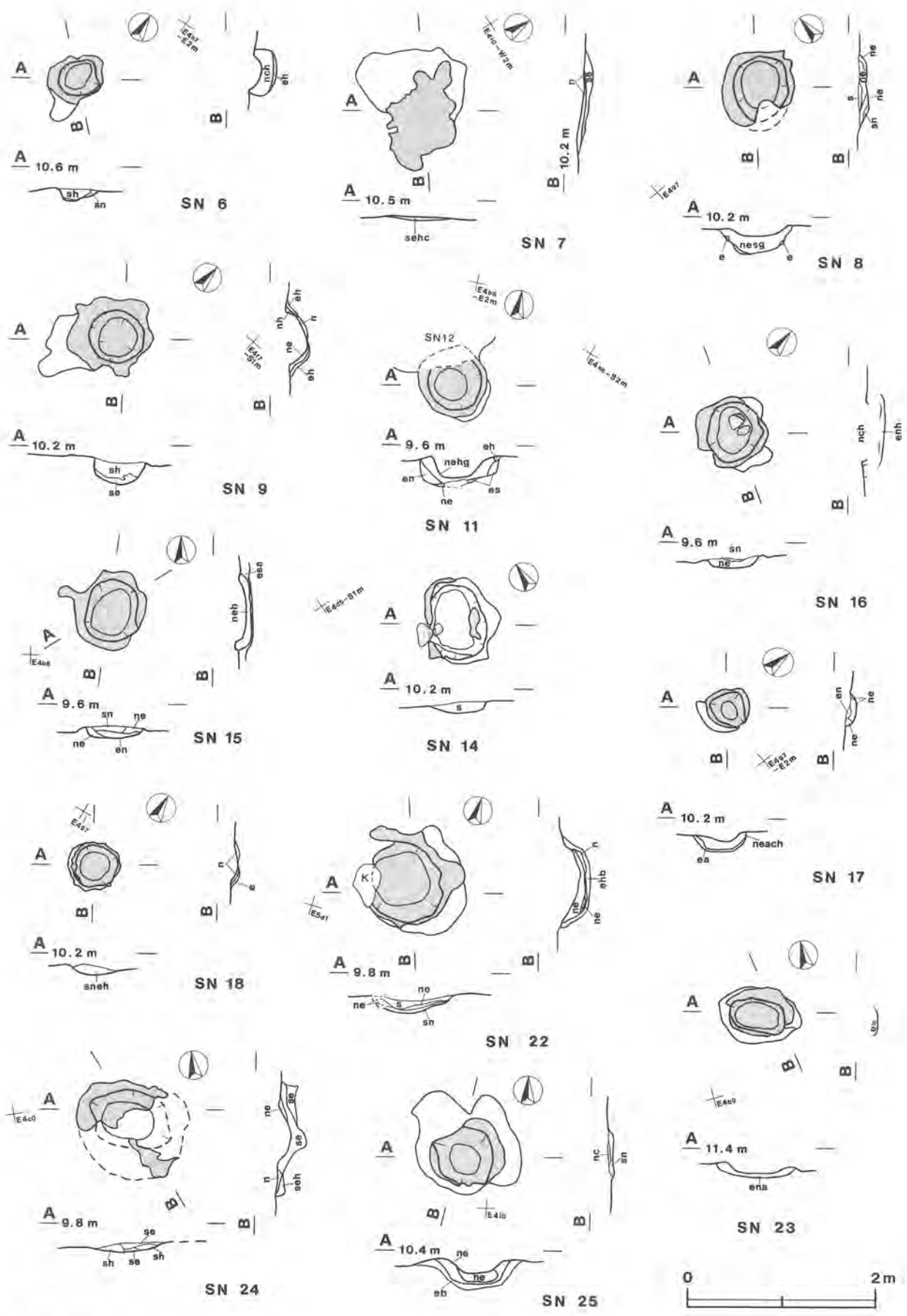


0 10cm

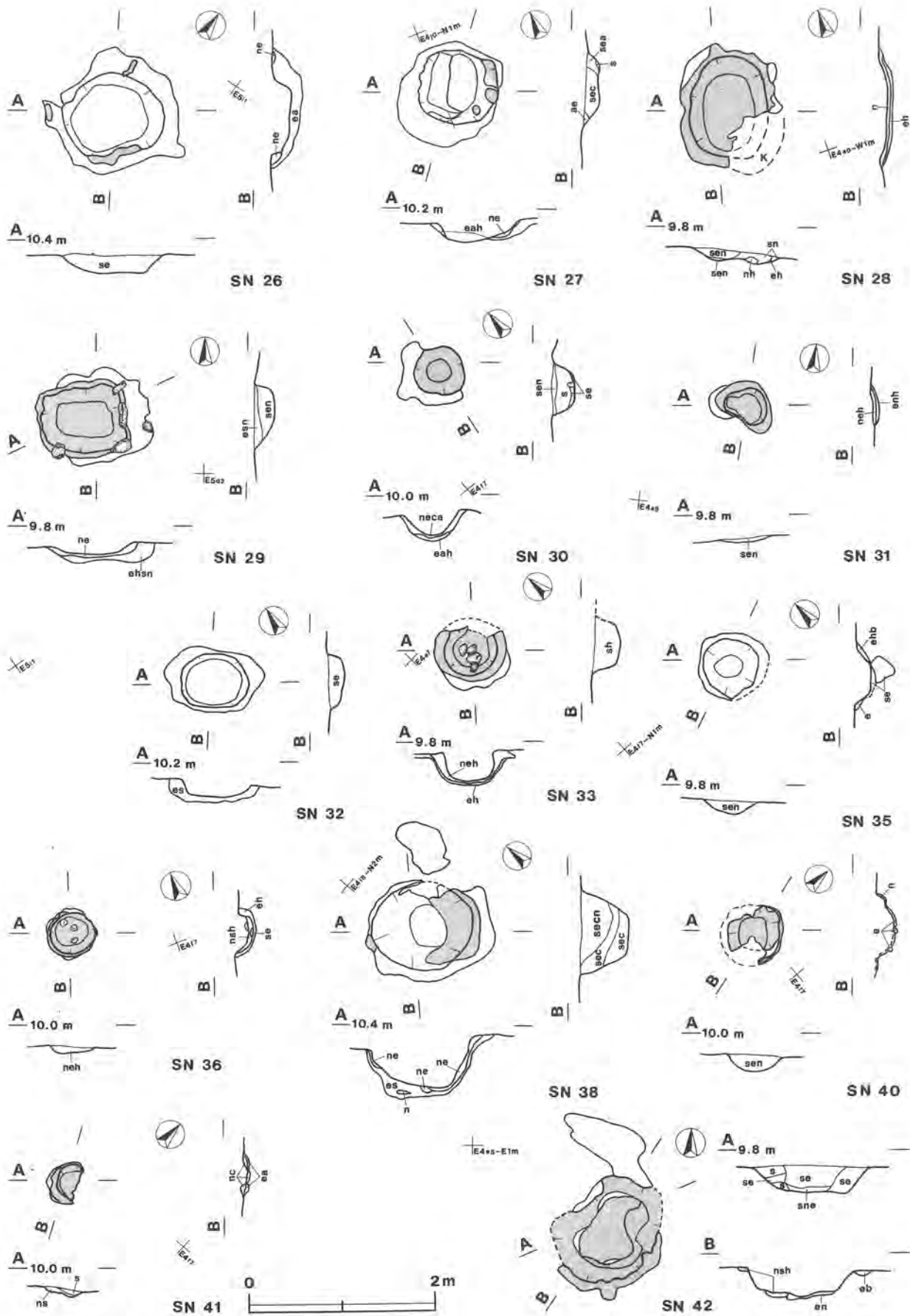
第34図 粘土貼り土坑出土遺物実測図

粘土貼土坑出土遺物観察表

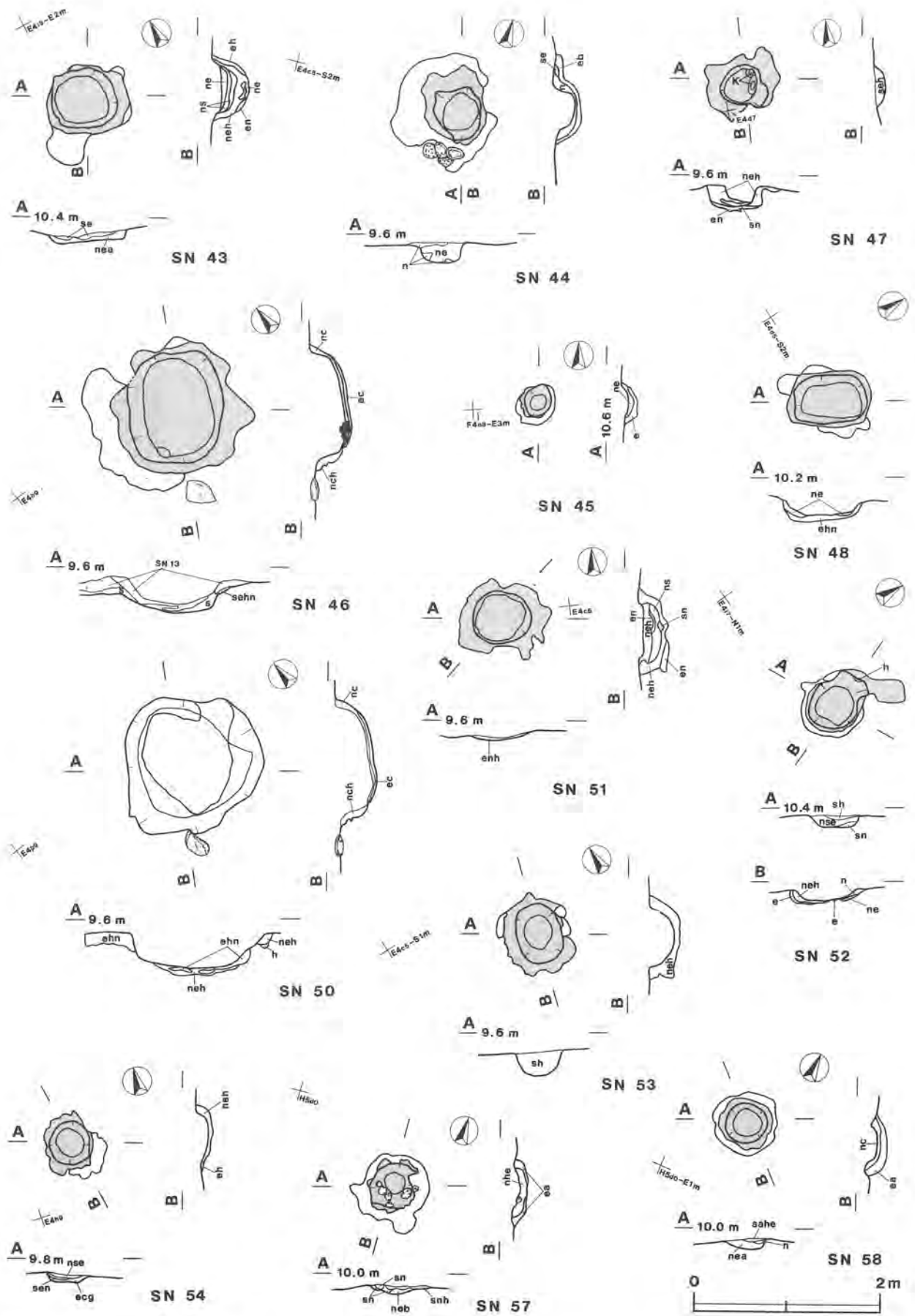
図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第34図 1	内耳土鍋 土師質土器	A(33.5) B(11.0)	体部から口縁部片。体部は直線的に開き口縁部は器壁薄く外に膨らむ。耳は内側に大きく出る。	体部、口縁部内外面横ナデ。器壁内部還元焼成。上端部外側へつまみ出し。体部外面指頭圧痕。	砂粒・雲母・石英 明褐色 普通	P3 残存率20% S N 33 覆土 外面、耳部煤付着



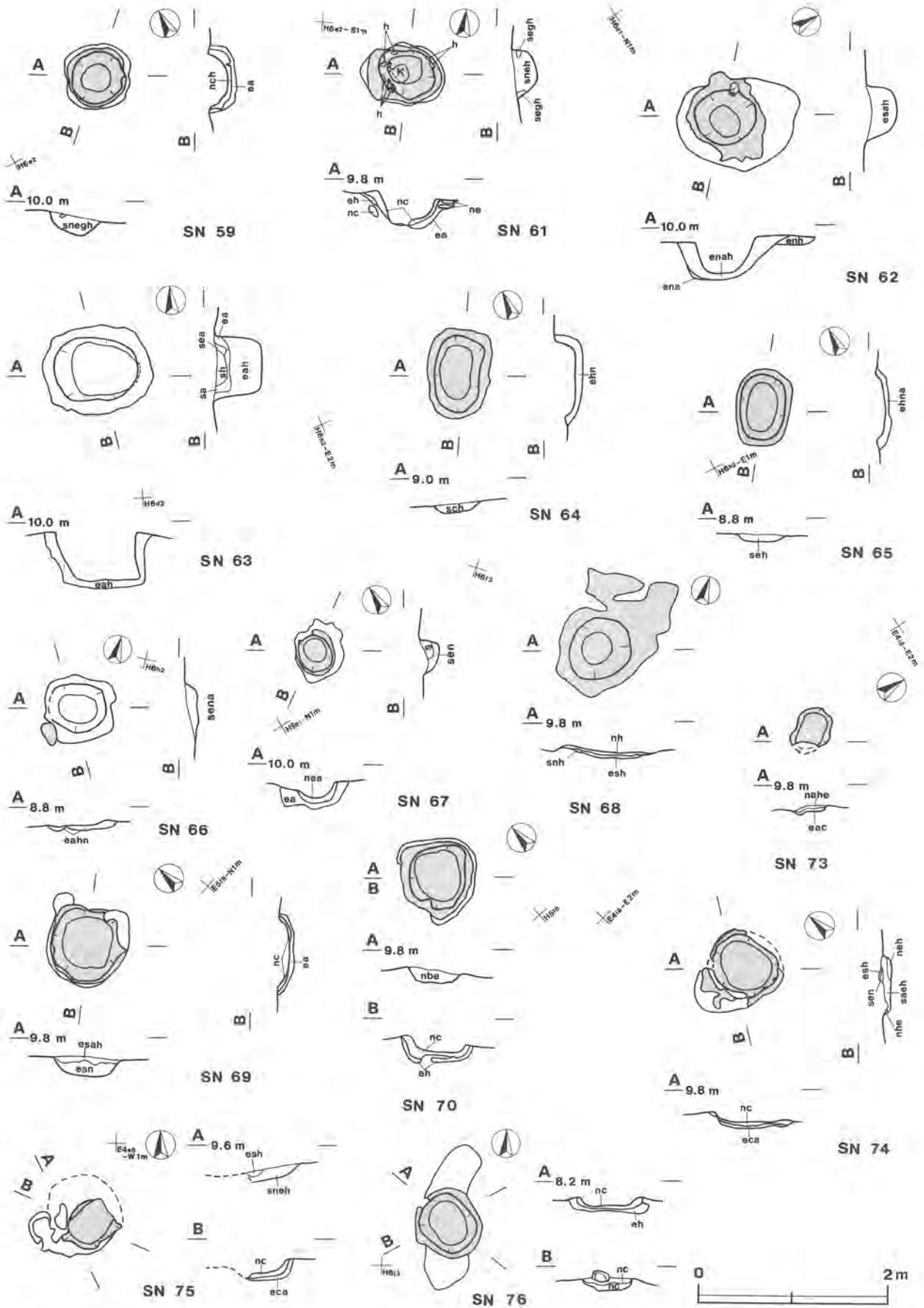
第35图 粘土貼り土坑实测图(1)



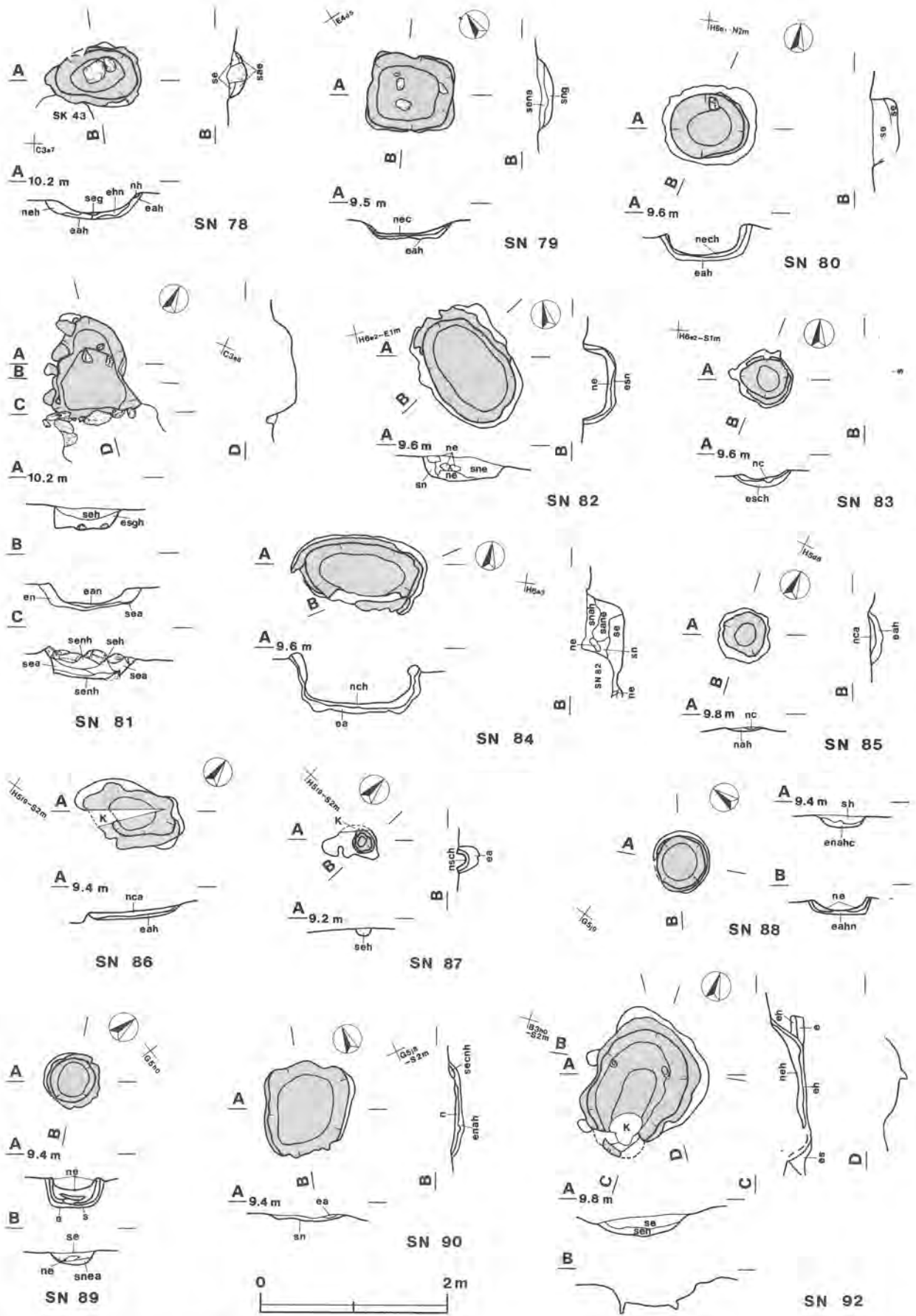
第36図 粘土貼り土坑実測図(2)



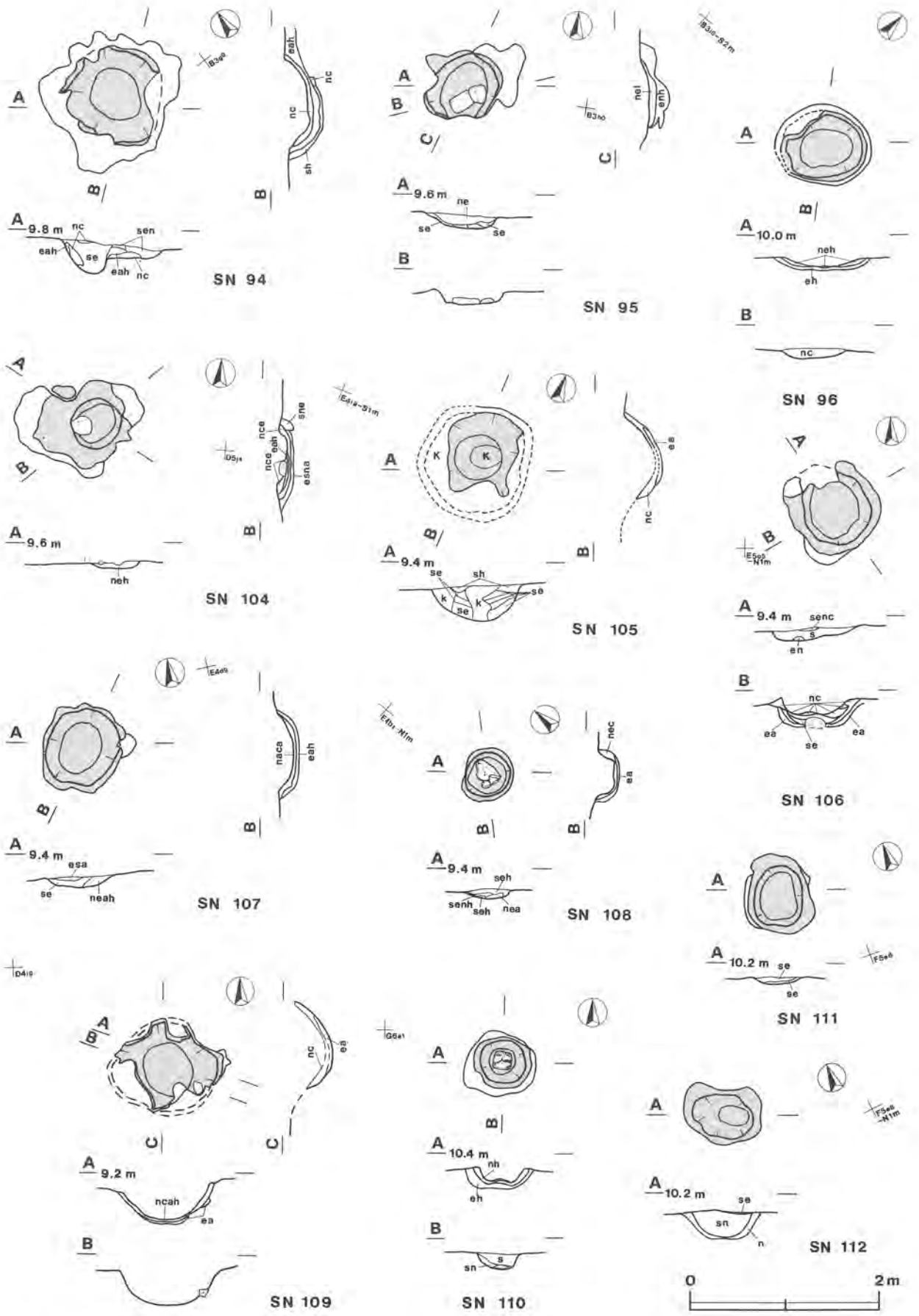
第37図 粘土貼り土坑実測図(3)



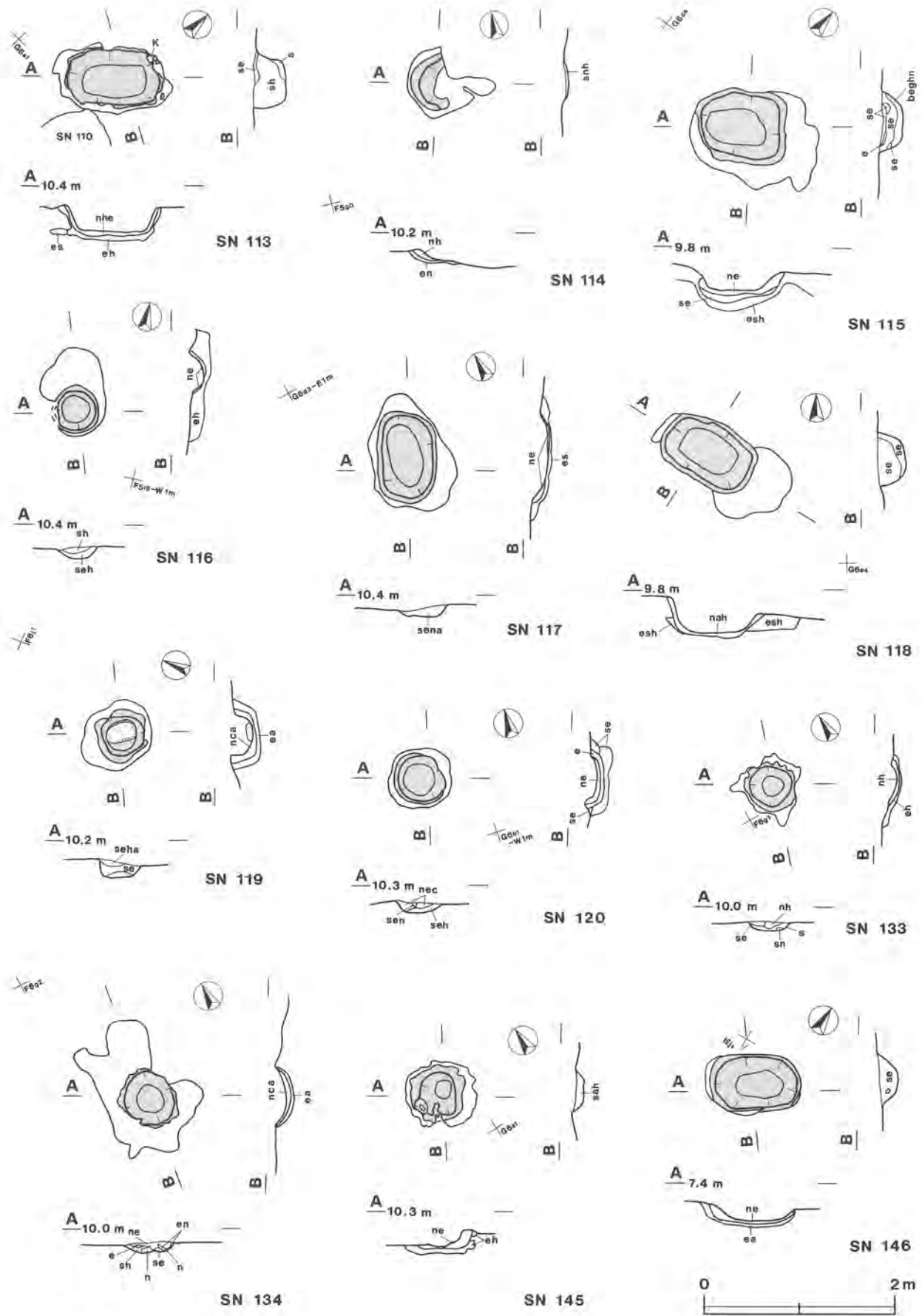
第38図 粘土貼切り土坑実測図(4)



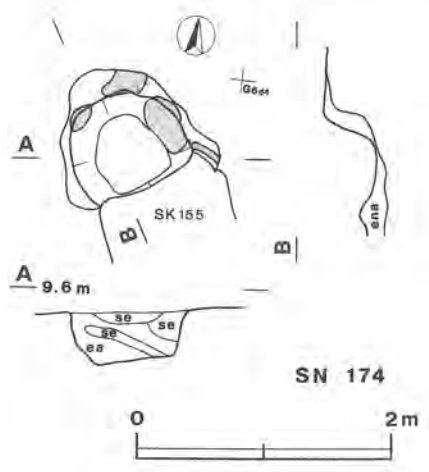
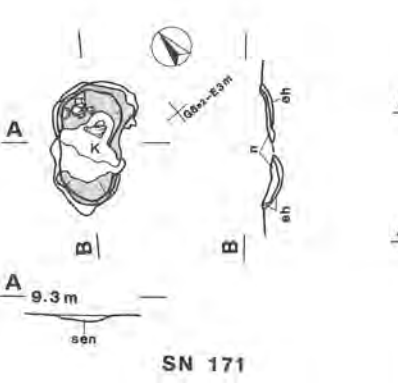
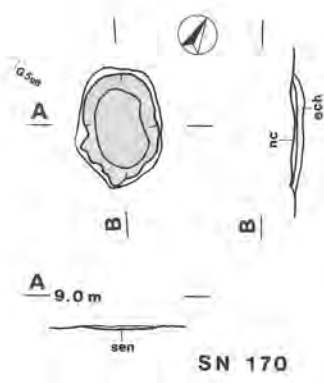
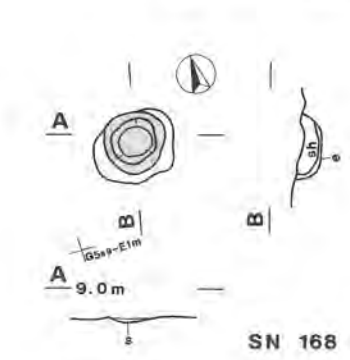
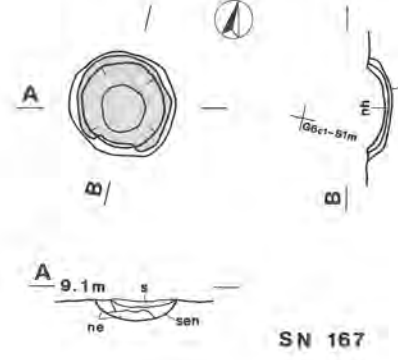
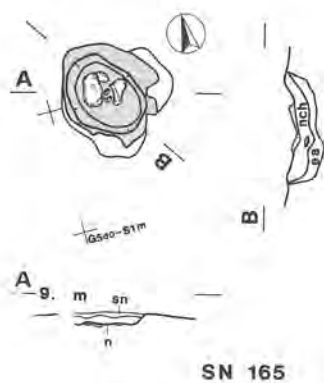
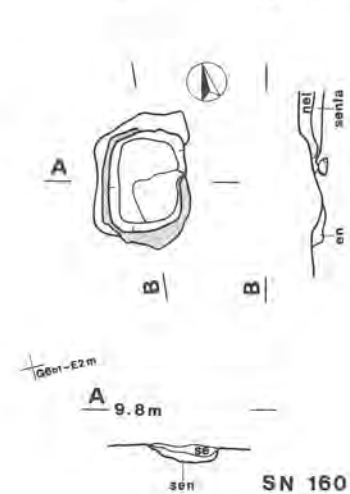
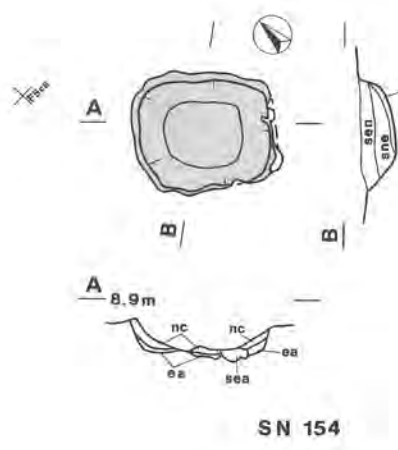
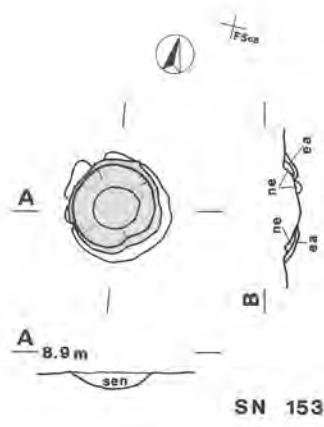
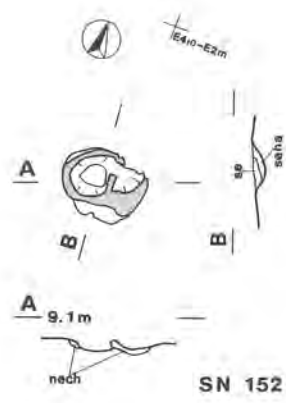
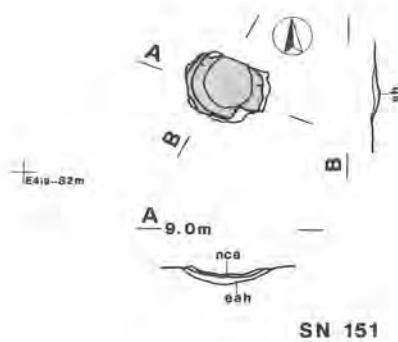
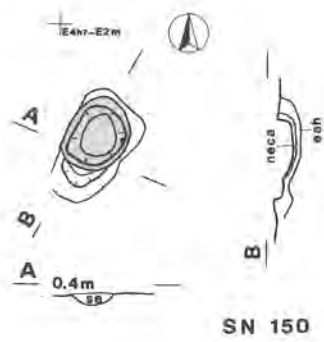
第39図 粘土貼り土坑実測図(5)



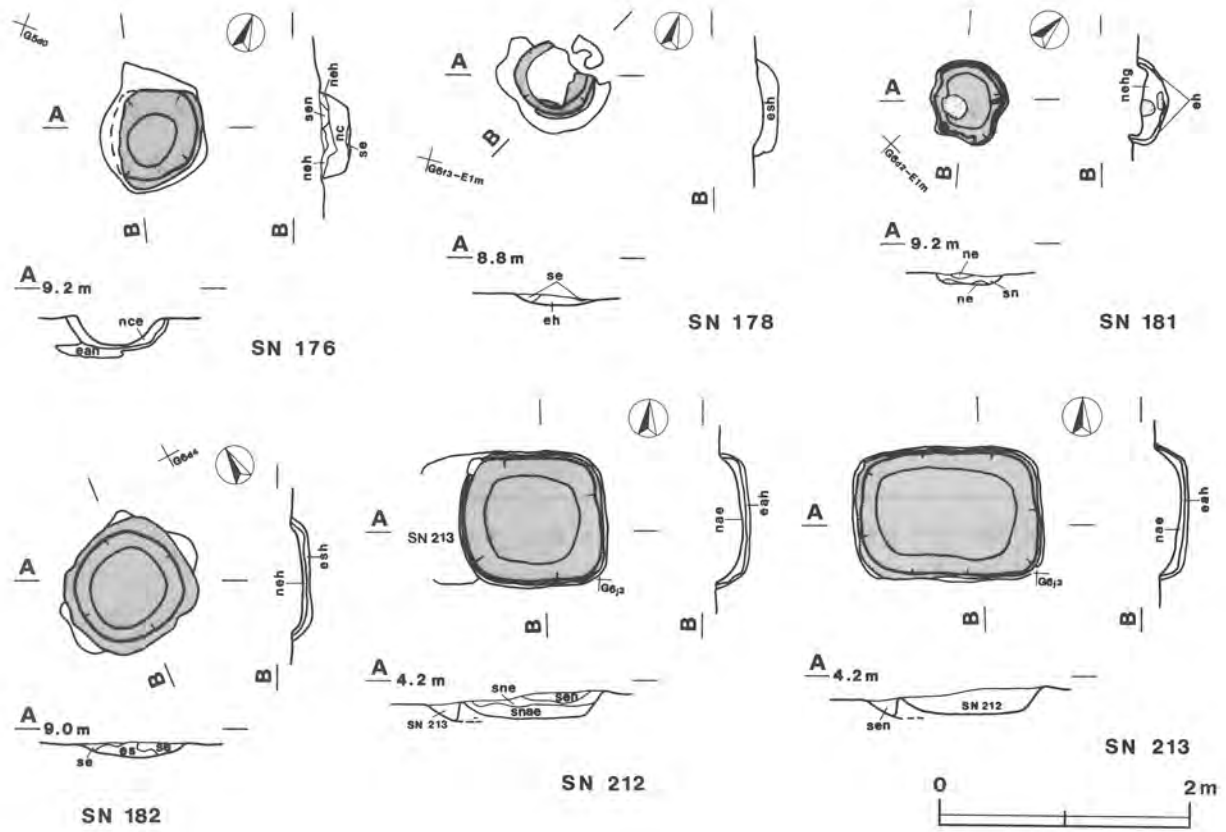
第40図 粘土貼り土坑実測図(6)



第41図 粘土貼り土坑実測図(7)



第42図 粘土貼り土坑実測図(8)



第43図 粘土貼り土坑実測図(9)

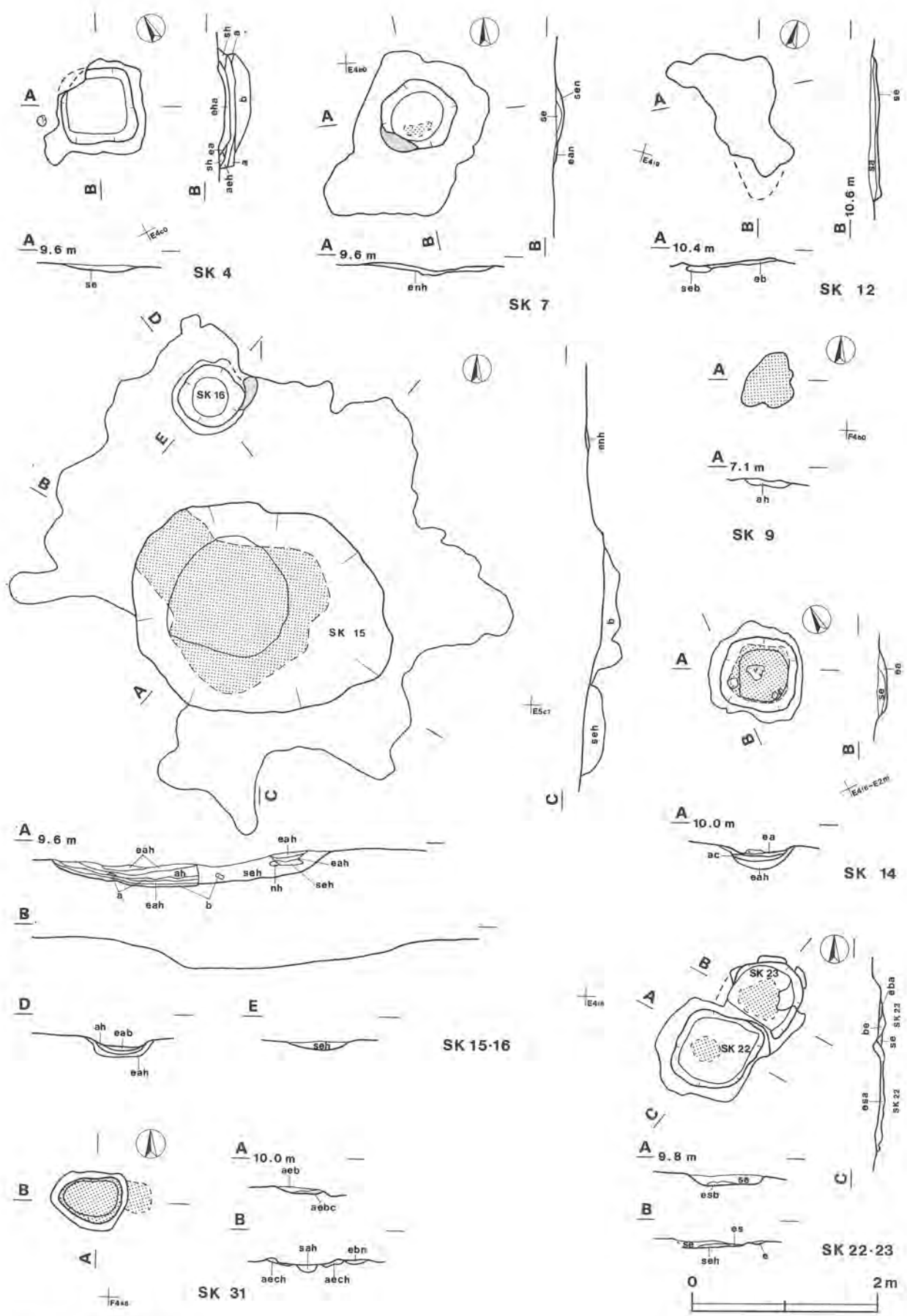
(3) 炉跡 (第44~49図)

この項で報告する「炉跡」は、長軸、短軸ともに1 m以下のものが多く、平面形は隅丸方形か隅丸長方形のものが多く、黒色土を使って構築されており、底面は平坦か皿状で浅く、覆土や底面に焼砂や灰の広がりが認められた。これら、火の使用の跡がある小規模な炉は、製塩の煎熬過程を行った竈とは考えられず、その他の煮炊きなどに使用したものと考えられる。またこれらの遺構は、一次面にも二次面にもまんべんなく分布しており、時期を限定することはできない。これらのうち、遺物が出土している遺構がいくつかあるが、いずれも流れ込みの可能性があるため、遺構は以下に一覧表として記載し、その後に遺構から出土した遺物を参考資料として掲載する。

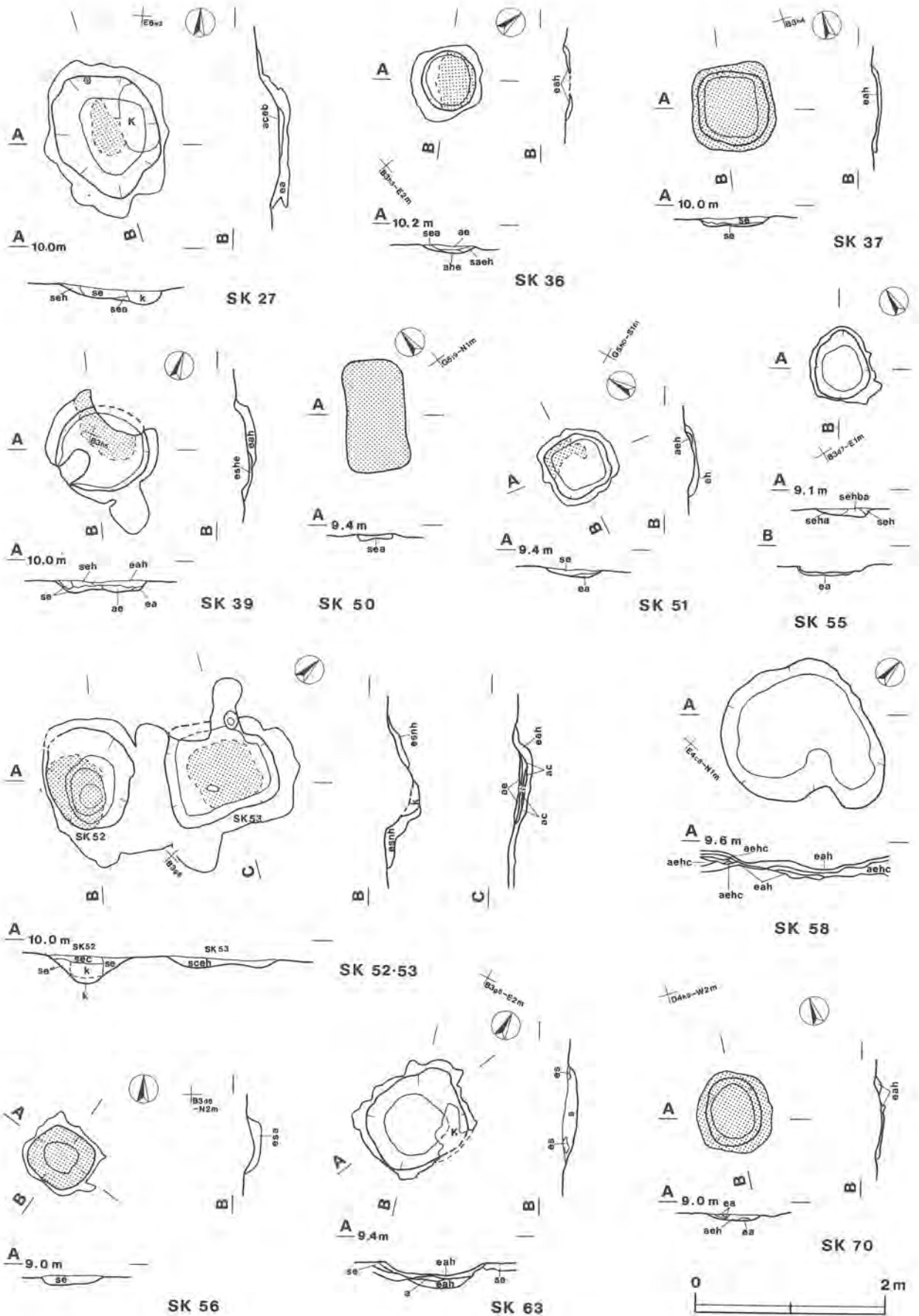
表10 炉跡一覧表

図版 番号	SK 番号	番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			壁面	底面	出土遺物	備 考
						長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				
第44図	4	1	E4b ₀	N-59°W	隅丸方形	0.78	0.78	0.90	外傾	平坦	-	北東コーナー部攪乱
	7	2	E4b ₀	N-43°E	楕円形	0.85	0.77	0.07	-	皿状	-	-
	9	3	F4a ₉	N-15°E	不定形	0.64	0.56	-	-	平坦	-	-
	12	4	E4h ₉	N-45°W	不定形	1.64	0.80	-	-	平坦	-	-
	14	5	E4e ₆	N-58°W	隅丸方形	0.81	0.78	0.07	外傾	平坦	-	面に石2点、北壁に1点
	15	6	E4b ₀	N-65°W	隅丸長方形	2.92	2.41	0.21	-	皿状	-	SK4・SN24の直下に確認、東半は攪乱により欠落
	16	7	E4b ₀	N-80°E	円形	0.71	0.69	0.09	外傾	平坦	-	-
	22	8	E4i ₈	N-73°W	隅丸方形	0.85	0.85	0.09	外傾	平坦	-	上部削平、SK23(旧)と重複
	23	9	E4h ₈	N-61°W	隅丸方形	0.76	0.71	0.09	外傾	平坦	-	SK22(新)と重複
	31	11	E4j ₇	N-83°E	不定形	0.68	0.49	0.08	-	平坦	-	-
	第45図	27	10	H6e ₁	N-16°E	隅丸方形	1.34	1.07	0.18	外傾	平坦	-
36		12	B3g ₃	N-48°W	隅丸方形	0.63	0.58	0.06	-	皿状	-	-
37		13	B3h ₃	N-17°E	隅丸方形	0.80	0.74	0.07	外傾	皿状	-	-
39		14	B3h ₅	N-39°E	円形	0.96	0.93	0.10	外傾	平坦	内耳土鍋片2点	東壁に石4点・西壁に石5点埋め込み、北東部攪乱で欠落
50		15	G5i ₈	N-33°E	隅丸長方形	1.21	0.62	0.01	-	平坦	-	-
51		16	G5h ₉	N-40°E	隅丸方形	0.57	0.51	0.09	外傾	皿状	-	-
52		17	B3g ₇	N-45°W	隅丸方形	1.06	0.82	0.27	外傾	(平坦)	-	底面に攪乱穴あり
53		18	B3f ₇	N-33°E	隅丸方形	1.17	0.94	0.08	外傾	平坦	-	北壁攪乱により欠落
55		19	B3c ₇	N-32°E	隅丸長方形	0.74	0.54	0.09	外傾	平坦	-	-
56		20	B3c ₇	N-40°E	隅丸方形	0.66	0.62	0.10	外傾	皿状	-	-
58		21	E4b ₈	N-28°E	不定形	1.34	1.30	0.18	外傾	平坦	-	-
63		23	B3g ₈	N-4°E	隅丸方形	1.19	0.90	0.09	外傾	平坦	-	上部削平
70		24	D4h ₈	N-22°E	円形	0.75	0.59	0.07	外傾	皿状	-	-
第46図	59	22	B3c ₇	N-30°E	楕円形	1.12	1.07	0.11	外傾	平坦	土師質土器片2点	-
	73	25	E5e ₄	N-16°W	円形	0.68	0.64	0.14	外傾	皿状	-	底面に石1点、すぐ西にSK80あり
	74	26	E5d ₃	N-64°E	不定形	1.70	1.03	0.09	外傾	皿状	-	西壁に石2点、底面東半は攪乱により欠落、SK81と接する
	75	27	D4j ₉	N-58°W	楕円形	[1.75]	1.22	0.16	外傾	凹凸	-	西側一部欠落
	83	28	E4a ₈	N-46°W	楕円形	0.68	0.50	0.11	外傾	皿状	-	すぐ西にSK82
	89	32	E4b ₈	N-45°E	楕円形	0.66	0.55	0.20	外傾	皿状	-	-
	90	33	D5j ₃	N-47°E	隅丸方形	0.63	0.63	0.10	外傾	皿状	-	-
	第47図	86	29	E5b ₅	N-27°E	楕円形	0.91	(0.78)	0.08	外傾	凹凸	-
87		30	E5c ₅	N-13°E	楕円形	0.79	(0.77)	0.11	外傾	平坦	-	SK86と接する、東半は崩落
88		31	E5c ₅	N-75°W	楕円形	1.12	0.92	0.16	外傾	皿状	-	北半は崩落

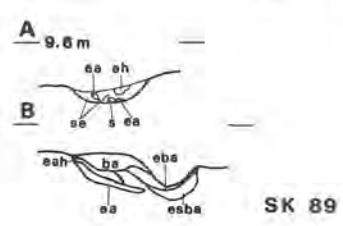
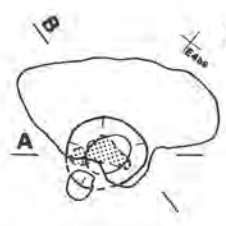
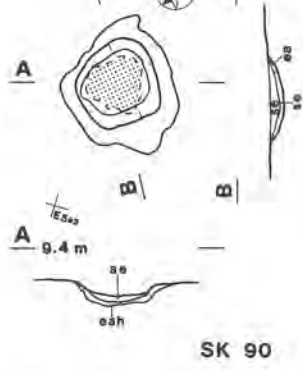
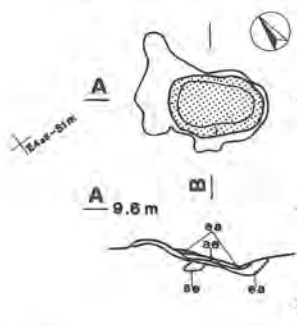
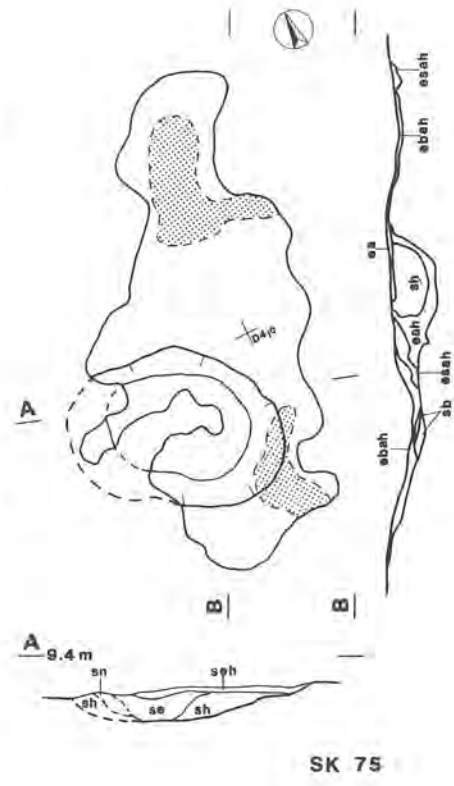
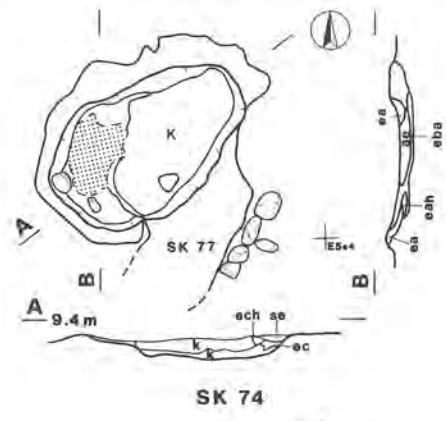
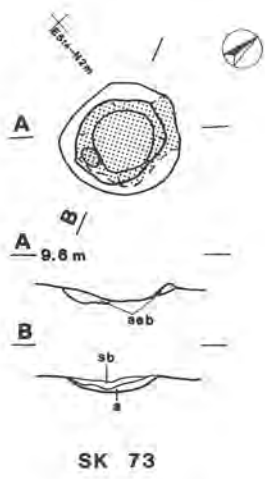
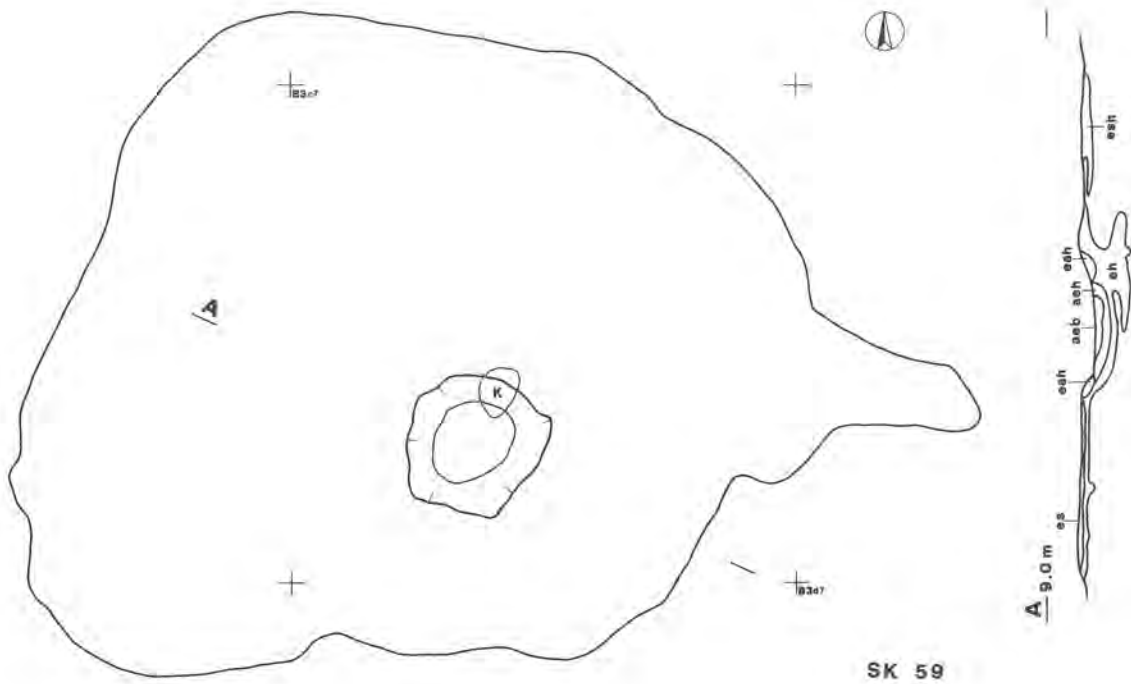
図版 番号	SK 番号	位置	長軸方向	平面形	規 模			壁面	底面	出土遺物	備 考	
					長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)					
第47図	91	34	D5j ₃	N-24°E	円 形	0.41	0.33	0.10	外傾	皿状	—	東壁崩落
	92	35	D5j ₃	N-15°E	楕 円 形	0.37	0.24	0.07	—	皿状	—	—
	94	36	E4a ₉	N-48°W	[円 形]	0.42	0.26	0.12	外傾	皿状	内耳土鍋片1点	SK95(新)と重複、西半は攪乱により欠落
	97	37	F6j ₁	N-45°E	隅丸長方形	0.88	0.69	0.11	外傾	平坦	—	—
	98	38	G5a ₀	N-18°E	円 形	0.71	0.71	0.07	外傾	平坦	—	—
	100	39	F6j ₁	N-57°W	方 形	0.90	0.76	0.06	—	—	—	緑色の偏平な砂岩を使って構築、直下にSN145
	109	40	F6j ₁	N-63°E	楕 円 形	0.65	0.48	0.15	外傾	平坦	—	—
	112	41	E4h ₈	N-42°E	隅 丸 方 形	0.63	0.61	0.09	外傾	平坦	—	上部削平
	121	42	F5h ₈	N-4°E	隅丸長方形	1.06	0.68	0.17	外傾	平坦	—	SK126(旧)と重複
	123	43	F5g ₈	N-2°W	楕 円 形	0.85	0.72	0.11	外傾	平坦	—	SK125(新)と重複
	125	44	F5g ₈	N-29°E	楕 円 形	1.01	0.83	0.14	外傾	平坦	—	SK123(旧)と重複
	126	45	F5h ₈	N-8°W	隅丸長方形	0.61	0.41	0.05	外傾	平坦	内耳土鍋片1点	SK121(新)と重複
	127	46	F5g ₇	N-21°W	隅丸長方形	0.67	0.59	0.09	外傾	平坦	内耳土鍋片2点	北側上部削平
第48図	128	47	F5i ₀	N-10°W	隅 丸 方 形	0.59	0.58	0.12	外傾	平坦	—	—
	129	48	F5j ₉	N-11°E	円 形	0.63	0.63	0.11	外傾	平坦	—	—
	131	49	I5a ₉	N-52°W	楕 円 形	0.57	0.54	0.16	外傾	皿状	—	—
	133	50	I6a ₁	N-67°W	[隅丸長方形]	(0.61)	0.49	0.07	外傾	平坦	—	上部削平により東半が欠落
	134	51	I5a ₀	N-51°W	[隅丸長方形]	0.97	0.90	0.16	外傾	皿状	—	—
	135	52	F5c ₈	N-65°W	円 形	0.59	0.56	0.10	外傾	平坦	—	縁辺部の黒色土は隅丸長方形
	136	53	F5h ₈	N-6°E	正 方 形	0.80	0.78	0.13	外傾	凹凸	—	—
	139	54	G6c ₁	N-30°E	隅丸長方形	1.03	0.89	0.13	外傾	平坦	—	—
	141	55	G6c ₁	N-78°E	楕 円 形	[0.99]	0.60	0.09	外傾	平坦	—	SK143(旧)と重複
	142	56	G6c ₁	N-72°W	楕 円 形	0.22	0.11	0.04	外傾	平坦	—	SK143(旧)と重複
	143	57	G6c ₁	N-30°W	楕 円 形	0.62	0.48	0.11	—	平坦	—	SK141(新)・SK142(新)と重複
	144	58	G5c ₀	N-35°E	円 形	0.49	0.46	0.07	外傾	皿状	—	—
	150	59	H6c ₃	N-13°W	隅 丸 方 形	1.09	0.83	0.10	外傾	皿状	—	3層にわたり底面を確認、SK151(最上・中間の間)と重複
156	60	F6j ₁	N-45°E	円 形	0.71	0.67	0.07	外傾	平坦	—	—	
162	62	H6a ₃	N-62°W	隅丸長方形	0.56	0.48	0.09	垂直	平坦	—	—	
第49図	161	61	H6a ₄	N-37°E	楕 円 形	1.10	0.69	0.06	外傾	平坦	—	—
	164	63	G5j ₅	N-72°W	楕 円 形	0.36	0.31	0.02	—	皿状	—	上部削平
	165	64	H6j ₅	N-45°E	[円 形]	0.59	0.52	0.16	外傾	皿状	—	—
	167	65	G6g ₅	N-68°E	円 形	3.03	2.76	0.35	外傾	皿状	—	—
	168	66	G6g ₃	N-60°W	[隅 丸 方 形]	0.83	0.75	0.11	外傾	凹凸	—	—
	171	67	G6j ₄	N-66°W	隅丸長方形	0.73	0.64	0.25	外傾	皿状	—	—
	173	68	G6j ₃	N-18°E	楕 円 形	0.63	0.49	0.09	外傾	皿状	—	—
	174	69	G6i ₂	N-45°E	隅 丸 方 形	0.69	0.57	0.02	—	平坦	—	上部削平により壁欠落



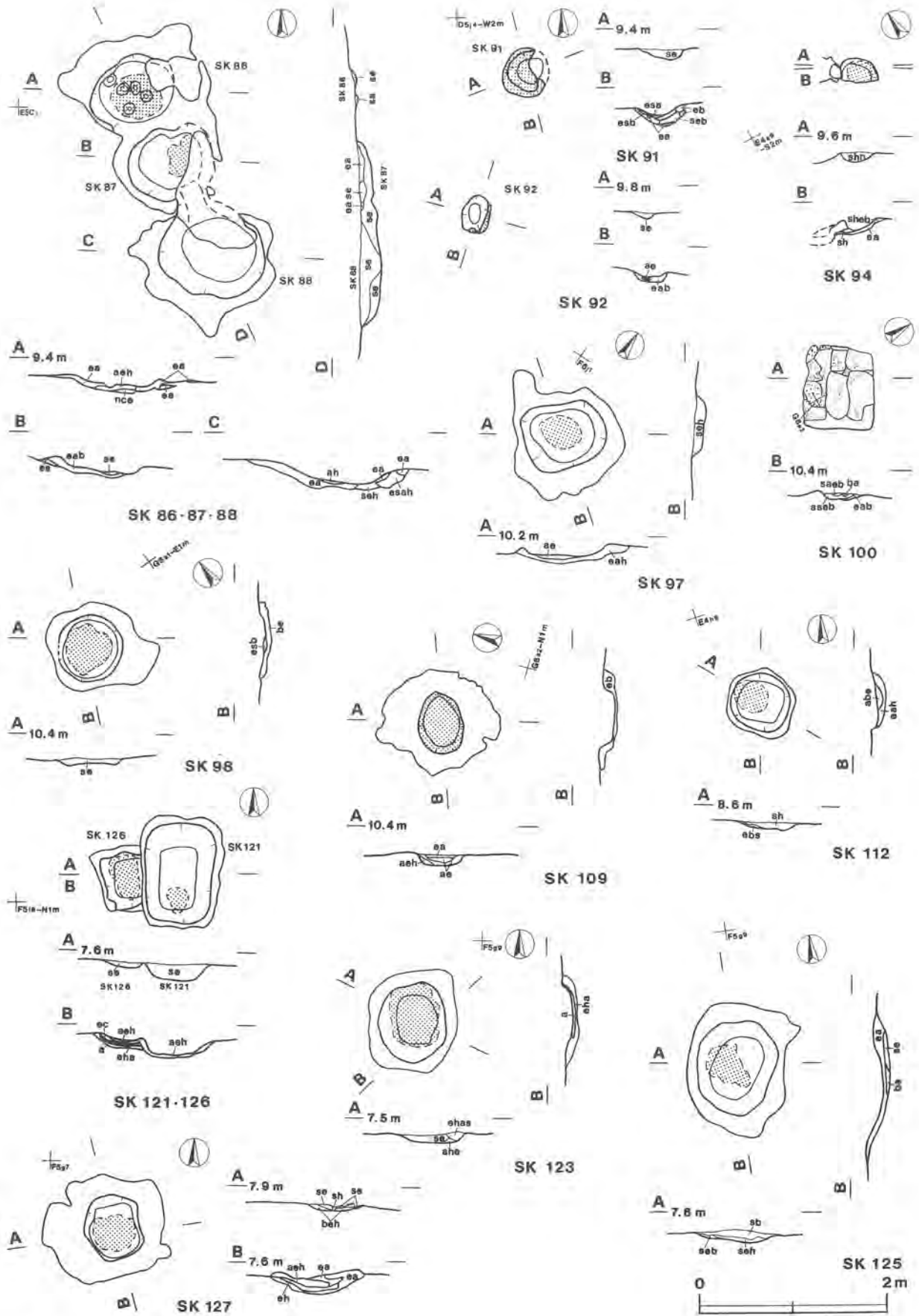
第44图 炉跡実測図(1)



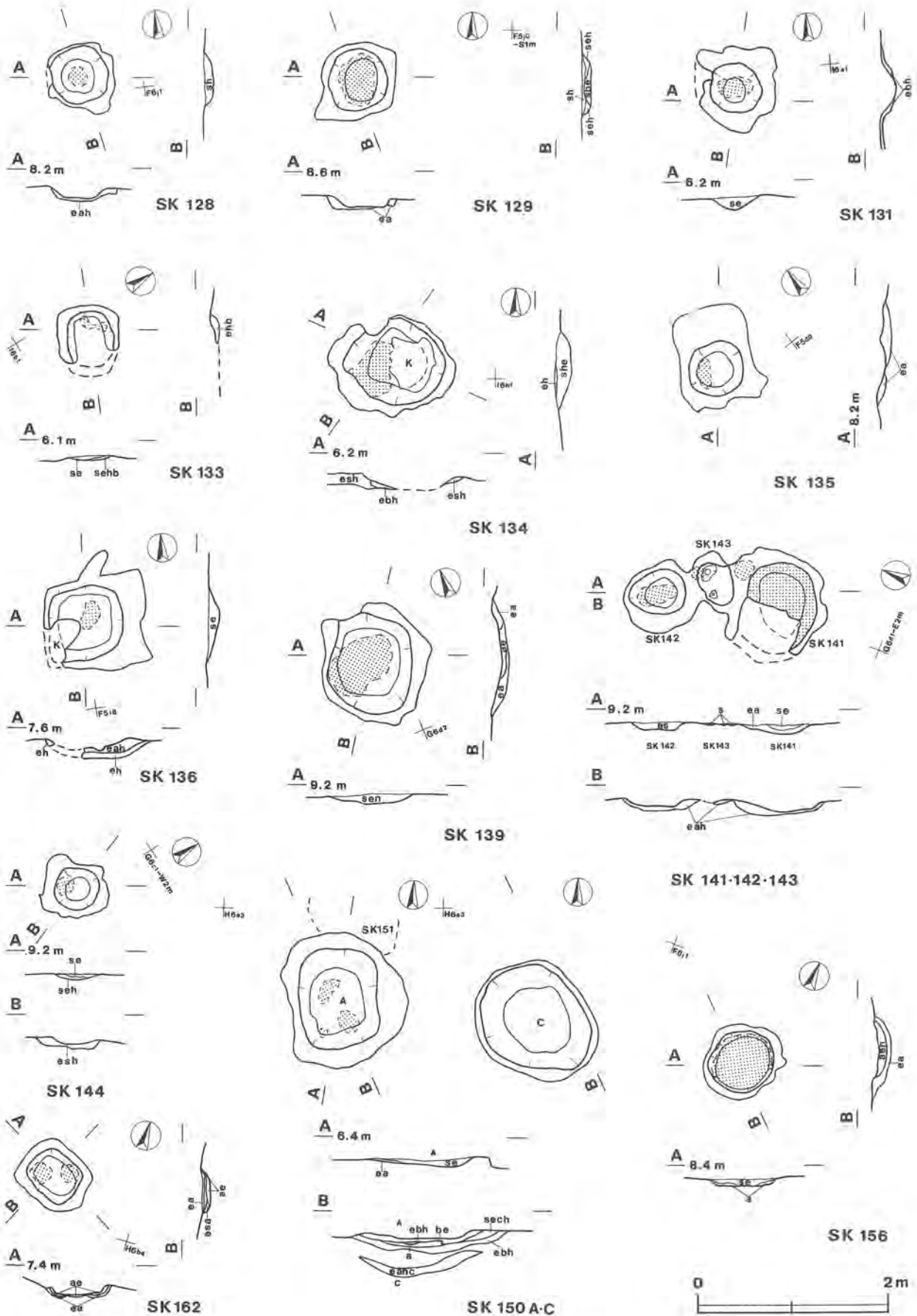
第45图 炉跡実測図(2)



第46图 炉跡実測図(3)



第47图 炉跡実測图(4)



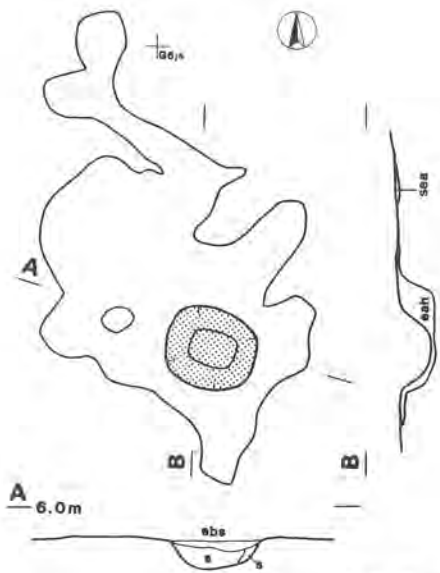
第48图 炉跡実測図(5)



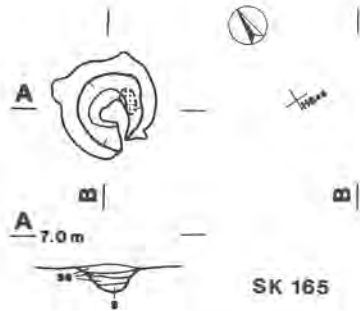
SK 161



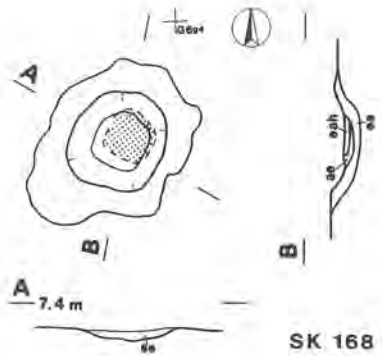
SK 164



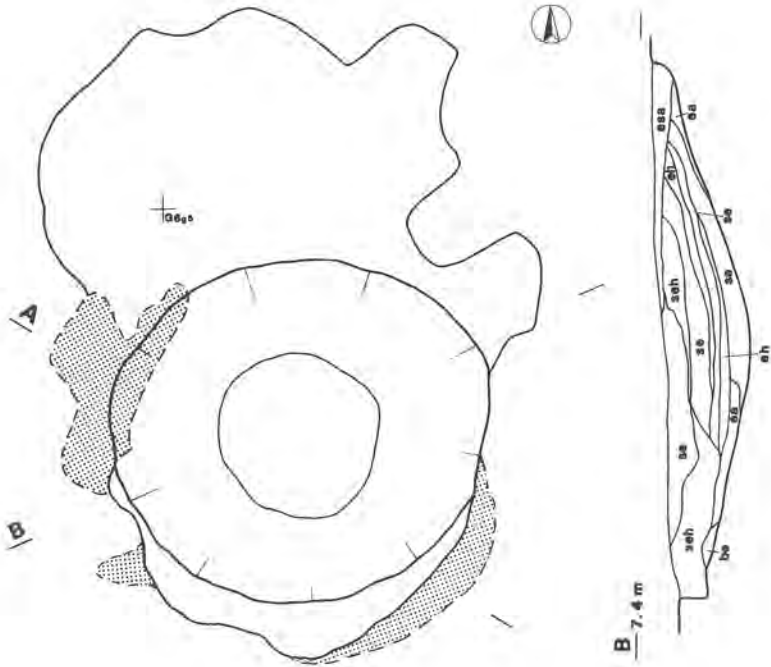
SK 171



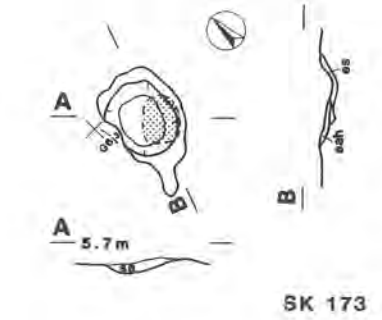
SK 165



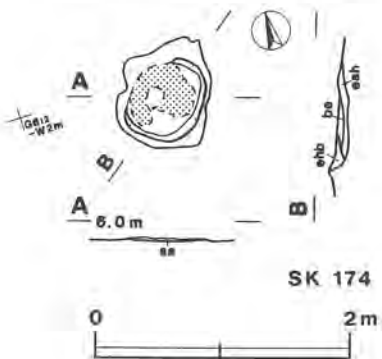
SK 168



SK 167



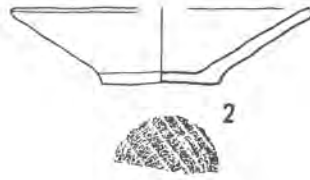
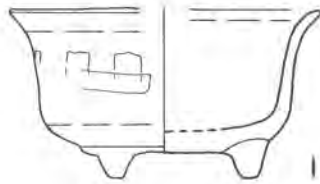
SK 173



SK 174



第49图 炉跡実測図(6)



第50図 炉跡出土遺物実測図

炉跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第50図 1	香炉 土師質土器	A[12.4]	底部から口縁部片。三足で底部はやや	水挽き成形。体部外面縦と横のヘラナ デ。部回転糸切り。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P11 残存率40% S K59
		B 6.9	突出。腰部が張り胴部はやや外傾して			
		C 6.6	直線的に立ち上がる。口縁部外反。			
2	皿 土師質土器	A[11.9]	底部から口縁部片。底部は平底で突出	水挽き成形。底部回転糸切り後ヘラナ デ。	砂粒・雲母 灰黄褐色 普通	P77 残存率60% S K59 内面煤付着
		B 3.1	し、体部、口縁部は直線的に立ち上			
		C[4.6]	る。			

(4) 土坑 (第51~58図)

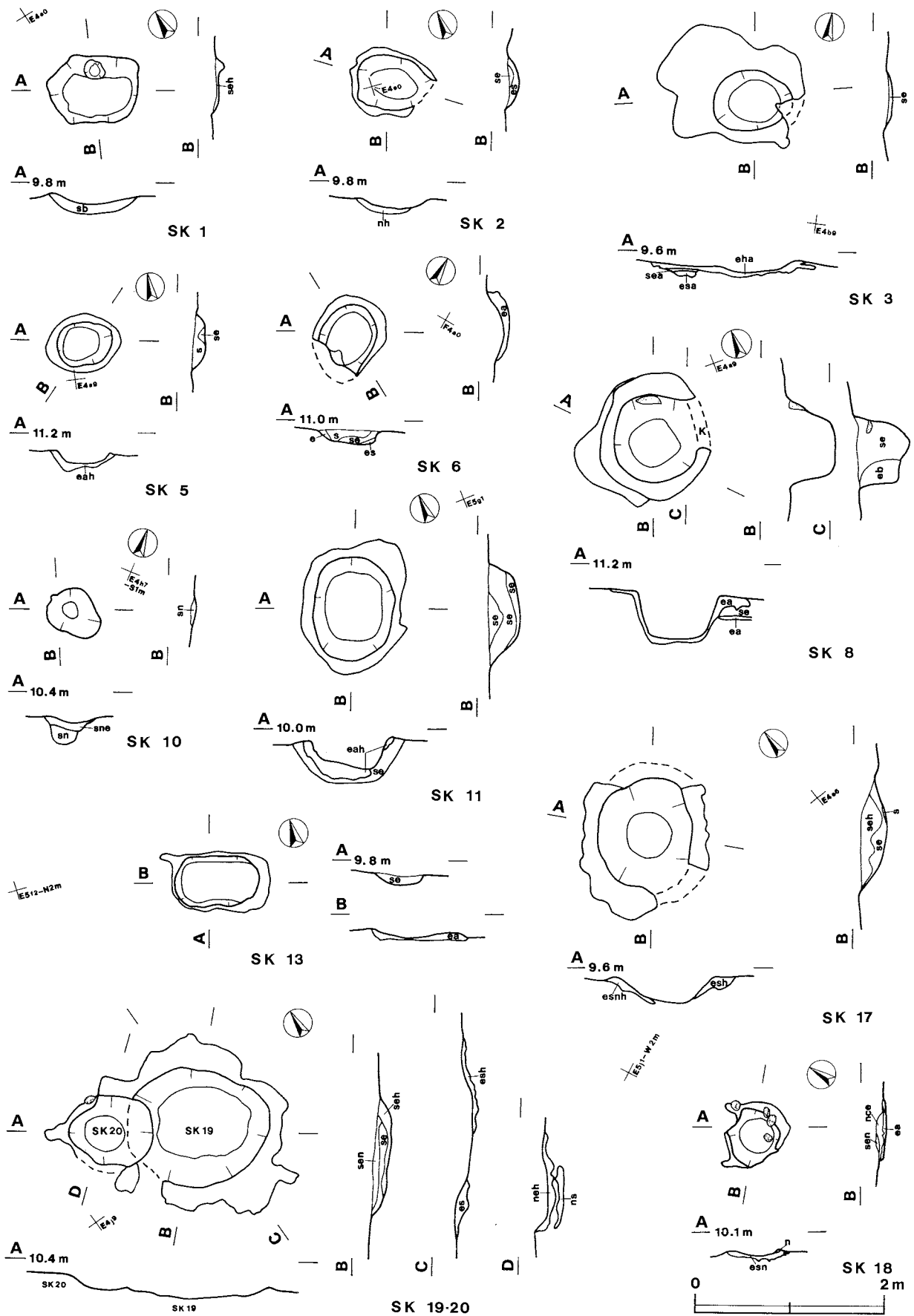
この項で報告する「土坑」は、前記の炉跡と同程度の規模のものが多く、平面形は隅丸長方形、楕円形、隅丸方形のものなどがある。黒色土を使って構築されており、底面は平坦か皿状で、壁は外傾しながら立ち上がるものが多い。浅いものもあれば深いものもあり、これらの使用目的は不明である。またこれらの遺構も、炉跡と同様一次面、二次面にまんべんなく分布しており、時期を限定することはできない。これらのうち、遺物が出土している遺構がいくつかあるが、いずれも流れ込みの可能性があるため、遺構は以下に一覧表として記載し、その後に遺構から出土した遺物を参考資料として掲載する。

表11 土坑一覧表

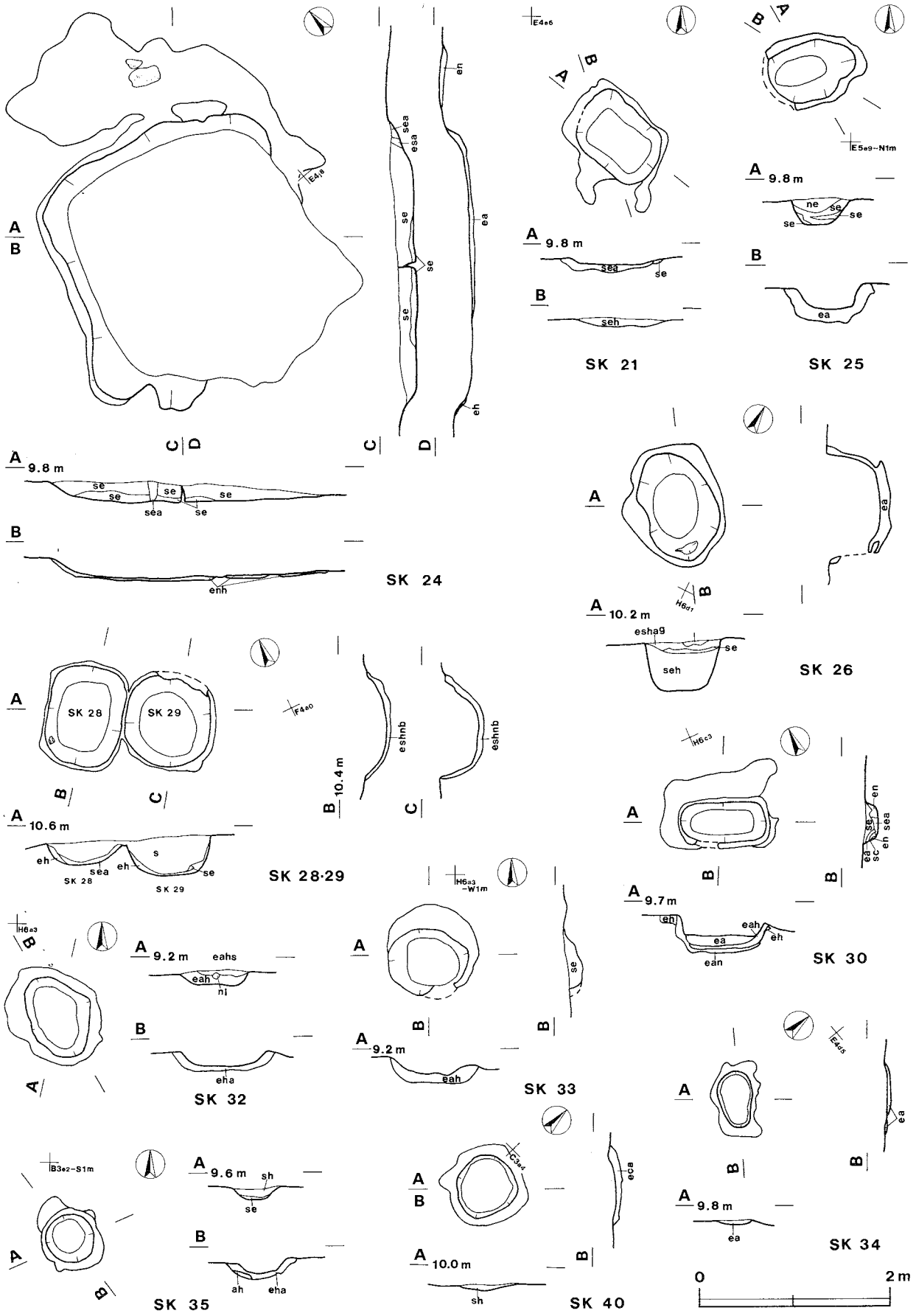
図版 番号	SK 番号	番号	位置	長軸方向	平面形	規模			壁面	底面	出土遺物	備考
						長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				
第51図	1	1	E4e0	N-49°W	楕円形	0.97	0.72	0.09	外傾	皿状	—	—
	2	2	E4e0	N-70°W	楕円形	0.80	0.59	0.12	外傾	皿状	内耳土鍋片1点	—
	3	3	E4a8	N-75°E	不定形	0.84	0.65	0.13	外傾	平坦	—	南側攪乱により一部欠落, 上部削平により欠落
	5	4	E4a9	N-74°E	楕円形	0.61	0.49	0.14	外傾	平坦	—	—
	6	5	F4a0	N-3°W	楕円形	[0.53]	0.57	0.12	—	皿状	—	南側攪乱により欠落
	8	6	E4a8	N-67°E	円形	0.94	0.90	0.49	外傾	皿状	—	東壁に石1点埋め込み, 南側攪乱により欠落
	10	7	E4h6	N-54°W	不定形	0.57	0.50	0.07	外傾	皿状	鉄製品1点	直下に粘土ブロック多数
	11	8	E4g0	N-25°E	楕円形	1.12	0.74	0.33	外傾	平坦	—	—
	13	9	E5e2	N-71°W	隅丸長方形	0.90	0.53	0.09	—	皿状	—	東壁削平により欠落
	17	10	E4c5	N-38°W	楕円形	1.22	1.00	0.27	外傾	平坦	—	直下にSN53, 壁一部攪乱により欠落
	18	11	E4j0	N-55°E	円形	0.61	0.53	0.09	外傾	平坦	—	覆土に多量の粘土ブロックと石4点
	19	12	E4i9	N-54°W	[楕円形]	[1.57]	1.27	0.15	外傾	皿状	—	覆土上層に粘土ブロック堆積, SK20(新)と重複
	第52図	21	14	E4e6	N-41°E	隅丸長方形	0.99	0.69	0.07	外傾	平坦	—
24		15	E4i1	N-23°E	隅丸方形	2.86	2.55	0.39	外傾	平坦	—	—

図版 番号	S K 番号	番号	位置	長軸方向	平面形 長軸(m)	規 模			壁面	底面	出土遺物	備 考
						短軸(m)	深さ(m)					
第52図	25	16	H5d ₈	N-72°E	楕円形	(0.92)	0.63	0.25	外傾	皿状	—	—
	26	17	H5c ₀	N-38°W	楕円形	1.17	0.76	0.53	外傾	平坦	—	—
	28	18	E4j ₉	N-37°W	隅丸長方形	1.07	0.81	0.23	外傾	皿状	内耳土鍋片1点	SK29と互いに接している
	29	19	E4j ₉	N-10°W	円形	1.01	0.98	0.39	外傾	皿状	—	SK28と互いに接している
	30	20	H6c ₂	N-66°W	隅丸長方形	0.91	0.45	0.20	垂直	平坦	土師質土器片1点	—
	32	21	H6a ₃	N-28°W	楕円形	0.94	0.63	0.15	外傾	平坦	—	—
	33	22	H6a ₂	N-76°E	楕円形	0.86	0.68	0.14	—	皿状	—	南壁一部欠落
	34	23	E4d ₄	N-54°W	楕円形	0.70	0.37	0.35	外傾	皿状	—	—
	35	24	B3c ₂	N-36°W	円形	0.57	0.50	0.13	外傾	皿状	古銭1点	南側欠落
	40	26	C3a ₄	N-33°W	隅丸方形	0.69	0.66	0.06	外傾	皿状	内耳土鍋片11点	壁西角は削平により欠落
第53図	38	25	B3h ₄	N-5°E	円形	1.01	0.99	0.11	外傾	皿状	内耳土鍋片3点	—
	41	27	B3i ₆	N-45°W	隅丸方形	(0.36)	0.36	0.15	外傾	皿状	—	—
	42	28	B3j ₅	N-13°E	楕円形	0.45	0.37	0.05	外傾	皿状	—	—
	43	29	B3j ₇	N-55°E	円形	0.67	0.64	0.21	外傾	皿状	—	SN78と重複
	44	30	H6c ₁	N-12°E	楕円形	0.62	0.46	0.13	外傾	平坦	—	—
	45	31	F5c ₀	N-34°W	楕円形	0.84	0.63	0.15	外傾	平坦	—	—
	46	32	H6a ₂	N-73°E	円形	0.65	0.57	0.07	外傾	平坦	—	上部削平
	47	33	H6b ₂	N-22°E	隅丸長方形	0.88	0.69	0.12	外傾	平坦	—	—
	48	34	C3a ₇	N-18°W	楕円形	0.68	0.65	0.17	外傾	凹凸	—	SN81と連続
	49	35	H5h ₉	N-19°W	楕円形	0.90	0.76	0.18	外傾	平坦	—	—
	54	36	B3e ₆	N-60°W	[隅丸方形]	0.83	0.75	0.17	外傾	平坦	内耳土鍋片1点	—
	57	37	B3g ₀	N-44°E	[楕円形]	0.88	0.86	0.11	外傾	平坦	—	—
	62	38	B3g ₈	N-69°W	円形	0.62	0.59	0.21	外傾	皿状	—	SN98(新)と接する
	64	39	B3g ₈	N-21°E	[隅丸方形]	(0.73)	(0.72)	0.21	外傾	平坦	古銭4点	北半は攪乱により欠落
第54図	65	40	B3e ₆	N-45°E	不定形	1.90	1.79	0.14	外傾	平坦	—	底面に石3点一列に並ぶ
	66	41	D5h ₀	N-29°W	隅丸長方形	1.04	0.80	0.28	外傾	平坦	—	直下にSK84
	67	42	D5h ₁	N-74°W	隅丸長方形	(0.93)	0.83	0.09	外傾	平坦	—	一部崩落
	68	43	D5i ₀	N-57°E	[楕円形]	0.77	0.66	0.14	外傾	皿状	—	南西部攪乱により一部欠落
	69	44	D5h ₂	N-68°E	楕円形	0.73	0.56	0.06	外傾	平坦	—	壁南東部攪乱により欠落
	71	45	D5a ₄	N-44°E	隅丸長方形	0.73	0.56	0.09	外傾	皿状	—	東壁崩落
	72	46	E5b ₂	N-30°E	円形	0.69	0.65	0.07	外傾	平坦	—	底面に石1点埋め込み
	76	47	D5f ₁	N-2°E	[隅丸方形]	1.00	0.84	0.23	外傾	平坦	—	—
	77	48	D5e ₁	N-82°W	楕円形	0.80	0.48	0.12	外傾	平坦	—	—
	78	49	D5e ₁	N-83°E	楕円形	0.71	0.59	0.14	外傾	平坦	—	—
	79	50	E5e ₄	N-44°W	円形	0.31	0.26	0.08	外傾	皿状	—	—
80	51	E5e ₃	N-45°E	円形	0.86	0.85	0.06	外傾	平坦	—	すぐ東にSK73,南壁崩落	
第55図	81	52	E5d ₄	N-55°W	円形	0.77	0.65	0.28	外傾	皿状	—	断割で粘土が張ってあるのを確認,SK74と接する
	82	53	E4a ₈	N-67°W	楕円形	0.80	0.47	0.17	外傾	凹凸	—	すぐ東にSK83
	84	54	D5h ₀	N-31°E	隅丸方形	1.12	0.93	0.27	外傾	平坦	—	SK66の直下に確認
	85	55	D5f ₁	N-30°E	楕円形	1.02	0.87	0.12	外傾	平坦	—	—
	93	56	D5j ₃	N-87°E	楕円形	0.60	0.20	0.05	外傾	平坦	—	—
	95	57	E4a ₉	N-60°W	[円形]	0.50	0.32	0.18	[外傾]	皿状	—	SK94(旧)と重複
	101	58	F6g ₁	N-0°	楕円形	0.71	0.62	0.18	外傾	皿状	—	—
	102	59	F5h ₀	N-11°W	楕円形	0.49	0.33	0.16	外傾	平坦	—	—
	103	60	F6i ₁	N-30°E	楕円形	0.59	0.51	0.34	外傾	平坦	鉢型石製品1点	鉢型石製品が逆位に置かれ水受けに転用,縁辺部を石列が囲み石製の水路が流れ込む

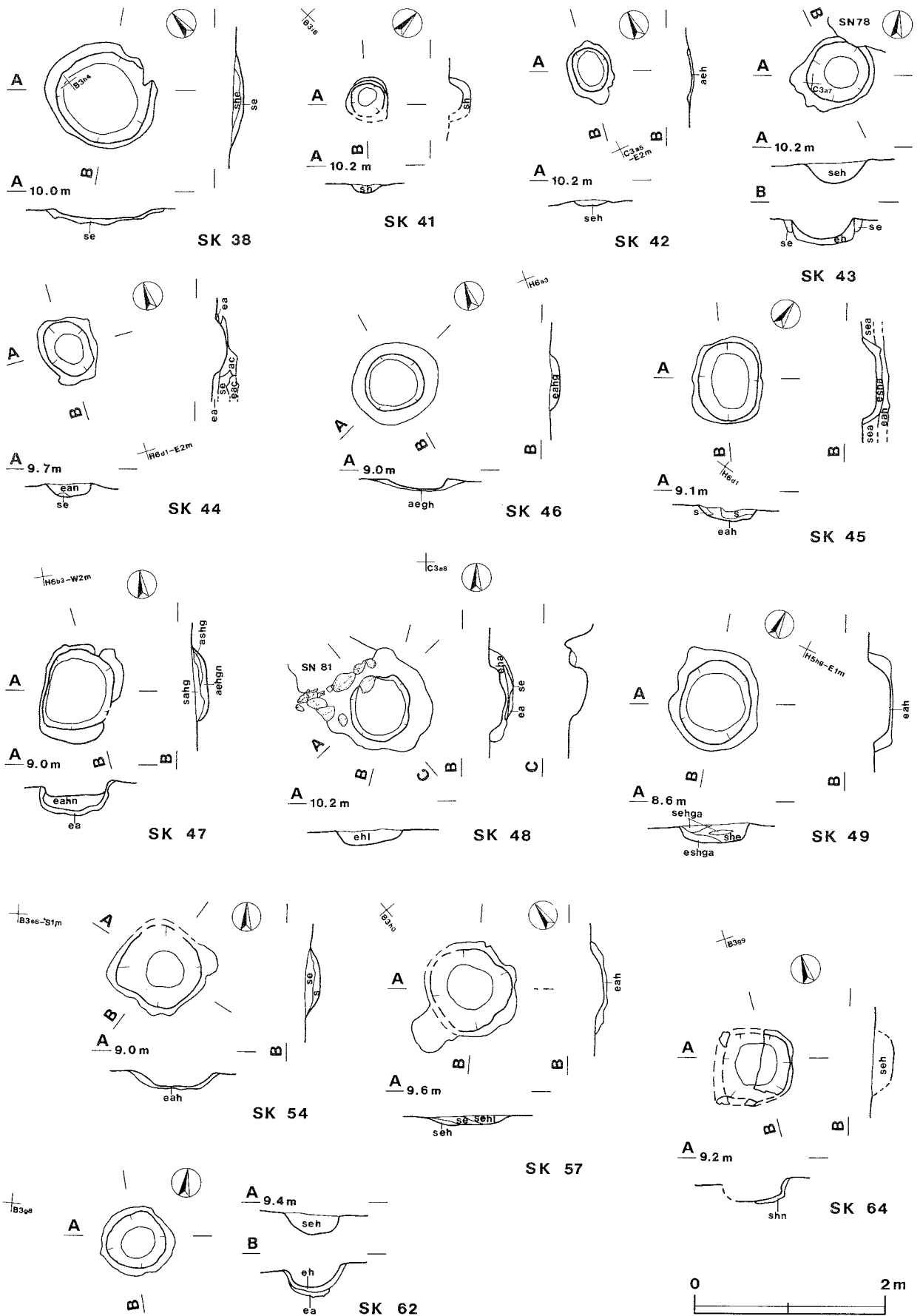
図版 番号	S K 番号	番号	位置	長軸方向	平面形 長軸(m)	規 模			壁面	底面	出土遺物	備 考	
						短軸(m)	深さ(m)						
第55図	104	61	F5e ₉	N-17°E	円形	0.56	0.49	0.10	外傾	皿状	—	—	
	105	62	F6i ₃	N-36°W	隅丸長方形	1.25	0.48	0.76	垂直	平坦	—	黒色土なし	
	106	63	F6g ₂	N-70°W	不定形	1.27	0.68	0.47	垂直	平坦	—	黒色土なし	
	107	64	F6i ₄	N-70°E	隅丸長方形	1.12	0.44	0.36	垂直	平坦	—	黒色土なし	
	108	65	F5g ₉	N-57°E	隅丸長方形	1.07	0.68	0.30	外傾	平坦	—	—	
	113	67	G6f ₃	N-44°W	隅丸長方形	1.04	0.98	0.25	外傾	平坦	—	—	
第56図	111	66	E5c ₁	N-8°E	隅丸長方形	(1.40)	1.01	0.17	外傾	平坦	—	北西部攪乱により欠落	
	114	68	G6d ₂	N-66°W	楕円形	1.20	0.62	0.26	外傾	平坦	—	—	
	115	69	G6b ₃	N-70°W	楕円形	0.96	0.56	0.10	外傾	平坦	—	上部削平	
	116	70	G6a ₂	N-54°W	楕円形	1.04	0.66	0.08	外傾	平坦	—	—	
	117	71	G6a ₁	N-52°W	円形	0.54	0.42	0.20	外傾	皿状	—	北壁上部剥離	
	118	72	G6a ₁	N-55°W	楕円形	(0.78)	0.56	0.15	外傾	平坦	—	—	
	119	73	G5a ₉	N-45°E	楕円形	0.66	0.49	0.08	外傾	平坦	—	上部削平, すぐ東に墨書石が出土	
	120	74	G6a ₁	N-57°E	楕円形	1.02	0.52	0.18	垂直	平坦	—	—	
	122	75	F5g ₈	N-87°E	隅丸方形	0.91	0.87	0.14	外傾	平坦	—	—	
	124	76	F5g ₉	N-4°E	隅丸長方形	0.73	0.61	0.13	外傾	平坦	—	底面に2枚貝の貝殻1点埋め込み	
	130	77	F5d ₇	N-78°W	隅丸長方形	1.00	0.59	0.26	外傾	平坦	—	—	
	132	78	I5a ₉	N-57°W	不定形	0.63	0.46	(0.19)	外傾	皿状	—	底面中央に攪乱穴	
	第57図	137	79	G6d ₃	N-52°E	楕円形	1.10	0.87	0.21	外傾	平坦	—	底面北側黒色土剥離
		138	80	G6d ₃	N-86°W	楕円形	1.81	1.37	0.53	外傾	平坦	—	—
140		81	G6c ₂	N-8°W	不定形	0.84	0.65	0.09	外傾	平坦	—	上部削平	
145		82	G5c ₈	N-50°E	円形	0.71	0.69	0.33	外傾	皿状	—	東半が攪乱により欠落	
146		83	G5d ₈	N-21°E	隅丸長方形	1.15	0.74	0.31	外傾	平坦	—	底面南西隅に石点埋め込み	
147		84	G5c ₈	N-32°W	楕円形	0.65	0.45	0.09	外傾	皿状	—	—	
148		85	F6j ₂	N-85°W	楕円形	0.77	0.52	0.20	外傾	皿状	—	—	
149		86	G6a ₂	N-70°W	楕円形	0.86	0.62	0.11	外傾	平坦	—	—	
151		87	H6d ₃	N-8°E	隅丸方形	0.85	0.85	0.13	外傾	平坦	—	SK150と重複(SK150Aより新しくSK150Bより古い)	
152		88	G6b ₂	N-85°W	隅丸長方形	0.93	0.50	0.24	外傾	平坦	—	東壁を残し上部削平	
第58図	153	89	G6b ₃	N-77°W	楕円形	0.84	0.58	0.16	外傾	平坦	内耳土鍋片1点	上部削平	
	154	90	G6c ₄	N-41°E	楕円形	1.14	0.83	0.48	外傾	平坦	—	覆土下層に石点	
	155	91	G6d ₃	N-57°E	隅丸長方形	1.05	0.75	0.30	外傾	平坦	—	SN174(新)と重複	
	157	92	G6c ₃	N-0°	楕円形	0.94	0.51	0.11	外傾	平坦	—	底面に石点	
	158	93	H6e ₃	N-10°W	隅丸方形	0.98	0.82	0.14	外傾	皿状	—	—	
	159	94	G6f ₃	N-36°E	長楕円形	2.51	0.80	0.14	—	平坦	—	底面に石点, 大型鉢水槽の底面の粘土が剥離したもの	
	160	95	G6f ₅	N-87°W	卵形	1.39	0.66	0.12	外傾	平坦	—	—	
	163	96	H6b ₃	N-44°W	不定形	0.95	0.77	0.03	—	皿状	—	上部削平	
	166	97	H6a ₄	N-77°W	隅丸方形	0.53	0.53	0.19	外傾	平坦	—	東半は攪乱により欠落	
	169	98	G6j ₄	N-13°E	隅丸方形	0.73	0.66	0.14	外傾	平坦	—	—	
172	99	G6j ₂	N-37°E	隅丸長方形	0.68	0.57	0.10	外傾	皿状	—	—		
175	100	G6h ₄	N-86°W	隅丸長方形	1.20	0.84	0.24	外傾	皿状	—	—		



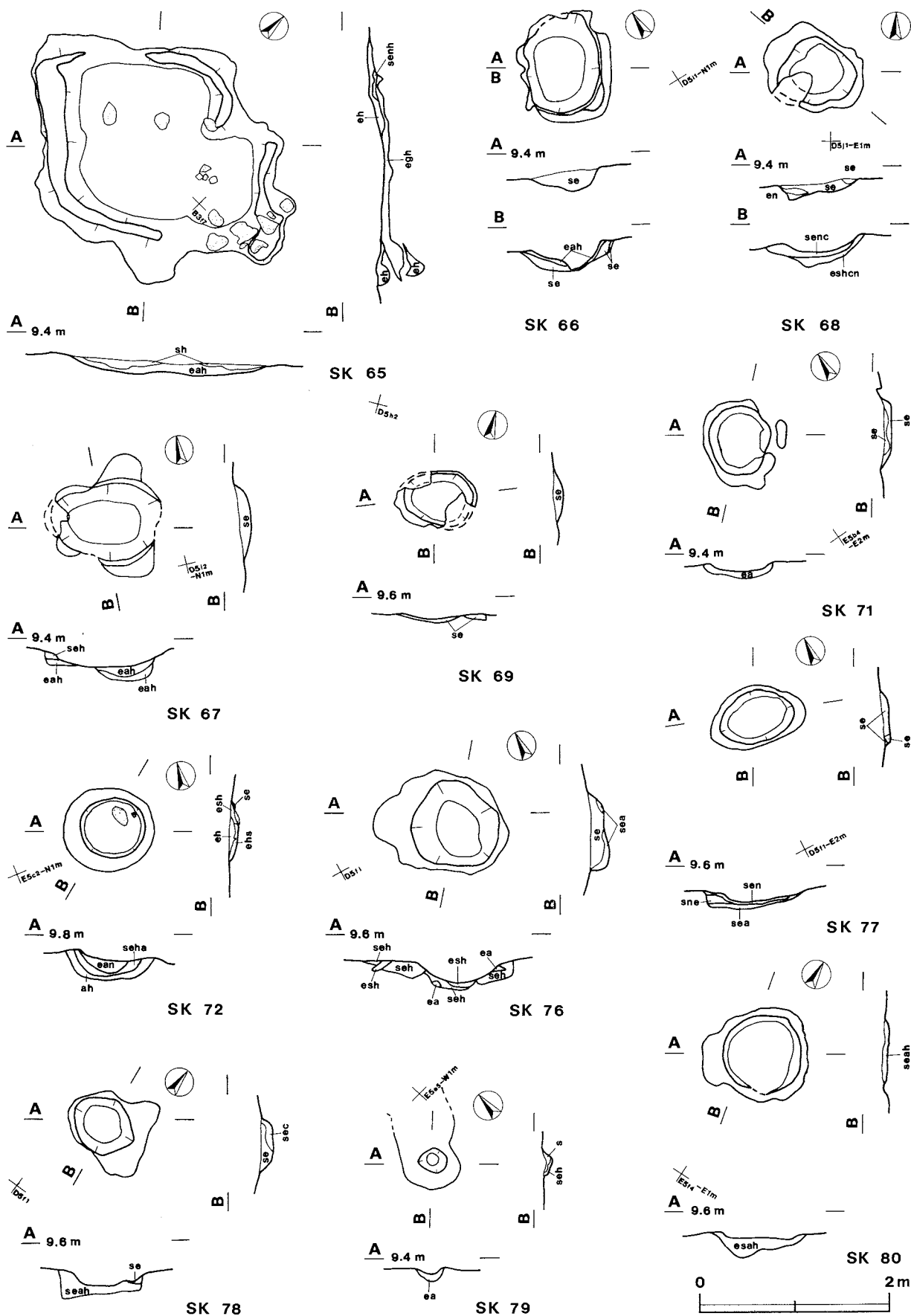
第51图 土坑实测图(1)



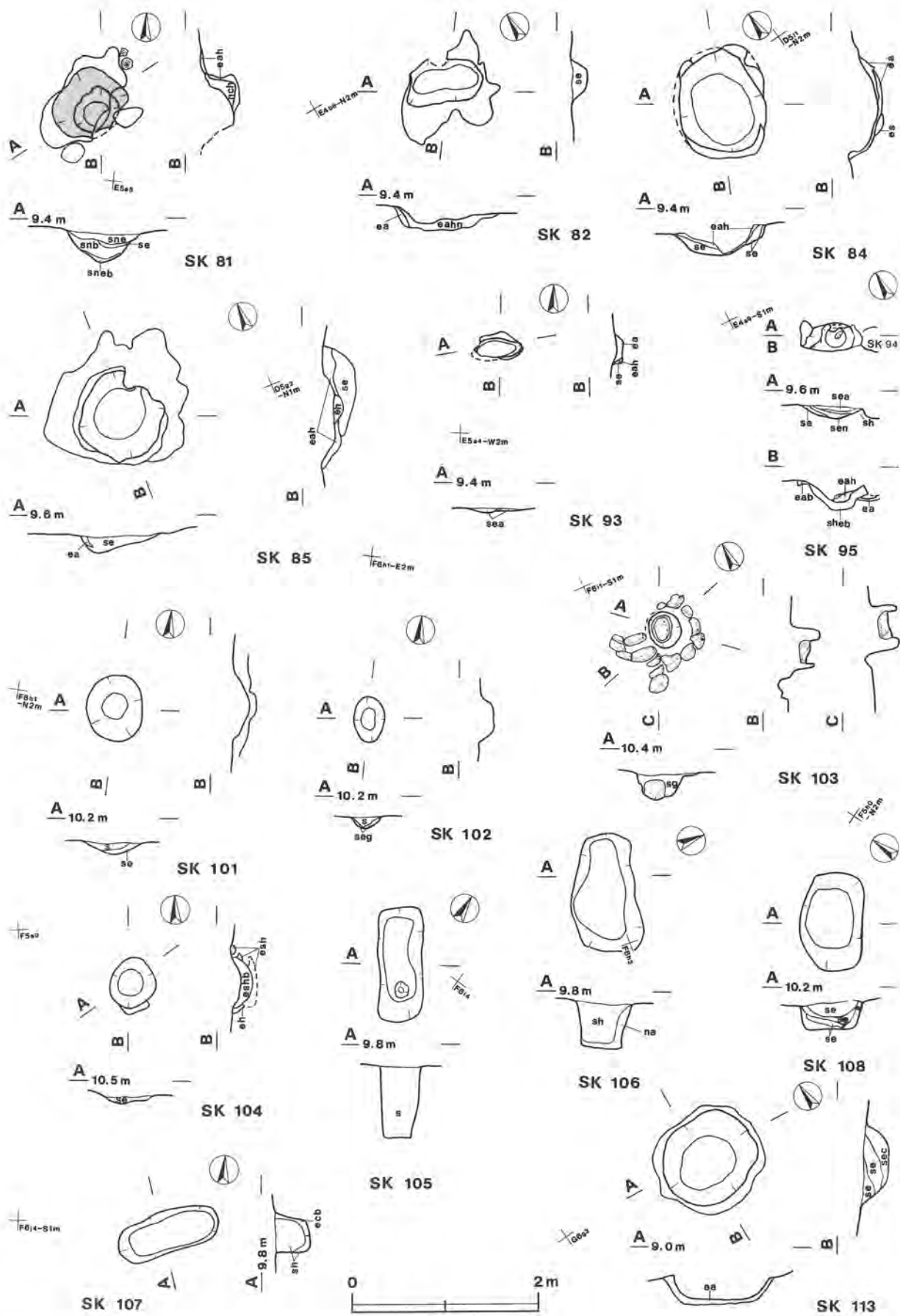
第52図 土坑実測図(2)



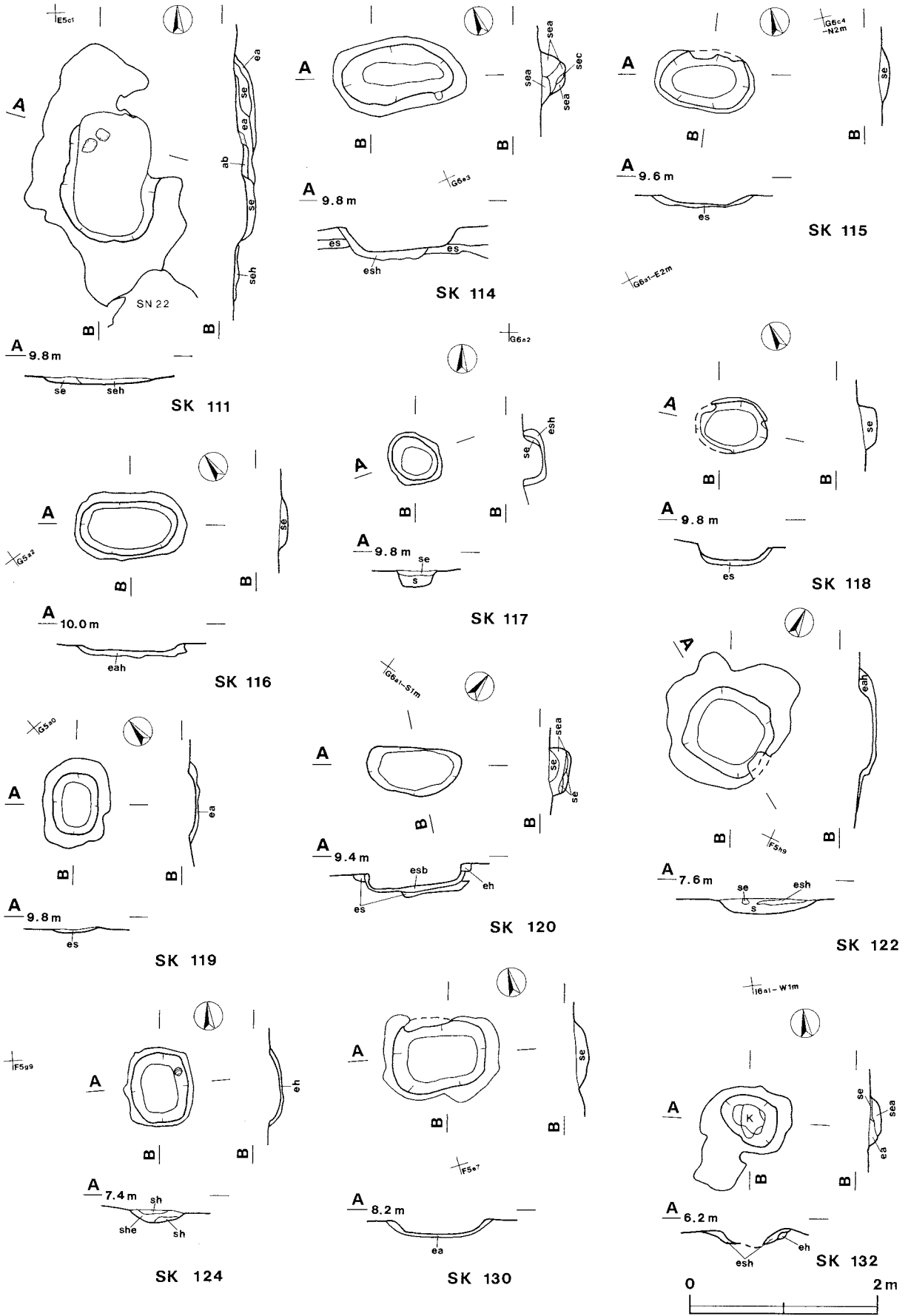
第53图 土坑实测图(3)



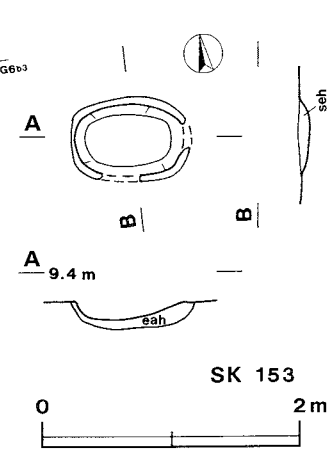
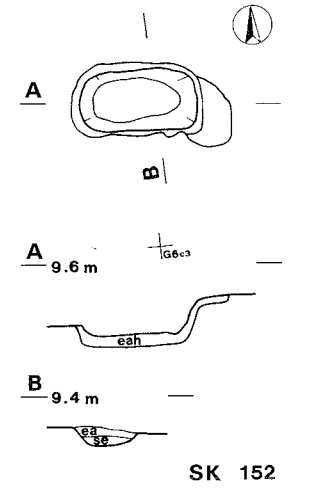
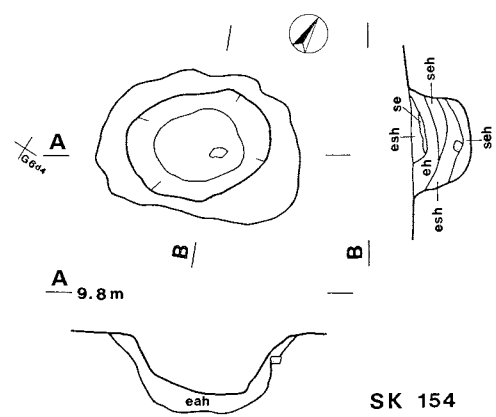
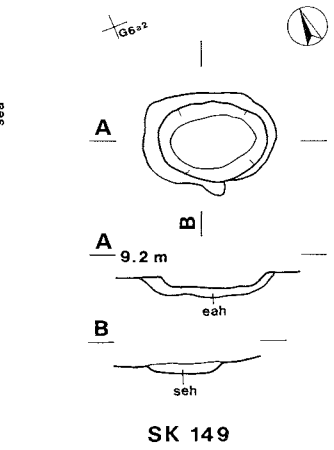
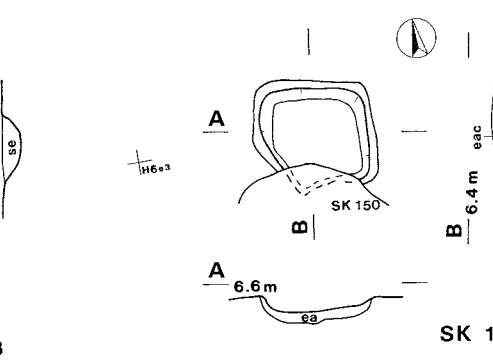
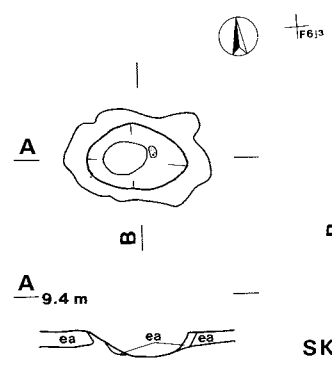
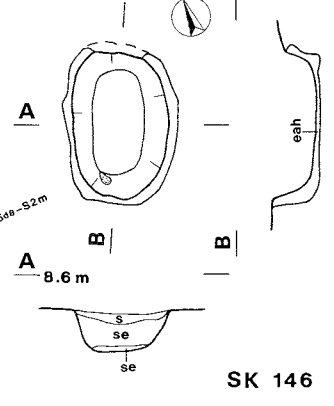
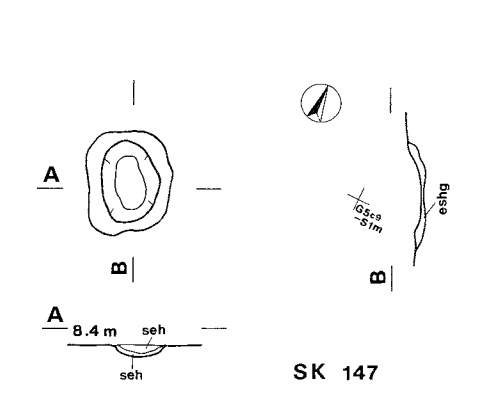
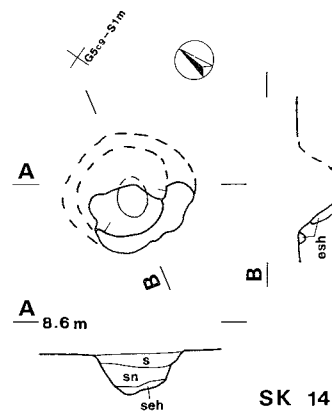
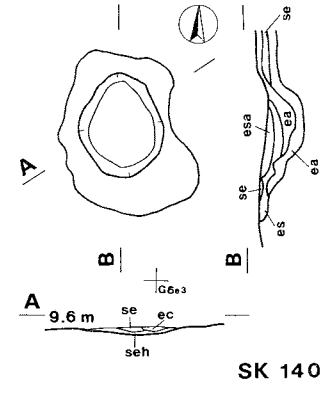
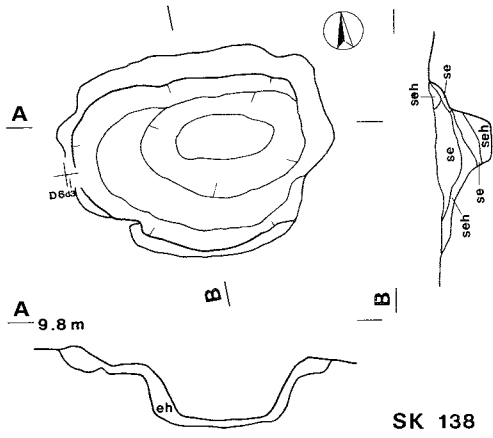
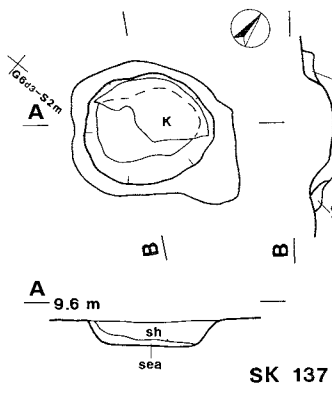
第54图 土坑实测图(4)



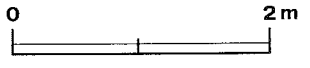
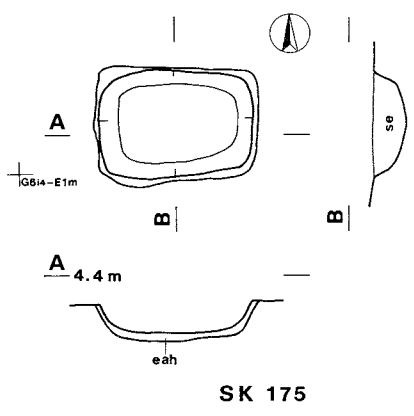
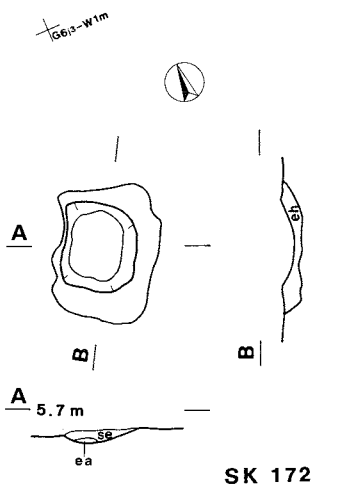
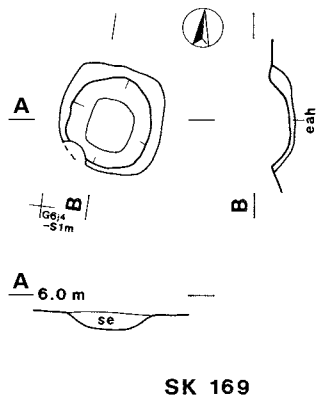
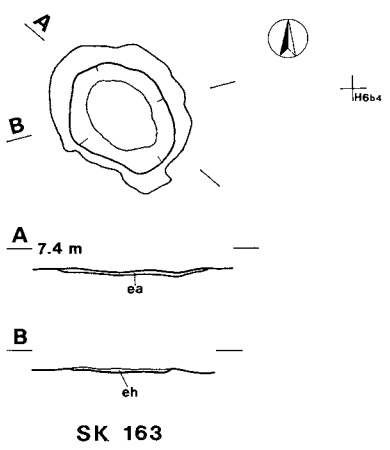
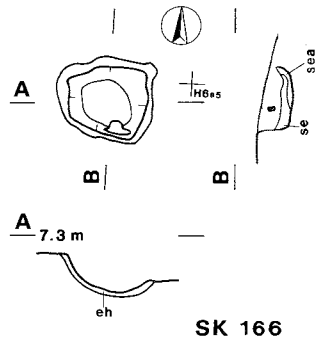
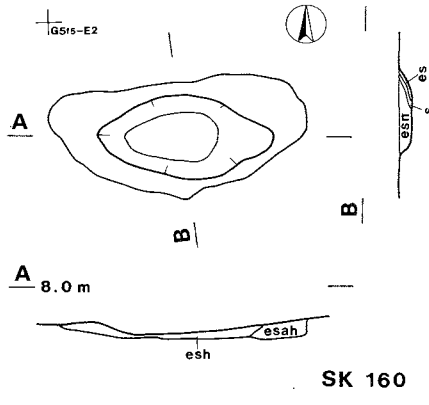
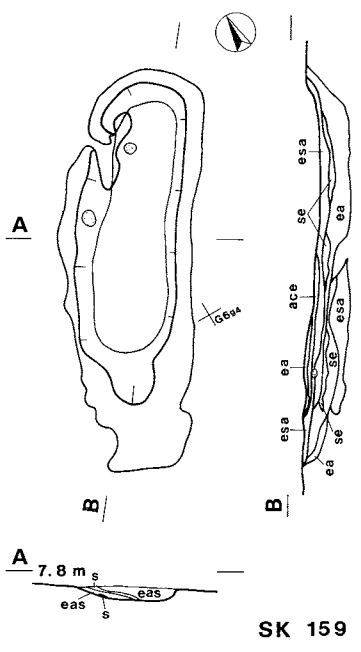
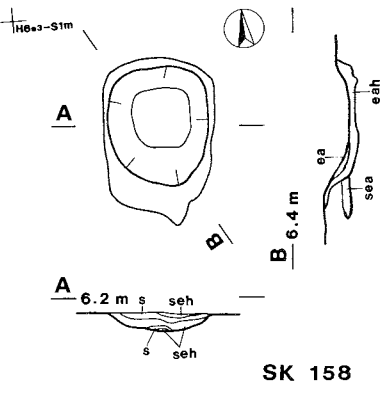
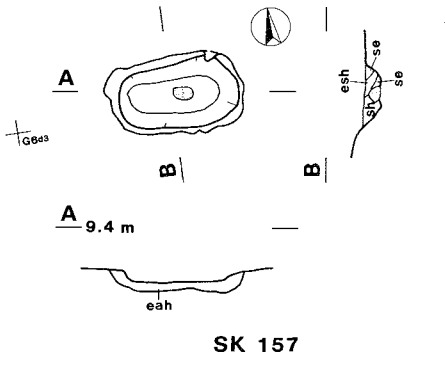
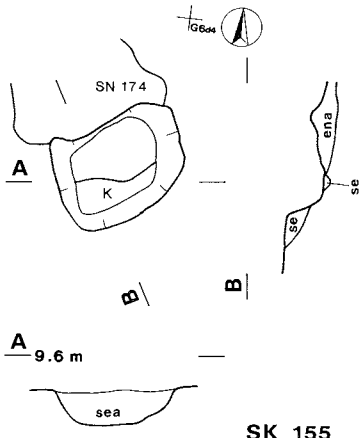
第55图 土坑实测图(5)



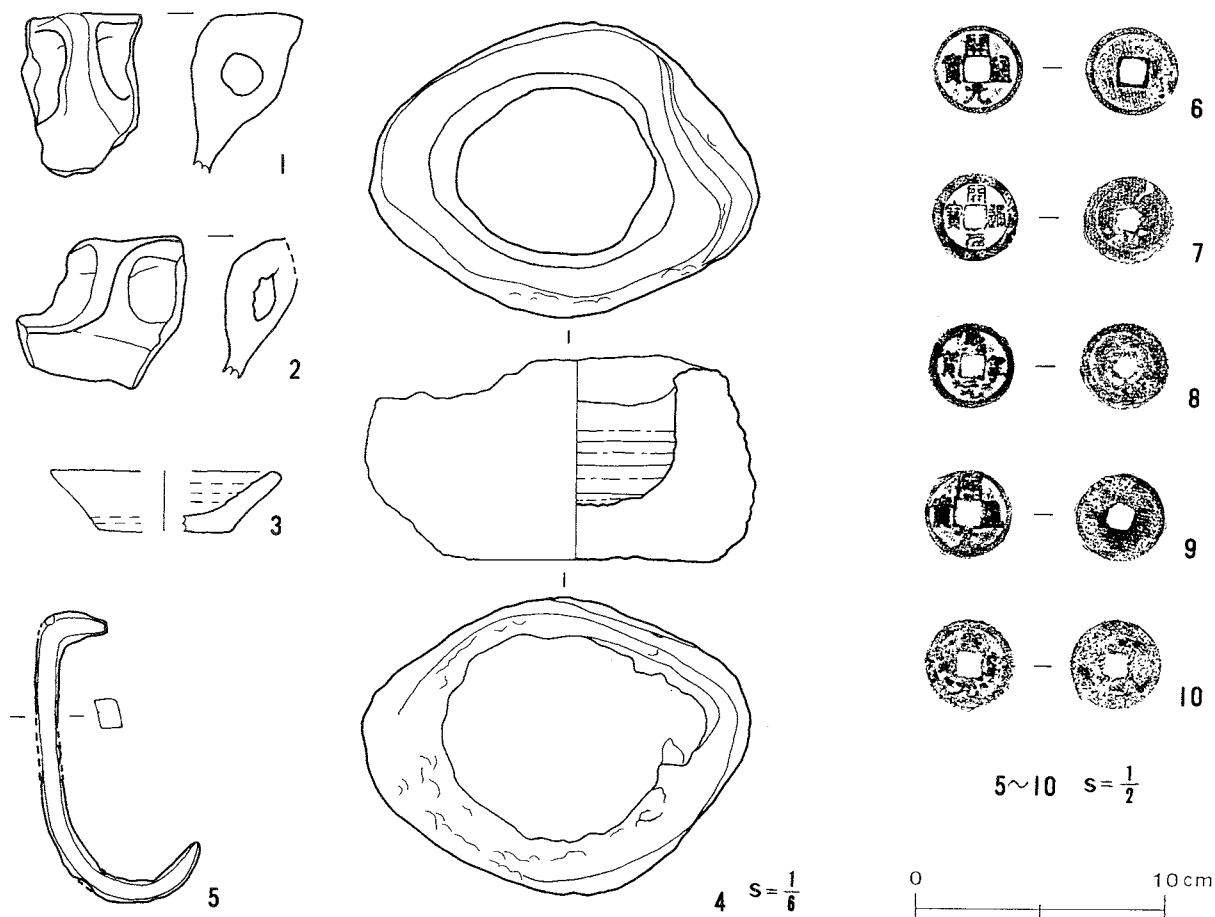
第56图 土坑实测图(6)



第57图 土坑实测图(7)



第58图 土坑实测图(8)



第59図 土坑出土遺物実測図

土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第59図 1	内耳土鍋 瓦質土器	B(6.6)	口縁部片。口縁部は外傾しながら僅かに外へ膨らむ。耳はほぼ垂直に立ち上がり、上端で大きく外反する。	口縁部内外面横ナデ。	砂粒・長石・礫 黒褐色 普通	P 8 残存率5% S K 28 外面煤付着
2	内耳土鍋 土師質土器	B(2.1)	口縁部片。口縁部は外傾しながら僅かに外へ膨らむ。耳はほぼ垂直に立ち上がり、上端で外反し、口縁部に至る。	口縁部内外面横ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P 10 残存率20% S K 40覆土 外面煤付着
3	皿 土師質土器	A[9.1] B 2.4 C[4.8]	底部から口縁部片。体部、口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。器壁は厚い。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母・長石 橙色 普通	P 9 残存率20% S K 30

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長軸(cm)	短軸(cm)	高さ(cm)	重量(g)			
第59図4	鉢型石製品	30.8	24.1	16.1	6250.0	砂岩	S K 103	Q 4 手水鉢を逆に伏せ、水受けに転用したか。

図版番号	器種	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第59図5	耳金	7.8	0.8	0.7	22.5	鉄	S K 10	M 3

図版番号	銭種	初 鑄 年		出土地点	備 考
		時 代	年 号 (西曆)		
第59図6	開元通寶	唐	武徳4年(621)	S K 35	M 4 真書
7	熙寧元寶	北 宋	熙寧元年(1068)	S K 64	M 6 真書
8	開元通寶	南 唐	中興3年(960)	S K 64	M 5 篆書
9	開元通寶	唐	武徳4年(621)	S K 64	M 7 真書
10	熙寧元寶	北 宋	熙寧元年(1068)	S K 64	M 8 真書

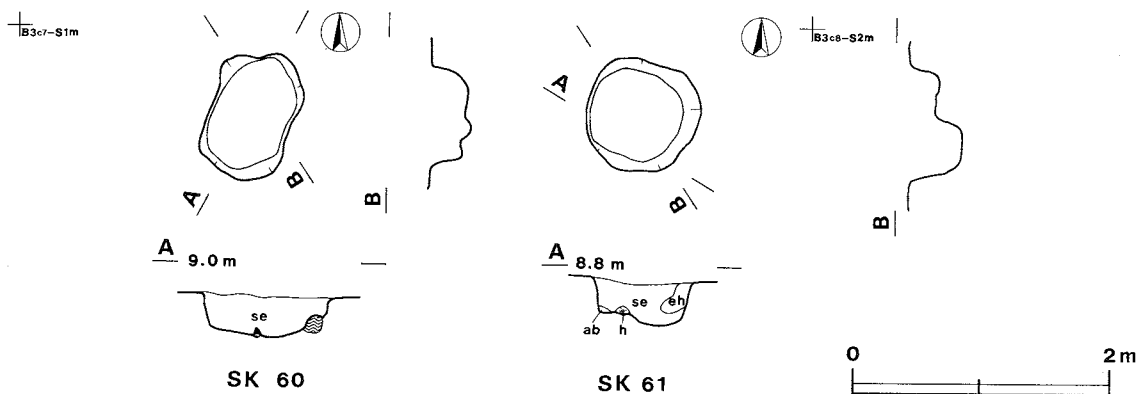
(5) 墓壙 (第60図)

当遺跡は砂丘に位置しているため、前回までの調査では、人骨の出土は確認できてその埋葬のために掘られた墓壙を確認することはできなかった。しかし、今回の調査において、周囲の黒色土を切る形で掘られた土坑が2カ所認められ、そこを掘ったところ、その下から人骨が出土したので、墓壙と確認できた。

第1号墓壙 第1号墓壙(S K 60)は、調査区の北部B3c7区を中心に確認できた。平面形は、楕円形である。規模は、長軸1.05m、短軸0.65m、深さ0.42mである。底面は凹凸があり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は、同質の砂が均一に堆積していた。出土した人骨は、北枕西向き屈葬で成人女性のもと思われる。頸椎骨の下から六道銭に当たる古銭が六枚出土した。また首の後ろ(東側)に当たる場所から内耳土鍋の破片が1片出土した。

第2号墓壙 第2号墓壙(S K 61)も、B3c7区を中心に確認できた。平面形は、隅丸方形に近い。規模は、長軸0.94m、短軸0.89m、深さ0.32mである。底面は凹凸があり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は、同質の砂が均一に堆積していた。出土した人骨は、北枕西向き屈葬で幼児骨である。ちょうど手に当たる部分に六道銭と思われる古銭が2枚出土した。1枚は摩耗が激しく判読不可能であった。

所見 両墓壙は、枕を並べる形で、ほぼ同じ標高に確認できたことから、2体の人骨は家族である可能性が高い。また、両墓壙とも、すぐ近くに存在した第22号炉(S K 59)に伴って広範囲に広がる黒色土を貫通して掘られているので、少なくとも第22号炉よりは新しい。さらに、人骨と共に埋納された六道銭のうち、最新のものが朝鮮通寶であることから、この人骨の埋納時期は15世紀の第二四半期をさかのぼるものではない。



第60図 墓壙実測図

表12 墓壇一覧表

図版 番号	SK 番号	位置	長軸方向	平面形	規模			壁面	底面	出土遺物	備考	
					長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)					
第60図	60	1	B3c7	N-28°E	楕円形	1.05	0.65	0.27	垂直	-	人骨下に古銭6枚	SK59を中心とする黒色土面を切って構築、人骨北枕屈葬
	61	2	B3c7	N-37°E	楕円形	0.94	0.89	0.40	垂直	-	人骨脇に古銭2枚	SK59を中心とする黒色土面を切って構築、幼児骨北枕屈葬

(6) 礎石建物状遺構（第61図）

礎石建物状遺構(SX1)とした遺構は、調査区の中央よりやや南のF5i0区を中心に確認できた。正確な規格性はないが、径20cm前後の平たい石がほぼ等間隔におかれたもので、その上に柱を立てたものと思われる。周辺から大量の釘や植木鉢、七輪、ガラス壺、金属製の急須の蓋、陶器製の徳利などが出土しており、この遺構は近代のものと考えられる。また、この遺構のすぐ東には小型の第38号鹹水槽があるので、これら一連の遺構と遺物は、近代の製塩跡と考えることができるかもしれない。

表13 礎石建物状遺構一覧表

図版 番号	SX 番号	位置	長軸方向	平面形	規模				出土遺物	備考
					長軸(m)	短軸(m)	石間距離(m)	石の数		
第61図	1	F5h8~F5i0	N-37°W	不整形正方形	6.72	6.36	1.12~1.50	大が20	石片2点	砂丘上の構築物のため、石が移動している可能性大

(7) 不明遺構（第62図）

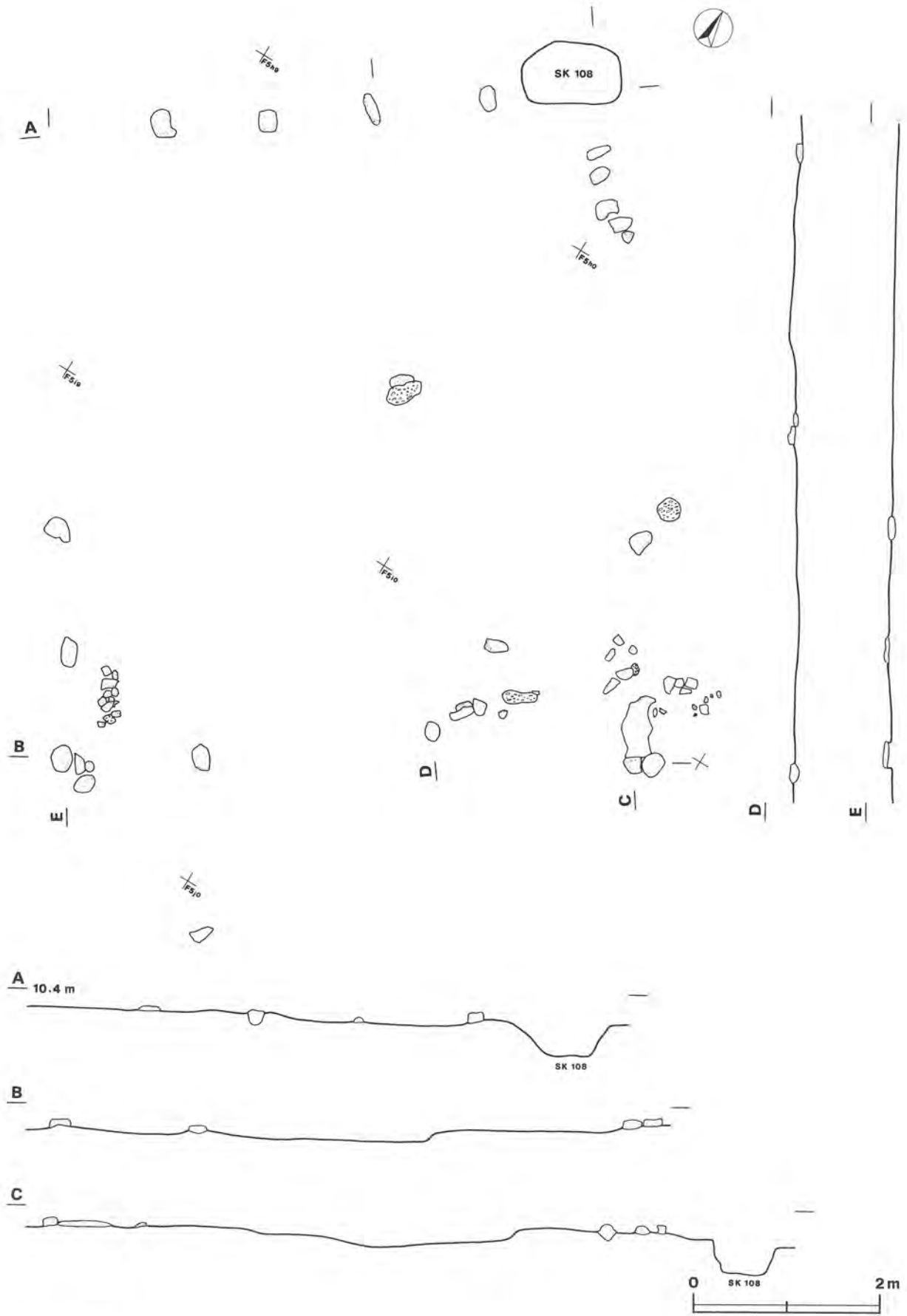
石列 この遺構(SX2)は、前記礎石建物状遺構の東側F6g1区に確認できた。第91号粘土貼り土坑と第58号土坑に挟まれるような位置に、径20~30cmの石7点が長さ1.69mの範囲に東西に直列で並んでいた。このすぐ北には、金属製の急須の蓋2点が出土しており、使用目的は不明であるが、近代の遺構と考えることができる。

貼床状遺構 この遺構(SX4)は、調査区の中央よりやや南のF5c7区を中心に確認できた。平面形は不定形で、規模は長軸5.33m、短軸3.10mの平坦な遺構である。遺構確認の時点で、表面一面に焼けた灰が厚さ10cm程度堆積していたのが確認できた。それを取り除くと、黒色土を貼って構築された不定形の本遺構が現れた。覆土中からは、土師質土器の小皿1点、香炉1点、内耳土鍋の口縁部片2点、その他多数の土師質土器小皿片と、内耳土鍋の体部片が出土した。これらの状況から、この遺構は消失家屋跡の可能性がある。付近には、小さな土坑と炉跡が1基ずつあったのみで、製塩と関係の深い遺構は見られなかった。

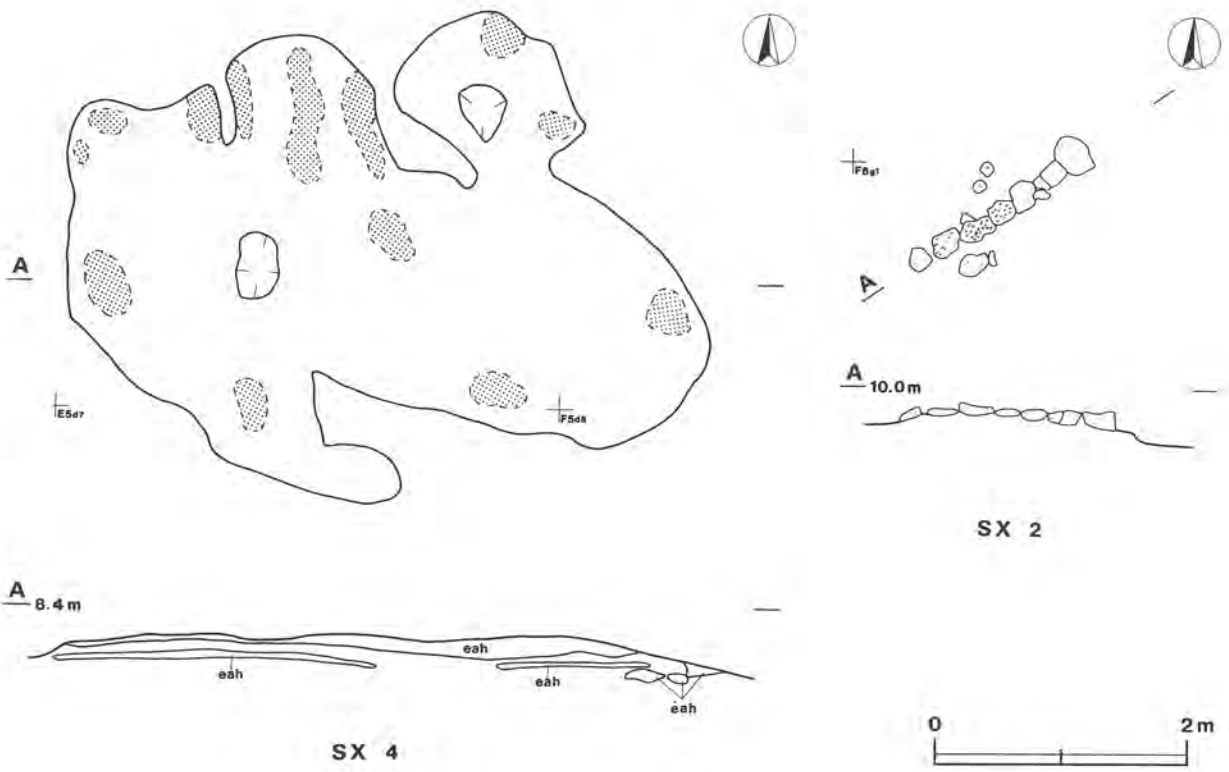
表14 不明遺構一覧表

図版 番号	SX 番号	位置	長軸方向	平面形	規模				出土遺物	備考
					長軸(m)	短軸(m)	石間距離(m)	石の数		
第62図	2	F6g1	N-55°E	石が直列に並ぶ	1.69	-	-	大が7	-	0.2m北に金属製の急須の蓋2点が並んで出土

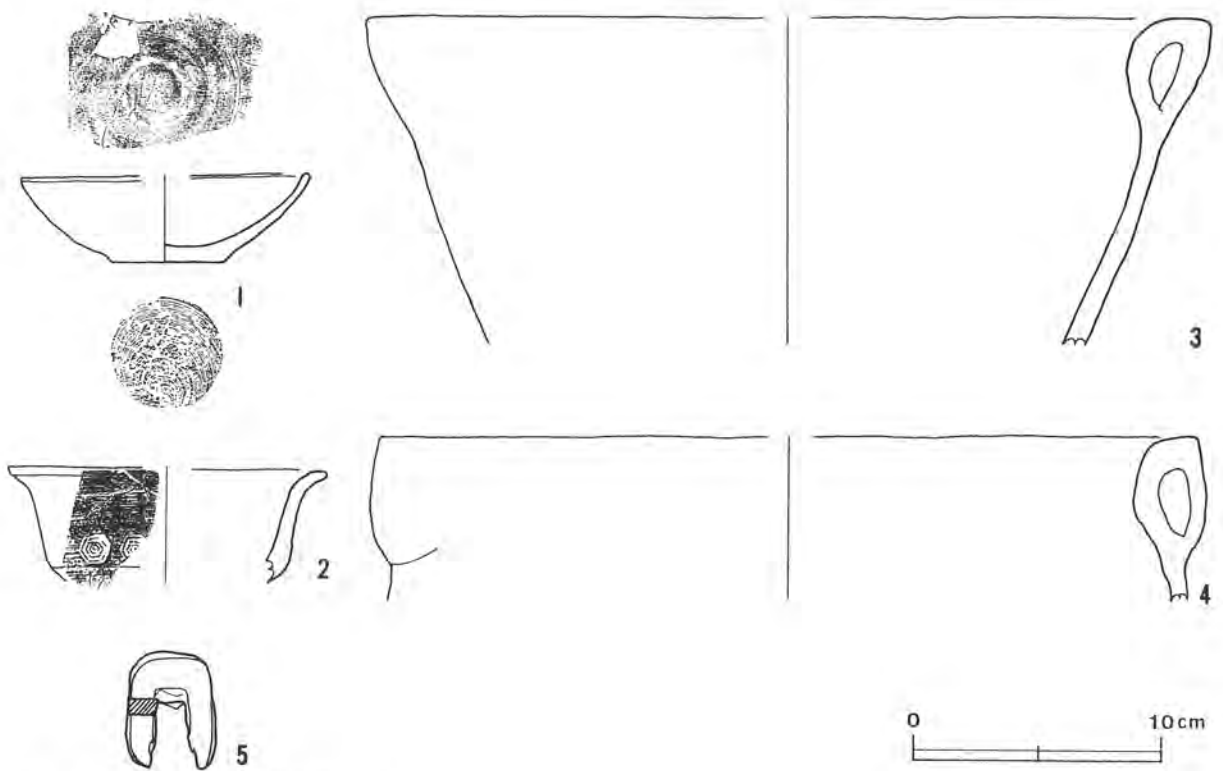
図版 番号	SX 番号	位置	長軸方向	平面形	規模		黒色土面の 厚さ(cm)	黒色土面 の起伏	出土遺物	備考
					長軸(m)	短軸(m)				
第62図	3	F5c7	N-72°W	不定形	5.33	3.10	2~5	平坦	土師質土器片15点、内耳土鍋片13点、鉄製品1点	黒色土面内に落込みあり



第61図 礎石建物実測図



第62図 不明遺構実測図



第63図 不明遺構出土遺物実測図

不明遺構出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第63図 1	皿 土師質土器	A〔11.6〕 B 3.5 C 4.5	底部から口縁部片。底部は平底で片面が突出。体部口縁部は内彎気味に立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。見込み指ナデ。	砂粒・スコリア 浅黄橙色 普通	P14 残存率50% S X 4 覆土
2	香炉 土師質土器	A〔12.8〕 B〔4.5〕	体部から口縁部片。腰部が張り胴部はやや外傾して直線的に立ち上がる。口縁部外反。	水挽き成形。体部低位外面に三重亀甲に蛇の目の押印文。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P15 残存率10% S X 4 覆土
3	内耳土鍋 土師質土器	A〔34.0〕 B〔13.1〕	体部から口縁部片。体部は外傾して直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外へ膨らむ。耳は内彎後滑らかに外傾。	体部、口縁部内外面横ナデ。上部内側へつまみ出し。体部外面指頭圧痕。	砂粒・雲母・長石 にぶい褐色 普通	P16 残存率20% S X 4 覆土 外面、耳部煤附着
4	内耳土鍋 土師質土器	A〔32.6〕 B〔6.6〕	口縁部片。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、外へ膨らむ。耳は内彎して立ち上がり、上部へ大きく外反する。	口縁部内外面横ナデ。上部内側へつまみ出し。	砂粒・雲母・長石 橙色 普通	P17 残存率15% S X 4 覆土 外面薄く煤附着

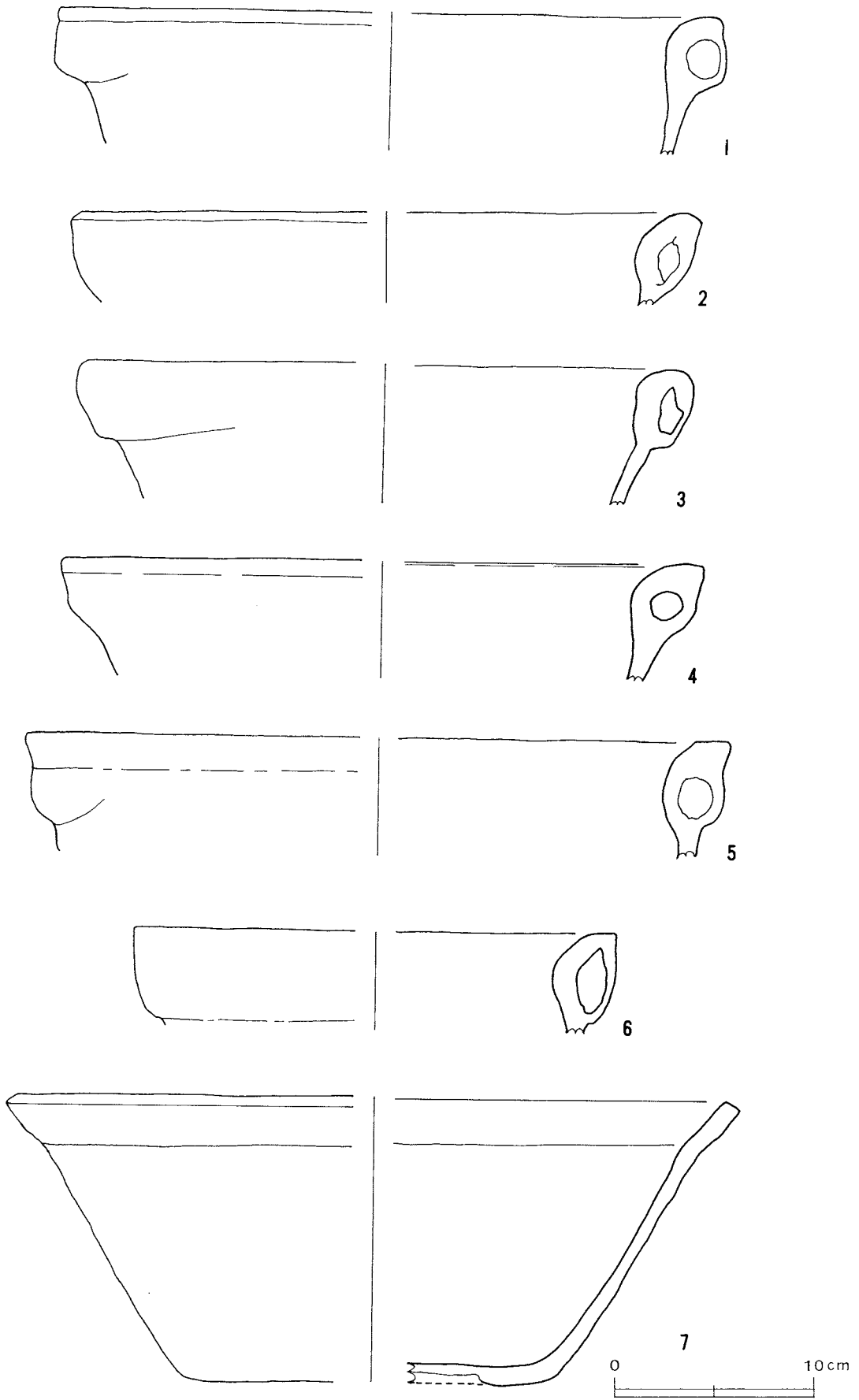
図版番号	器種	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第63図5	不明	3.1	2.4	0.4	17.0	鉄	S X 4	M 9

3 遺構外出土遺物

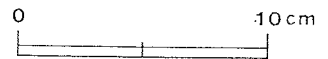
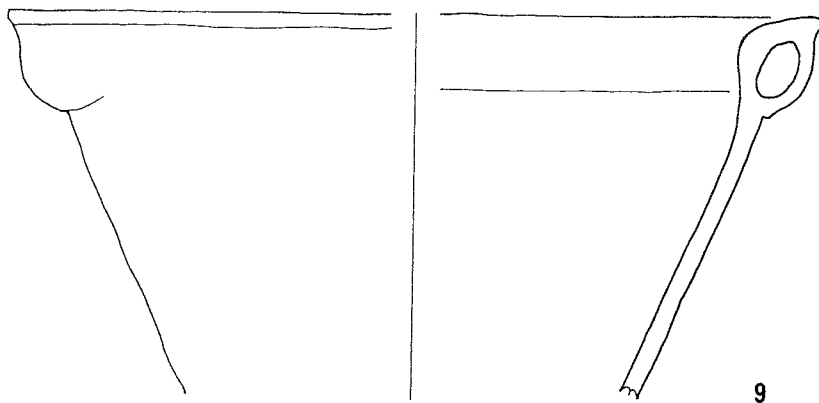
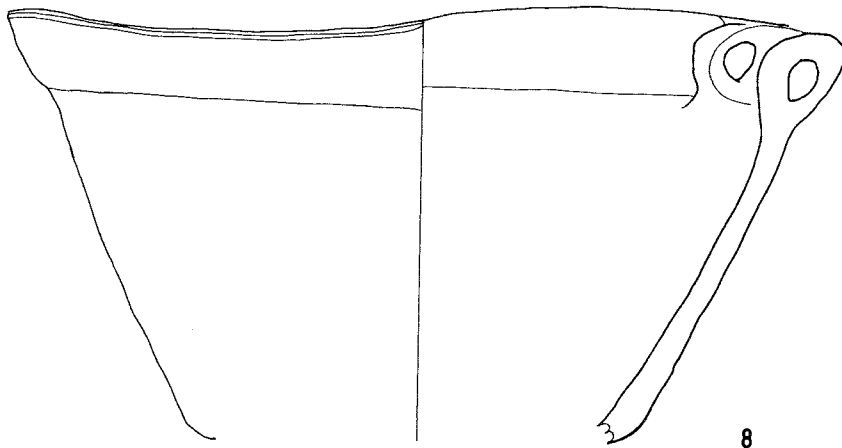
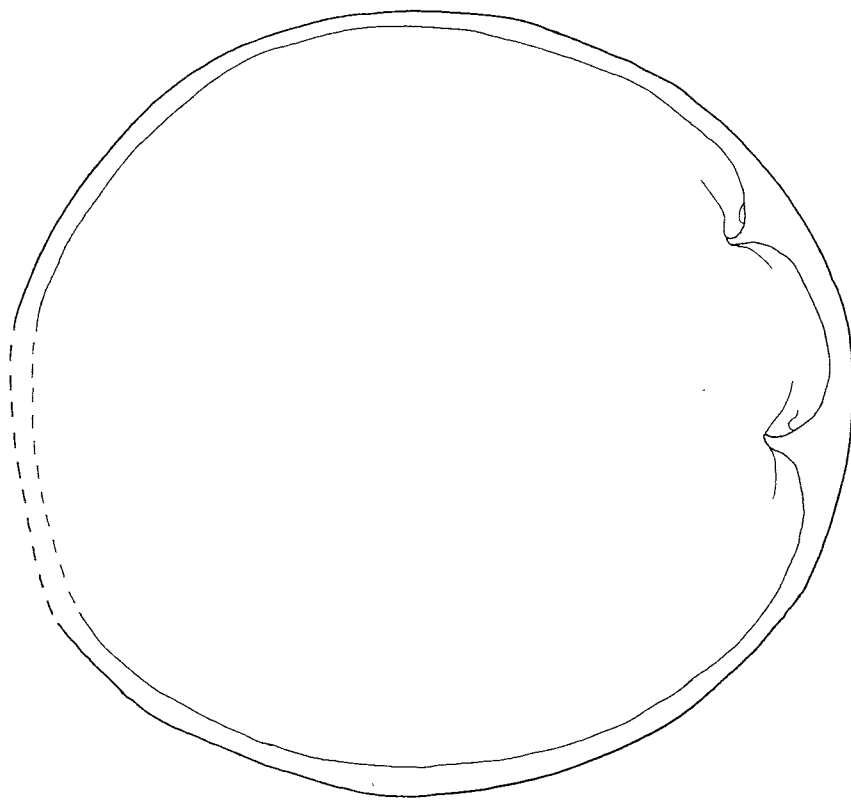
本跡における遺物の出土状況は、遺構に伴うものがごく僅かであるが、遺構外からは多種の遺物が出土している。そこで、以下に遺構外出土遺物を土器・陶磁器、土製品、ガラス製品、石製品、金属製品、古銭、骨角製品の順に種類別に掲載しておく。

遺構外出土遺物観察表（土器・陶磁器）

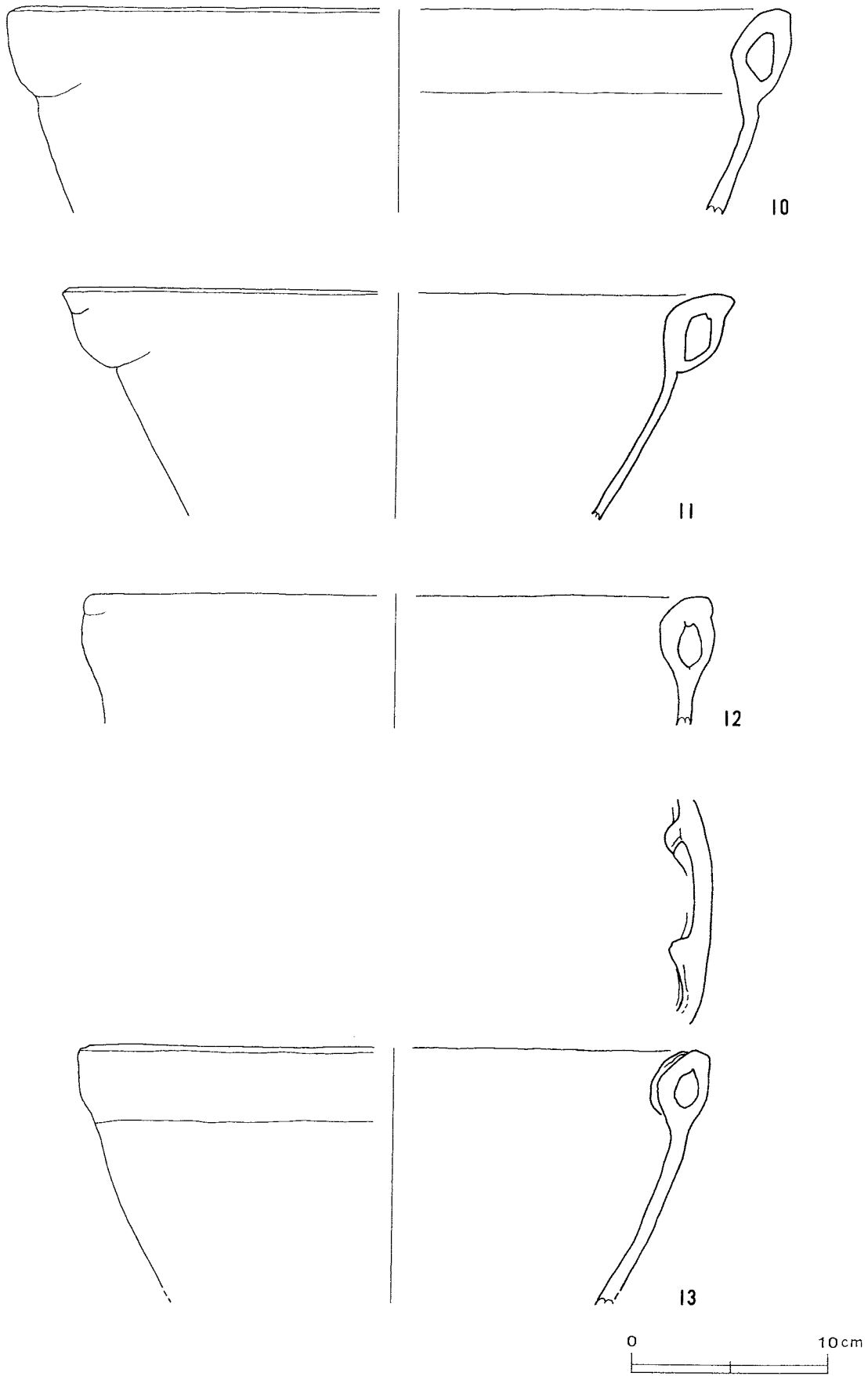
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第64図 1	内耳土鍋 土師質土器	A〔33.2〕 B〔7.0〕	口縁部片。口縁部は器壁を薄くし、外反気味に外へ膨らむ。耳はほぼ垂直に立ち上がり、外反して上部に至る。	口縁部内外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 長石・スコリア にぶい橙色 普通	P19 残存率10% B3h区表採 外面煤附着
2	内耳土鍋 土師質土器	A〔30.5〕 B〔4.6〕	口縁部片。口縁部は外傾しながら外に膨らむ。耳は内彎気味に立ち上がり、外反して上部に至る。	口縁部内外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 橙色 普通	P20 残存率5% B3gs区表採 外面煤附着
3	内耳土鍋 土師質土器	A〔30.0〕 B〔7.0〕	口縁部片。口縁部は器壁を薄くし、大きく外反して膨らむ。耳はほぼ垂直に立ち上がり、外反して上部に至る。	口縁部内外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 スコリア にぶい橙色 普通	P21 残存率5% B3区表採 外面煤附着
4	内耳土鍋 土師質土器	A〔32.3〕 B〔6.0〕	口縁部片。口縁部は外傾しながら僅かに外へ膨らむ。耳はほぼ垂直に立ち上がり、外反して上部に至る。	口縁部内外面横ナデ。	砂粒・石英・長石 スコリア 灰赤色 普通	P29 残存率5% E4a区表採 内外面煤附着
5	内耳土鍋 土師質土器	A〔35.4〕 B〔6.0〕	口縁部片。口縁部は外傾気味に立ち上がり、外に膨らむ。耳は内彎後滑らかに外傾して立ち上がる。	口縁部内外面横ナデ。上部外側へつまみ出し。	砂粒・雲母・長石 スコリア 明赤褐色 普通	P30 残存率10% E4ja区表採 外面煤附着
6	内耳土鍋 土師質土器	A〔24.2〕 B〔5.0〕	口縁部片。口縁部は耳のつく部分にくびれをもち、器壁を薄くして外傾しながら立ち上がる。耳は内彎後外傾。	口縁部内外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	P36 残存率3% E5c7区表採 外面煤附着
7	内耳土鍋 土師質土器	A〔37.1〕 B 14.4 C〔19.0〕	底部から口縁部片。平底。体部は外上方へ直線的に立ち上がる。口縁部は体部との境に浅い凹線が巡り外反する。	底部ナデ調整。体部、口縁部内外面横ナデ。体部外面指頭圧痕。	砂粒・雲母・石英 橙色 普通	P34 残存率35% F5i9区表採 外面と底部内面煤附着



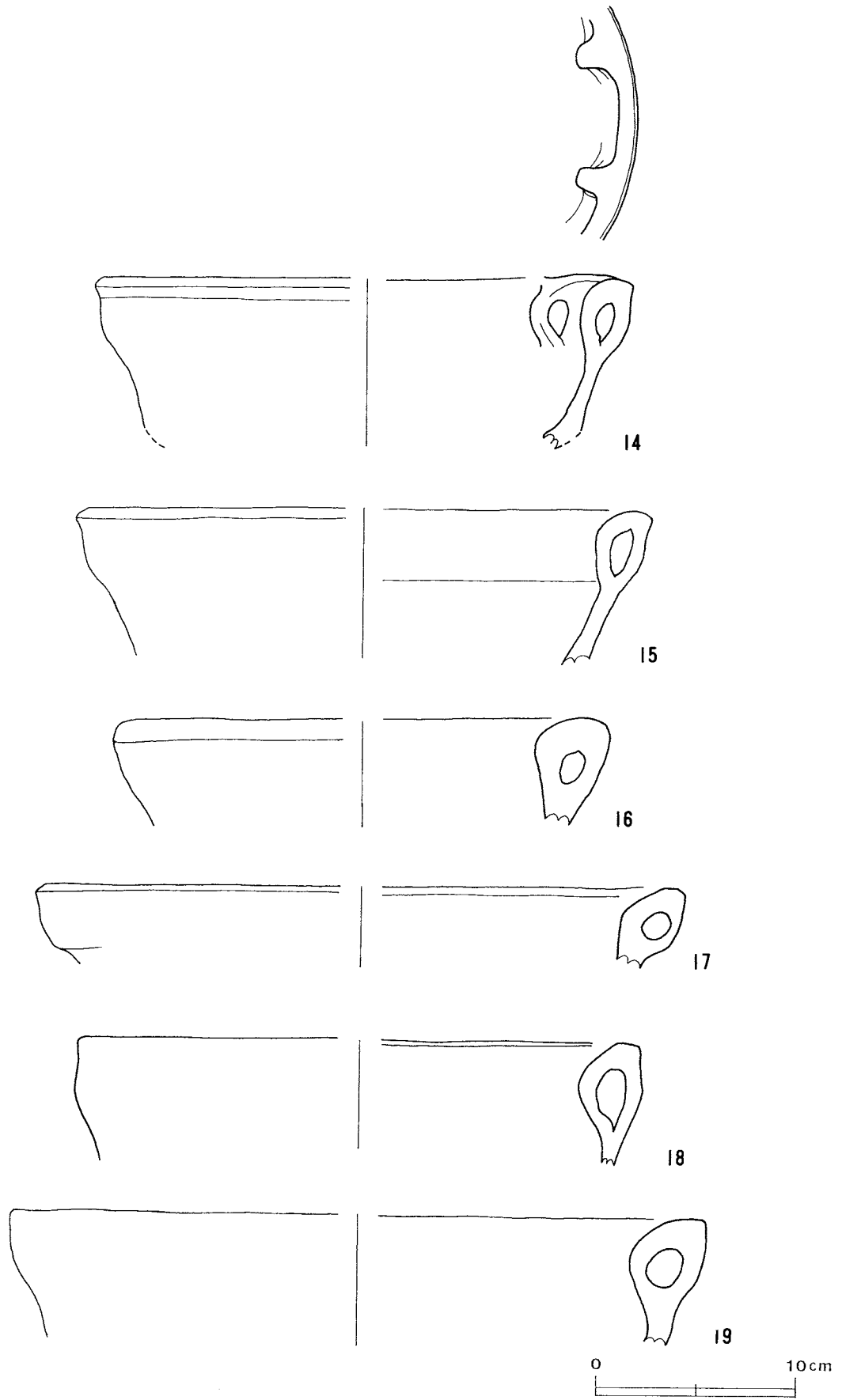
第64図 遺構外出土遺物実測図(1)



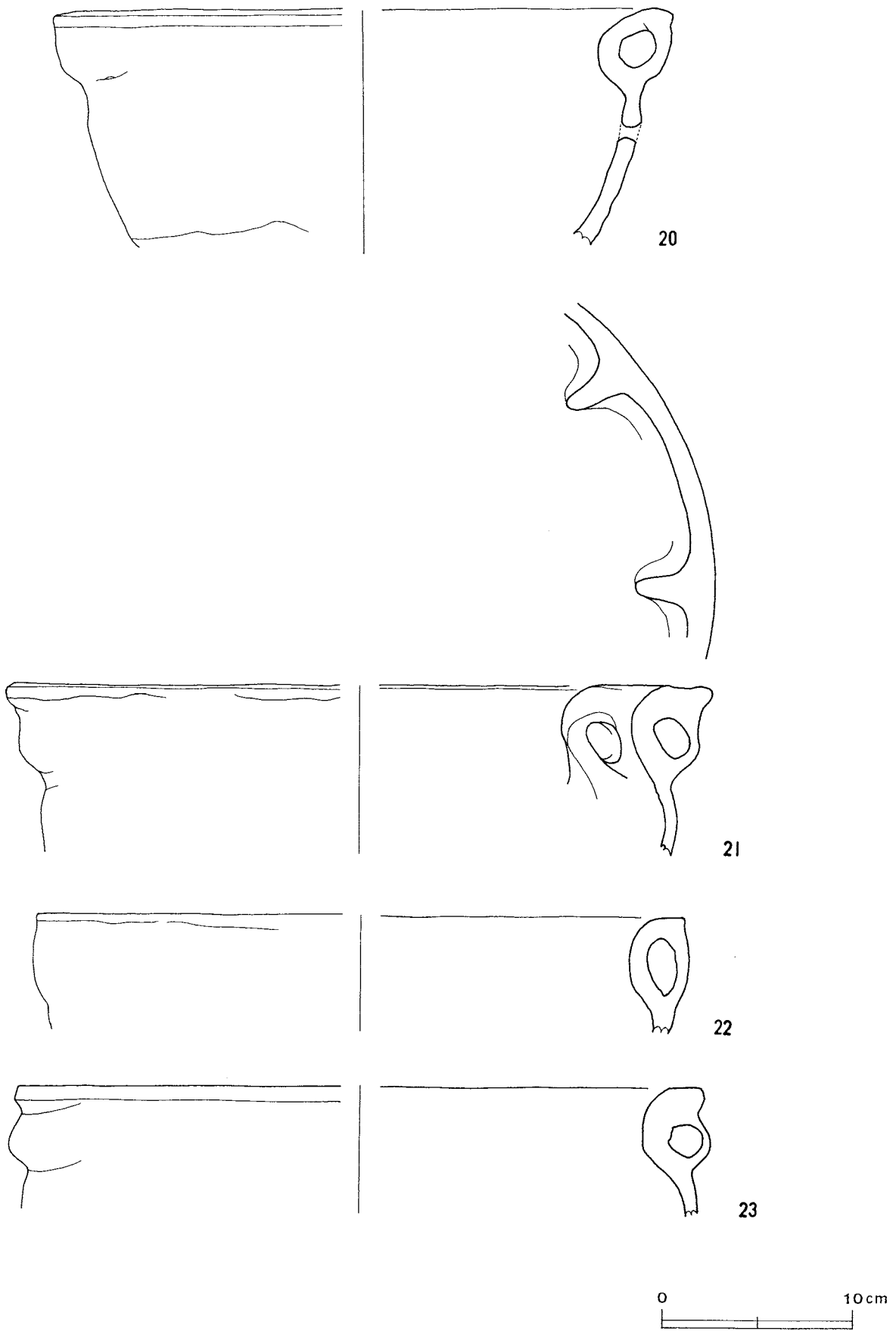
第65図 遺構外出土遺物実測図(2)



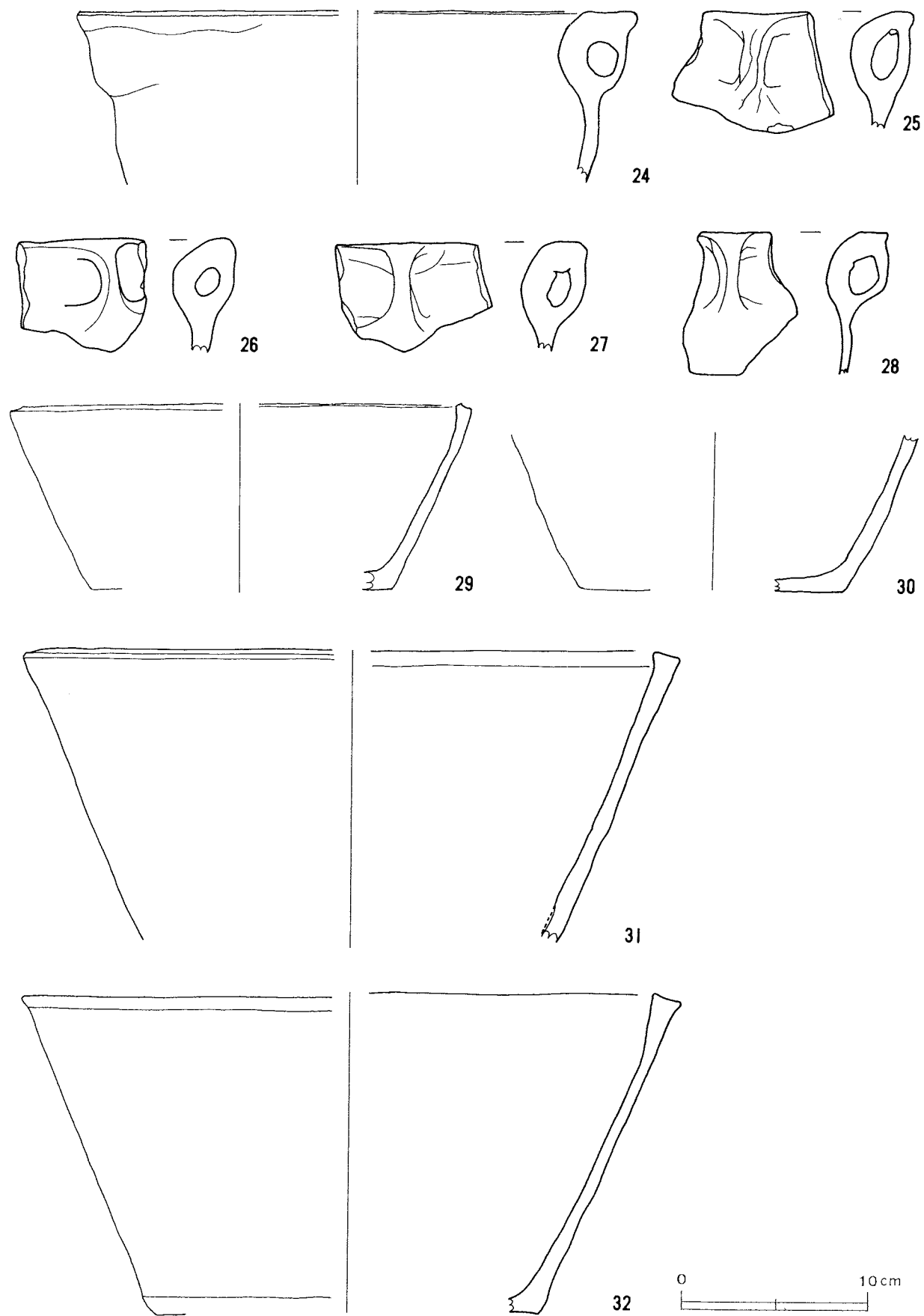
第66図 遺構外出土遺物実測図(3)



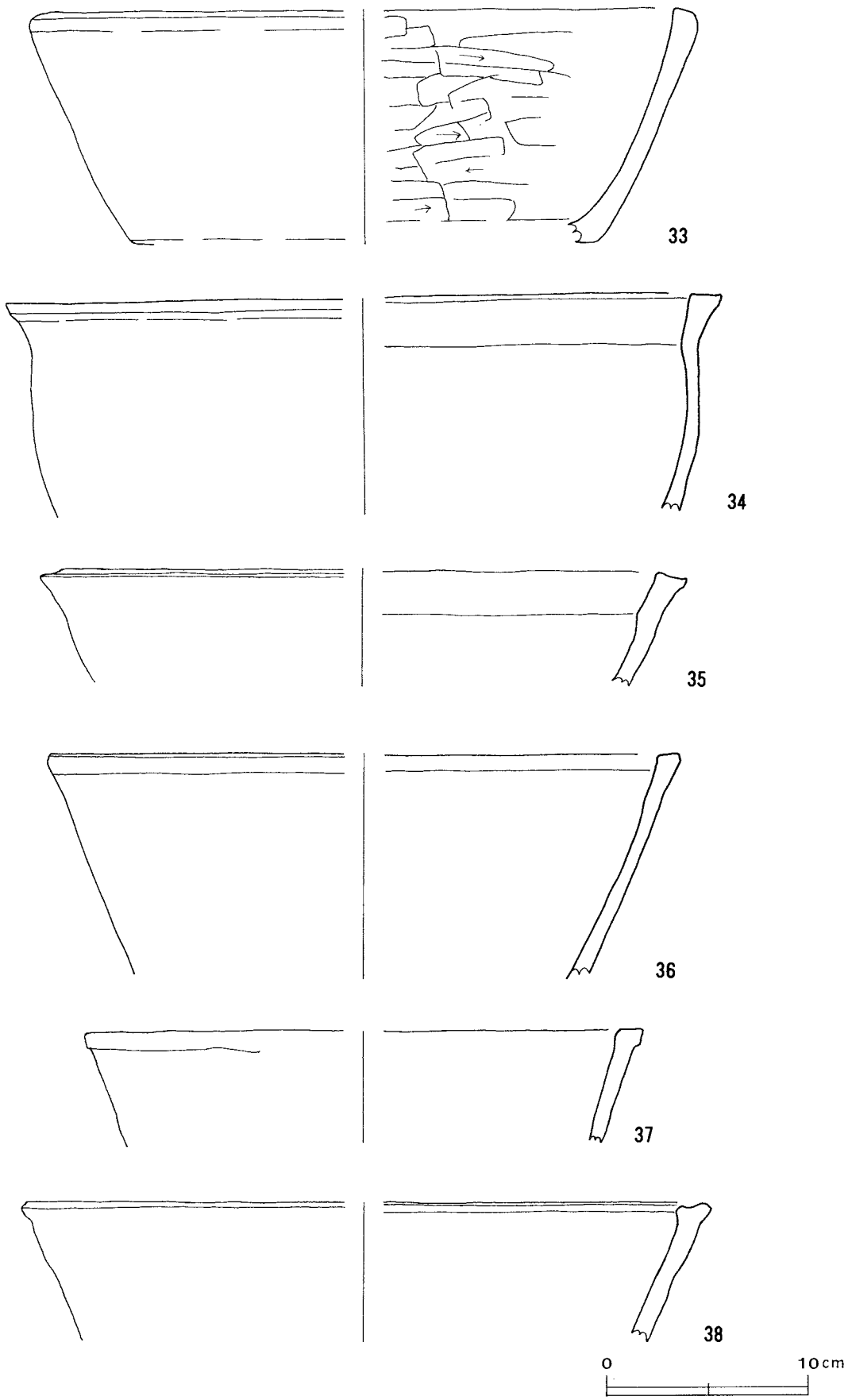
第67図 遺構外出土遺物実測図(4)



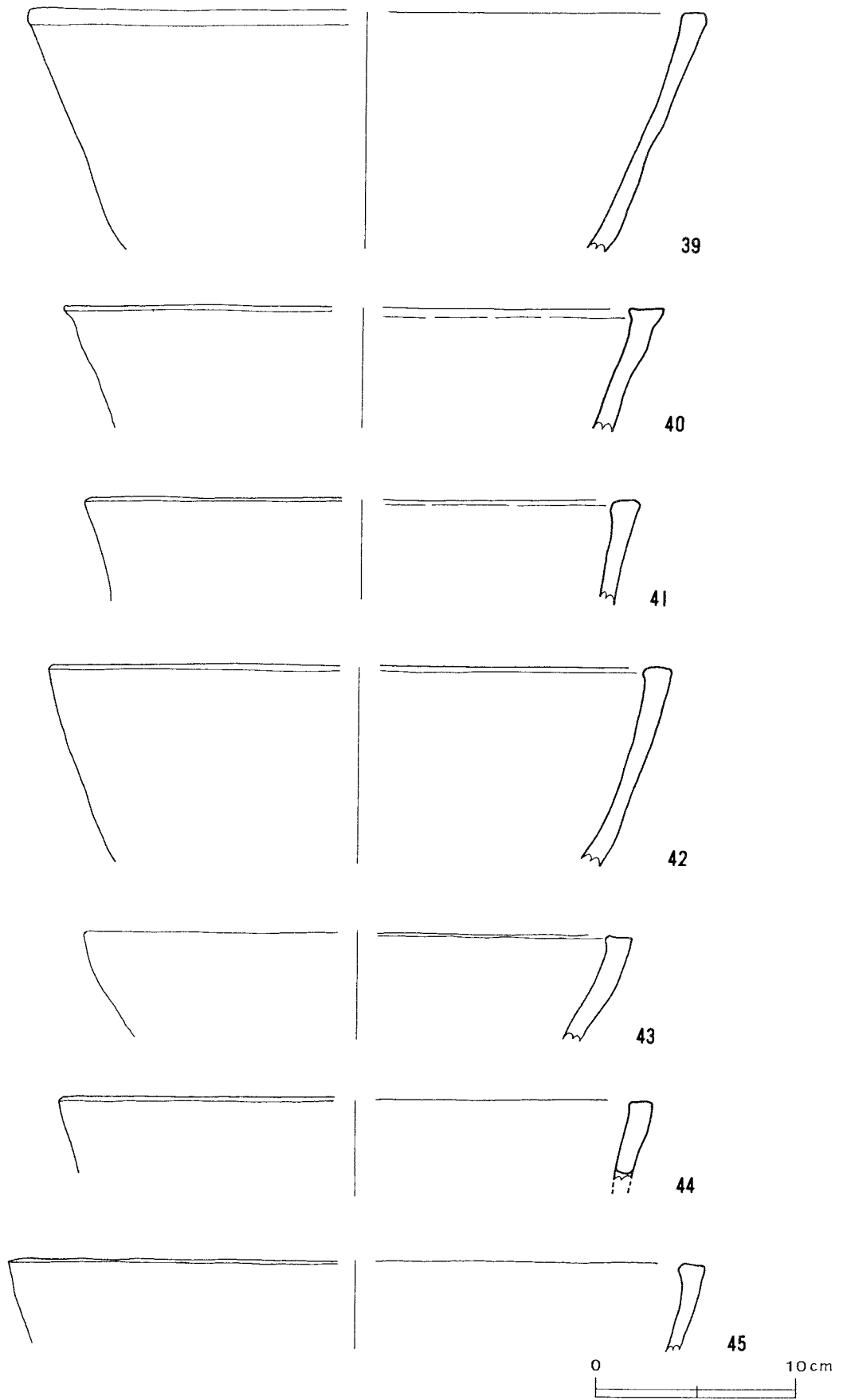
第68図 遺構外出土遺物実測図(5)



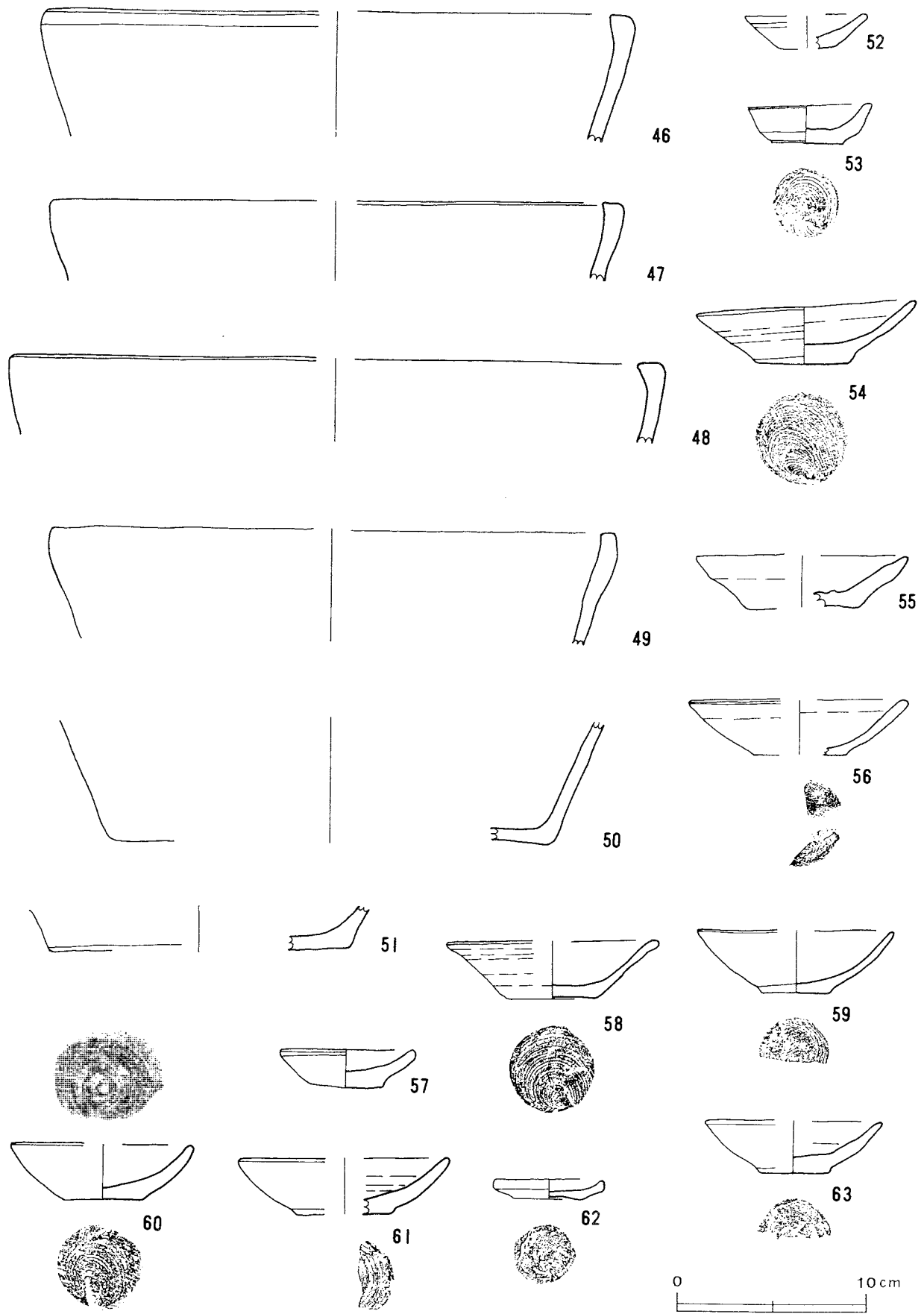
第69图 遺構外出土遺物実測図(6)



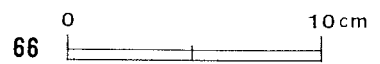
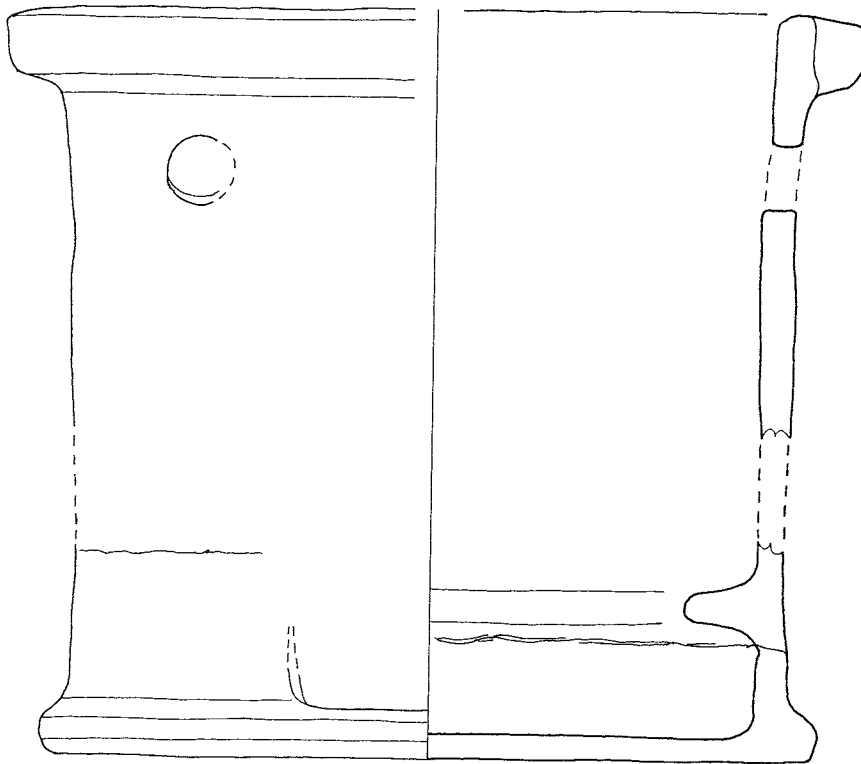
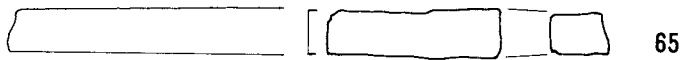
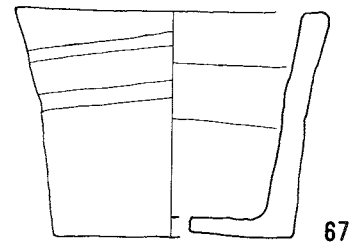
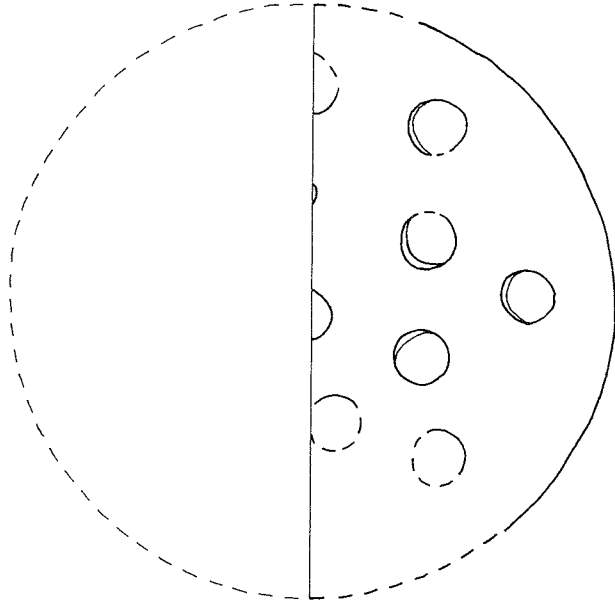
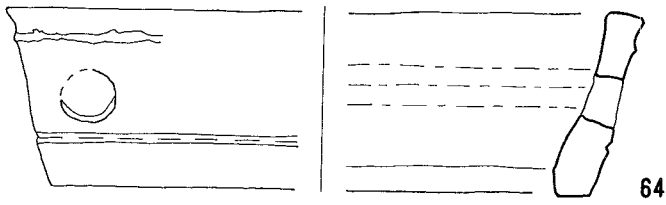
第70図 遺構外出土遺物実測図(7)



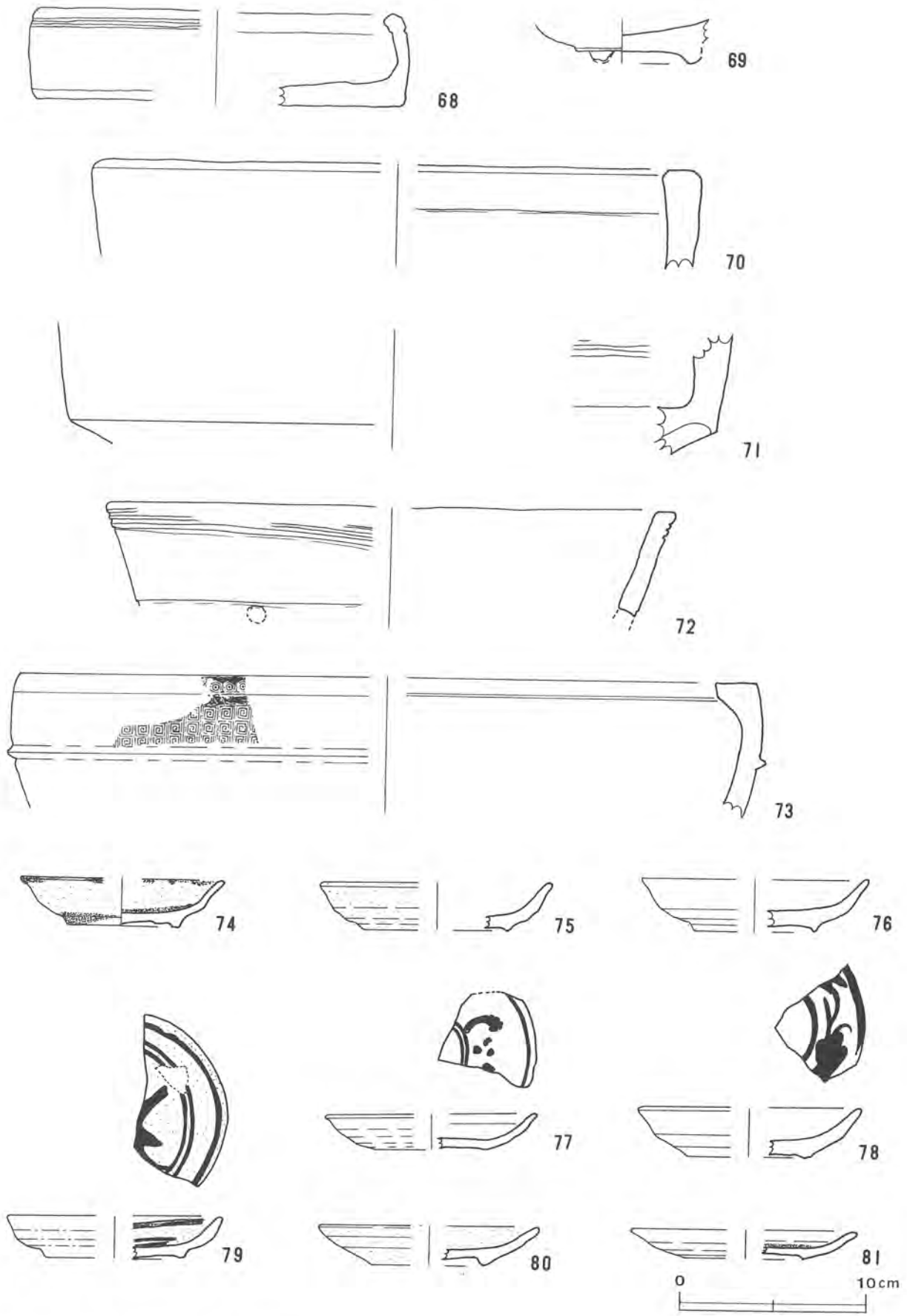
第71図 遺構外出土遺物実測図(8)



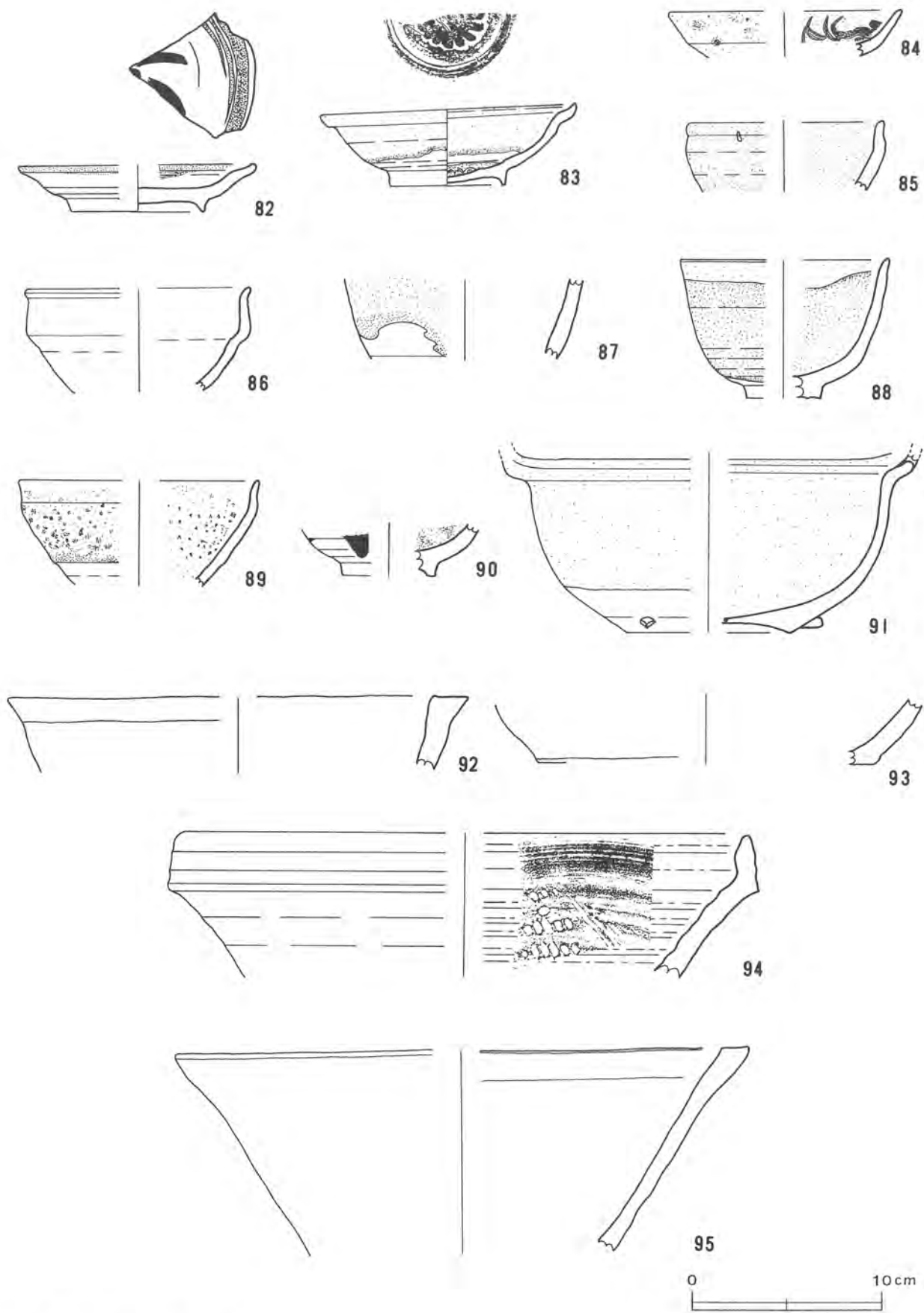
第72図 遺構外出土遺物実測図(9)



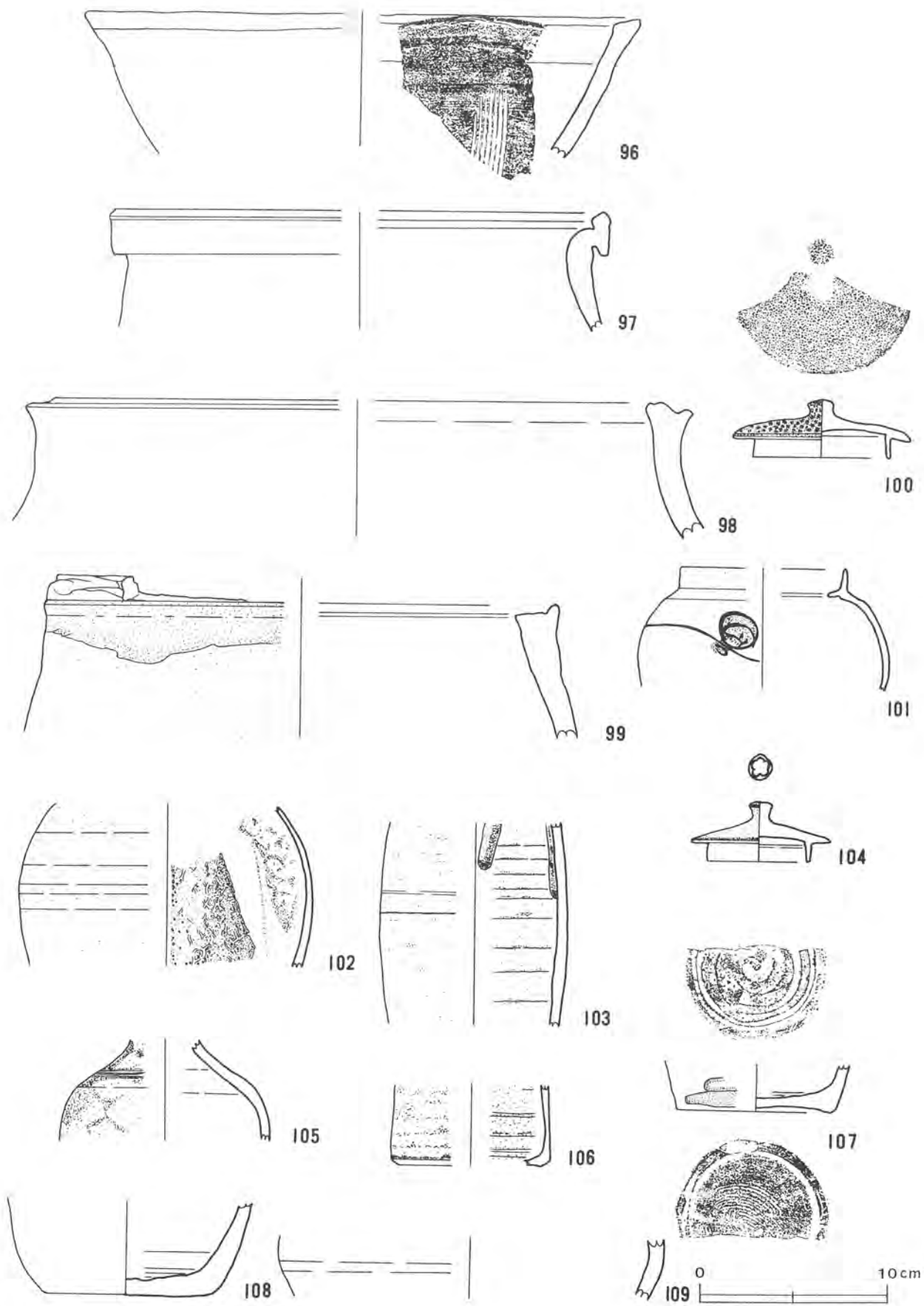
第73図 遺構外出土遺物実測図(10)



第74図 遺構外出土遺物実測図(11)



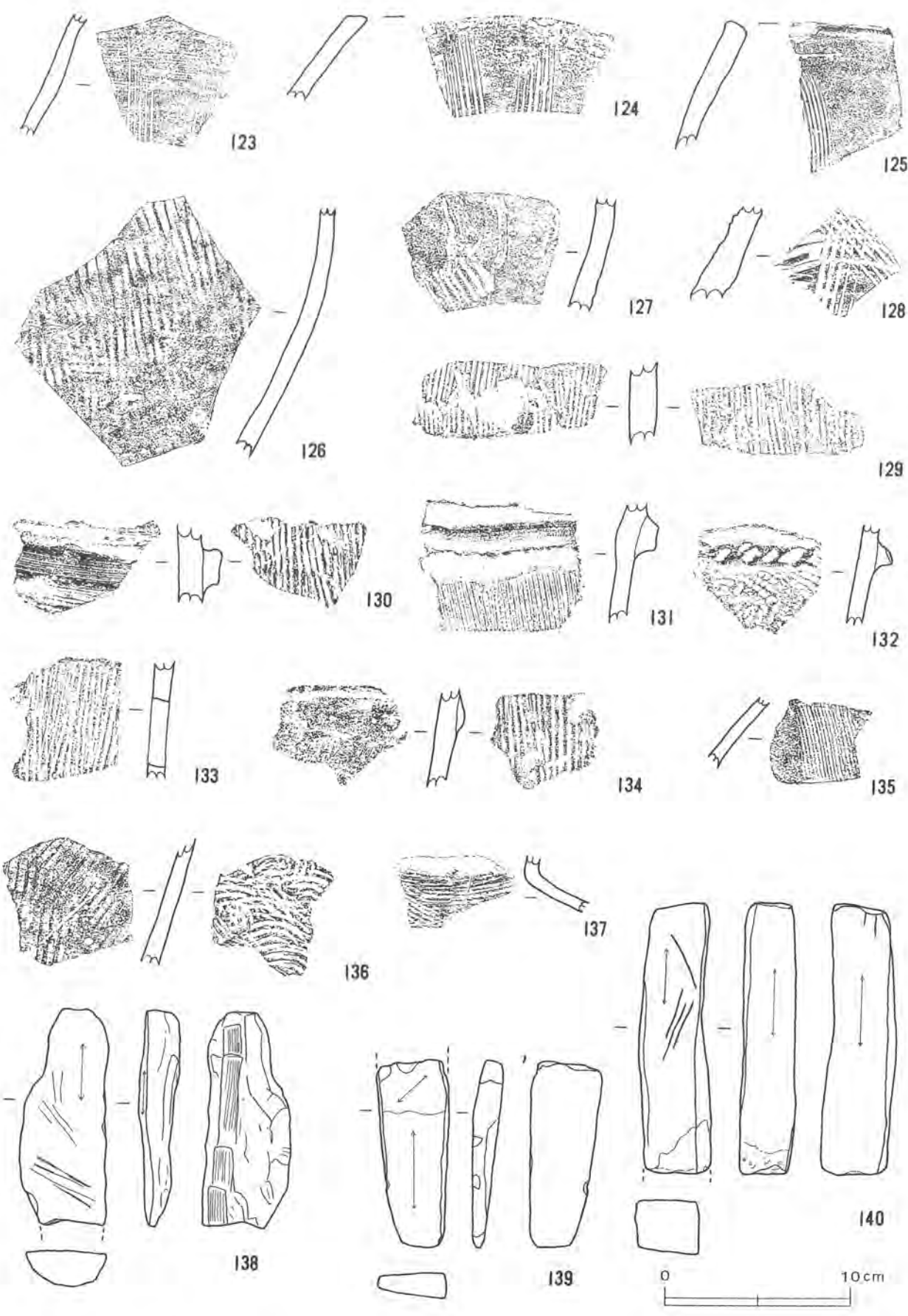
第75図 遺構外出土遺物実測図(12)



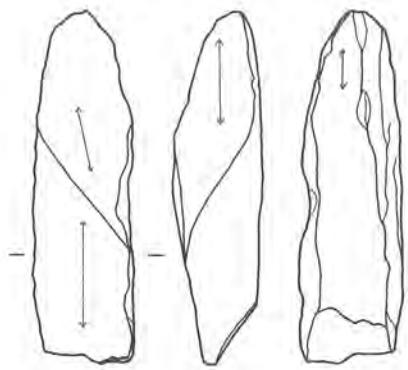
第76図 遺構外出土遺物実測図(13)



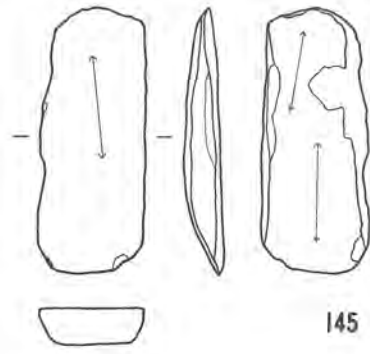
第77図 遺構外出土遺物実測図(14)



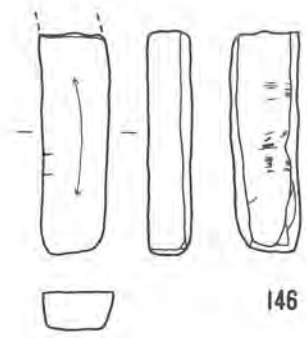
第78図 遺構外出土遺物実測図(15)



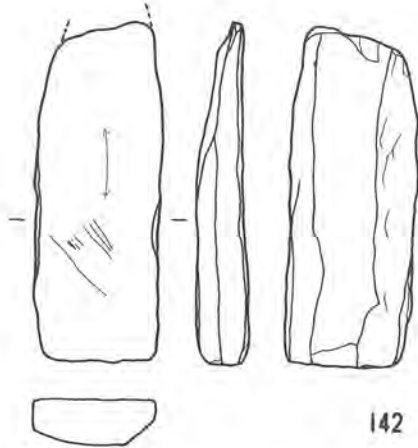
141



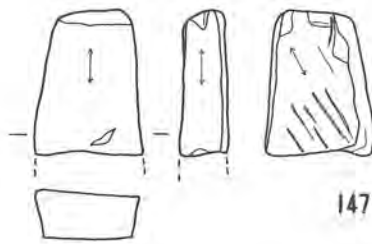
145



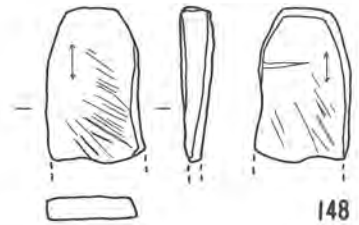
146



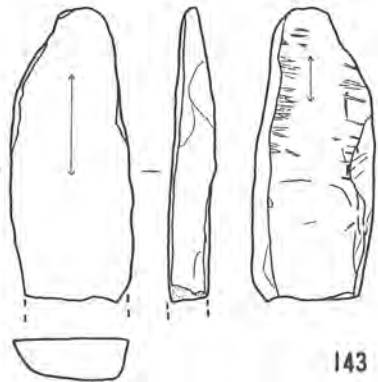
142



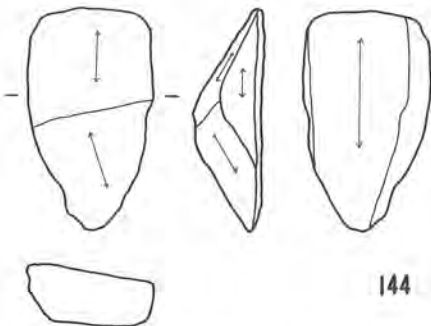
147



148



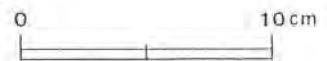
143



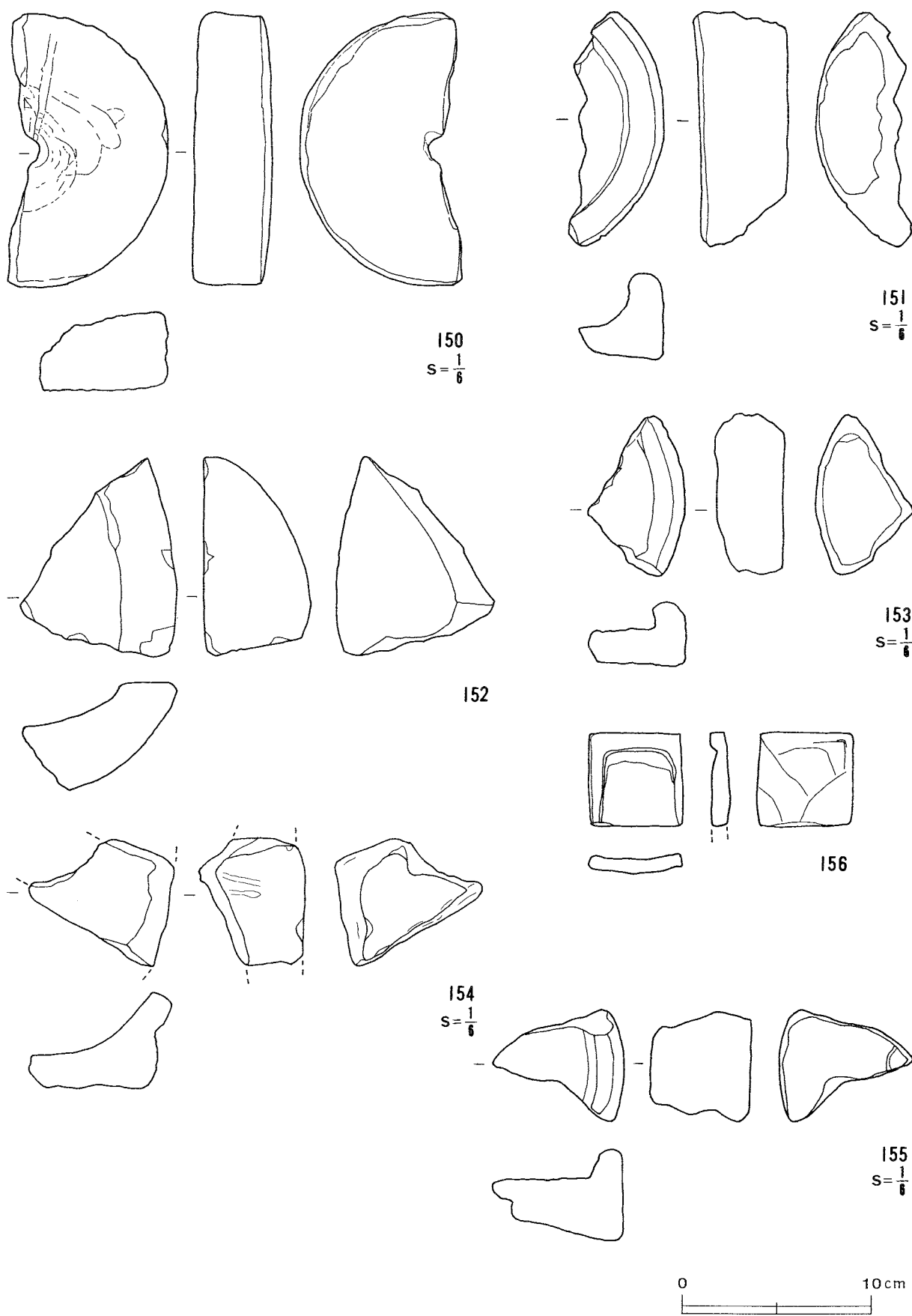
144



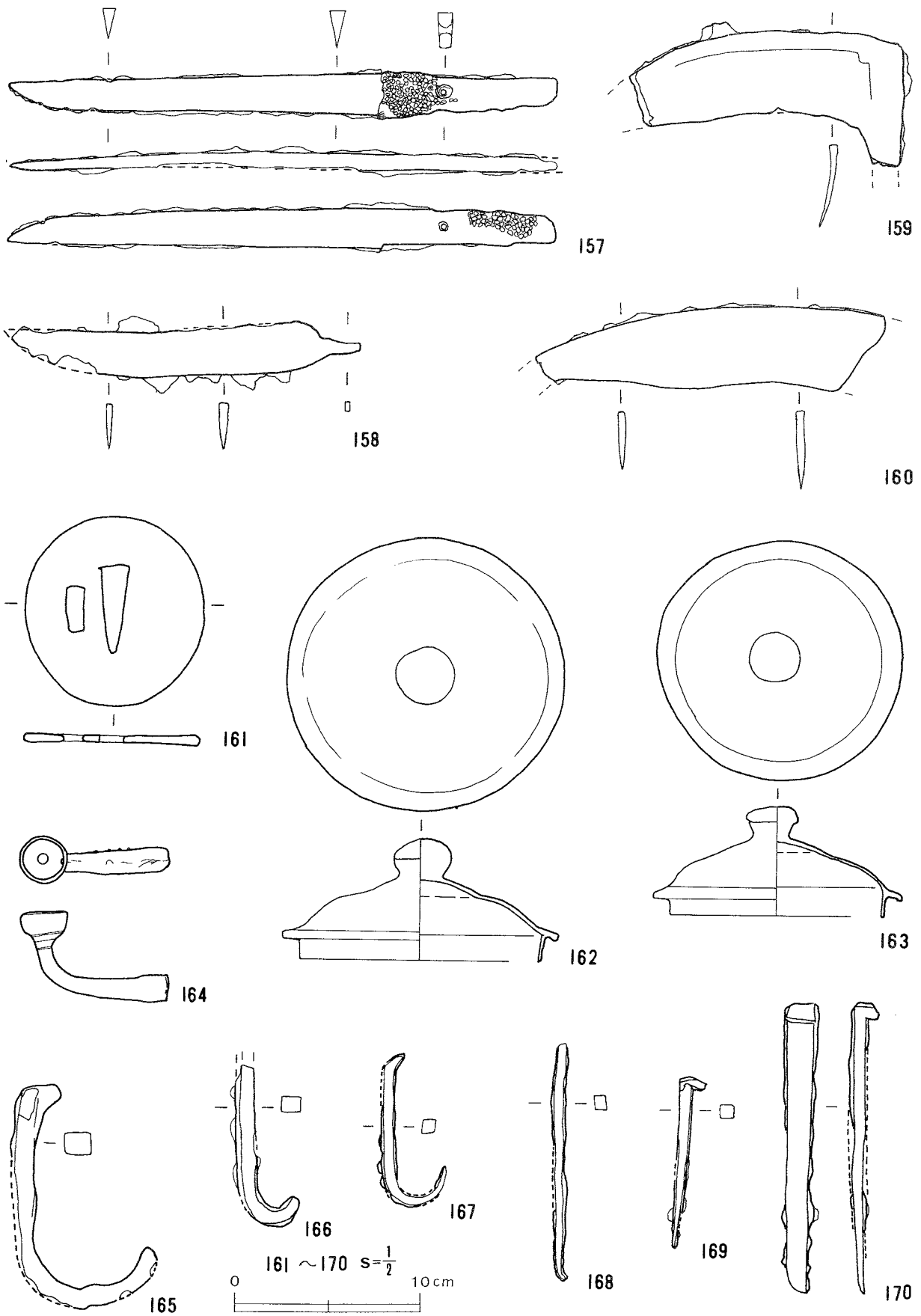
149



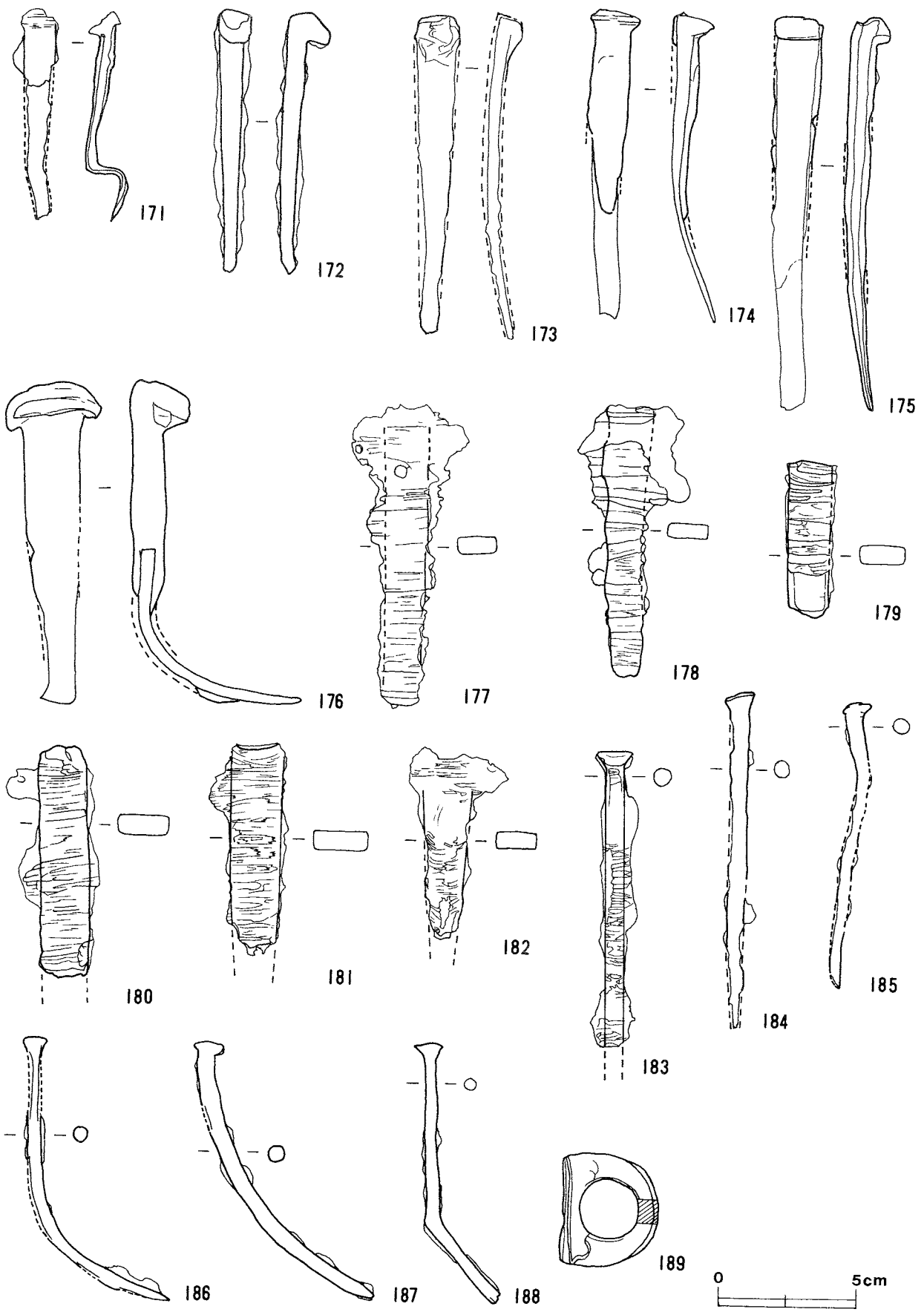
第79圖 遺構外出土遺物実測図(16)



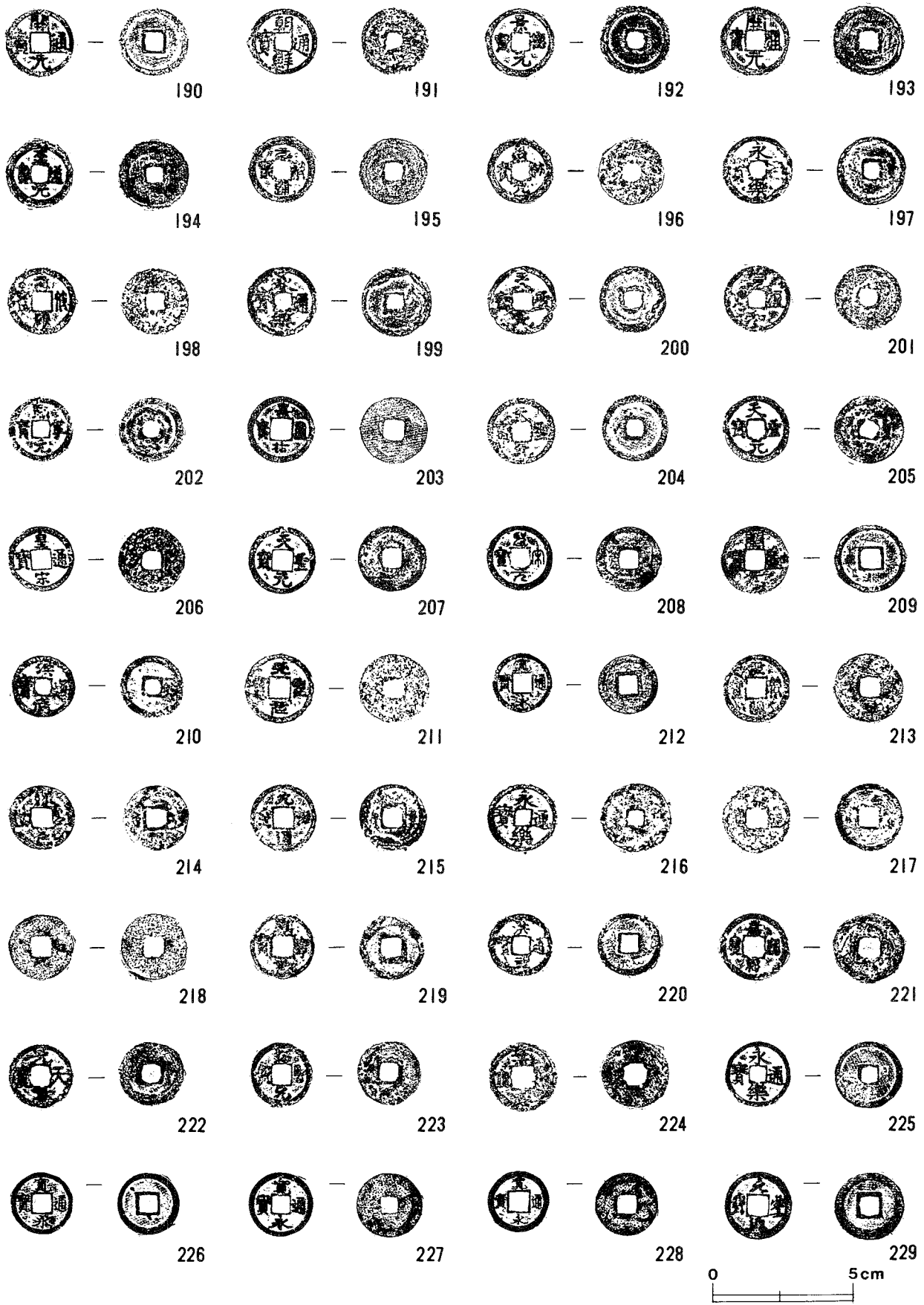
第80図 遺構外出土遺物実測図(17)



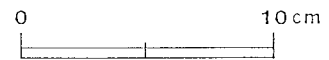
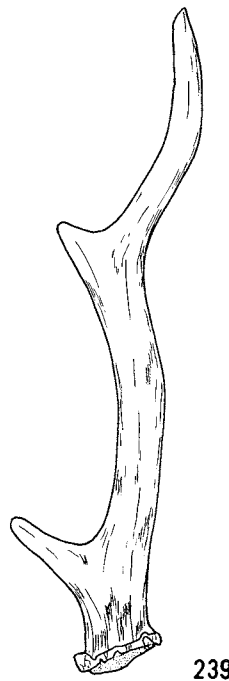
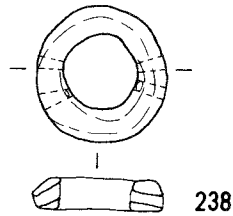
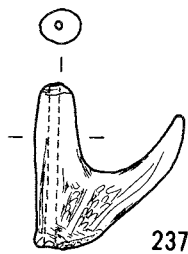
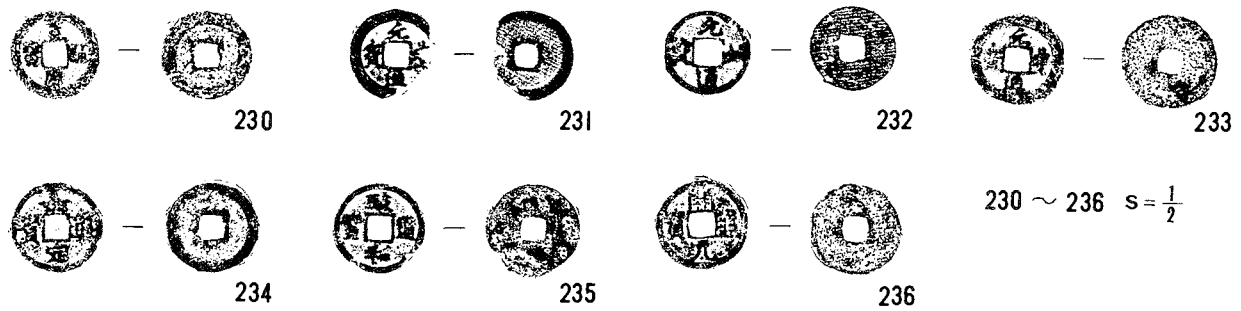
第81图 遺構外出土遺物実測図(18)



第82図 遺構外出土遺物実測図(19)



第83図 遺構外出土遺物実測図(20)



第84図 遺構外出土遺物実測図(21)

遺構外出土遺物観察表（土器・陶磁器）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第65図 8	内耳土鍋 土師質土器	A 33.3 B (16.1)	体部から口縁部片。体部は外上方へ直線的に立ち上がる。口縁部は体部との境に浅い凹線が巡り、外へ膨らむ。	体部、口縁部内外面横ナデ。上部部外側へつまみ出し。体部外面指頭圧痕。	砂粒・雲母・石英 長石・スコリア 橙色 普通	P 44 残存率70% F6j ₂ 区表採 外面煤付着
9	内耳土鍋 土師質土器	A [32.6] B (15.4)	体部から口縁部片。体部は外側へ直線的に立ち上がる。口縁部は耳の付く所で外へ膨らみ、内側に稜が巡る。	体部、口縁部内外面横ナデ。体部外面指頭圧痕。上部部外側へつまみ出し。器壁内部還元焼成。	砂粒・石英・長石 スコリア 橙色 普通	P 45 残存率20% F6j ₂ 区表採 外面煤付着
第66図 10	内耳土鍋 土師質土器	A [39.6] B (10.5)	体部から口縁部片。体部は内彎気味に開いて立ち上がり、口縁部はやや外に膨らむ。耳は内彎後外反。	体部、口縁部内外面横ナデ。体部外面指頭圧痕。	砂粒・雲母・石英 スコリア 明赤褐色 普通	P 46 残存率15% F6j ₂ 区 外面煤付着
11	内耳土鍋 土師質土器	A [33.8] B (11.6)	体部から口縁部片。体部は直線的に開いて立ち上がり口縁部は外反して膨らむ。耳は直立後外反し上部部に至る。	体部、口縁部内外面横ナデ。体部外面指頭圧痕。上部部外側へつまみ出し。器壁内部還元焼成。	砂粒・雲母・長石 スコリア 橙色 普通	P 47 残存率7% F6j ₂ 区表採 外面煤付着
12	内耳土鍋 土師質土器	A [31.3] B (6.6)	口縁部片。口縁部は外へ膨らみ上部部僅かに折り返しあり。耳は内彎気味に立ち上がり、外反して上部部に至る。	口縁部内外面横ナデ。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P 48 残存率3% F6j ₂ 区表採 外面煤付着

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第66図 13	内耳土鍋 土師質土器	A〔32.0〕 B〔12.9〕	体部から口縁部片。体部、口縁部は内彎気味に外傾して立ち上がる。口縁部はやや外に膨らむ。耳は内彎後外反。	体部、口縁部内外面横ナデ。上端部内側へつまみ出し。体部外面指頭圧痕。	砂粒・雲母・石英 礫 にぶい橙色 普通	P 64 残存率10% G5a区表採 外面煤付着
第67図 14	内耳土鍋 (焙烙型) 土師質土器	A〔26.9〕 B〔 8.6〕	体部から口縁部片。体部、口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部はやや外に膨らむ。耳は内彎後外反し口縁部へ。	体部、口縁部内外面横ナデ。体部外面指頭圧痕。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	P70, P71と同一か 残存率15%, H6j区, 外面煤付着
15	内耳土鍋 (焙烙型) 土師質土器	A〔28.9〕 B〔 7.5〕	体部から口縁部片。体部、口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部はやや外に膨らむ。耳は内彎後外反し口縁部へ。	体部、口縁部内外面横ナデ。体部外面指頭圧痕。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 71 残存率10% H6j区表採 外面 と体部内面煤付着
16	内耳土鍋 瓦質土器	A〔24.5〕 B〔 5.4〕	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がり、僅かに外へ膨らむ。耳は太く、直立後外反して上端部に至る。	口縁部内外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 長石 褐灰色 良好	P 111 残存率3% 二次面表採 P 106と同一か
17	内耳土鍋 土師質土器	A〔32.6〕 B〔 4.2〕	口縁部片。口縁部は外へ膨らんで立ち上がる。耳は直立後外反し、上端部に至る。	口縁部内外面横ナデ。	砂粒・長石 浅黄橙色 普通	P 112 残存率 3 % 二次面表採 外面煤付着
18	内耳土鍋 土師質土器	A〔28.2〕 B〔 6.0〕	口縁部片。口縁部は僅かに外へ膨らんで立ち上がる。耳は内彎後外反して口唇部に至る。	口縁部内外面横ナデ。	砂粒・石英・長石 スコリア、にぶい 赤褐色 普通	P 109 残存率 3 % 二次面表採 外面煤付着
19	内耳土鍋 土師質土器	A〔35.0〕 B〔 6.3〕	口縁部片。口縁部は僅かに外へ膨らんで立ち上がる。耳は内彎後外反して口唇部に至る。	口縁部内外面横ナデ。	砂粒・石英・長石 礫・スコリア 明赤褐色 普通	P 113 残存率 3 % 二次面表採
第68図 20	内耳土鍋 土師質土器	A〔32.4〕 B〔12.6〕	体部から口縁部片。体部、口縁部は内彎気味に外傾して立ち上がり、耳の外側が膨らむ。耳の下に穿孔あり。	体部、口縁部内外面横ナデ。体部外面指頭圧痕。	砂粒・雲母・石英 長石 赤橙色 普通	P 67 残存率15% G6e区表採 穿孔は焼成後
21	内耳土鍋 土師質土器	A〔37.0〕 B〔 9.0〕	体部から口縁部片。体部、口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。耳の付く所は内側へ凹む。耳は内彎後外反。	体部、口縁部内外面横ナデ後黒色処理を施す。体部、口縁部外面に指頭圧痕あり。上端部外側に折り返し。	砂粒・石英・長石 スコリア 黒褐色 普通	P 107 残存率15% トレンチ表採 内外面煤付着
22	内耳土鍋 土師質土器	A〔34.4〕 B〔 6.0〕	口縁部片。口縁部はわずかに外へ膨らむ。耳は内彎後外反し上端部に至る。	口縁部内外面横ナデ。上端部外側につまみ出し。	砂粒・雲母・長石 にぶい赤褐色 普通	P 108 残存率 3 % 二次面表採 内外面一部煤付着
23	内耳土鍋 土師質土器	A〔36.0〕 B〔 6.9〕	口縁部片。口縁部は耳の付け根が大きく凹む。耳は内彎後外反し上端部に至る。	口縁部内外面横ナデ。口縁部外面に指頭圧痕。	砂粒・雲母・石英 長石・スコリア 鈍い赤褐色 普通	P 114 残存率 3 % トレンチ表採 外面一部煤付着
第69図 24	内耳土鍋 土師質土器	A〔29.6〕 B〔 9.3〕	体部から口縁部片。口縁部、耳の下部の付け根が大きく凹む。耳は内彎後外反し上端部に至る。	体部、口縁部内外面横ナデ後内面の黒色処理を施す。体部外面に指頭圧痕。上端部外側に折り返し。	砂粒・石英・長石 礫・スコリア 褐灰色 普通	P 117 残存率 5 % 二次面表採 外面煤付着
25	内耳土鍋 土師質土器	B〔 6.4〕	口縁部片。口縁部は僅かに外へ膨らんで立ち上がる。耳は内彎気味に立ち上がり、外反して上端部に至る。	口縁部内外面横ナデ。外面指頭圧痕。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	P 110 残存率 3 % 二次面表採 外面煤付着
26	内耳土鍋 土師質土器	B〔 6.0〕	口縁部片。口縁部は僅かに外へ膨らんで立ち上がる。耳は内彎後外反して口唇部に至る。	口縁部内外面横ナデ後黒色処理。	砂粒・石英・長石 礫・スコリア、オ リーブ黒色 普通	P 115 残存率 3 % 一次面表採
27	内耳土鍋 土師質土器	B〔 6.0〕	口縁部片。口縁部は下部の耳の付け根で凹み外へ膨らんで立ち上がる。耳はくの字状に立ち上がり上端部に至る。	口縁部内外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 長石 にぶい褐色 普通	P 116 残存率 3 % B3f区二次面表採 外面煤付着
28	内耳土鍋 土師質土器	B〔 7.7〕	口縁部片。口縁部は下部の耳の付け根で大きく凹んだ後、外へ膨らんで立ち上がる。耳は内彎後外反し上端部へ。	口縁部内外面横ナデ。器壁薄い。	砂粒・雲母・石英 にぶい橙色 普通	P 118 残存率 3 % B3区二次面表採
29	内耳土鍋 土師質土器	A〔24.5〕 B 9.7 C〔16.0〕	底部から口縁部片。平底で、体部、口縁部は外傾して直線的に立ち上がる。口縁部内側には、凹みが巡る。	底裏ナデ調整。体部、口縁部内外面横ナデ。体部外面指頭圧痕。上端部内側上方へつまみ上げ。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	P 35 残存率15% F5c7区表採 体部 口縁部外面煤付着

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第69図 30	内耳土鍋 土師質土器	B(8.3) C(14.0)	底部、体部片。底部は平底で、体部は外傾して直線的に立ち上がる。底部と体部の境に凹線が巡る。	底部内外面ナデ調整。体部内外面横ナデ。体部内外面指頭圧痕。	砂粒・雲母・石英 スコリア にぶい橙色 普通	P 38 残存率5% F5d区表採 体部外面煤付着
31	内耳土鍋 土師質土器	A(35.0) B(15.3)	体部、口縁部片。体部、口縁部は外傾して直線的に立ち上がる。口縁部内側には、凹みが巡る。	体部、口縁部内外面横ナデ。体部、口縁部外面指頭圧痕。上端部内側につまみ出し。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	P 37 残存率15% F5d区表採 内面の 一部と外面に煤付着
32	内耳土鍋 土師質土器	A(35.0) B 17.2 C(20.2)	底部から口縁部片。平底で、体部、口縁部は外傾して直線的に立ち上がる。口縁部は若干内彎気味。	底裏へラ調整。体部、口縁部内外面横ナデ。体部内外面と口縁部外面指頭圧痕。上端部外側につまみ出し。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	P105,17% ,H6区二 次面表採, 外面と 底部内面に煤付着
第70図 33	内耳土鍋 瓦質土器	A(32.9) B 11.8 C(23.4)	底部から口縁部片。平底で体部、口縁部は外傾して内彎気味に立ち上がる。	底裏へラ調整。体部、口縁部内外面へラナデ。上端部外側へラナデによる面取り調整。	砂粒・雲母・石英 長石・礫・スコリア 灰色 普通	P 106 残存率10% 二次面表採
34	内耳土鍋 土師質土器	A(35.6) B(10.9)	体部、口縁部片。体部は内彎気味にほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。内面の両部境に稜が巡る。	体部、口縁部内外面横ナデ。外面指頭圧痕。上端部外側へつまみ出し。	砂粒・雲母・石英 スコリア 黒褐色 普通	P 119 残存率10% No.13,14トレンチ間 体部外面煤付着
35	内耳土鍋 土師質土器	A(32.2) B(5.7)	体部、口縁部片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。内面の両部境に稜が巡る。	体部、口縁部内外面横ナデ。外面指頭圧痕。上端部外側へつまみ出し。	砂粒・雲母・石英 スコリア 灰黄褐色 普通	P 120 残存率5% E4区表採 内外面煤付着
36	内耳土鍋 土師質土器	A(31.5) B(11.6)	体部、口縁部片。体部は外傾して直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	体部、口縁部内外面横ナデ。外面指頭圧痕。上端部外側へつまみ出し後、へラで面取り調整。	砂粒・雲母・石英 スコリア 褐灰色 普通	P 123 残存率15% E4区二次面表採 外面煤付着
37	内耳土鍋 土師質土器	A(29.2) B(5.7)	体部、口縁部片。体部は外傾して直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	体部、口縁部内外面横ナデ。外面指頭圧痕。上端部外側へつまみ出し後、へラで面取り調整。	砂粒・石英・長石 礫・スコリア 褐灰色 普通	P 124 残存率3% E4区二次面表採 外面煤付着
38	内耳土鍋 土師質土器	A(34.4) B(7.0)	体部、口縁部片。体部は外傾して直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	体部、口縁部内外面横ナデ。外面指頭圧痕。上端部内、外側へつまみ出し。器壁内部還元焼成。	砂粒・雲母・石英 長石・スコリア にぶい橙色 普通	P 127 残存率3% 二次面表採 外面に薄く煤付着
第71図 39	内耳土鍋 土師質土器	A(33.7) B(12.7)	体部、口縁部片。体部、口縁部は外傾して内彎気味に立ち上がる。	体部、口縁部内外面横ナデ。外面指頭圧痕。上端部外側へつまみ出し後、へラで面取り調整。内外面黒色処理。	砂粒・雲母・石英 長石・スコリア 黒色 普通	P 125 残存率10% 二次面表採 外面煤付着
40	内耳土鍋 土師質土器	A(29.8) B(6.2)	体部、口縁部は外傾して直線的に立ち上がり、口縁部は器壁を厚くする。	体部、口縁部内外面横ナデ。外面指頭圧痕。上端部内、外側へつまみ出し。器壁内部還元焼成。	砂粒・雲母・石英 長石 にぶい橙色 普通	P 126 残存率5% E4b区表採 内外面煤付着
41	内耳土鍋 土師質土器	A(27.6) B(5.3)	口縁部片。口縁部は僅かに外反した後内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面横ナデ。外面指頭圧痕。上端部内、外側へつまみ出し。	砂粒・石英・長石 スコリア 褐灰色 普通	P 128 残存率3% No.14トレンチ 外面煤付着
42	内耳土鍋 瓦質土器	A(27.6) B(5.3)	体部、口縁部片。体部、口縁部は外傾して僅かに内彎しながら立ち上がる。	体部、口縁部内外面横ナデ。外面指頭圧痕。	砂粒・雲母・石英 長石 灰色 良好	P 134 残存率12% 二次面表採 外面煤付着
43	内耳土鍋 土師質土器	A(27.2) B(5.4)	口縁部片。口縁部は厚みを増しながら内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 スコリア にぶい橙色 普通	P 135 残存率5% 二次面表採 外面煤付着
44	内耳土鍋 土師質土器	A(29.4) B(4.0)	口縁部片。口縁部は厚みを増しながら内彎気味に立ち上がる。口縁部最下部に穿孔。	口縁部内外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 スコリア 橙色 普通	P 136 残存率3% No.12トレンチ表採
45	内耳土鍋 土師質土器	A(34.6) B(4.5)	口縁部片。口縁部は厚みを増しながら内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 スコリア にぶい橙色 普通	P 139 残存率3% No.47トレンチ表採
第72図 46	内耳土鍋 瓦質土器	A(31.1) B(7.0)	口縁部片。口縁部は厚みを増しながら内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面横ナデ。外面指頭圧痕。	砂粒・雲母・石英 長石・スコリア 褐灰色 普通	P 138 残存率5% 二次面表採 外面煤付着
47	内耳土鍋 土師質土器	A(30.4) B(4.3)	口縁部片。口縁部は厚みを増しながら内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英・ス コリア・長石 にぶい赤褐色 普通	P 140 残存率2% 二次面表採 外面煤付着

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第27図 48	内耳土鍋 土師質土器	A〔35.0〕 B〔4.3〕	口縁部片。口縁部は厚みを増しながら内彎気味に立ち上がる。上端部内側へやや突出。	口縁部内外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 橙色 普通	P142 残存率2% 二次面表採 外面に薄く煤付着
49	内耳土鍋 土師質土器	A〔30.0〕 B〔6.0〕	口縁部片。口縁部は厚みを増しながら内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面横ナデ。外面指頭圧痕。	砂粒・雲母・石英 長石・スコリア にぶい橙色 普通	P141 残存率5% G6区二次面表採 外面に薄く煤付着
50	内耳土鍋 土師質土器	B〔6.7〕 C〔23.1〕	底部から体部片。平底で体部は外傾し直線的に立ち上がる。	底裏ヘラナデ。底部内面及び体部内外面横ナデ。体部外面指頭圧痕。被二次焼成。	砂粒・石英・長石 赤灰色 普通	P144 残存率5% No.14トレンチ表採 外面一部煤付着
51	内耳土鍋 土師質土器	B〔2.4〕 C〔16.0〕	底部から体部片。平底で体部は外傾して立ち上がる。内面は底部から体部へなだらかに移行する。	底部、体部内面横ナデ。底裏はヘラナデ。底部、体部外面の境の稜は指押圧による調整。	砂粒・雲母・長石 スコリア 灰褐色 良好	P146 残存率2% 二次面表採 体部外面煤付着
52	小皿 土師質土器	A〔6.5〕 B 1.8 C〔3.2〕	底部から口縁部片。底部は平底。体部から口縁部は直線的に立ち上がる。	水挽き成形。底部、切り離した後ナデ調整。	砂粒・雲母 橙色 普通	P43 残存率45% F6i ₁ 区表採
53	小皿 土師質土器	A 6.6 B 2.2 C 3.8	口縁部一部欠損。底部は平底でやや突出。体部下半に若干の張り出しが巡り口縁部へ内彎気味に立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母・礫 スコリア にぶい褐色 普通	P28 残存率90% E4a7区表採
54	皿 土師質土器	A 11.6 B 2.9 C 4.9	底部から口縁部片。底部は平底でやや突出。体部、口縁部はほぼ直線的に立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母・礫 にぶい褐色 普通	P42 残存率60% F6g ₂ 区表採
55	皿 土師質土器	A〔11.2〕 B 2.8 C〔6.0〕	底部から口縁部片。底部は平底で突出する。体部、口縁部はほぼ直線的に立ち上がる。	水挽き成形。底部、切り離した後ナデ調整。	砂粒・雲母・スコリア・石英・礫 橙色 普通	P66 残存率40% G6i ₂ 区表採
56	皿 土師質土器	A 11.6 B 3.0 C〔4.8〕	底部から口縁部片。底部は平底。体部から口縁部は内彎気味に立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア・礫 にぶい黄褐色 普通	P75 残存率45% E5h ₇ 区表採
57	小皿 土師質土器	A 7.1 B 2.1 C 3.6	口縁部一部欠損。底部は平底でやや突出。体部から口縁部は内彎気味に立ち上がる。	水挽き成形。底部、切り離した後ナデ調整。	砂粒・雲母・石英 長石・スコリア 橙色 普通	P82 残存率99% 表採
58	皿 土師質土器	A〔11.4〕 B 3.1 C 4.7	底部から口縁部片。底部は平底。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P76 残存率25% 二次面表採
59	皿 土師質土器	A〔10.4〕 B 3.3 C 3.8	底部から口縁部片。底部は平底でやや突出。体部、口縁部は内彎しながら外傾して立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母・石英 長石 にぶい橙色 普通	P78 残存率25% 二次面表採
60	皿 土師質土器	A〔9.8〕 B 3.0 C 4.4	底部から口縁部片。平底で、体部、口縁部は内彎しながら外傾して立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り後ナデ調整。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P79 残存率60% 二次面表採
61	皿 土師質土器	A〔11.2〕 B 3.1 C 5.0	底部から口縁部片。底部は平底でやや突出。体部、口縁部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P80 残存率35% 二次面表採
62	小皿 土師質土器	A 5.9 B 1.0 C 5.8	口縁部一部欠損。底部は平底でやや上げ底。体部は僅かな立ち上がりを見せ口縁部は外面が垂直に立ち上がる。	水挽き成形。底部切り離した後ナデ調整を施す。	砂粒 浅黄褐色 普通	P83 残存率99% 二次面表採
63	皿 土師質土器	A〔9.3〕 B 2.7 C〔4.0〕	底部から口縁部片。底部は平底でやや突出。体部、口縁部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母 浅黄褐色 普通	P81 残存率35% 二次面表採 外面一部煤付着
第73図 64	七輪(五徳) 土師質土器	A〔25.0〕 B 7.4 C〔21.2〕	全体にやや外傾して立ち上がる。中位に径2.1cmの円孔がある。	轆轤成形。内面最下部にヘラによる面取り痕が巡る。外面下位と上位に沈線が一条ずつ巡る。	砂粒・石英・長石 スコリア 橙色 普通	P51 残存率10% F6i ₁ 区表採 内外面煤付着

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第73図 65	七輪(さな) 土師質土器	直径 23.8 厚さ 1.7	厚さ1.7cmの円板に、径2.1cmの円孔が 推定で15個あけられている。	轆轤成形後上面ナデ調整。	砂粒・雲母・石英 長石・礫・スコリア にぶい赤褐色 普通	P 52 残存率35% F6i1区表採 上面煤・灰・錆付着
66	七輪 土師質土器	A[34.0] C 30.4	底部片と体部中位から口縁部片。体部 下端に灰掻き出し窓あり。下位内面には はさな受けが出る。上位に円孔あり。	轆轤成形後ナデ調整。	砂粒・石英・長石 礫・スコリア にぶい橙色 普通	P 49,50 残存率20% F6i1区表採 内外面煤付着
67	植木鉢 土師質土器	A 12.4 B 9.0 C 9.3	平底。底部中央に径1.4cmの円孔。体 部から口縁部はやや反り気味に直立し て立ち上がる。器壁厚い。	轆轤成形。底部静止ヘラ切り。	砂粒・雲母・長石 礫・スコリア 明赤褐色 普通	P 53 残存率100% F6i1区表採
第74図 68	火鉢か 土師質土器	A[19.2] B 5.1 C[19.4]	平底。体部は内彎気味に直立して立ち 上がる。	轆轤成形。体部最下位にヘラによる面 取りが巡る。口縁部外面に沈線が一条 巡る。	砂粒・雲母・長石 スコリア 橙色 普通	P 39 残存率15% F5a1区表採 外面煤付着
69	香炉 土師質土器	A(9.2) B(2.4) C 5.8	底部から体部片。底部平底で突出し三 足がつく。	水挽き成形。底部回転糸切り後ナデ調 整。内外面黒色処理。	砂粒・雲母・石英 スコリア にぶい橙色 普通	P 18 残存率30% B3g7区表採
70	火鉢か 土師質土器	A[32.6] B(5.3)	体部から口縁部片。ほぼ直立して立ち 上がる。器壁厚い。	轆轤成形。	砂粒・雲母・石英 長石・礫・スコリア にぶい橙色 普通	P 95 残存率5% 二次面表採 外面煤付着
71	火鉢か 土師質土器	B 6.5	底部から体部片か。底部と体部の境の 角の部分に斜めに面取りが巡る。	轆轤成形。面取り部ヘラ削り。	砂粒・石英・長石 礫・スコリア にぶい橙色 普通	P 96 残存率7% 二次面表採 体部外面煤付着
72	鉢か 土師質土器	A[30.4] B(5.8)	体部から口縁部片。外傾して立ち上 がり、体部に径1.0cmの円孔があく。口 縁部外面に三条の沈線が波状に巡る。	轆轤成形。	砂粒・雲母・石英 長石・スコリア 橙色 普通	P 68 残存率5% G6i2区表採 内面に二次焼成痕
73	火鉢 瓦質土器	A[39.6] B(7.3)	体部から口縁部片。内彎しながら直立 して立ち上がる。体部、口縁部に突帯 が2本(1本は欠落)巡る。	轆轤成形。2本の突帯間に3段の雷文 が巡る。欠落した口縁部の突帯の上部 に亀甲文が1段巡る。	砂粒・長石・スコ リア 暗灰色 普通	P 104 残存率3% H6区二次面表採
74	丸皿 陶器	A[11.0] B 2.6 C 6.0	底部から口縁部片。削り出し高台。体 部は内彎気味に外傾して立ち上がり、 口縁部が外反する。	水挽き成形。底裏に削り出しによる段 差がつく。底裏に胎土目積みによる目 積み痕がある。底裏中央部以外施釉。	砂粒 オリブ、褐灰色 灰釉 普通	P 84 美濃 残存率60% 試掘トレンチ
75	丸皿 陶器	A[12.4] B 2.6 C[7.8]	底部から口縁部片。削り出し三角高台 体部は内彎気味に外傾して立ち上がり 口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。全面施釉。	砂粒・石英 灰白色、長石釉 普通	P 87 志野 残存率20% 一次面表採
76	丸皿 陶器	A[12.0] B 2.8 C[6.4]	底部から口縁部片。削り出し三角高台 体部、口縁部は内彎気味に外傾して立 ち上がる。	水挽き成形。全面施釉。被二次焼成。	砂粒 灰白色、長石釉 普通	P 26 志野 残存率30% D4区表採
77	丸皿 陶器	A[11.4] B 1.9 C[6.0]	底部から口縁部片。平底で体部は外傾 して立ち上がり、口縁部は僅かに外反 する。	水挽き成形。見込みに二重の円、その 外側に幾何文、口縁部に一重の円が筆 書きされる(鉄絵)。全面施釉。	砂粒・スコリア 淡黄色、鉄釉 長石灰釉 普通	P 90 志野織部 残存率15% 一次面表採
78	丸皿 陶器	A[11.9] B 2.7 C[6.6]	底部から口縁部片。削り出し高台で高 台高が低い。体部は内彎気味に外傾し て立ち上がり、口縁部がやや外反。	水挽き成形。見込み外周部と口縁部上 端に鉄絵の円。その間に草花文が筆書 きされる。全面施釉。被二次焼成。	砂粒・長石・スコ リア、淡黄色、鉄釉 長石灰釉 普通	P 88 志野織部 残存率20% 一次面表採
79	丸皿 陶器	A[11.6] B 2.2 C[7.8]	底部から口縁部片。削り出し三角高台 体部、口縁部は内彎気味に外傾して立 ち上がる。底裏に胎土目積み痕。	水挽き成形。見込みに鉄絵草花文、見 込み外周部に二重の円、口縁部に一重 の円が筆書きされる。全面施釉。	砂粒・長石 淡黄色、鉄釉 長石灰釉 普通	P 85 志野織部 残存率30% 一次面表採
80	丸皿 陶器	A[11.9] B 2.1 C[6.3]	底部から口縁部片。削り出し高台。高 台外面は削りなし。体部、口縁部は内 彎気味に外傾して立ち上がる。	水挽き成形。全面施釉。	砂粒・石英・スコ リア 灰白色 長石釉 普通	P 86 志野 残存率30% 一次面表採
81	丸皿 陶器	A[12.1] B 1.6 C[6.3]	底部から口縁部片。削り出し高台。高 台外面は削りなし。体部内彎気味に外 傾して立ち上がり、口縁部僅かに外反。	水挽き成形。底裏に胎土目積み痕。摩 耗が激しく釉の判別がつかない。	砂粒・スコリア 淡黄色 普通	P 91 ? 残存率10% 一次面表採
第75図 82	丸皿 陶器	A[12.6] B 2.5 C[7.0]	底部から口縁部片。削り出し三角高台 体部は内彎気味に外傾して立ち上がり 口縁部は折縁となっている。	水挽き成形。見込みに鉄絵による草花 文。折縁部に銅緑釉。	砂粒・長石・スコ リア、灰白色、鉄釉 銅緑釉 良好	P 89 織部 残存率15% B3区表採

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第75図 83	小鉢 陶器	A 13.5 B 4.4 C 6.0	底部から口縁部片。削り出し高台の外 面垂直内面内彎。体部は内彎気味に外 傾して立ち上がり、口縁部は折縁。	水挽き成形。見込み外周に輪ハゲ、中 央に菊の印花文がありへこむ。体部低 位から底部の外面は無釉。	砂粒 灰白色 長石釉 普通	P 74 志野 残存率50% 17a1区表採
84	丸皿 陶器	A [10.3] B 2.4	体部から口縁部片。体部は内彎気味に 外傾して立ち上がり、口縁部は直線的 に立ち上がる。	水挽き成形。全面施釉。被二次焼成。 体部内面に鉄絵草花文。	砂粒・石英・長石 灰白色、鉄釉・ 長石釉 普通	P 87 志野織部 残存率10% 一次面表採
85	天目茶碗 陶器	A [10.2] B (3.7)	体部から口縁部片。体部は外傾して立 ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。 口縁部は直立後やや外反する。	水挽き成形。内外面施釉。	砂粒 褐色 鉄釉 普通	P 32 瀬戸美濃系 残存率10% E5a3区表採
86	天目茶碗 陶器	A [11.7] B (5.5)	体部から口縁部片。体部は外傾して直 線的に立ち上がり、口縁部との境に稜 をもつ。口縁部は直立後外反する。	水挽き成形。内外面施釉。被二次焼成	砂粒・長石・スコ リア 灰白色 長石釉 普通	P 72 志野 残存率15% H6j0区表採
87	天目茶碗 陶器	B (4.4)	体部片。やや内彎気味に立ち上がる。	水挽き成形。外面一部施釉。	砂粒・雲母・長石 灰色 黒色鉄釉 普通	P 25 瀬戸美濃系 残存率5% C3az区表採
88	丸碗 陶器	A [11.0] B 7.5 C [4.0]	底部から口縁部片。削り出し輪高台。 体部は、内彎後外傾して立ち上がる。 口縁部上端がやや外反する。	水挽き成形。高台部と体部下端は無釉 口縁部のみ鉄釉ではなく灰釉をかけ分 けている。(かけ分け茶碗)	砂粒・石英・長石 スコリア 黒褐色 鉄釉 普通	P 93 瀬戸美濃系 残存率45% トレンチ表採
89	天目茶碗 陶器	A [12.8] B (5.7)	体部から口縁部片。体部はやや内彎後 外傾して立ち上がる。口縁部は内彎気 味に直立後すぐやや外反する。	水挽き成形。体部外面下位無釉。被二 次焼成。	砂粒・雲母・石英 褐色 黒色鉄釉 普通	P 98 瀬戸美濃系 残存率15% 二次面表採
90	天目茶碗 陶器	B (2.8) C [5.0]	底部から体部片。削り出し高台。高台 外面垂直内面内傾。体部は内彎気味に 外傾して立ち上がる。	水挽き成形。体部内面施釉、外面下位 無釉。	砂粒 灰白色 鉄釉 普通	P 54 瀬戸美濃系 残存率10% F6i1区表採
91	土鍋 陶器	A [21.8] B (9.7) C [9.7]	底部から口縁部片。底部底上げ。体部 は内彎しながら立ち上がり、口縁部は 折縁となって耳が付く。	轆轤成形。見込みに目積み痕。体部下 位に胎土目付着。底裏、体部下位外面 無釉。	砂粒・石英・長石 スコリア、にぶ赤褐色 黒色鉄釉 普通	P 97 在地系 残存率20% 一次面表採
92	播鉢 土師質土器	A [24.5] B (4.0)	口縁部片。口縁部は僅かに内彎なが ら、外傾して立ち上がり、上端外面が 僅かに外反する。	口縁部内外面横ナデ。体部外面指頭圧 痕。	砂粒・雲母・長石 スコリア 灰赤色 普通	P 101 在地系 残存率5% E5h7区表採
93	播鉢 土師質土器	B (3.5) C [17.6]	底部から体部片。平底。体部は外傾し て立ち上がる。	体部内外面横ナデ。体部外面指頭圧痕 底裏ヘラ削り。体部最下位はヘラで面 とり。	砂粒・石英・長石 スコリア 明赤褐色 普通	P 102 在地系 残存率3% 二次面平底
94	播鉢 土師質土器	A [24.5] B (8.0)	体部から口縁部片。体部は外傾して開 き、口縁部との境に稜をもち、口縁部 は直立し、上端の器厚が薄くなる。	轆轤成形。内外面回転ヘラナデ 口縁部を拡張した縁帯が付き、外面に 3条の沈線が巡る。播目は縦と斜め。	砂粒・長石・スコ リア・礫 明赤褐色 良好	P 41 堺・明石系 残存率20% F6h1区表採
95	播瓦質土器	A [30.6] B (10.8)	体部から口縁部片。体部は外傾して開 き、口縁部は器厚を増しながら僅かに 外へ膨らむ。	体部、口縁部内外面横ナデ。体部外面 指頭圧痕。内面の播目は10本1単位で、 体部上端まで達する。	砂粒・石英・長石 スコリア・礫 黒色 普通	P 65 在地系 残存率20% G5d9区表採
第76図 96	播鉢 土師質土器	A [29.6] B (7.7)	体部から口縁部片。体部は外傾して開 き、口縁部は器厚を増しながら立ち上 がる。	体部、口縁部内外面横ナデ。体部外面 指頭圧痕。内面の播目は7本1単位で、 体部上端まで達する。内外面黒色処理	砂粒・石英・長石 スコリア・礫 黒褐色 普通	P 100 在地系 残存率10% 二次面表採
97	大甕 土師質土器	A [26.2] B (6.5)	頸部から口縁部片。頸部は内傾気味に 立ち上がり、口縁部は外反した後N字 状の縁帯をつくる。	粘土紐巻き上げ成形。内外面横ナデ。	砂粒・石英・長石 スコリア 赤褐色 普通	P 27 常滑系 残存率5% D5h2区表採
98	大甕 土師質土器	A [32.6] B (7.4)	肩部から口縁部片。肩部、口縁部は内 傾気味に立ち上がる。口縁部上端は内 側が扁平で外側はつまみ出し突帯。	粘土紐巻き上げ成形。内外面横ナデ。	砂粒・石英・長石 スコリア・礫 灰色 普通	P 148 常滑系 残存率5% No.13トレンチ
99	大甕 土師質土器	A [27.6] B (7.2)	肩部から口縁部片。肩部から口縁部は 内傾して立ち上がる。口縁部上端の内 側が扁平で外側はつまみ出し突帯。	粘土紐巻き上げ成形。内外面横ナデ。 口縁部外面に自然釉。口縁部に重ね焼 きによる異個体の一部が付着。	砂粒・石英・長石 スコリア にぶい赤褐色 普通	P 152 常滑系 残存率10% 一次面表採

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第76図 100	土瓶蓋 陶器	A〔 9.4〕 B 3.2 返し径 7.8	山蓋で返し部はほぼ直立。蓋部は僅かに上昇しながら鈕部へ至る。鈕部の縁は浅い。	水挽き成形。外面鉄釉鮫肌。内面無釉	砂粒・長石 にぶい黄橙 普通 (釉)褐色	P 7 残存率60% 在地系(「勿来手」) 三次面表採
101	土瓶 陶器	A〔 8.8〕 B〔 6.6〕	体部、口縁部片。体部は丸味をもって立ち上がり口縁部は僅かに内傾後直立する。内面には蓋受けの突起が巡る。	水挽き成形。内外面横ナデ。体部外面に鉄釉と白釉による筆書きの梅花文。	砂粒 灰白色 普通	P73 在地系 残存率15% H6c区表採
102	(袋物) 陶器	B〔 8.8〕	体部片。内彎しながら丸味をもって立ち上がる。	水挽き成形。内外面横ナデ。内外面施釉外面は海鼠釉。内面は鉄釉と長石釉の流し分け。長石釉は鮫肌。	砂粒・普通、外面明 緑灰色、内面灰褐色、 黒褐・明青灰色	P99 在地系 残存率15% 二次面表採
103	德利器 陶器	B〔 11.0〕	体部片。下位はやや外傾し、上位は内彎気味に立ち上がる寸胴型。	水挽き成形。内外面横ナデ。外面全体に鉄釉。内面鉄釉の流し掛け。	砂粒 にぶい黄色 普通	P 154 瀬戸美濃系 残存率20% 二次面表採
104	土瓶蓋 陶器	A〔 7.5〕 B 3.3 返し径 5.4	山蓋で返し部はほぼ直立。蓋部は僅かに上昇しながら鈕部へ至る。鈕部の縁は浅い。	水挽き成形。鈕部に五弁花の梅花文を無釉部により作り出している。外面白釉で弱い貫入がある。内面無釉。	砂粒 灰黄色 普通 (釉)明オリブ灰色	P 92 在地系 残存率60% 二次面表採
105	德利器 陶器	B〔 5.5〕	体部(肩部から頸部)片。内彎して肩部の張りを作り、内傾して立ち上がり、頸部に至る。	水挽き成形。外面鉄釉。内面無釉。	砂粒 灰白色 普通 (釉)オリブ黄色	P 153 瀬戸美濃系 残存率20% 二次面表採
106	(袋物) 陶器	B〔 4.4〕 C〔 8.4〕	底部、体部片。上げ底で、体部はほぼ垂直に立ち上がる。	水挽き成形。外面海鼠釉。内面鉄釉。底部外周は面取りを施す。	砂粒 普通 外面 明緑灰色 内面 褐色	P 156 在地系 残存率10% 二次面表採
107	德利器 陶器	B〔 2.6〕 C 8.6	底部片。低い削り出し高台。	水挽き成形。底部回転系切り。内面回転ヘラ削り。	砂粒 浅黄色 普通 (釉)にぶい黄色	P 155 瀬戸美濃系 残存率10% 一次面表採
108	(袋物) 瓦質土器	B〔 5.1〕 C 8.6	底部、体部片。平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	水挽き成形。底部ヘラナデ。体部内外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 長石・スコリア・ 礫 黒褐色 普通	P 151 在地系 残存率15% G6区二次面表採
109	(袋物) 陶器	B〔 3.4〕	体部片。	水挽き成形。外面鉄釉。内面無釉。	砂粒・石英 にぶい橙色 普通 (釉)明赤褐色	P 33 在地系 残存率2% E5区表採
第77図 110	德利器 磁器	A 3.0 B 25.8 C 10.0	完形品。底部は低い削り出し高台。体部は僅かに外傾して内彎気味に立ち上がり、肩が張る。口縁部は折り返し。	水挽き成形。体部外面に呉須書きの文字三面。「伊勢屋」、「最上醤油」、「丹」字入りの屋号。透明釉。	砂粒・礫 灰白色 普通 呉須 黒色	P 57 在地系 残存率100% F6g2区表採
111	染付碗 磁器	B〔 3.4〕	口縁部片。残存部はほぼ直線的に立ち上がる。	水挽き成形。呉須素焼き掛け。透明釉に弱い貫入あり。	砂粒 灰白色 普通 呉須 明緑灰色	P 94 肥前系 残存率5% 二次面表採
112	染付丸碗 磁器	B〔 3.5〕 C 4.0	底部、体部片。三角高台。底部から体部へ、連続的に内彎しながら立ち上がる。	水挽き成形。絵柄は珪酸コバルトによる型紙絵付けで、透明釉。	砂粒 白色 普通	P 56 瀬戸美濃系 残存率25% F6i1区表採
113	坏 須恵器	B〔 1.6〕 C〔 7.4〕	底部片。やや上げ底気味。	底部一方向の手持ちヘラ削り。体部下端は回転ヘラ削り。	砂粒・礫 黄灰色 普通	P 69 残存率20% H5i0区二次面表採 底裏に×印のヘラ記号
114	長頸壺 須恵器	B〔 5.7〕	頸部片。やや径を細めながら立ち上がる。頸部下位は器厚が厚い。	内外面横ナデ。外面片側に自然釉が付着。	砂粒・長石・黒色 斑点、黄灰色、普通 (釉)オリブ黒色	P 31 残存率15% E4a7区表採

遺構外出土遺物観察表（土製品）

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
第77図115	煙突	13.8	—	—	225.5	B3g8区表採	D P 1

遺構外出土遺物観察表（ガラス製品）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	色調・容量	備考
第77図 116	瓶 ガラス器	A 2.5	傾斜のきつい上げ底で底裏の中間部に突帯が巡る。底裏の中央部は平底。などで肩で頸部にねじれ。上端に突帯あり	口縁部に切り離し痕あり。器壁内部に気泡がある。	透明青緑色 270ml	P 58 残存率100% F6ii区表採
		B 19.8				
		C 6.3				
117	瓶 ガラス器	A 2.1	上げ底の平底。体部は肩まで垂直に上がり、肩から頸へ内傾。途中凹線が1条巡る。頸部下端突帯。口縁部緑帯。	器壁内部に細かい気泡がある。	無色透明 70ml	P 60 残存率100% F6ii区表採
		B 11.8				
		C 4.1				
118	瓶 ガラス器	A 2.6	上げ底の平底。体部は肩まで垂直に上がり、肩から頸へ内傾。頸部から口縁部へはやや外傾して直立。口縁部緑帯。	底裏の中間部に突帯が巡る。器壁内部に気泡。底裏の中央部に突帯で「元」字の文様。底部から頸部途中まで縦線2条	無色透明 50ml	P 61 残存率100% F6ii区表採
		B 7.8				
		C 4.0				
119	瓶 ガラス器	A 1.5	上げ底の平底。体部は肩まで垂直に上がり、肩から頸へ内傾。頸部から口縁部へはやや外傾して直立。口縁部緑帯。	底裏の中間部に突帯が巡る。器壁内部に気泡。底裏の中央部に突帯で「K」字の文様。底部から頸部途中まで縦線2条	無色透明 10ml	P 22 残存率100% F6ii区表採
		B 5.5				
		C 2.4				
120	瓶 ガラス器	A 3.4	口縁部一部欠損。上げ底。胴部がへこんで直立。肩は内傾内傾。肩上端に突帯1条、口縁部に突帯各1条が巡る。	器壁内部に気泡がある。体部下端から肩部上端まで縦線2条。頸部から口縁部まで別な場所に縦線2条が上がる。	透明青緑色 50ml	P 62 残存率99% F6ii区表採
		B 6.6				
		C 5.6				
121	瓶 ガラス器	A 1.9	上げ底でなで肩。頸部がねじれ、口縁部に緑帯が巡る。	器壁内部に気泡がある。体部下端から頸部上端まで縦線2条が立ち上がる。	透明緑灰色 185ml	P 59 残存率100% F6ii区表採
		B 16.6				
		C 5.2				
122	瓶 ガラス器	A 6.2	上げ底の平底。体部は口縁部まで僅かに外傾しながら立ち上がる。口縁部に凹線が1条巡る。	器壁内部に気泡がある。体部下端から口縁部下端まで細い縦線が2条立ち上がる。	透明青緑色 100ml	P 63 残存率100% F6ii区表採
		B 7.7				
		C 4.9				

遺構外出土遺物観察表（石製品）

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第78図138	砥石	(11.8)	4.8	1.9	116.9	凝灰岩	D5ja区表採	Q 7
139	砥石	(10.2)	3.3	1.4	67.8	凝灰岩	二次面表採	Q 18
140	砥石	(14.8)	5.0	2.9	268.5	凝灰岩	D5ja区表採	Q 5
第79図141	砥石	14.3	4.0	3.1	191.5	凝灰岩	D5ja区表採	Q 6
142	砥石	(13.8)	5.8	1.8	218.9	粘板岩	F6ii区表採	Q 10
143	砥石	(11.8)	4.8	1.7	130.3	凝灰岩	二次面表採	Q 17
144	砥石	9.0	5.1	2.5	105.1	凝灰岩	H6cs区表採	Q 15
145	砥石	(10.8)	(4.2)	1.5	92.9	凝灰岩	H6di区表採	Q 14
146	砥石	(9.0)	2.8	1.6	72.8	凝灰岩	H6gs区表採	Q 16
147	砥石	(5.8)	4.3	1.9	69.4	凝灰岩	二次面表採	Q 19
148	砥石	(6.2)	3.9	0.9	42.4	凝灰岩	二次面表採	Q 20
149	墓石	29.2	15.8	8.9	5300.0	砂岩	G5as区表採	Q 12 墨書「キリク、即得安楽世界、阿弥陀仏文、奉為妙忍、三〇詣大〇、天文十四年二月十日」
第80図150	石臼	29.5	(17.0)	8.3	5300.0	砂岩	F5ho区表採	Q 8 粉挽き臼の下臼片 残存率50%
151	石臼	25.1	(9.6)	9.3	2119.6	砂岩	G6j区表採	Q 13 粉挽き臼の上臼片 残存率15%
152	石臼	(10.6)	(8.3)	5.8	300.7	安山岩	No.14トレンチ表採	Q 22 茶挽き臼の下臼片 残存率10%
153	石臼	(17.3)	(10.4)	6.9	953.7	砂岩	F6ii区表採	Q 11 粉挽き臼の上臼片 残存率20%
154	石臼	(10.2)	(15.1)	—	1164.8	砂岩	B3区貝集積地点	Q 21 唐臼(搗き臼)片 残存率20%
155	石臼	(14.1)	(11.8)	9.8	1176.4	砂岩	F5ho区表採	Q 9 粉挽き臼の上臼片 残存率15%
156	硯	(5.0)	5.0	1.0	42.9	粘板岩	一次面表採	Q 23 残存率50%

遺構外出土遺物観察表（金属製品）

図版番号	器種	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第81図157	小刀	(29.0)	(2.2)	(0.8)	(127.1)	鉄	B3g ₁ 区表採	M15 茎長(9.3)cm 茎の革装が一部残存
158	小柄	(18.4)	(2.6)	(0.5)	(51.6)	鉄	表採	M76 茎長(2.1)cm
159	鎌	(14.9)	(4.5)	(0.3)	(101.5)	鉄	F6i ₁ 区表採	M49
160	鎌	(18.5)	(4.2)	(0.4)	(111.7)	鉄	E4e ₆ 区表採	M39
161	鐔	—	(径)6.8	0.4	74.4	銅	H5f ₀ 区表採	M69
162	蓋	つまみ径2.1	(径)9.8	(高さ)4.3	51.5	鉄	F6j ₁ 区表採	M66
163	蓋	つまみ径1.9	(径)8.8	(高さ)3.9	41.1	鉄	F6j ₁ 区表採	M67
164	煙管	5.3	火皿径1.7	—	7.5	銅	E5h ₇ 区表採	M80 雁首のみ残存 火皿の吸い口側に穿孔1カ所
165	耳金	(8.0)	(0.8)	(0.9)	(18.2)	鉄	表採	M77
166	吊金具	(5.8)	(0.7)	(0.6)	(10.1)	鉄	E4c ₇ 区表採	M40
167	耳金	(5.5)	(0.5)	(0.5)	(4.9)	鉄	B3h ₃ 区表採	M11
168	角釘	(8.5)	(0.5)	(0.5)	(6.4)	鉄	B3h ₃ 区表採	M12
169	角釘	(6.2)	(0.5)	(0.5)	(5.4)	鉄	B3h ₃ 区表採	M13
170	舟釘	(10.5)	(1.0)	(0.3)	(16.9)	鉄	F6i ₁ 区表採	M59
第82図171	舟釘	(7.6)	(1.1)	(0.5)	(9.5)	鉄	F6i ₁ 区表採	M55
172	角釘	(9.5)	(0.8)	(0.6)	(21.2)	鉄	表採	M78
173	舟釘	(11.6)	(1.4)	(0.4)	(26.2)	鉄	表採	M79
174	舟釘	(11.1)	(1.2)	(0.5)	(27.1)	鉄	F6i ₁ 区表採	M58
175	舟釘	(14.2)	(1.7)	(0.9)	(38.1)	鉄	F6i ₁ 区表採	M57
176	舟釘	(15.7)	(2.0)	(1.2)	(76.1)	鉄	F6i ₁ 区表採	M56
177	舟釘	(10.9)	(1.6)	(0.6)	(47.5)	鉄	F6i ₁ 区表採	M51 木目痕付着
178	舟釘	(9.9)	(1.4)	(0.5)	(42.9)	鉄	F6i ₁ 区表採	M50 木目痕付着
179	舟釘	(5.7)	(1.6)	(0.7)	(19.6)	鉄	F5h ₈ 区表採	M45 木目痕付着
180	舟釘	(8.3)	(1.7)	(0.7)	(44.6)	鉄	F6i ₁ 区表採	M52 木目痕付着
181	舟釘	(7.7)	(1.8)	(0.7)	(31.0)	鉄	F6i ₁ 区表採	M54 木目痕付着
182	舟釘	(6.9)	(1.7)	(0.7)	(20.4)	鉄	F6i ₁ 区表採	M53 木目痕付着
183	丸釘	(10.7)	(0.6)	—	(17.5)	鉄	F6i ₁ 区表採	M62 木目痕付着
184	丸釘	(12.2)	(0.6)	—	(12.1)	鉄	F6i ₁ 区表採	M64
185	丸釘	(10.3)	(0.6)	—	(7.5)	鉄	F6i ₁ 区表採	M63
186	丸釘	(11.5)	(0.5)	—	(11.5)	鉄	F6i ₁ 区表採	M61
187	丸釘	(9.3)	(0.6)	—	(12.2)	鉄	F6i ₁ 区表採	M60
188	丸釘	(9.4)	(0.4)	—	(8.3)	鉄	F6i ₁ 区表採	M65
189	不明	(4.1)	(3.5)	(0.9)	(45.7)	鉄	B3g ₈ 区表採	M14

遺構外出土遺物観察表（古銭）

図版番号	銭種	初鑄年		出土地点	備考
		時代	年号(西暦)		
第83図190	開元通寶	唐	武徳4年(621)	B2f ₀ 区表採	M10 真書
191	朝鮮通寶	朝鮮	世宗5年(1423)	SK60内人骨の六道銭	M16 真書
192	景德元宝	北宋	景德元年(1004)	SK60内人骨の六道銭	M17 真書
193	開元通寶	唐	武徳4年(621)	SK60内人骨の六道銭	M18 真書 平頭通・上月
194	至道元寶	北宋	至道元年(995)	SK60内人骨の六道銭	M19 真書
195	元符通寶	北宋	元符元年(1098)	SK60内人骨の六道銭	M20 篆書
196	嘉祐元寶	北宋	嘉祐元年(1056)	SK60内人骨の六道銭	M21 真書
197	永樂通寶	明	永樂6年(1408)	B3c ₆ 区人骨の六道銭	M22 真書
198	元符通寶	北宋	元符元年(1098)	B3c ₆ 区人骨の六道銭	M23 篆書
199	永樂通寶	明	永樂6年(1408)	B3c ₆ 区人骨の六道銭	M24 真書
200	天聖元寶	北宋	天聖元年(1023)	B3c ₆ 区人骨の六道銭	M25 真書
201	宣和通寶	北宋	宣和元年(1119)	B3c ₆ 区人骨の六道銭	M26 分楷

図版番号	銭種	初 鑄 年		出 土 地 点	備 考
		時 代	年 号 (西曆)		
202	熙寧元寶	北宋	熙寧元年(1068)	SK6 ₁ 区人骨の六道銭	M27 真書
203	嘉祐通寶	北宋	嘉祐元年(1056)	B3f ₄ 区表採	M29 真書
204	天聖元寶	北宋	天聖元年(1023)	B3g ₄ 区表採	M31 真書
205	天聖元寶	北宋	天聖元年(1023)	B3j ₂ 区表採	M32 真書
206	皇宋通寶	北宋	寶元元年(1038)	B3区表採	M33 真書
207	天聖元寶	北宋	天聖元年(1023)	B3j ₂ 区表採	M34 真書
208	聖宋元寶	北宋	建中靖国元年(1101)	B3区表採	M35 篆書
209	開元通寶	唐	武徳4年(621)	B3区表採	M36 真書 平頭通・上月
210	洪武通寶	明	洪武元年(1368)	B3区表採	M37 真書 背一銭
211	天聖元寶	北宋	天聖元年(1023)	E4a ₈ 区人骨の六道銭	M41 篆書
212	寛永通寶	日本	寛永13年(1636)	E4a ₈ 区人骨の六道銭	M42 真書 一文銭
213	元符通寶	北宋	元符元年(1098)	E4f ₈ 区表採	M43 篆書
214	紹聖元寶	北宋	紹聖元年(1094)	E5f ₃ 区表採	M44 篆書
215	元祐通寶	北宋	元祐元年(1086)	F5d ₈ 区人骨の六道銭	M46 真書
216	永樂通寶	明	永樂6年(1408)	F5d ₈ 区人骨の六道銭	M47 真書
217	〇〇元寶	—	—	F5d ₈ 区人骨の六道銭	M48 真書
218	—	—	—	G6j ₂ 区表採	M68
219	熙寧元寶	北宋	熙寧元年(1068)	H6c ₄ 区人骨の六道銭	M70 真書
220	洪武通寶	明	洪武元年(1368)	H6c ₄ 区人骨の六道銭	M71 真書
221	嘉祐通寶	北宋	嘉祐元年(1056)	H6c ₄ 区人骨の六道銭	M72 篆書
222	光天元寶	前蜀	光天元年(918)	H6c ₄ 区人骨の六道銭	M73 真書
223	紹聖元寶	北宋	紹聖元年(1094)	H6c ₄ 区人骨の六道銭	M74 行書
224	〇〇〇寶	—	—	H6c ₄ 区人骨の六道銭	M75
225	永樂通寶	明	永樂6年(1408)	No.15トレンチ表採	M81 真書
226	寛永通寶	日本	寛永13年(1636)	一次面表採	M82 真書 一文銭
227	寛永通寶	日本	寛永13年(1636)	表採	M83 真書 一文銭
228	寛永通寶	日本	寛永13年(1636)	二次面表採	M84 真書 一文銭
229	元豊通寶	北宋	元豊元年(1078)	No.16トレンチ表採	M85 行書
第84図230	皇宋通寶	北宋	寶元元年(1038)	B3h ₈ 区二次面表採	M86 篆書
231	元豊通寶	北宋	元豊元年(1078)	表採	M87 行書
232	元祐通寶	北宋	元祐元年(1086)	二次面表採	M88 行書
233	元豊通寶	北宋	元豊元年(1078)	B3h ₈ 区二次面表採	M89 行書
234	嘉定通寶	南宋	嘉定元年(1208)	B3h ₈ 区二次面表採	M90 真書 背九(嘉定九年鑄造の意)
235	政和通寶	北宋	政和元年(1111)	B3g ₈ 区二次面表採	M91 分楷
236	開元通寶	唐	武徳4年(621)	B3g ₈ 区二次面表採	M92 真書

遺構外出土遺物観察表(骨角製品)

図版番号	種類	計 測 値				材 質	出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
第84図237	不明	6.6	5.9	1.6	17.7	鹿 角	E4a ₇ 区二次面表採	B 1 上・下端部に割り痕。内側海綿質部くりぬく。
238	駒 ?	外径3.6	内径2.1	0.8	7.5	鹿 角	F5i ₈ 区二次面表採	B 2 対角線に2対の穿孔あり。
239	不明	26.6	—	2.5	79.2	鹿 角	二次面表採	B 3 表面摩耗激しい

第4節 まとめ

前節において遺構、遺物についてまとめてきたが、その中で遺構については、屋外鹹水槽に形態の上で特徴の類型化ができ、遺物については陶磁器に比較的時期を限定できるものがあるので、この2点について以下に記載する。

1 屋外鹹水槽について

屋外鹹水槽については、前節において1群としてとらえられるものを「製塩跡」の中に入れ、群としてとらえにくいものと、小型のものを「鹹水槽」としてまとめたが、これらを形態の上から見ていくと、以下のように大きく3つのグループに分類することができる。

(1) 大型のもの……1つの製塩跡に下記ア、イの両タイプが混在することはない。

ア 長大型……推定復元値で長軸が4～6m、長軸：短軸＝1：2～1：4、深さ1m超が多い。土樋を伴う。

第3号製塩跡の屋外鹹水槽……16,34,36,66号鹹水槽

第6号製塩跡の屋外鹹水槽……26,64,67号鹹水槽

第7号製塩跡の屋外鹹水槽……68,70,72,73号鹹水槽

その他の屋外鹹水槽……39,55,52号鹹水槽 計13基

イ 隅丸方形型……推定復元値で長軸が1.2～2.6m、長軸：短軸＝1：1～3：5、深さ1m超が多い。土樋を伴わない。

第2号製塩跡の屋外鹹水槽……40,45号鹹水槽

第8号製塩跡の屋外鹹水槽……71,74,75,76,77,79,80,81,82,83号鹹水槽

第9号製塩跡の屋外鹹水槽……87,88,89,90,91,92,100,101,102,103,104号鹹水槽

その他の屋外鹹水槽……41,42,44,56,63,69,78号鹹水槽 計30基

(2) 小型のもの……推定復元値で長軸が1.5～2.8m、深さが比較的浅く0.2～0.7m。分布に規格性がなく、

並んでも2基。(1)のア、イ以外の屋外鹹水槽 計45基

上記(1)のア、イ、(2)の3タイプの屋外鹹水槽は、タイプ別に群をなして存在する。

2 陶磁器について

今回の調査において出土した陶磁器類のうち、時期のわかったものが38点あった。以下に、それを古い順に整理した。

15世紀	2点	常滑系大甕
16世紀後半	3点	瀬戸美濃系灰釉丸皿2・水注1
16世紀後半～17世紀初頭	2点	明万暦製染付碗1、在地系瓦質1
16世紀後半～17世紀前半	2点	常滑系大甕
17世紀初頭	1点	瀬戸美濃系(志野)白天目
17世紀前半	14点	瀬戸美濃系丸皿9(志野8、織部1)、天目3、志野小鉢2
17世紀	1点	明石・堺系播鉢

18世紀前半	2点 瀬戸美濃系掛け分け茶碗 1, 鉄釉丸碗 1
18世紀	1点 肥前系染付碗
18世紀後半～19世紀前半	3点 瀬戸美濃系灰釉徳利
19世紀	6点 在地系急須 1, 急須の蓋(松岡) 2, 土鍋 1, その他 2
明治	1点 瀬戸美濃系染付丸碗

これらのうち、16世紀後半から17世紀前半という枠でまとめると、38点中22点が入ってくる。これより前の時期のものは、15世紀の常滑系大甕 2点のみで、後の時期のものは14点である。仮に15世紀をⅠ期、16世紀後半から17世紀前半をⅡ期、18世紀以後をⅢ期とすると、各期の間に断絶期があることになる。Ⅰ・Ⅱ期の間が、16世紀の後半、Ⅱ・Ⅲ期の間が17世紀の後半である。

以上の2点についてまとめたが、最後に本跡の製塩跡としての存続期間について述べておく。まず、その開始であるが、上記の陶磁器からさかのぼることのできる年代は15世紀である。また、比較的多量に出土している内耳土鍋は、在地産のいわゆる「常陸型」内耳土鍋であり、これも15世紀に比定できる⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾。これらの遺物は、ほとんどが遺構外で出土したものであり、その出土状況を考えると、製塩跡の操業時期の決定に直接結びつけられるものではない。しかも、本跡の性格の中に製塩跡としての立地以外に、墓域として機能していた時期があり、内耳土鍋片が人骨と共に出土する例もある⁽⁴⁾⁽⁵⁾。

しかし、内耳土鍋のほとんどすべての破片の外面に煤が付着しており、明らかな使用痕が認められる。これは本跡付近で生活をしていた者が存在したことを示すものであり、その生活者が製塩を行っていた可能性があると考えられる。従って、本跡における製塩業の開始時期を15世紀と考えておきたい。

また終末については、第2章第2節で述べたように、文献から、明治末までは零細化しながらも製塩が続けられていたことが分かる。このように本跡における製塩跡としての存続期間は、15世紀から明治時代末期までととらえることができる。しかし、開始時期については、さらにさかのぼるという可能性を否定することはできない。

注

- (1) 浅野晴樹 「東国における中世在地系土器について—主に関東を中心にして—」 『国立歴史民俗博物館研究報告第31集』 国立歴史民俗博物館 1991年3月
- (2) 茨城県教育財団 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書13 屋代B遺跡Ⅰ」 『茨城県教育財団文化財調査報告第33集』 財団法人茨城県教育財団 1986年3月
- (3) 茨城県教育財団 「(仮称)水戸浄水場予定地内埋蔵文化財調査報告書 白石遺跡」 『茨城県教育財団調査報告第82集』 財団法人茨城県教育財団 1993年3月
- (4) 茨城県教育財団 「常陸那珂港関係埋蔵文化財調査報告書1 沢田遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告第52集』 財団法人茨城県教育財団 1989年3月
- (5) 茨城県教育財団 「常陸那珂港関係埋蔵文化財調査報告書2 沢田遺跡」(上), (下) 2冊 『茨城県教育財団文化財調査報告第77集』 財団法人茨城県教育財団 1989年3月

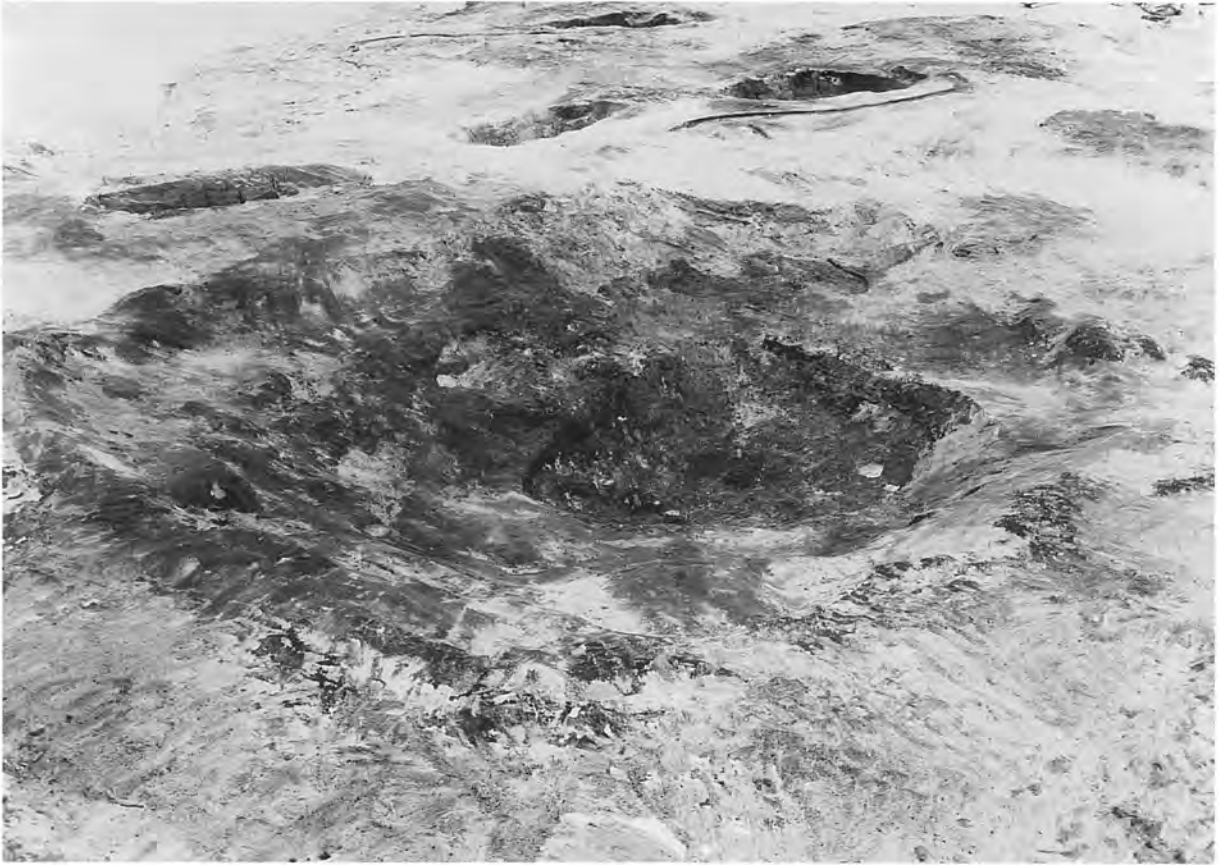
写真図版

沢田遺跡



上 調査前風景（南から），下 第1号製塩跡

PL 2



上 第3号製塩跡, 下 第4号製塩跡



上 第7号製塩跡, 下 第8号製塩跡



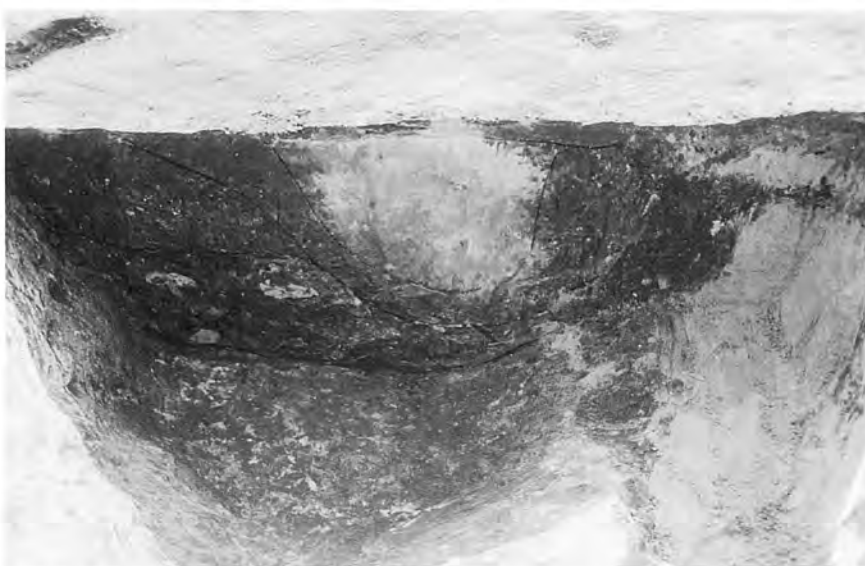
上 第9号製塩跡, 中左 第12号トレンチ, 中右第13号トレンチ,
下左 第18号トレンチ, 下右 第41号トレンチ



第1号竈土層断面



第1号竈断割状况



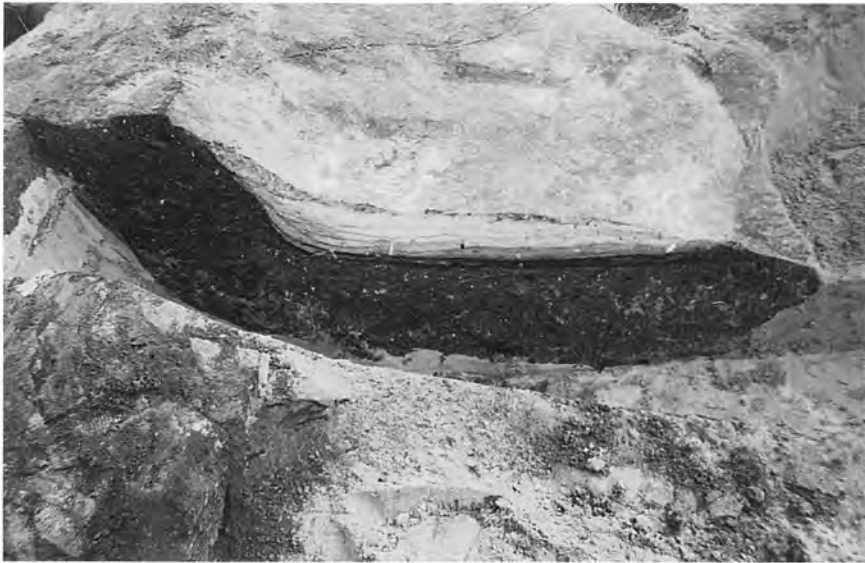
第33号釜屋内
鹹水槽土層断面

第1号製塩跡

PL 6



第3号竈



第3号竈断割状况



第2号製塩跡

第47号釜屋内
鹹水槽土層断面



第45号屋外鹹水槽土層断面



上 第40号屋外鹹水槽
下 第45号屋外鹹水槽



第3号製塩跡釜屋
遺構確認状況

第2・3号製塩跡

PL 8



第4号竈土層断面



第4号竈断割状況



第3号製塩跡

第9号土樋と
第54号釜屋内鹹水槽



第57号鹹水槽
(居出場) 土層断面



第57号鹹水槽 (居出場)



第16号屋外鹹水槽
土層断面

第3号製塩跡

PL 10



第16号屋外鹹水槽



第16号屋外鹹水槽と
第1号土樋



第3号製塩跡

第1号土樋土層断面



第1号土樋断割状况



第10号土樋土層断面



第85号釜屋内鹹水槽

第3・4号製塩跡



第6号竈断割状況



第26号屋外鹹水槽と
第3・6号土樋



第26号屋外鹹水槽と
第3号土樋確認状況

第5・6号製塩跡



第3・6号土樋



第68号屋外鹹水槽
土層断面



第70号屋外鹹水槽

第6・7号製塩跡

PL 14



第73号屋外鹹水槽



第15号土樋確認状況



第7号製塩跡

第15号土樋断割状況



第68号屋外鹹水槽



第22号土樋土層断面



第7号製塩跡

第23号土樋



第1・2号土樋



第16号土樋



第17・18・19号土樋

第3・7号製塩跡



第22号土樋



第4号土樋



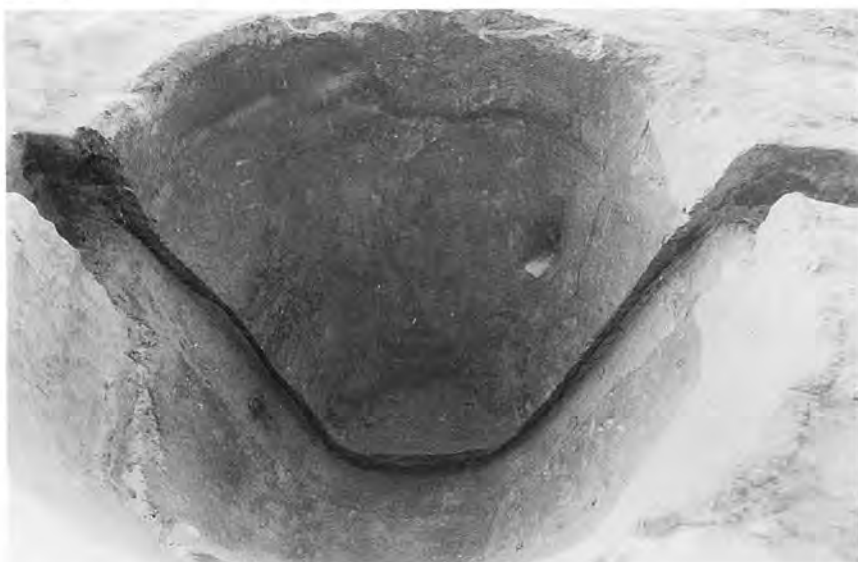
第4号土樋断割状况



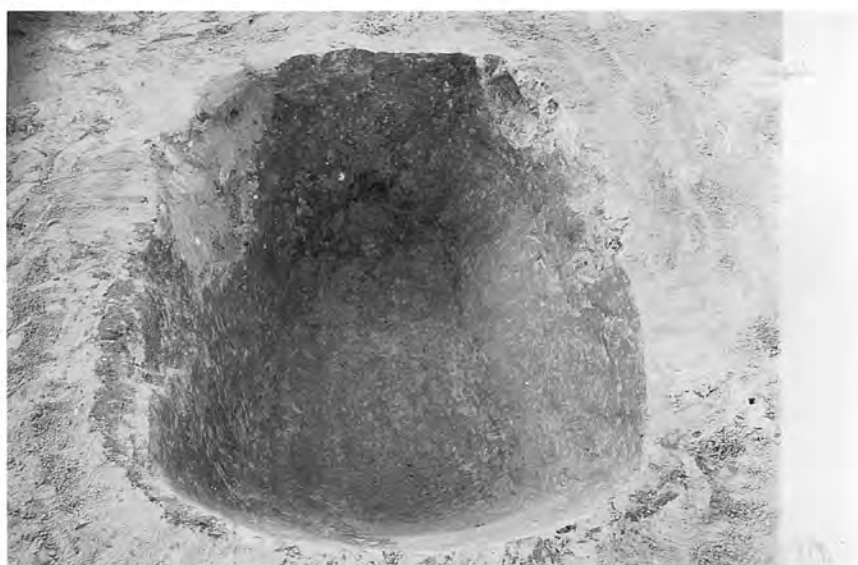
第7・8号製塩跡

左第80号屋外鹹水槽
右第81号屋外鹹水槽

PL 18



第79号屋外鹹水槽
断割状况



第88号屋外鹹水槽



第1号鹹水槽

第8・9号製塩跡



第 2 号鹹水槽断割狀況



第 9 号鹹水槽



第21号鹹水槽



第21号鹹水槽断割状况



第39号鹹水槽



第44号鹹水槽



第46号鹹水槽



第46号鹹水槽断割状况



第50号鹹水槽
遺物出土状况

PL 22



第60号鹹水槽断割状况



第62号鹹水槽



第63号鹹水槽断割状况



第94号鹹水槽



第96号鹹水槽



第97号鹹水槽



第1号粘土貼土坑
断割狀況



第4号粘土貼土坑
土層断面



第19号粘土貼土坑
土層断面



第22号粘土貼土坑



第22号粘土貼土坑
断割状况



第42号粘土貼土坑
断割状况



第57号粘土貼土坑



第72号粘土貼土坑



第78号粘土貼土坑



第80号粘土貼土坑



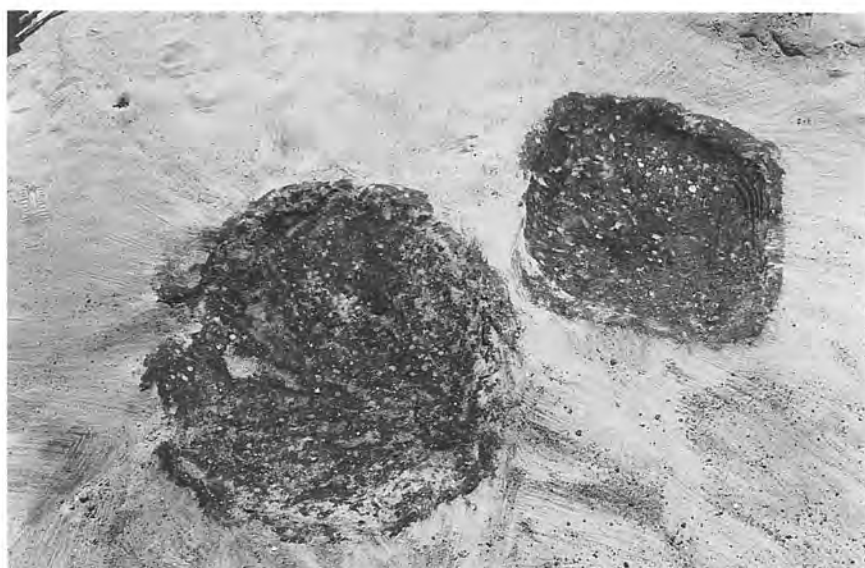
第80号粘土貼土坑
断割状况



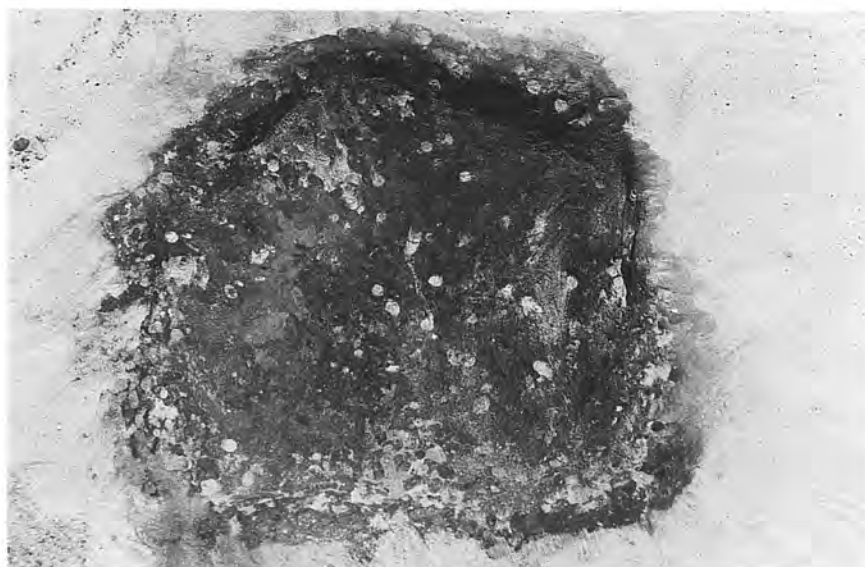
第102号粘土貼土坑



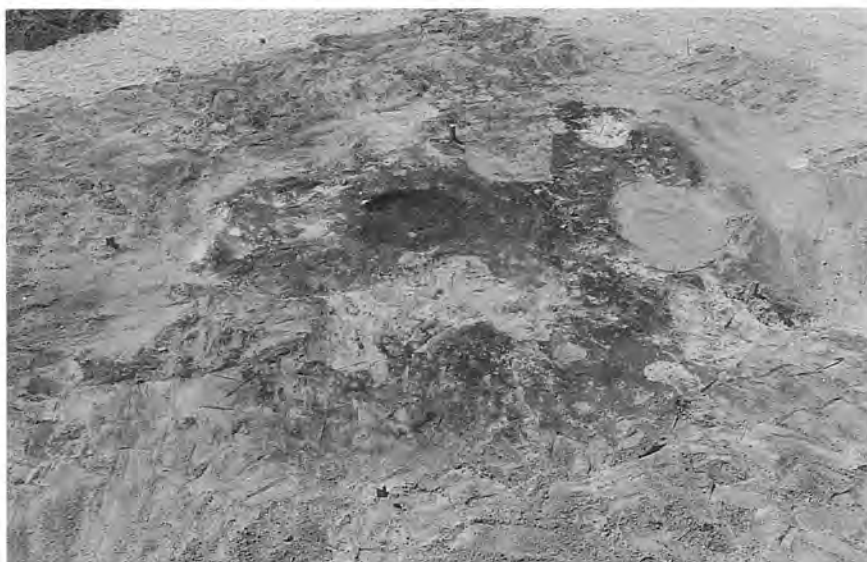
第111・112号粘土貼土坑



右上 第13号炉跡
左下 第25号土坑



第15号炉跡



第22号炉跡とその周辺



第22号炉跡遺物出土状況



第39号石組炉跡

PL 30



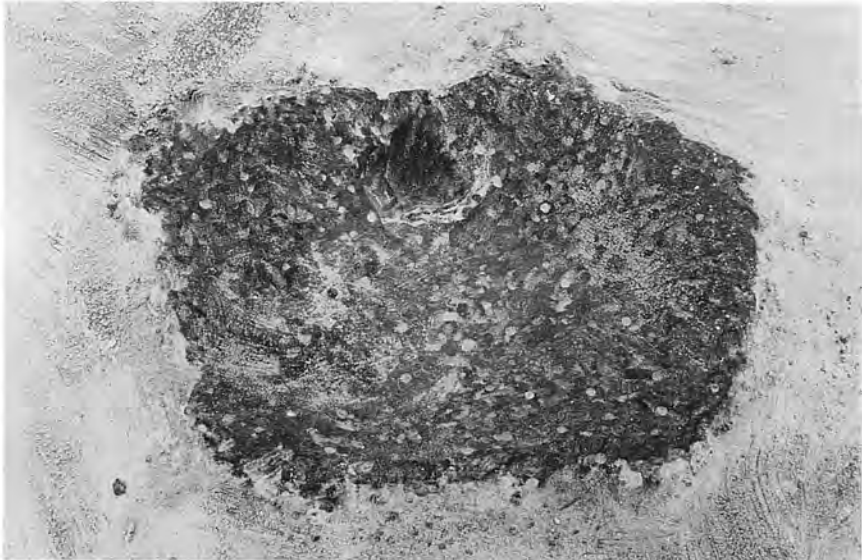
第40号炉跡



第43号炉跡断割状况



第62号炉跡



第 1 号土坑



第 1 号土坑断割状况



第 2 号土坑



第5号土坑土层断面



第8号土坑



第15号土坑断割状况



第18・19号土坑



右 第60号粘土貼土坑
左 第34号土坑



第46号土坑



第52号土坑と石列



第60号土坑と石組遺構



第80号土坑断割状況



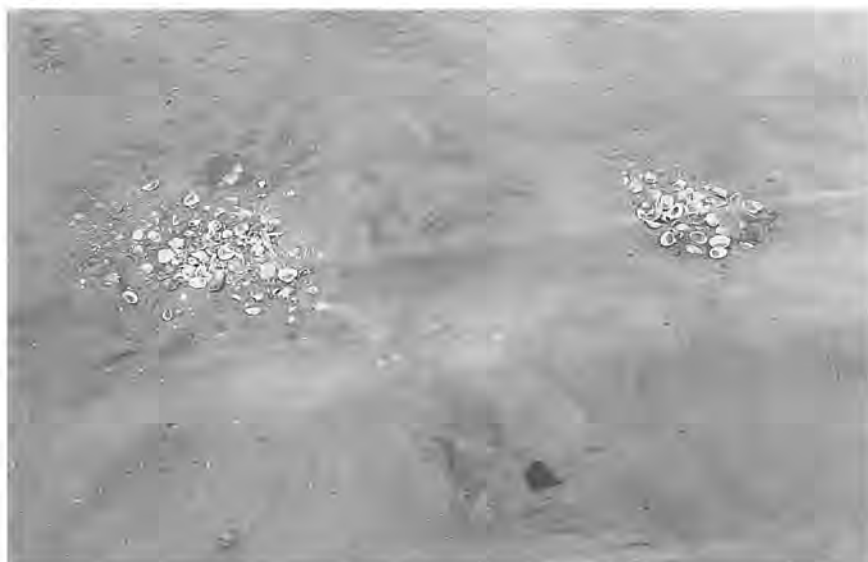
第1号墓壙



第2号墓壙



不明石列遺構



B3b7区貝殻集積状況



遺構外遺物出土状況
(内耳土鍋片)



E4j8区遺物出土状況
(内耳土鍋片, 人骨)



遺構外遺物出土状況
(土師質土器の皿)



遺構外遺物出土状況
(七輪)



遺構外遺物出土状況
(砥石)



G5a₉区遺物出土状況
(墨書供養石)



H5f₀区遺物出土状況
(鈔)



B3g₁区遺物出土状況
(幼児骨, 小刀, 六道銭)



B3g₁区遺物出土状況
(幼児骨と六道銭)



遺構外遺物出土状況
(人骨と内耳土鍋片)



遺構外遺物出土状況
(人骨と六道銭)



F5d₈区遺物出土状況
(幼児骨と貝殻)



遺構外遺物出土状況
(獣骨)



H6i₁区遺物出土状況
(獣骨)



E4～F4区調査終了後風景



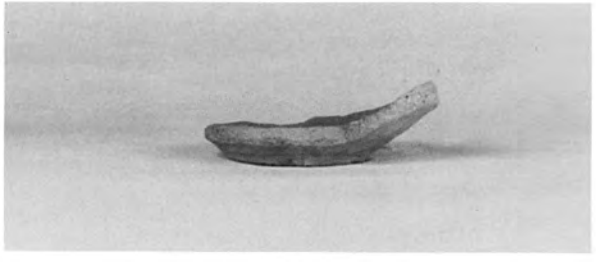
埋め戻し作業風景



調査終了後全景
(北から)



|



|



7-1



10-1



7-2



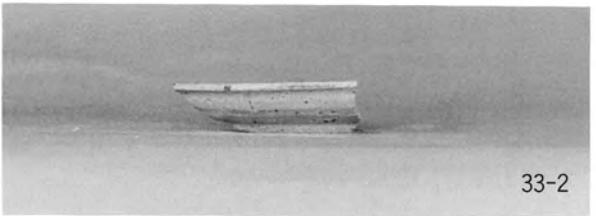
|



10-2



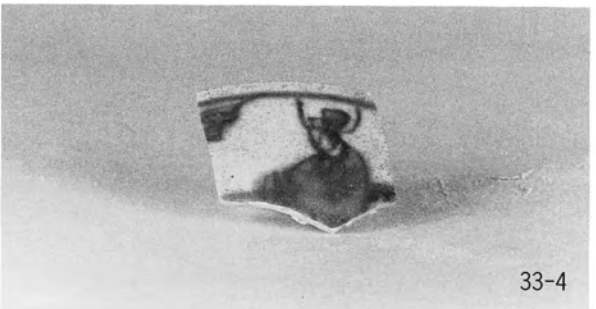
33-1



33-2



33-3



33-4

第1・3号製塩跡，鹹水槽出土遺物



33-6



59-3



59-4



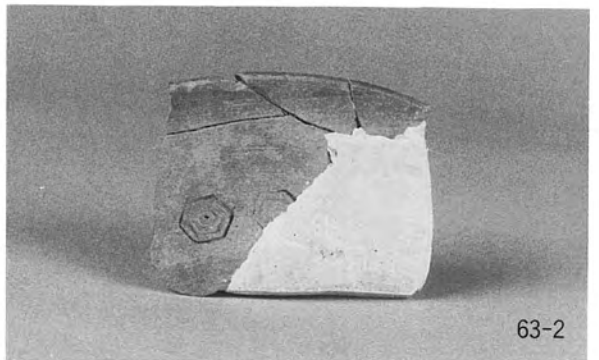
50-1



63-1



50-2



63-2

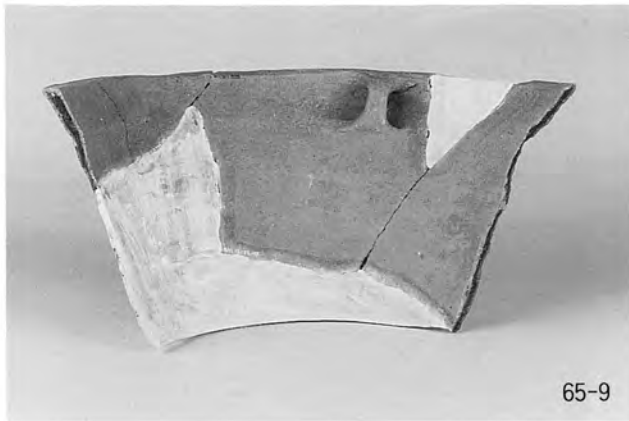


63-3

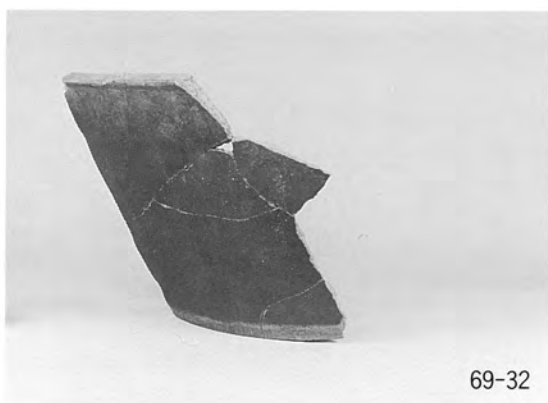


63-5

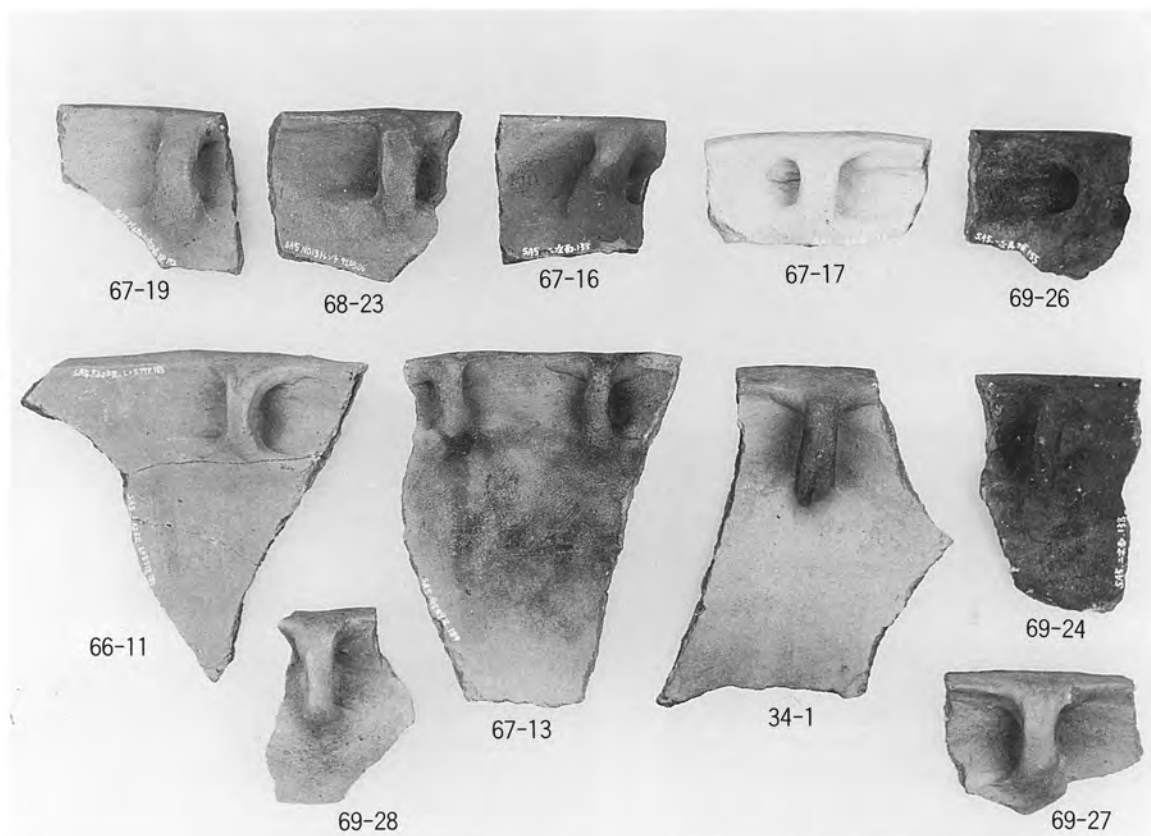
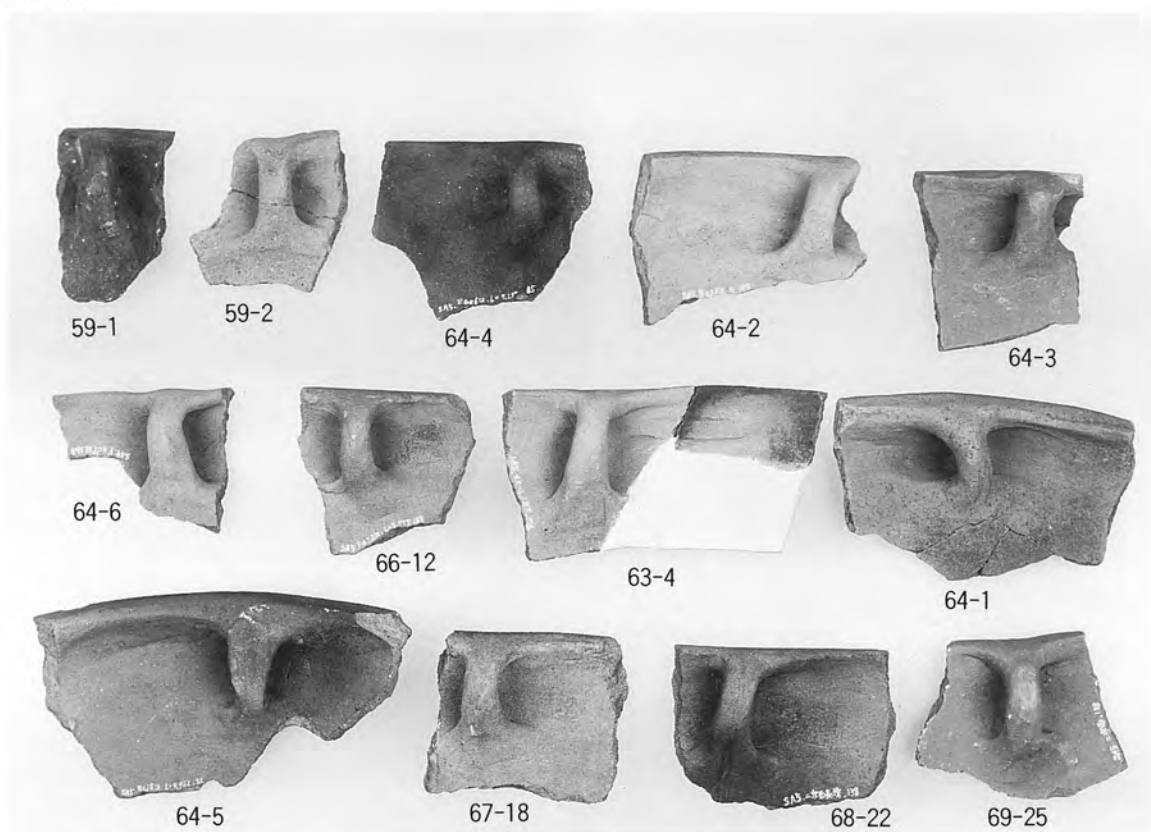
鹹水槽，炉跡，土坑，不明遺構出土遺物



遺構外出土遺物（内耳土鍋）



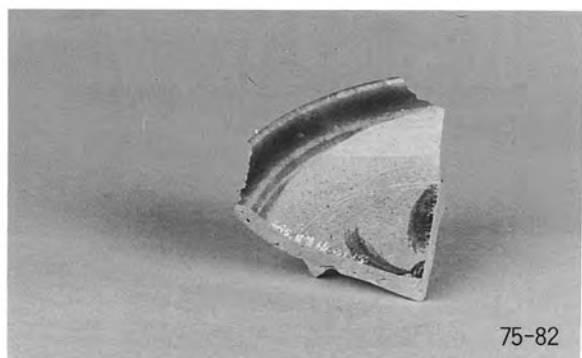
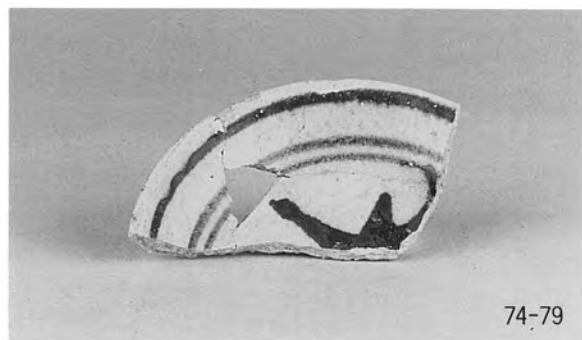
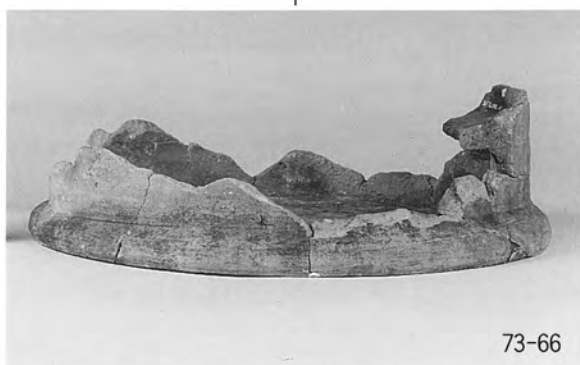
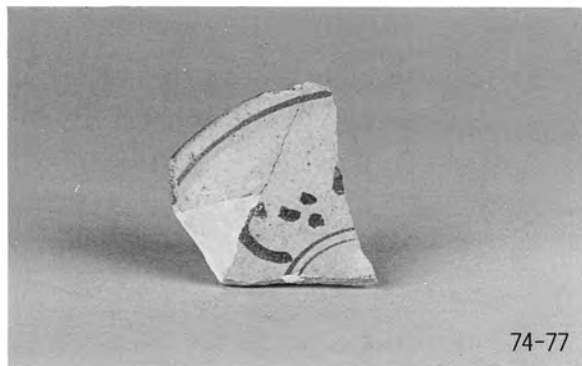
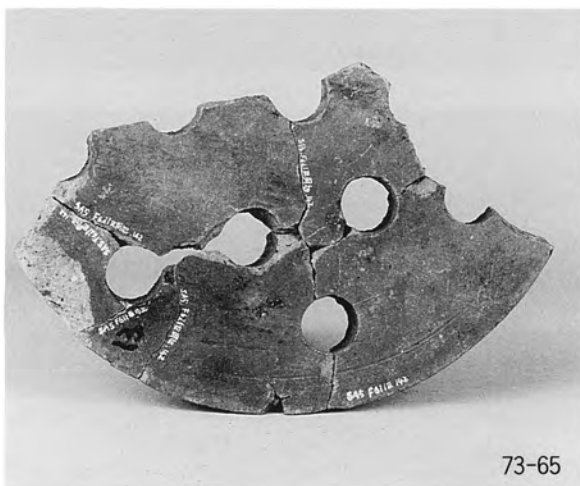
遺構外出土遺物（内耳土鍋・土師質土器の皿）



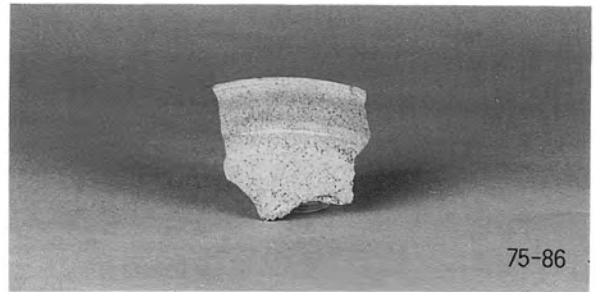
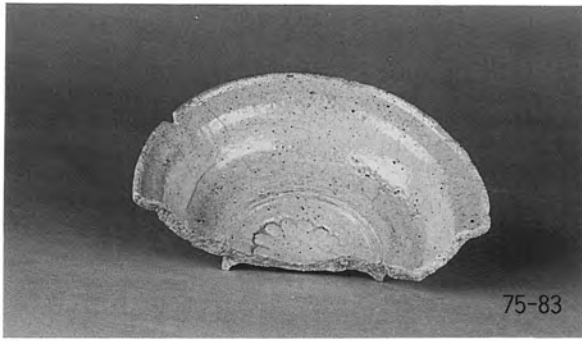
粘土貼土坑，土坑，不明遺構，遺構外出土遺物（內耳土鍋片）



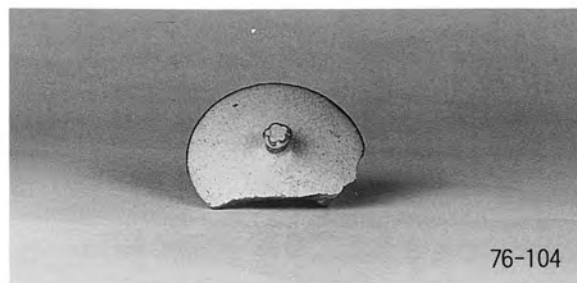
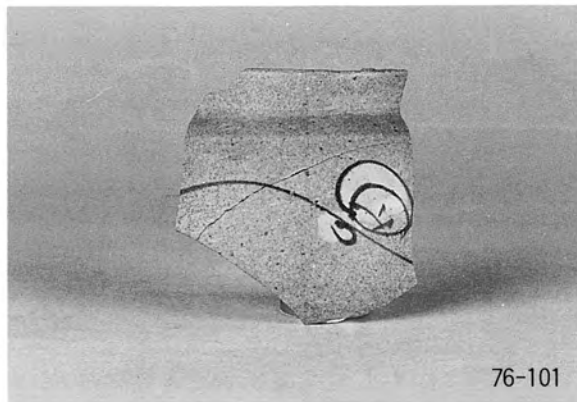
遺構外出土遺物（土師質・瓦質土器）



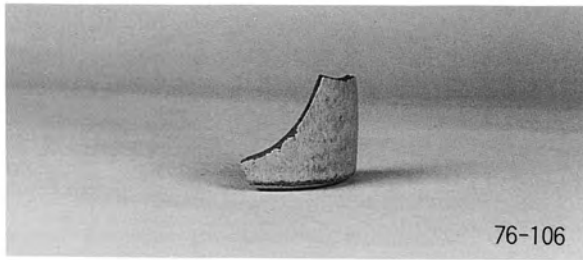
遺構外出土遺物（七輪・陶器片）



遺構外出土遺物（陶器・炆器片）



遺構外出土遺物（陶器・炆器片）



76-106



76-107



76-108



77-109



77-110



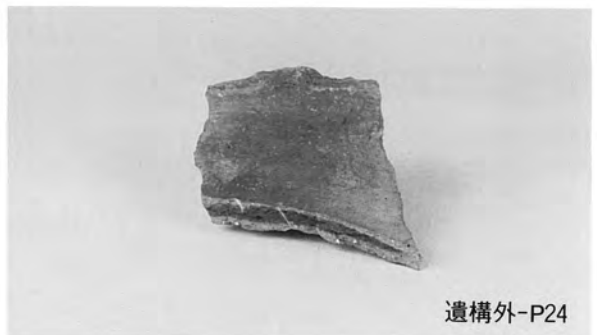
77-113



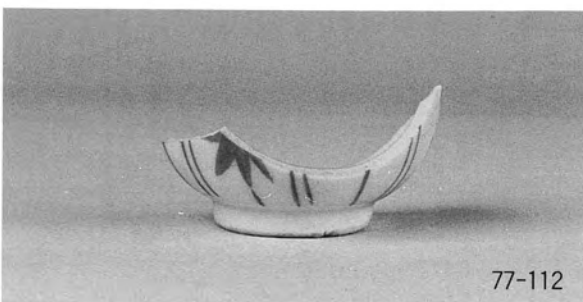
77-114



77-111



遺構外-P24

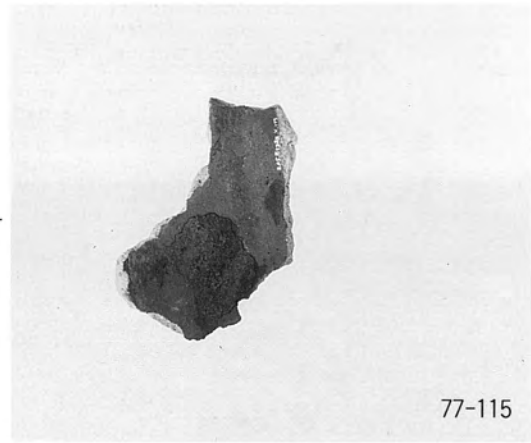
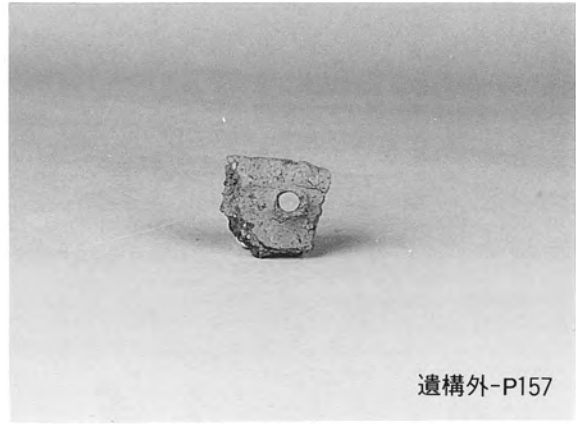
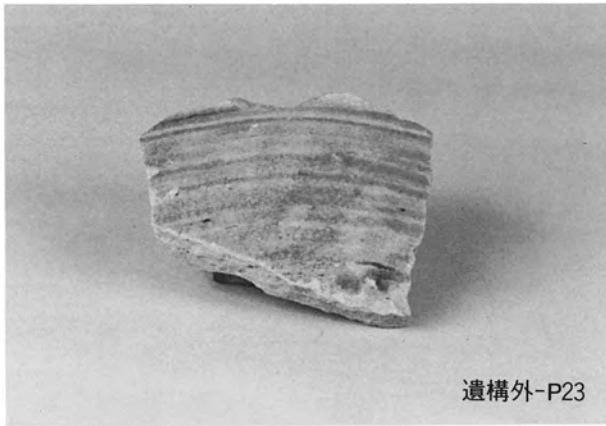


77-112

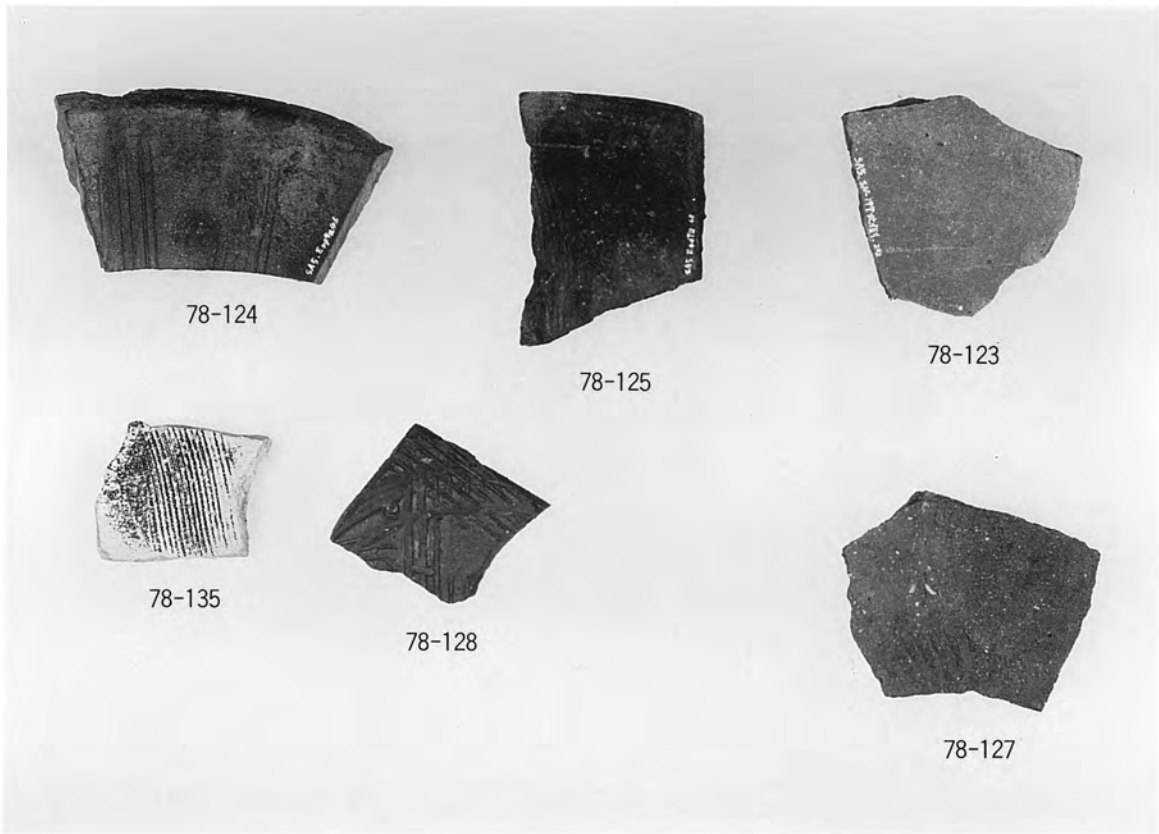


遺構外-P158

遺構外出土遺物 (陶器・磁器・須恵器・炆器片)



遺構外出土遺物（陶器片・土製品・ガラス製品）



78-124

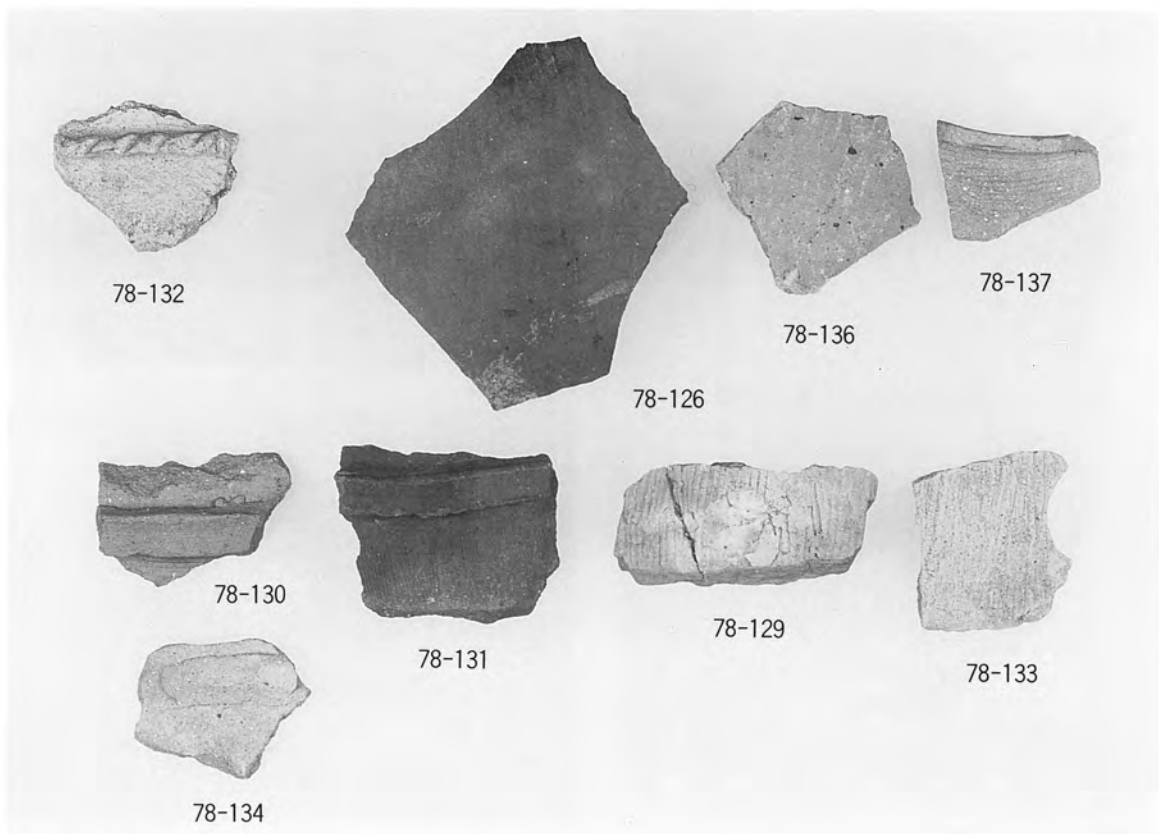
78-125

78-123

78-135

78-128

78-127



78-132

78-137

78-136

78-126

78-130

78-131

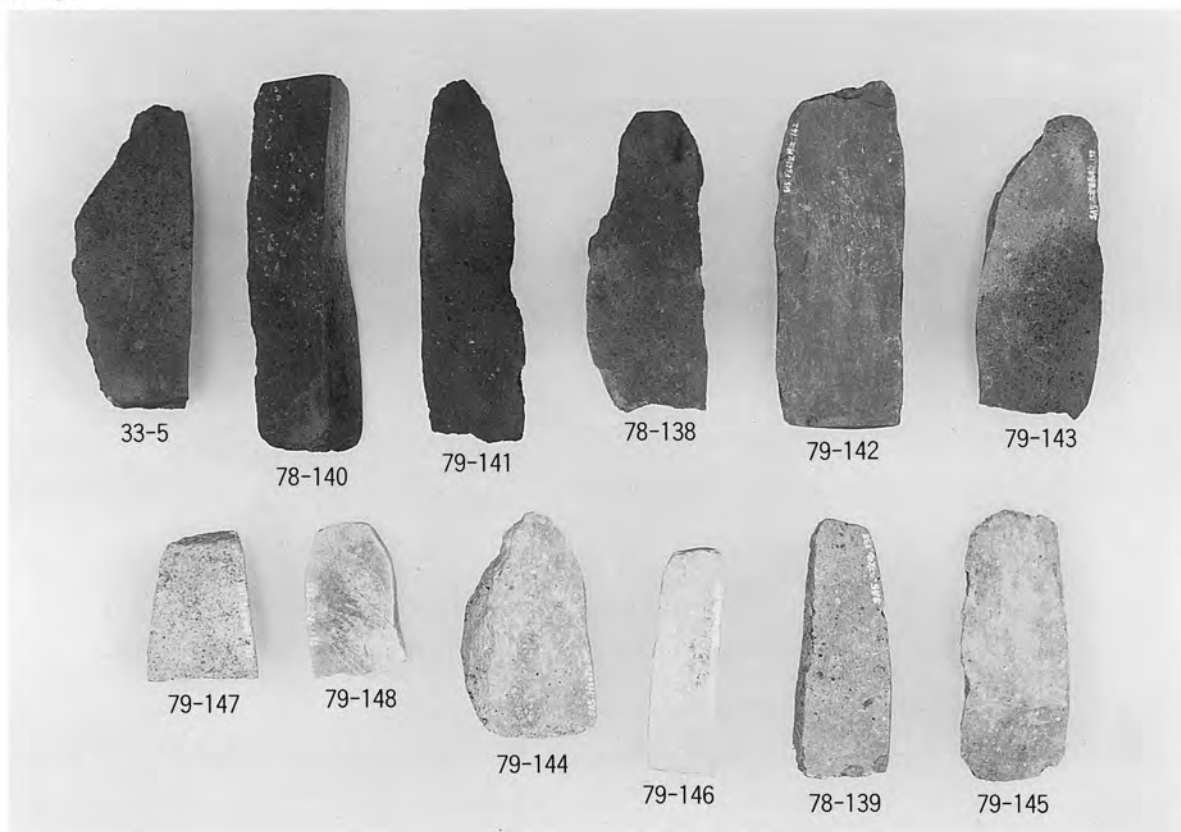
78-129

78-133

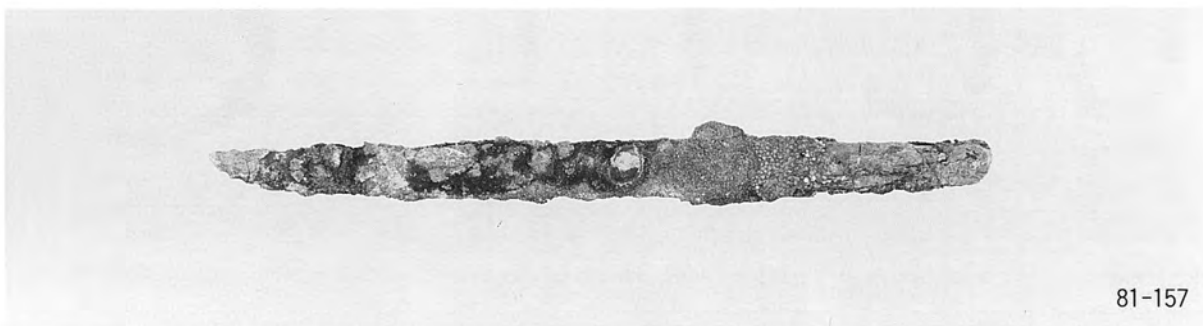
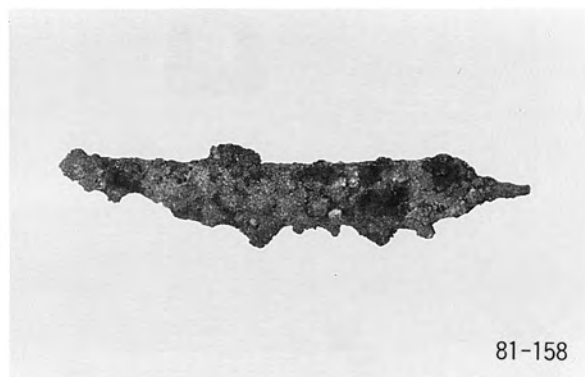
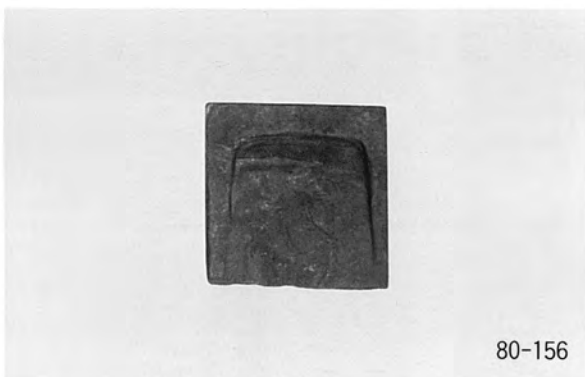
78-134

遺構外出土遺物

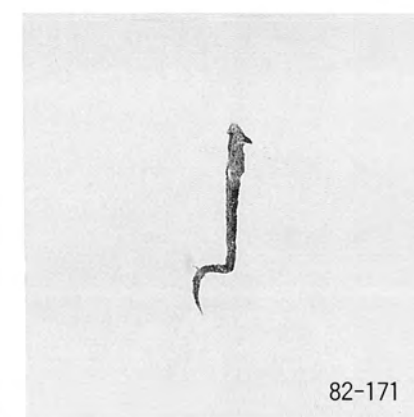
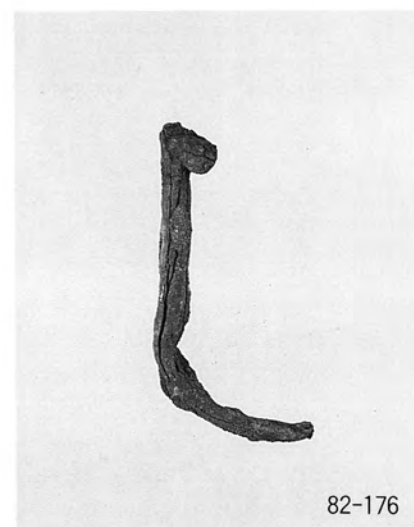
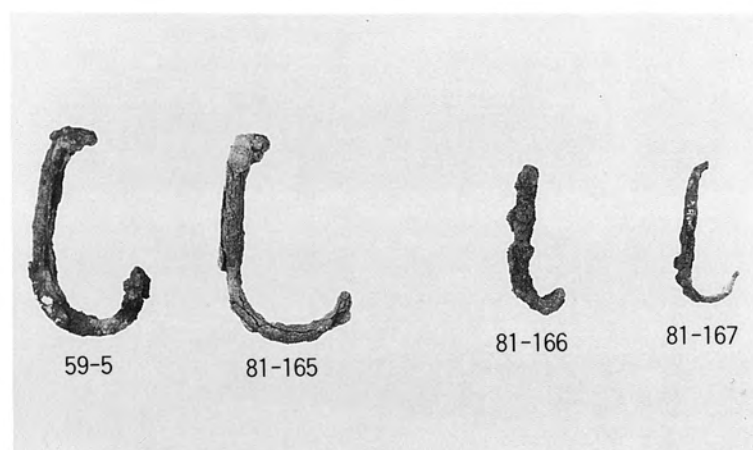
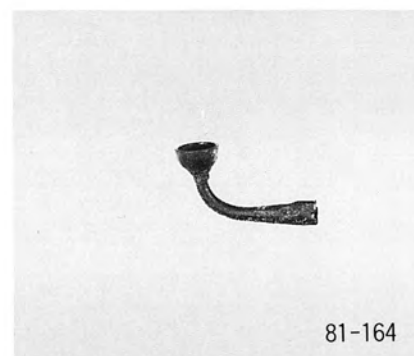
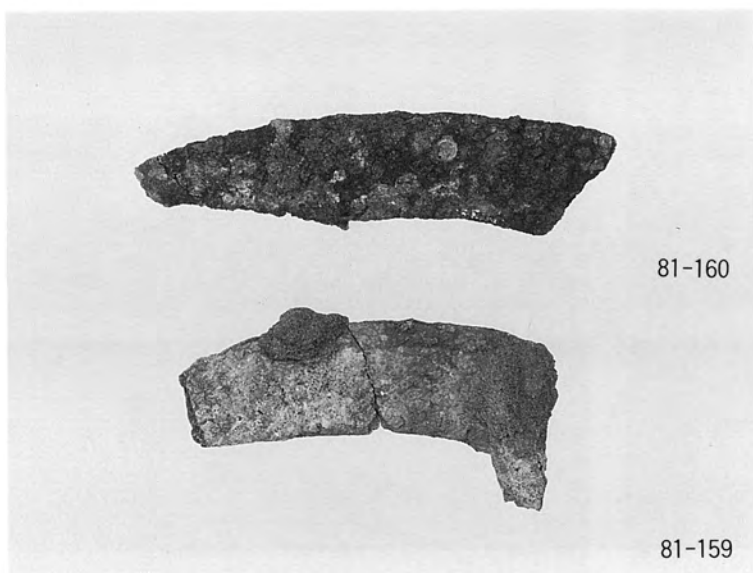
上 土師質・瓦質土器・炆器片，下 縄文式土器・須恵器・埴輪片



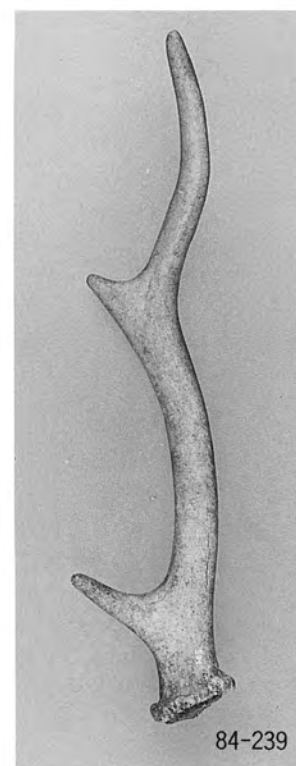
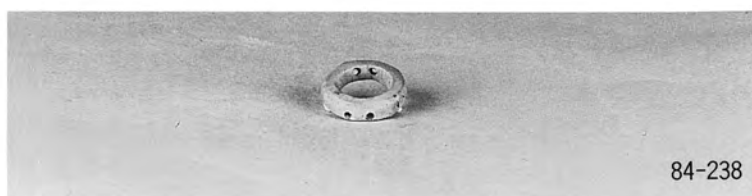
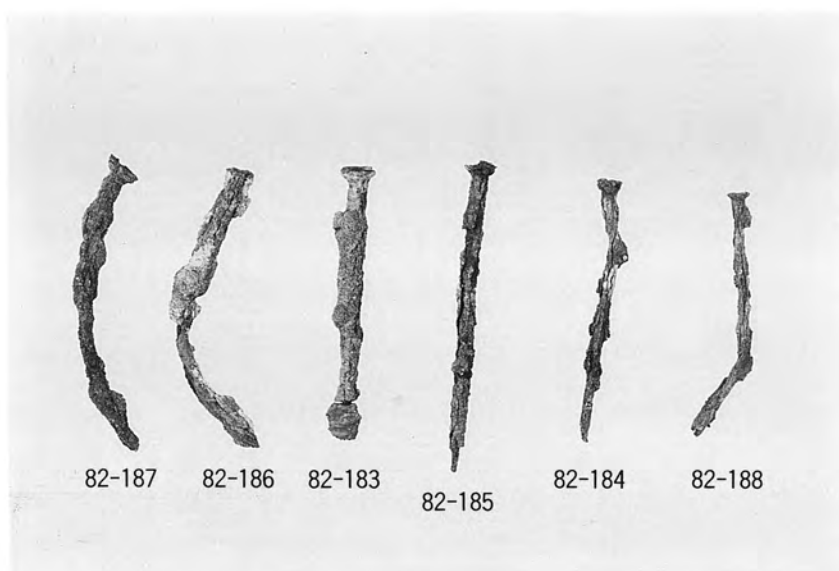
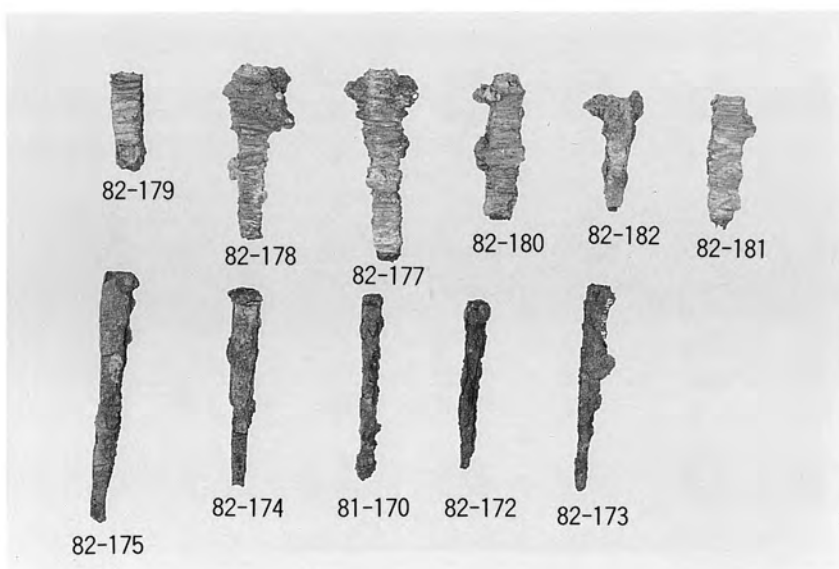
鹹水槽・遺構外出土遺物（石製品）



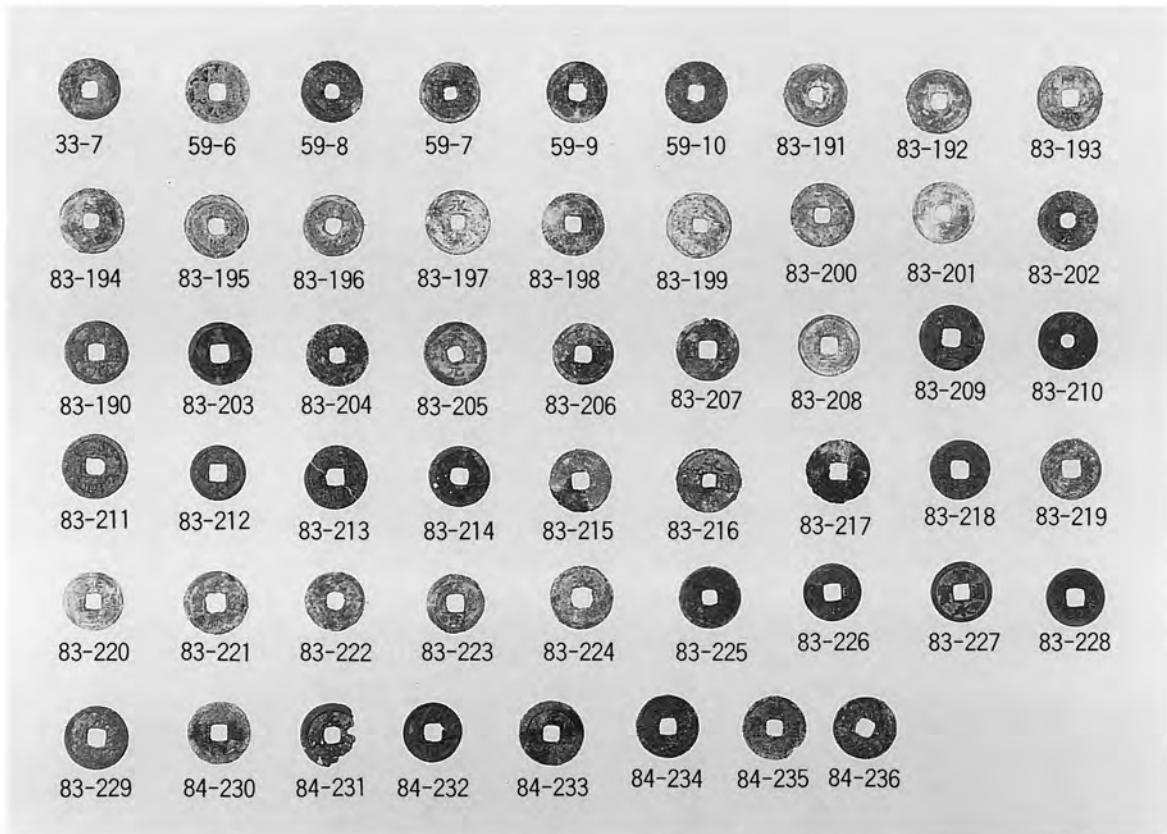
遺構外出土遺物（石・金属製品）



土坑，遺構外出土遺物（金屬製品）



遺構外出土遺物（金属・骨角製品）



上 鹹水槽・土坑出土遺物（古錢），下 第3号竈断割作業風景

茨城県教育財団文化財調査報告第95集
一般県道水戸那珂湊線道路改良
工事地内埋蔵文化財調査報告書

沢田遺跡

平成7（1995）年3月25日 印刷

平成7（1995）年3月31日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団

〒310 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県生涯学習センター内

T E L 029-225-6587

印刷 株式会社 高野高速印刷

〒310 水戸市東原2-8-1

T E L 029-231-0989

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第95集

沢 田 遺 跡

沢田遺跡遺構配置図



+B3

+C3

+D4

+F5

+G6

+H6

+I6

+H6

+I7

+J8

